

近畿地方南部地域における 弥生時代中期から後期への 移行過程の検討

Examination of the Transition Process from the Middle to Late Yayoi Period
in the Southern Part of the Kinki Region

深澤芳樹・浅井猛宏・荒木幸治・石井智大・杉山真由美・
田中元浩・中居和志・三好 玄・山本 亮・渡邊 誠

FUKASAWA Yoshiki, ASAI Takehiro, ARAKI Koji, ISHII Tomohiro,
SUGIYAMA Mayumi, TANAKA Motohiro, NAKAI Kazushi, MIYOSHI Gen,
YAMAMOTO Ryo and WATANABE Makoto

①研究の目的と方法

②土器様相からみた弥生時代後期への移行過程

③集落様相からみた弥生時代後期への移行過程

④弥生時代後期への移行過程

【論文要旨】

弥生時代中期から後期への社会的・文化的変化は、弥生時代における最大の画期と目され、その主因を巡って、政治・経済・環境などさまざまな観点に基づく仮説が提示されてきたが、諸説の総合にはいまだ至っていない。そこで、近畿地方南部地域を中心とした広域的範囲において、共通する基準に基づく基礎的検討を加えて当該期の社会変化の鮮明化を図るとともに、その内容や背景について、地域間交流や近年急速に進化した古気候研究の成果を含む環境変化等の広域的視野を加えて総合的に考察することを試みた。

具体的な検討対象として、土器と集落を取り上げた。土器については、編年や併行関係の検討とともに、系統的な視点に基づく様式構造の把握を試みた。それによって、遠隔地間交流の活発化や地域間関係の変化、生駒西麓系土器の広域的な伝播などを明らかにした。これらを踏まえて、後期前葉の土器様式の展開は広域的な運動性を有し、かつ多元的、多核的なものであったと考えた。集落の検討では、中期と後期の移行期における集落の断絶や、後期前葉の集落数減少と集落分布密度の低下、集落の高所立地傾向を広く確認できたが、集落差の存在も明らかになった。こうした点は、中期から後期への移行期の社会変化が広域的な運動性ととも地域性を有したことから、社会変化の諸要因に対して地域ごとに柔軟な適応行動がなされたことを示唆する。

以上の検討結果を基に、当該期の考古資料の変化は、地域間交流の活発化と集団間関係の再編および社会的緊張の高まりといった事象を反映したものであり、当該期に生じた広汎な人口減少がその要因となった可能性を指摘した。さらに、これを踏まえた試論として、暦年代や木材年輪セルロース酸素同位体比にかかる研究成果との対比を行い、弥生時代中期後葉の湿潤化によって生じた食糧生産量の変化と人口変動を契機として、長期的・継続的に社会変化が進行したという見通しを示した。

【キーワード】 弥生時代中・後期、集落、土器、集団間関係、人口減少

①……………研究の目的と方法

近畿地方では、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて、土器や集落に顕著な変化が認められ、その背景に社会の大きな変革が想定されてきた。そして、気候変動や争乱、物流の変化などが社会変化の要因として注目された。こうした近畿地方における研究が一つの動因ともなって、日本列島各地で弥生時代中期・後期移行期における大きな社会変化の存在が注目され、研究が深められてきた。特に近年は自然科学的な分析手法の発展もあり、暦年代や気温・降水量等の環境に関する研究が急速に進展し、弥生時代中期から後期への移行期における社会変動についても、中国大陸や朝鮮半島の社会変動や気候変動等との関連を踏まえた考察の重要性が増大しつつある。

しかしながら、近年、近畿地方ではこの時期に焦点を当てた研究は低調で、まとまった検討はほとんどない。その一方で、多くの発掘調査等によって、情報不足の感があった弥生時代後期前葉の土器や集落についても資料の蓄積が進んでおり、そうした資料を総合的に把握・整理・検討し、近畿地方における弥生時代中期後葉から後期前葉の社会の変化について、改めて議論を深めていく必要が生じている。

そこで、本研究では、近畿地方南部地域（大阪・和歌山・奈良・京都南部）を中心に、地域ごとの資料の収集や詳細な変化の様相の把握を基礎としつつ、広域的な視野から弥生時代中期から後期への過渡期における社会の変化について考察することを企図した、考古学的検討を試みた。

具体的には、まずは土器と集落を主な検討対象として、地域単位で後期前葉を中心とした資料の集成や中期後葉からの変化に関する検討を図った。土器と集落それぞれの問題意識や検討課題については第2・3章の冒頭に詳述している。検討に際しては、各地域の様相に関する検討会を2016年から2019年にかけて7回開催し、さらに、これと並行して土器の観察・検討を各地で4回実施した。⁽¹⁾

これら検討に際して行った具体的な検討作業の内容は、土器については次の通りである。

- ①中期後葉～後期中葉の土器編年の検討
- ②後期前葉の土器様式の地域間での併行関係の確認
- ③器種・製作技法・文様等にみられる外的要素の検討を踏まえた、後期前葉の土器様式の成立過程の検討

集落については、上記の土器に関する検討を踏まえつつ、以下のような作業を行った。

- ①後期前葉の集落の集成及び、中期後葉～後期後葉の集落の動態表の作成
- ②後期前葉の遺構や土器出土地点の集成及び、一覧表の作成
- ③後期前葉の遺構埋土・被覆土層等からみた堆積環境の検討
- ④後期前葉の代表的な集落の構造に関する検討

そして、こうした検討を基礎として、近畿地方南部における弥生時代中期から後期への社会変化の内容について、考察を行った。

本稿では、こうした共同研究による成果を総括的に提示したい。まずは基礎となる地域ごとの土器・集落の検討成果について整理し、簡便に示す。そして、それらによって把握された変化の様相

を、暦年代や気候変動に関する研究成果なども参照しながら複合的に検討し、近畿地方南部において弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて社会がどのように変化したのかを考察する。(深澤・石井)

②……………土器様相からみた弥生時代後期への移行過程

(1) 分析の枠組み

a. 研究史

1. 型式学的研究：後期初頭の空白

近畿地方の弥生後期土器編年の大枠は、奈良県唐古遺跡および大阪府西ノ辻遺跡の資料を用いた小林行雄によって打ち立てられたものである [小林 1943・1958]。ただし、この段階で後期前葉とされた西ノ辻 I 地点出土土器は、現在の編年観からみれば後期中葉に位置づけられるべきものであり、中期と後期の間には大きな断絶があった。

細分の進展 1970年代中頃から、良好な資料の増加がみられた中・南河内地域に関して、編年の細分化が進められた。都出比呂志の検討は、土器の形態だけでなく製作技法を論点としたものであった。さらにそれは、古墳の出現にいたる社会の動態を論じるための物差しとすることを志向したものであり、以後の研究に大きな影響を与えた [都出 1974]。その後、これを受けて畿内各地で第 V 様式の細分が検討された [森岡 1976, 丸山 1976, 森田 1977 など]。これらの成果を受けて森岡秀人は、予察的な内容を含むものながら畿内各地の後期の土器の併行関係を検討し、体系的な編年案を提示した [森岡 1977]。しかしながら、この時点では、森岡の研究においても後期前葉には西ノ辻 I 地点出土土器があてられており、依然として中期と後期の間には空白が残されていた。

方法論の深化と後期初頭資料の抽出 これに対し、寺沢薫が 1980 年に示した第 V 様式編年においては、西ノ辻 I 地点式より古相を示す土器群が抽出され、後期初頭に位置づけられた [寺沢 1980]。寺沢の編年案は、様式論の方法論的吟味を経た体系的なものであり、これにより近畿の弥生土器編年研究は新たな段階に至ったといえる。寺沢は、既往の第 V 様式編年研究の型式学的操作の不十分さを批判したうえで、様式—形式—型式の関係性を整理し、土器群に対する定量的な分析を実施した。この中で高坏の型式学的変遷に関する混乱が解消され、中期から後期の土器の変化が連続的に捉えられるようになったことは重要である。寺沢は、このような前提作業のうえで大和地域の第 V 様式を 6 段階に区分する編年を組み立て、畿内各地においてこの各段階に並行すると考えられる資料を列挙した。ただし、この段階では、後期初頭の資料は大和以外ではほとんど例示できない状況にあった。

中—後期移行説 / 共存説 一方、森岡秀人は、小林行雄により中期末葉とされた西ノ辻 N 地点出土土器の位置づけについて再検討を行うとともに、その頃畿内各地で増加しはじめた後期初頭の資料 (森岡はこれを西ノ辻 N 地点出土資料の併行期と呼んだ) の存在を指摘した [森岡 1982a]。さらに、その年代的位置づけに関して、理論上 (西ノ辻) N→I 式移行説と N—I 共存説とがありえることを示し、前出の寺沢が前者を採用するのに対し、自身は後者、すなわち第 V 様式の成立に地域による時間差を考慮する立場を選択するとした。このことには、後期初頭の資料が後期の新しい段階と

比べてあまりに少なく、かつ西ノ辻I式が畿内各地で予想よりも定型化していない、という自身の作業結果〔森岡 1977〕に基づく認識の下、中期と後期の間の断絶を少しでも合理的に説明するための作業仮説的な意味合いがあったものと考えられる〔森岡 1984〕。

その後、森岡の“共存説”については、井藤暁子による批判が加えられ〔井藤 1983〕、各地で後期土器資料が増加する中で畿内全体として“移行説”⁽²⁾が一般化したようである。その結果は、寺沢・森岡が共編者となった『弥生土器の様式と編年』（近畿編Ⅰ・Ⅱ）をみればよく分かる〔寺沢・森岡編 1989・1990〕。西ノ辻I式に並行する資料は、いずれの地域でも後期中頃に位置づけられ、それより古相を示し、かつ中期には組み入れられない資料（河内地域では西ノ辻N地点出土資料を含む）が後期の古相に位置づけられている。その後も西ノ辻N式については、これを後期初頭とみる立場〔桑原 1989 など〕と中期末とする立場〔三好 1993, 濱田 1993〕が併存する時期がしばらく続いた。

生駒西麓地域の先進性 その後、濱田延充が資料実見の成果により、西ノ辻N地点出土土器の中期末葉としての位置づけを改めて確認したうえで、90年代を通じた当該期前後の良好な資料の蓄積⁽³⁾に基づき、畿内主要地域の中期末から後期の土器変遷について整理した〔濱田 2001〕。これにより、中期末における生駒西麓地域の土器の逸早い無文化と、続く後期初頭における畿内各地への生駒西麓型器種の拡散による第Ⅴ様式の成立という図式が提案された。濱田の検討により、櫛描き文の消失→凹線文の消失＝生駒西麓型器種の受容という中期末から後期初頭にかけての展開が各地で具体的に示された。弥生土器に関わる情報は、隣接集落間の日常的交流を基盤としたものと考えられることもあり、よほど特殊な事情を考えない限り、“共存説”は成り立ちがたいのである。このことは、当該期前後の土器の型式差は、すなわち時期差を示すものであり、後期前葉の資料の少なさは、土器区分の都合による見かけ上のものではなく、実態を反映した可能性が高いことを示している。

時期区分の現状 最後に時期区分の現状についてまとめておこう。前述の『弥生土器の様式と編年』（近畿編Ⅰ・Ⅱ）は、近年の弥生土器研究の基礎をなす重要な成果であるが、この中で内容を異にする二つの後期様式大別案が提出されている。すなわち、寺沢薫による河内地域、藤田三郎による大和地域の編年案における第Ⅴ／第Ⅵ様式という区分であるが、両者の違いは、河内地域という西ノ辻I地点式の段階を基準点としながら、その前後どちらに区分の線を引くか、という点によるものである〔寺沢・森井 1989, 藤田・松本 1989〕。

前述の通り、西ノ辻I地点式は、かつて後期の古相に位置づけられてきたが、中期後葉との間を埋めるより古い土器群が認識されたことにより、後期中での位置づけが下降したものであり、寺沢、藤田両名の編年でもこの点に相違はない。さらに、西ノ辻I地点式の後は、『唐古編年』で第五様式第一亜式とされたものにほぼ相当する段階が続くことになり、この点も両者同様である。

その上で、寺沢が『唐古編年』以来の画期を重視し、古式土師器へと向かう様相を示すものとして西ノ辻I地点式段階の後に新様式を設定したのに対し、藤田は、土器製作技術の面から同式段階の前により大きな画期を見出したことにより違いが生じている。結局、両者の編年に大別様式の設定という資料操作上の高次のレベルでの違いはあれ、後期を細様式に区分した具体的な資料の配列にはさほど大きな差はないことが理解できる（表1）。

一方、その後約20年の研究の展開をみると、『弥生土器の様式と編年』の関係者を除けば、後期

表 1 編年の併行関係及び基準資料

本稿	大和		河内			
	藤田・松本1989	寺沢1980	寺沢・森井1989			
後期前葉	V-1	唐古・鍵13次SD-05中期溝下層 唐古・鍵19次SD-204第8層	1期	六条山方形特殊土坑 忌部山丘陵上 大王山17号住	V-0	亀井SD-3008・3010 亀井遺跡SD-04Ⅳ・Ⅴ層 巨摩・瓜生堂沼状遺構上層
	V-2	唐古・鍵20次SK-104 忌部山		V-1	亀井SD-3104 亀井遺跡ⅡSX-03 亀井遺跡SD-04Ⅱ・Ⅲ層	
後期中葉	VI-1	芝SK-01下層 唐古・鍵1次70号竪穴	2期	六条山1号住 唐古・鍵第1次70号竪穴 唐古・鍵3次Pit5	V-2	西ノ辻I地点 長原SB-01 亀井SE-3027
	VI-2	四分SD-666中層 唐古・鍵14次SK-106	3期	六条山5号住 六条山方形竪穴 平等坊・岩室円形Pit 纏向東田土壙2	V-3	亀井遺跡SD-02 亀井遺跡ⅡSD-09・23 瓜破北SD-04 若江北第Ⅳ遺構面水田耕土 内
後期後葉	VI-3	四分SD-666上層・SE-670・1665 大福溝2 唐古・鍵1次45号竪穴上層	4期	六条山2・3号住 六条山4号住 唐古・鍵1次45号竪穴下層 纏向東田土坑1下層 大福土壙20	VI-1	恩智Ⅰ-SD-13 亀井(その2)SD-2304・SK2301 加美土壙1
			5期	六条山流路最下層・下層 唐古・鍵1次45号竪穴上層 大福溝2 布留山口池4-B区溝Ⅵ層	VI-2	恩智Ⅰ-SP-03 鬼塚E地点Ⅱ竪穴住居跡 瓜生堂溝220 上六万寺第7層
	IV-4	纏向東田土坑4 纏向東田北溝下層	6期	纏向東田大溝下層 纏向辻土壙1・4 曲川 土橋 窪之荘	庄内0	

土器の第Ⅴ／第Ⅵ様式という区分は普及しておらず、土器についての専論では、西の辻Ⅰ地点式段階とその前後という三段階の区分が採用されることが一般的である [若林 1999b, 濱田 2001, 鈴木 2002, 赤塚 2002, 西谷 2002, 谷上 2013⁽⁴⁾]。このため、本稿でも、資料の編年区分としては、前葉、中葉、後葉の三段階を採用することとする。ただし、これによって寺沢および藤田の主張の学史的な重要性に変わりはなく、特に後者については、後期土器の技術的変遷を理解する上で極めて重要な認識に基づくものと考えられることから、後述する土器の系統の把握に際し、第Ⅵ様式という呼称を一部で踏襲する。

2. 製作技術とその系譜：外因性から内因性への注目

製作技術上の画期 佐原眞は、第Ⅴ様式の特徴として、器種の減少とともに無文化と回転台の放棄を挙げた [佐原 1968]。続く70年代の都出の検討により、分割成形技法、底部輪台技法、連続ラセンタキといった第Ⅴ様式を特徴づける技法が明確に把握された [都出 1974]。

さらに、80年代の編年研究の進展の中で、後期前葉の土器群についての理解が深まるとともに、分割成形技法等の定型化の画期が後期中葉にあることが指摘された [豊岡 1985, 藤田・松本 1989]。これにより中期ではなく、かつ『弥生式土器集成』の畿内第Ⅴ様式的なものでもない、独自の個性を持つものとして後期前葉の土器群が注目されるようになっていく。藤田三郎は、大和地域の編年の中で、従来の第Ⅴ様式とは切り離れた形で改めて後期前葉の土器の内容を整理し、器種構成や調

整技法等の特徴に加え、全体に厚手のつくりで粗雑である反面、長頸壺や高坏などに精緻なつくりをなすものがあることなどに注意を促した。

瀬戸内系要素 このような中期から後期への土器の変化が内発的なものか、外因的なものか、という点は注目されるところであるが、他地域との関係性については、いち早く森岡秀人が、甕などの内面ケズリ調整（森岡は内面荒搔手法と呼ぶ）から山陽地域との関係性を指摘している〔森岡 1982a・1982b〕。その後、大阪平野に位置する遺跡の調査によって、後期初頭の瀬戸内系の土器が多数出土し、吉備からの移住を含む交流を物語るものと評価された〔井藤 1983, 前田 1988〕。

讃岐系要素の認識 90年代になると、大規模調査の進展により、高松平野の土器様相が明らかとなった結果、それまで吉備系と考えられていた他地域系の資料の大半の故地が讃岐に求められることが明らかとなってきた〔大久保 1995〕。後述するように、この時期の讃岐の土器は、北部九州まで持ち運ばれており、西日本の広域編年を考える上で鍵となる資料であるだけでなく、角閃石を含んだ胎土をもつものもあり、河内地域との直接的交流が窺われる極めて重要な資料である〔濱田 2009〕。

生駒西麓地域の先駆性 さらに、前述のとおり濱田は、第V様式を特徴づける要素の多く（垂下口縁広口壺や柱状脚高坏など）が、中期後葉の生駒西麓地域に由来するものであることを指摘し、これらの要素の拡散により、畿内の地域性が払しょくされ、斉一的な土器様相となるという評価を行っている。濱田は当該期の資料を弥生後期前葉土器群と呼び、その特徴として無文化、器種構成の大幅な変化、および地域を超えて共通する土器形式（先述の広口壺、高坏にくわえて長頸壺やいわゆる“結合形土器”など）によって構成されること等を挙げた〔濱田 2001〕。

複合的な土器様相の把握 しかしながら、当該期の各地の土器を見比べると単純に斉一的とはいえない地域色が存在するように感じられる。また、河内地域からの影響の波及と、先に指摘のなされている瀬戸内系要素との関係性はいかに理解すべきであろうか。

この点に関する近年の研究として、谷上真由美が瀬戸内系と河内系の要素の弁別を検討の軸に据え、第V様式の地域性の検討を行っている〔谷上 2013〕。その結果、“東部瀬戸内系とその影響を受けた土器が主体であった中期に比べ、後期前葉では生駒西麓系とそれに準ずるタイプの土器が増加する”こと、そして“東部瀬戸内系とその影響を受けた土器は、後期前葉に大幅な縮小傾向がみられながらも残存し、それが主体となる地域もある”こと、“中期に東部瀬戸内系の土器によって薄れた地域色が、後期前葉段階ではどちらの流れを汲む土器が主要となっているかという形で発現している”ことなどを指摘した。

3. 実年代と併行関係

史書に依拠した年代観 考古資料から歴史を論じるためには土器編年を整備したうえで、その各段階に暦年代を割り当てなければならない。1970年代以前の近畿地方における弥生時代の実年代観は、土器様式の変化や高地性集落、石製武器の発達といった考古資料の様相と中国史書上の倭情勢との対比に基づいて推考されたものが主流であった〔田辺・佐原 1966〕。具体的には、第I様式（新）の段階が楽浪四郡設置（B.C.108）の直後の段階、中期前半が『分爲百余国』の段階、中期後半が『使譯所三十国』の段階、畿内第IV様式末が倭国大乱（A.D.180前後）に相当するといった具合で、畿

内第Ⅴ様式については、卑弥呼の時代から紀元後4世紀はじめの古墳の成立にいたる約百年間があてられていた。一方、大陸系文物が多く所在する九州では、早くから実際の考古資料に基づいた緻密な研究が進められており、両地域の併行関係および年代観（畿内第Ⅳ様式が九州の後期に並行すると考えられていた）には大きな齟齬が生じていた。

船載資料に基づく年代観の見直し 80年代になると、後期の土器編年研究をリードしていた寺沢薫、森岡秀人両氏によって近畿地方の暦年代観の見直しが進められた〔森岡 1984・1985, 寺沢 1985〕。森岡は、見直しの機運が高まった要因として、高地性集落の消長が一元的でなく、かなりの時間幅と類型をもつことが明らかとなってきたこと、第Ⅴ様式の細分作業の進展により、後期にかなりの時間幅を見込むことが適当と考えられるようになったこと、大阪平野の発掘調査の進展による大陸系の船載遺物の増加の3点を挙げている。年代が特定できる中国銭や銅鏡の出土事例の検討を軸とした分析が進められた結果、近畿地方の第Ⅴ様式には、紀元後1世紀後半から3世紀はじめごろまでの年代が比定されることとなった。後期の開始年代は、王莽系資料が定点となるが、この段階では、中国史書にみえるA.D.57年の奴国王の後漢への遣使がその流入契機として重視されたようである。

また、寺沢の編年観では、畿内第Ⅳ様式が北部九州の中期末から後期初頭に並行するとされていた。寺沢は、当該期の時代背景に、新代の政治的動乱を経て登場した後漢王朝との交通に支えられた“北九州諸国の新たな権力関係（連合）の形成”を想定しており、これを近畿地方の中期後葉～後期前葉と並行するとみて、この時期に盛行する高地性集落の出現と瀬戸内地域の政治的緊張関係を結びつけた理解を提案していた。一方、ほぼこれとほぼ同じ時期に豊岡卓之は、搬入土器の共伴関係から、瀬戸内地域の鬼川市Ⅰ式が畿内第Ⅴ様式及び北部九州の後期前半の土器に並行することを指摘していた〔豊岡 1985・1990〕。

讃岐系土器を介した併行関係の把握 90年代以降も、遠隔地間の土器が共伴する事例は増加した。さらに、讃岐地域の土器様相が明らかになったことで、近畿地方と北部九州で出土する瀬戸内系土器の出自が明らかとなり、その編年位置付けも確かなものとなってきた。これを受けて、杉本厚典や西谷彰によって詳細な比較検討が行われ、西日本各地の後期のはじまりがほぼ一致することが明らかとなった〔杉本 1996, 西谷 2002〕。

後期開始年代の遡上 さらに暦年代に関しても、後期のはじまりを1世紀後半へと遅らせることに対する疑問が呈され、むしろ貨泉の初鑄年代に即して1世紀前半のうちに求めるべきという意見が主流となりつつある〔杉本 1996, 秋山 1996, 森岡 2002, 河合 2003など〕。1996年に発表された池上曾根遺跡出土資料の年輪年代法に基づく分析の結果（第Ⅳ様式に属する柱の伐採年が紀元前52年と特定された）もこの年代観に影響している。

なお日本列島出土貨泉の流入年代については、寺沢薫が貨泉の分類・編年に関する中国の研究を参照して、いずれも後漢代に下るという主張を行ったところだが〔寺沢 1985〕、寺沢の引用文献を再検討した濱田延充は、その年代比定の根拠は薄弱であり、上限を定める根拠としては不適當であると、自身は後期の開始を1世紀前半の中で理解するとした〔濱田 2006〕。

4. 後期前葉の土器群の理解と分析視点

前提的理解 以上みてきた研究史の展開に基づき、本研究における後期前葉の土器群の前提的理解を下記のとおり整理しておこう。

- 1) 第V様式を3期に大別したうちの冒頭を占め、中期に盛行した櫛描き文や凹線文などの文様を失った後、鉢をベースとした分割成形技法の確立をみるまでの間にあたる
- 2) 瀬戸内、生駒西麓といった中期後葉以来の複数の地域の土器系譜の複合的様相を示す
- 3) 実年代の上限としてA.D.1世紀前半、下限は同世紀後半までという時間幅が見込まれる（この点については、第4章で再論する）

分析の視点 次に上記をふまえつつ、分析にあたっての問題意識について述べておこう。

まず、1)については、主に大和・河内地域において指摘されたことであるが、近畿地方全体の様相としてこれを敷衍してよいかどうかという点について具体的な各地の土器様相に基づいて検証する必要がある。また、各種の変化が畿内の中のいずれかの地域に発信源をもつものなのか、あるいは中心をもたないものなのか、といった点を考えることは2)とも関連して弥生時代後期の始まりという現象の理解のうえで重要である。

2)については、谷上により大きく畿内南部と北部で様相が異なることがすでに指摘されているが〔谷上 2013〕、その検討は器種を限定したものであったため、改めて土器様式総体としての分析が必要な状況である。また、畿内各地の土器を見比べてみると、谷上が目した、東部瀬戸内系および生駒西麓系以外に、中期後葉における在地の土器が製作技法や装飾を退化させたと考えられる土器が後期前葉に残存している。さらに、広域での検討に際しては、出土例が増加した近江系土器の動向にも注意すべきであろう。これらを含めた複数の土器系統の認識を共有し、各地域の土器様式のあり方を分析することが必要である。また、この現象の背景を考えるうえで搬入土器の様相から交流形態を確かめることが重要であることはいうまでもない。

3)については、畿内各地および瀬戸内等の遠隔地との土器様相の併行関係を搬入資料に基づいて明らかにすることが、年代比定の前作業として肝要である。

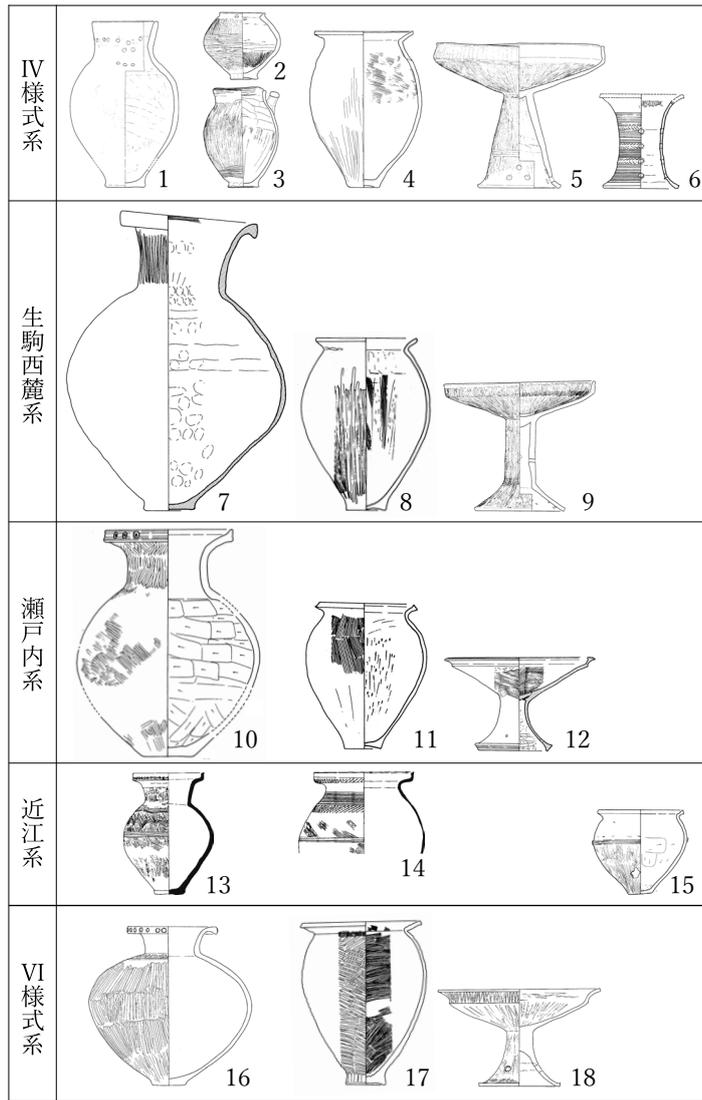
以上をふまえ、各地域における弥生時代中期から後期への土器の連続性と断絶性の整理を行うが、まず次節においてその前提となる系統の認識を示しておきたい。

b. 系統の認識

当該期における在地の土器を、IV様式系・生駒西麓系・瀬戸内系・近江系・VI様式系の5つの系統に区分する。ただし、ここでいう系統とは、土器を構成する要素の系譜を認識するための作業上の概念であり、実際の個々の土器は、地域および時期によってさまざまな混淆・折衷の様相をみせるものである。ここでは、現在の理解に基づき、それぞれの要素の組み合わせを理念型としてなるべく純粋な形で抽出してみたい（図1、表2）。

IV様式系 中期後葉の在地の土器の系譜を引くものであり、主要器種として、短頸壺、無頸壺、水差形土器、甕、高坏、器台がある。

中期後葉の土器に対し、文様の減少とヨコナデ技法の退化等による粗雑化を特徴として指摘できる。器種によって、精製／粗製の度合いの違いが大きく、高坏、器台にはミガキとともに凹線文や沈線文などの文様が施されることがある一方、短頸壺や甕はハケ、タタキ、ケズリなどの痕跡を残



【出土遺跡】

- 1～3・5・9：久宝寺遺跡（河内）
- 4・15：古曾部・芝谷遺跡（摂津）
- 6・7・8・11・12：亀井遺跡（河内）
- 10：表山遺跡（播磨）
- 13：中久世遺跡（山城）
- 14：長法寺遺跡（山城）
- 16・18：段上遺跡（河内）
- 17：城山遺跡（河内）

図1 系統の分類

表2 弥生時代後期前葉～中葉における土器の系統

	IV 様式系	生駒西麓系	瀬戸内系	近江系	VI 様式系	
器種	広口壺	✓	✓垂下口縁	✓退化凹線・平底	✓受口状口縁	✓分割成形
	短頸壺	✓				
	長頸壺		✓?			
	無頸壺	✓				
	水差形土器	✓				
	鉢	✓		✓複合口縁	✓受口状口縁	✓分割成形基部
	甕	✓多様	✓外面ミガキ	✓内面ケズリ	✓受口状口縁	✓分割成形
高坏	✓メガホン状脚	✓柱状脚	✓内面ケズリ脚		✓ラッパ状脚	
器台	✓					
主な成形・調整	成形	連続成形	連続成形 (部分的に分割成形)	連続成形	連続成形	分割成形
	外面	(タタキ→)ハケ/ケズリ →ミガキ	(タタキ→)ハケ/ケズリ →ミガキ	(タタキ→)ハケ →ミガキ	ハケ	タタキ→ハケ →ミガキ
	内面	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ→ケズリ	ナデ	ナデ・ハケ
文様	退化凹線・沈線文	円形浮文・直線文	退化凹線	列点文・直線文・ 波状文	円形浮文+竹管文	
部分形態	平底	平底	複合口縁 / 平底	受口状口縁	小型突出底	

している。また、いずれの器種も基本的に連続成形によるものと思われる。

短頸壺・甕の調整には中期以来の伝統を受けて地域色が顕著である。特に甕の形態・調整は多様であり、瀬戸内系との峻別に迷うものもある。高坏は、メガホン状に開いた脚部をもつもので、沈線や透かし孔によって装飾されることが多い。

生駒西麓系 中期の生駒西麓型土器の系譜を引くもので、主な器種として垂下口縁をもつ広口壺および柱状の脚部をもつ高坏がある。

壺の口縁端部や頸部にわずかに文様をもつことがあるが、総じて装飾は少ない。⁽⁶⁾ 広口壺は、前述の口縁部形態とともに、体部下半に鉢をベースとした分割成形の痕跡をとどめることを特徴とする。

高坏は、内面に絞り目のない柱状脚をもち、坏部と脚裾部との接合痕は、分割成形によって成形されたことを示す。

瀬戸内系 同時期の東部瀬戸内地域の土器の系譜を引くもので、主な器種として広口壺、甕、高坏がある。

やや大きな平底に外面ハケ、内面ケズリ調整の体部、拡張した端部に擬凹線を加えた口縁部⁽⁷⁾といった器種の違いをこえた調整および装飾の共通性がある。このため、貯蔵、供膳、煮沸の各形態において精製／粗製の度合いの差が小さいという点も大きな特徴である。いずれの器種も基本的に連続成形によるものと思われる。

その他の特徴として、壺・甕の体部は、最大径がやや上位に位置する肩の張った形態で、外面下半を中心に縦方向のミガキ調整を加える。高坏は、内湾しながら裾が広がる脚部をもつもので、脚部外面および坏部にミガキ、同内面にケズリ調整を加える。坏部のミガキは横方向に施されることがある。

近江系 同時期の近江地域の土器の系譜を引くもので、主な器種として受口状の口縁をもつ壺、甕、鉢がある。

いずれの器種も小型の上げ底気味の底部をもち、体部外面に粗いハケの後、内面にナデ調整を施す。さらに体部上半および口縁部には、櫛描き文による列点文・直線文・波状文が加えられる。このため器種による精製／粗製の度合いの違いはきわめて小さい。また、いずれの器種も基本的に連続成形によるものと思われる。

VI様式系 今回の検討は、後期前葉を中心とするものだが、後続する後期中葉を特徴づける分割成形技法の発達した土器群を、大和地域で藤田三郎・松本洋明が提唱した編年区分の意義をふまえ〔藤田・松本 1989〕、VI様式系として把握しておく。

VI様式系は、製作工程に分割成形を体系的に組み込んだシステムティックな土器づくりによるものである。鉢をベースとした分割成形によるサイズの異なる器形の作り分けは、壺だけでなく甕についても採用され〔三好 2019〕、高坏についてもパーツごとの製作工程の分割が認められる。装飾は総じて少ないが、煮炊具の体部外面はタタキ調整のままで仕上げられており、器種ごとの精製／粗製の差は明瞭である。

次節以降において、讃岐、播磨、摂津、河内、紀伊、大和、山城、近江、伊勢の各地域を対象とし、上記の内容を共通認識として踏まえながら、地域の実態に即して適宜調整を加えつつ、後期前葉の土器様相とその推移について分析を行う。(三好)

(2) 讃岐地域

a. 分類

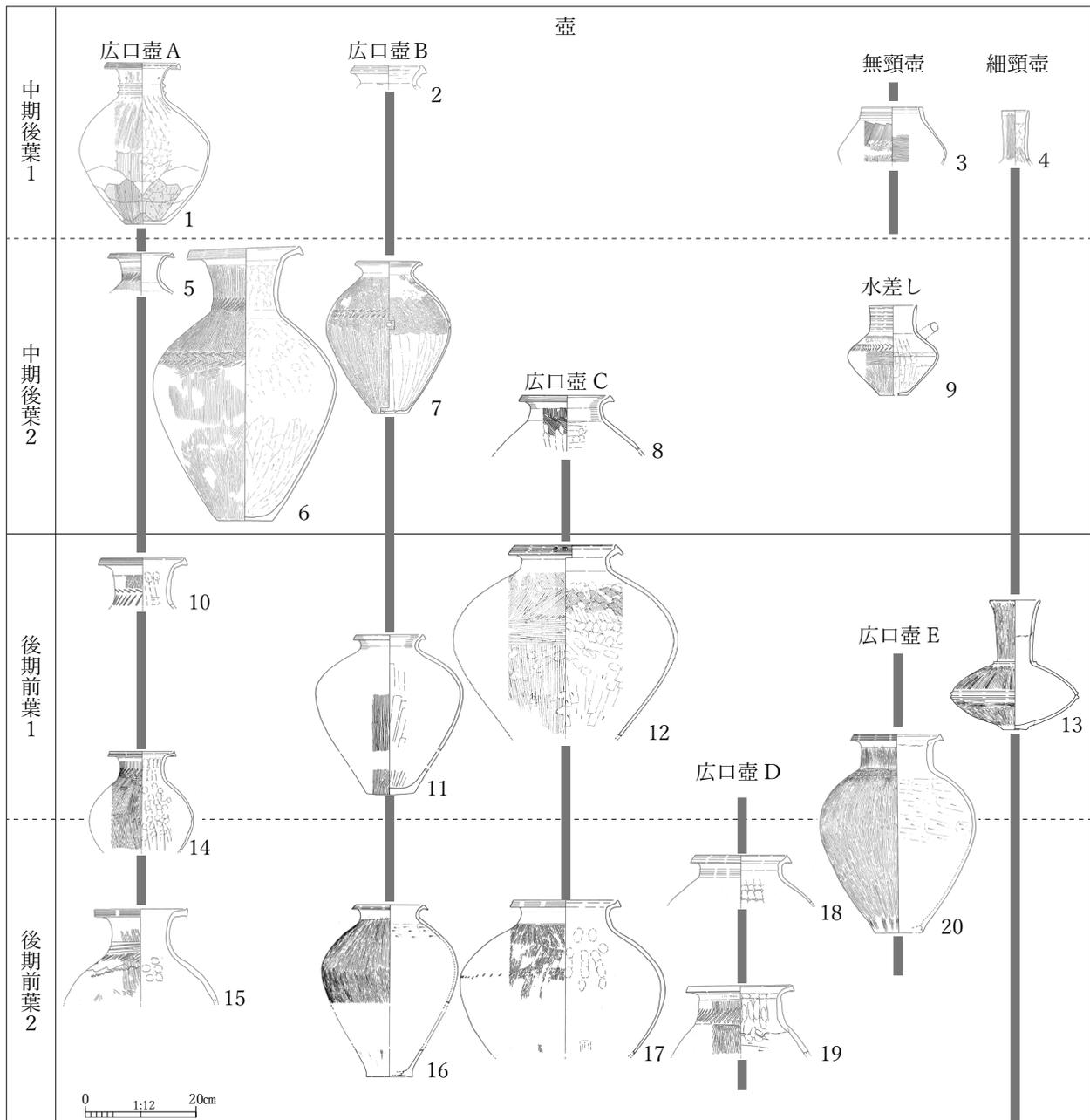
当該期の土器組成を構成する主要な器種としては、壺、甕、高坏、鉢、器台、製塩土器等があり、さらにこれらは細別器種としてまとめることができ、その中で安定的に認められる主要なものとして、広口壺 A～E、直口壺 A～C、細頸壺、水差し、甕 A～F、高坏 A～J、台付鉢、鉢 A～D、器台（大・小）、製塩土器がある（図2～5）。このほか、特殊な器種として、朱精製取手付皿（通称グラタン皿）をあげることができる。広口壺、甕は口縁部に擬凹線文を、直口壺、高坏、鉢は頸部外面、坏部外面に擬凹線文、若しくは強いヨコナデによる凹凸面が文様状にみえる。

広口壺は口頸部の形状で細分するもので、頸部が長いもの（A・E）は、体部長に対して最大径の位置がやや低く、頸部の短いもの（B・C・D）は、頸部の長いものより最大径の位置が高く、肩部がかなり張った形状となる対応関係が認められる。直口壺Aは口唇部と頸部外面に擬凹線を施し、体部はやや肩が張るが、広口壺の頸部の長いものと類似する。直口壺Bは頸部外面のみ擬凹線を施し、体部は扁平な玉葱型を呈する。直口壺Cはハの字状にやや開く口頸部で体部ややバリエーションがあるが、倒卵形を呈する。細頸壺は口頸部と体部が同じ長さで、口頸部が細く伸びる直線的でやや口縁が外に開く形状が特徴である。広口壺 A・B・C、直口壺 A～C、細頸壺は中期末からの系譜のものである。

細頸壺以外は、外面はタタキ成形後、ハケ調整後体部下半にミガキ調整を施し、内面は、中期後半は体部下半にケズリ調整を施し、体部上半にハケを施すものが、ケズリのみで仕上げるものや指押さえの痕跡が顕著に残るものへと変化する。広口壺 A・B、直口壺 A・B は頸部にハケ目列点文を施す。直口壺 C は、口頸部外面をナデ調整やミガキ調整で仕上げるものがある。細頸壺は、外面をミガキ調整で仕上げ、体部最大径に突帯を貼りつける。

甕は、中期以来の口縁部に擬凹線を施すもので、口頸部の形状で細別器種を設定する。A～Cは、外面がタタキ成形、ハケ調整後、体部下半はミガキ調整で仕上げるものが主流で、D、E、Fはタタキが顕著に認められるもの、ハケ調整のみものなどがみられ、最終調整にバリエーションが認められる。内面はケズリによって仕上げる。A、E以外はバリエーションとして創出されるものと考えられる。

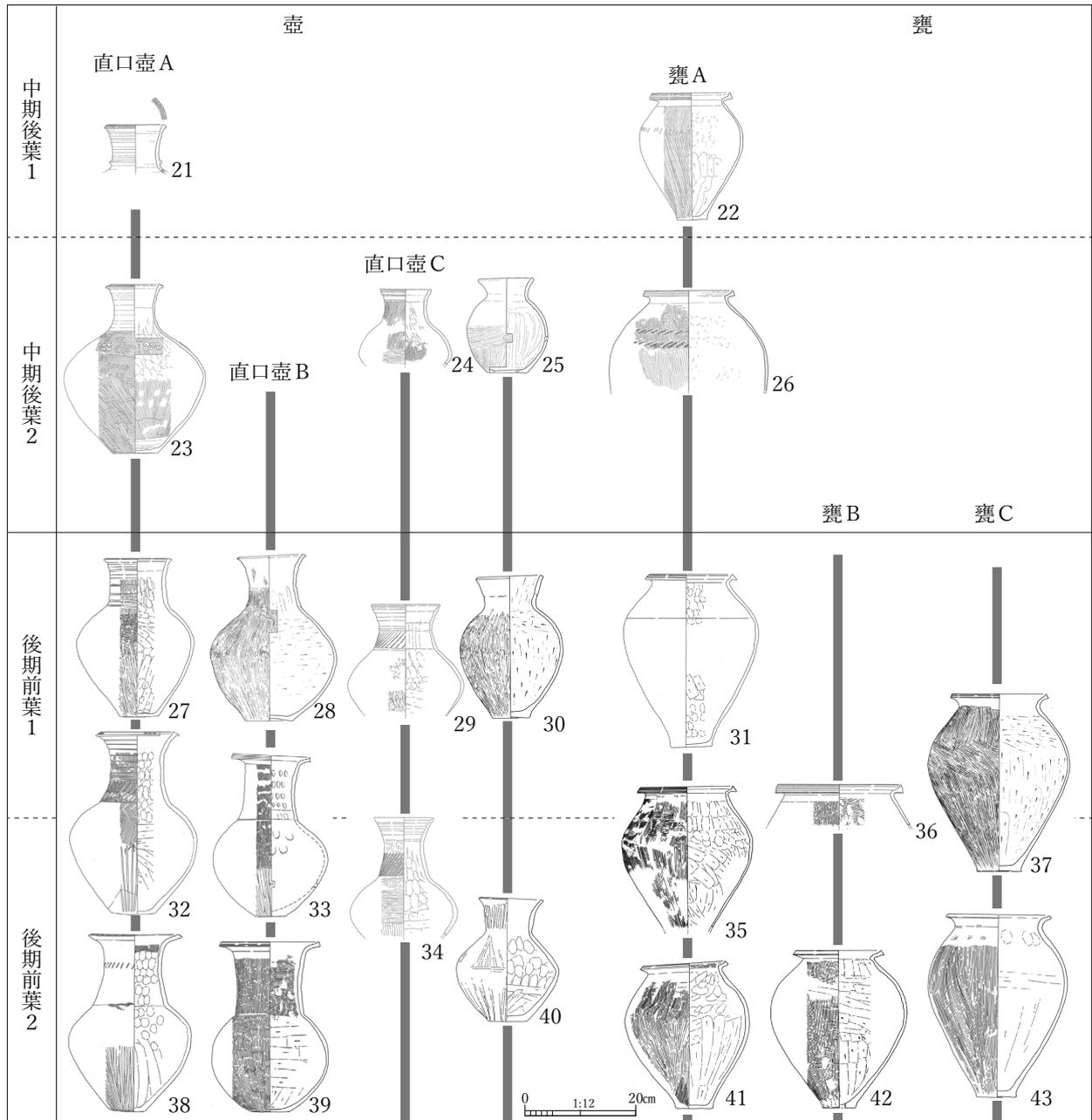
高坏は坏部の形状と脚部形状によって細別器種を設定する。Aは坏部が椀状を呈するもので、外面上部に凹線文が入る。Bは口唇部が肥厚し、やや直線的に内傾して立ち上がり、浅い鉢状を呈する坏部である。脚部は短く、ハの字状に広がる。Cは坏部の先端を内側に鋭く折り曲げるもので、脚部は短くハの字状に開き、端部を上部へとやや肥厚させ、凹線文を施す。外面は脚部から坏部にかけてミガキ調整で仕上げ、坏部内面はミガキ調整、脚部内面はケズリである。Dは先端を直線的に内傾させる一群で、外面に凹線文もしくはヨコナデを強く施す。端部は次第に直立するようになる。内外面ともにミガキ調整を施す。脚部は細く長く直線的で、端部はやや上部へと肥厚させ、沈線文もしくは凹線文を施す。内面はケズリ。Eは、端部が長くやや直立するが、稜はやや丸みを帯びる。内外面ともにミガキ調整で仕上げる。脚部は直線的に長く伸び、端部がやや緩やかに開く。端部外面に凹線文や沈線文を施すものがある。内面はケズリ。Fは坏部の端部が直立し、口唇部を



1・4・：旧練兵場遺跡Ⅲ O区 SD8001, 2：奥白方中落遺跡：SD03, 3：矢ノ塚遺跡 SX85005, 5・6・7・：太田原高洲遺跡 1 方形周溝墓 SD05, 8：久米池南遺跡 2号テラス状遺構, 9：諏訪神社遺跡, 10：上天神遺跡 4区 SK04, 11：岡清水遺跡 SX05, 12：久米池南遺跡 3号テラス状遺構, 13：小山・南谷遺跡Ⅱ SH511, 14・16・20：大空遺跡土坑, 15：上天神遺跡 3区 SD03, 17：太田下・須川遺跡 SE2, 18：上天神遺跡 4区 SD08, 19：前田東・中村遺跡 FSR01

図2 土器編年図(讃岐地域)(1)

やや肥厚し、擬凹線を施すもので、坏部の形状からバリエーションが認められ、そのうち一つの系統が香東川下流域産土器を構成する高坏となるものである。坏部の内外面はミガキ調整で仕上げ、脚部は外面がミガキ調整で、内面がケズリである。脚部は緩やかにハの字状に開く。香東川下流域産土器と同じ胎土のものは、分割ミガキで、脚部に円形の透かしを三角形の頂点に規則的に配置するものが主体を占める。Eはやや小型で深みのあるボウル型を呈する坏部で端部外面に凹線文状の強いヨコナデを施すものである。Gは坏部が小型で直線的に外傾する坏部で、脚部はやや細くハの

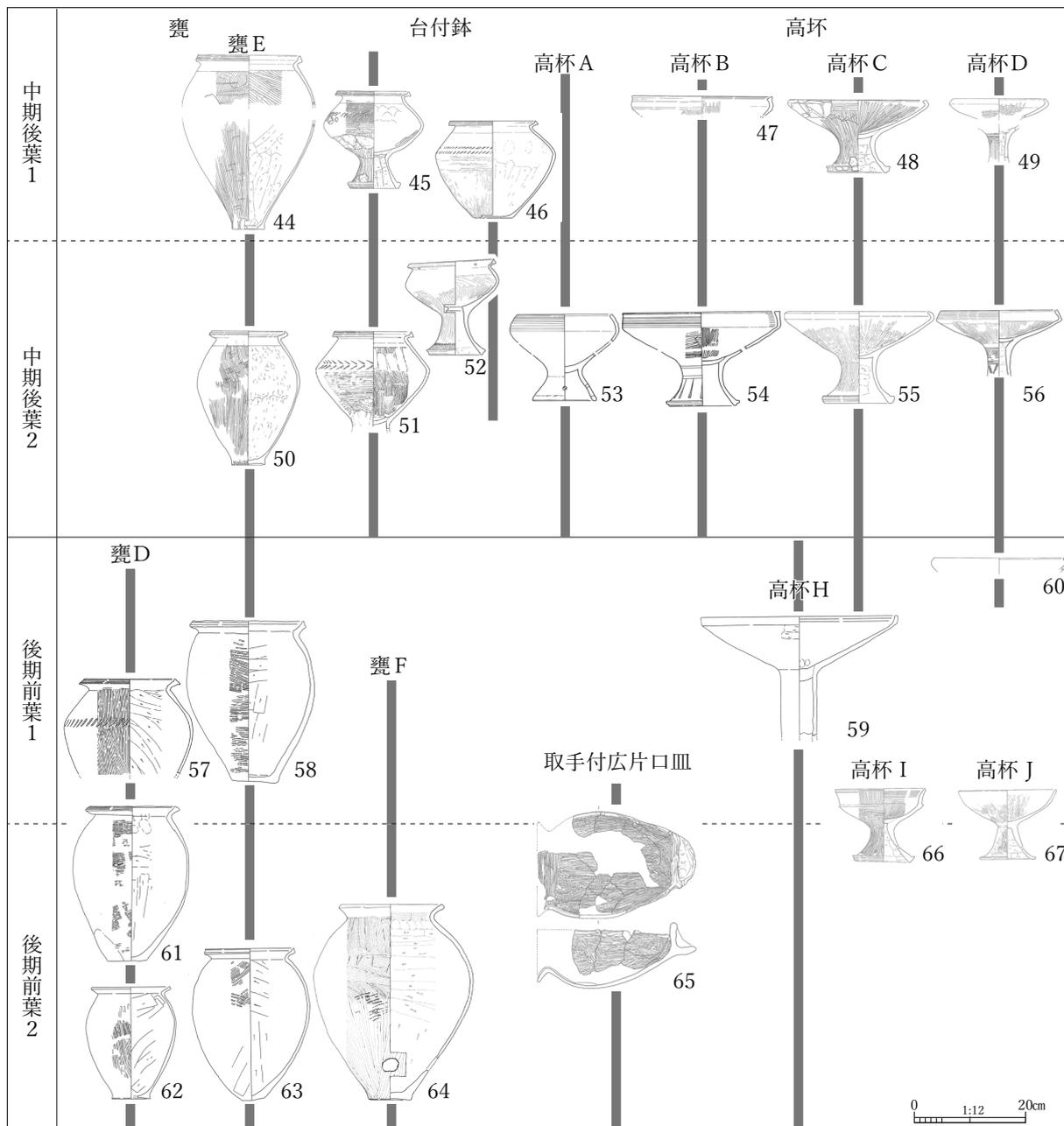


21：旧練兵場遺跡ⅢO区SD8001，22：旧練兵場遺跡ⅢSH4009，23：旧練兵場遺跡Ⅲ22次SB4010，24：西白方瓦谷遺跡SH01，25・26：太田原高洲遺跡1方形周溝墓SD05，27：上天神遺跡4区SK04，28・30・37：大空遺跡土坑，29：上天神遺跡4区SK01，31：上天神遺跡3区SD02，32・34・36：上天神遺跡4区SD08，33：前田東・中村遺跡ⅠCSE01，35：空港跡地遺跡ⅡSDe115，38：太田下・須川遺跡SH01，39小山・南谷遺跡ⅡSH515，40・41・43：太田下・須川遺跡SE2，42：小山・南谷遺跡ⅡSH511

図3 土器編年図(讃岐地域)(2)

字状に広がり，端部は肥厚させる。Fと同様な香東川下流域産土器と類似する胎土である。Hは，E同様に坏部の端部が直立するもので，脚部は柱状脚で，生駒西麓系の高坏の系譜と考えられるものである。高坏はいずれも坏部はミガキ調整，脚部は外面をミガキ調整，内面はヘラケズリで仕上げる。I・Jについては系譜が明確ではないが，当該期に点的に確認できる。

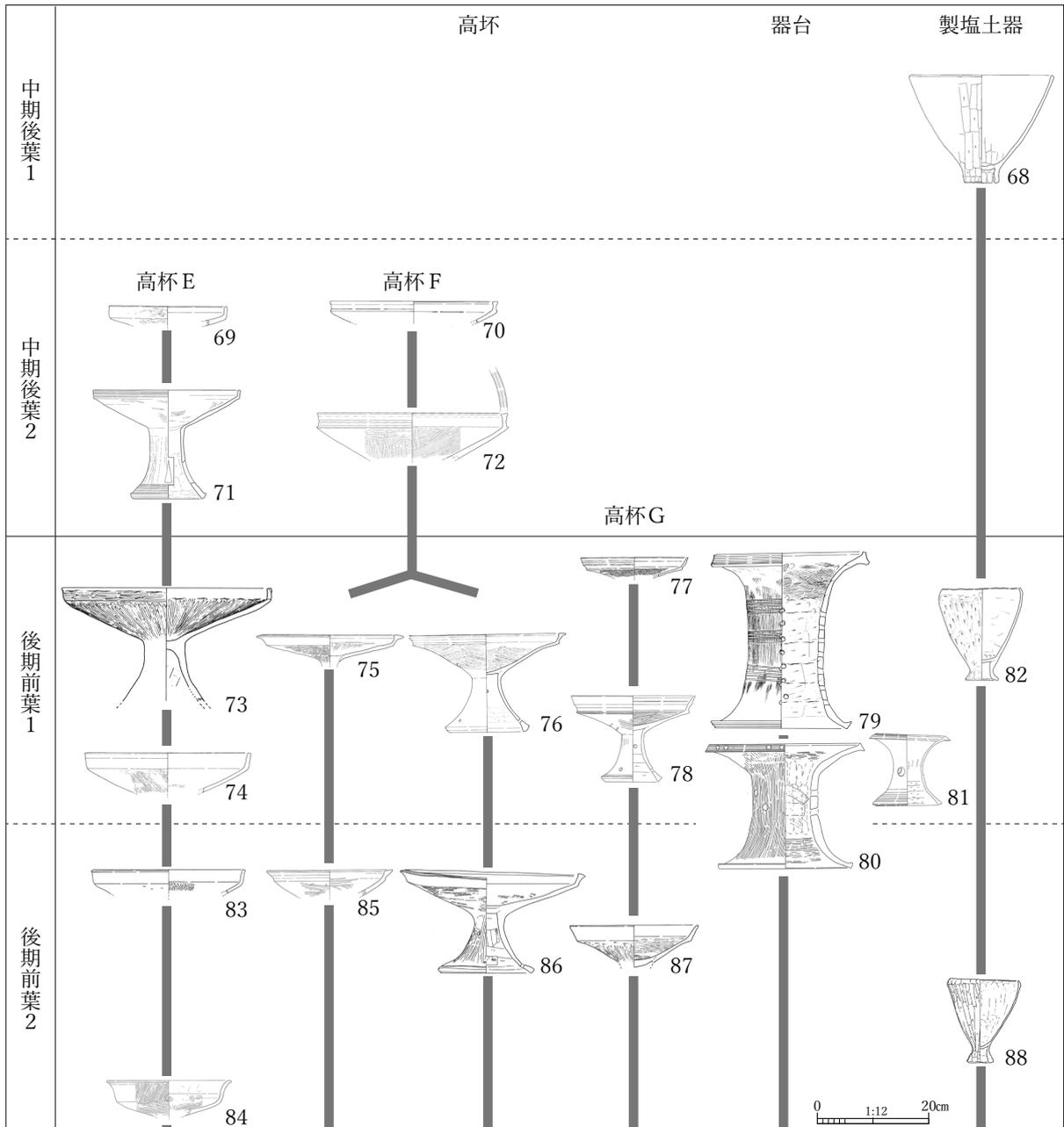
鉢は甕同様の口縁部形態となるものと，高坏の坏部形状に類似するものがある。前者は台がつくものとつかないものがある。台付鉢は頸部の縮まり具合で2つに分類できる。後者は口縁部形状で



44・45・48：旧練兵場遺跡ⅢO区SD8001，46・52：太田原高洲遺跡1方形周溝墓SD05，47：旧練兵場遺跡Ⅳ29次SD50，49：旧練兵場遺跡ⅢSB2003，50・55：旧練兵場遺跡Ⅱ19次SD86/106，51：仲善寺遺跡SH9202，53：久米池南遺跡3号テラス状遺構，54：久米池南遺跡2号テラス状遺構，56：太田原高洲遺跡1方形周溝墓SD03，57・64：小山・南谷遺跡ⅡSH511，58：上天神遺跡3区SD02，59・61・62：上天神遺跡3区SD02，60：旧練兵場遺跡Ⅲ12次SH11，63：前田東中村遺跡GSR02，65・66：旧練兵場遺跡ⅢSH5011，67：小山・南谷遺跡ⅡSH511

図4 土器編年図（讃岐地域）（3）

細別形式を設定できる。Aは甕と同様にくの字の口縁部に擬凹線を施すもので外面はミガキ調整で仕上げ、内面はケズリである。Bは端部が直立するもので、口唇部を次第に肥厚させ、凹線文もしくは強いヨコナデによって凹凸を形成し、高杯Fと同様の形態変化となる。杯部端部外面に凹線文もしくは強いヨコナデによって凹凸を形成する。対面はミガキ調整で仕上げるが、次第にケズリ調整が顕著となる。内面はミガキ調整で仕上げる。CはB同様に口唇部を肥厚させ、端部外面に凹線文もしくは強いヨコナデによって凹凸を形成する。端部を内傾／内湾させる点が異なる。内外



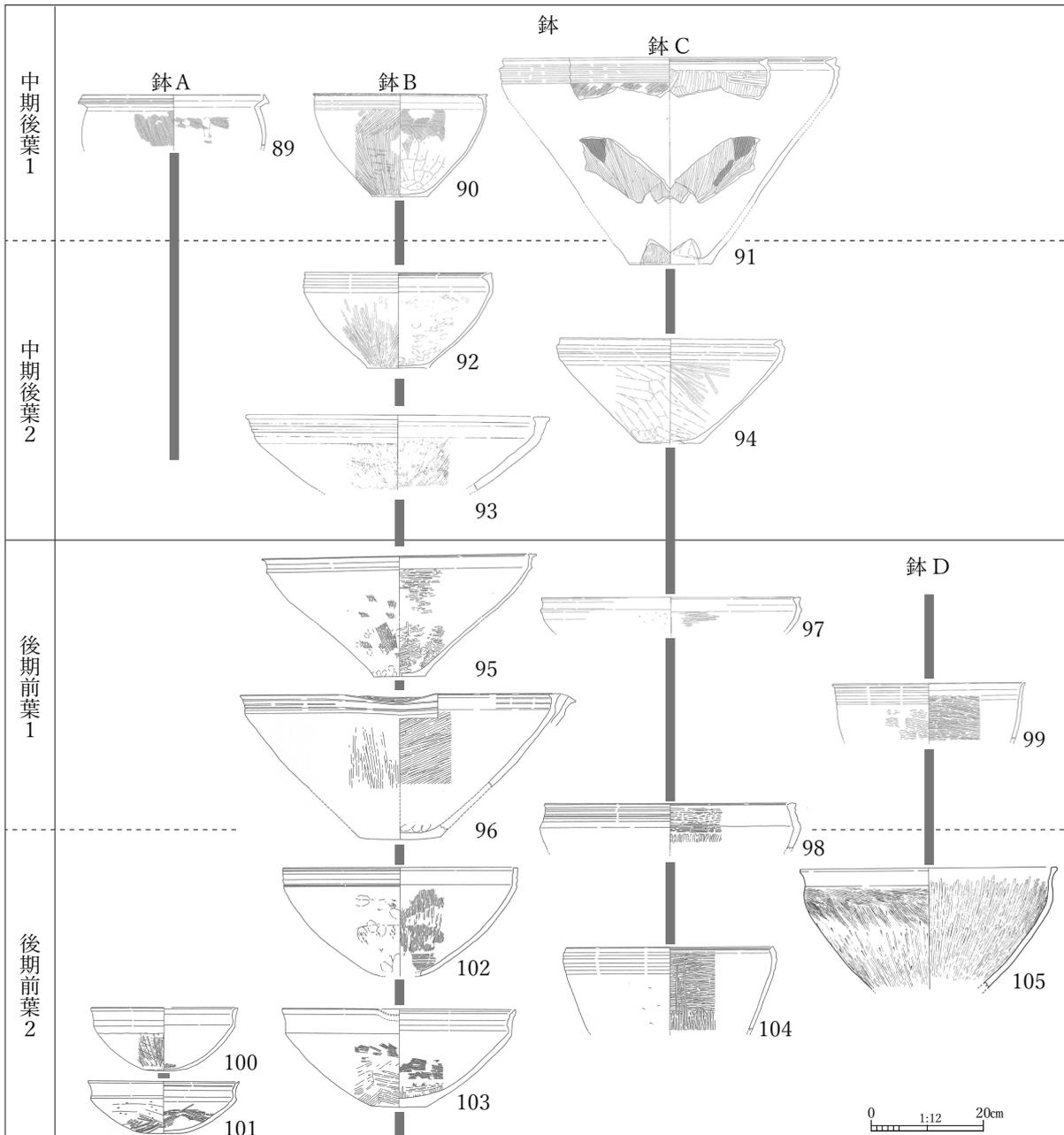
68：前田東・中村遺跡 FSK07, 69：旧練兵場遺跡Ⅱ 19次 SD86/106, 70：太田原高洲遺跡 1 方形周溝墓 SD05, 71：仲善寺遺跡 SH9202, 72：旧練兵場遺跡Ⅳ 27次 SX08, 73・79・81・87：大空遺跡土坑, 74：上天神遺跡4区 SD08, 75：旧練兵場遺跡 12次Ⅲ SH11, 76・88：小山・南谷遺跡Ⅱ SH511, 77：岡清水遺跡 SH02, 78：上天神遺跡 3区 SD02, 80：上天神遺跡 4区 SK11, 82：上天神遺跡 4区 SK03, 83：神天神遺跡 4区 SD16f, 84・85：旧練兵場遺跡Ⅲ SH5011, 86：太田下・須川遺跡 SE2

図5 土器編年図（讃岐地域）（4）

面ともにミガキ調整で仕上げるが、次第にB同様に外面はケズリが顕著になる。外面の磨きは高杯Dと同様に分割ミガキである。Dは外反する口縁部で、口縁部外面はヨコナデが顕著であり、型式組列が十分確定できるほど量は多くない。

器台はサイズによって大小に区分でき、体部に凹線、透かしなどの組み合わせによってバリエーションが認められる。ここでは細別器種が設定しない。

製塩土器は脚台付のタイプである。ハの字に開く体部で脚部が直立するものと、体部が細くグラ



89:奥白方中落遺跡SD03, 90:旧練兵場遺跡ⅢSB2003, 91:旧練兵場遺跡ⅢO区SD8001, 92:旧練兵場遺跡Ⅱ19次SD86/106, 93:仲善寺遺跡SH9202, 94:奥白方中落遺跡SR02, 95:上天神遺跡4区SK11, 96・104:上天神遺跡4区SD08, 97:香川郡条里遺跡, 98・99:上天神遺跡4区SD16f, 100・101・102・103:多肥松林遺跡SD07100, 105:大空遺跡土坑

図6 土器編年図(讃岐地域)(5)

ス状を呈し、端部がやや内湾し、脚部の端部が肥厚し、やや広がるものがある。

以上が中期末から後期にかけて確認できる器種で、これらは中期後半からの継続性で理解できる器種群であり、本研究における系統の認識(第2章第1節)との関係でいえば、瀬戸内系にあたる。高坏H、小型器台の一部は生駒西麓型の影響を受けた可能性があり、上天神遺跡の中に垂下口縁の壺もあり、一定量影響を受けた器種が含まれる[濱田2009]が、こうした器種は出土する集落遺跡が限定的である点は注意が必要である。

b. 編年・併行関係

編年 広口壺 A・B・C, 無頸壺, 細頸壺, 直口壺 A・B・C, 甕 A・E, 高坏 A・B・C・D・E・F, 台付鉢, 鉢 A・B・C, 製塩土器が中期後葉 1・2 の土器相を構成する器種群である。後期前葉になると, 台付鉢, 高坏 A・B・C・D が消滅し, 新たな器種として高坏 G・H・I・J, 器台が出現するほか, 壺 D・E, 甕, B・C・D・F が認められ, 壺甕の形態が多様化する。また, そのほかの細別器種も個別に型式変化が認められ, 擬凹線文が次第に不明瞭になっていく。その中で, 特に, 後期の始まりのメルクマールとなる器種は高坏 F や鉢 B で, 坏部が浅い鉢状を呈し, 上部へと直線的伸びるもしくはやや外傾する口縁部を呈し, その口唇部の先端を外側につまみ出したように拡張し, その上面に凹線文若しくは強いヨコナデによって凹凸を形成するという特徴を共有する。高坏 F は脚部との接合部は円板充填で, ハの字状に開き端部は上部へと肥厚させ, 凹線文が施されるものであるが, やや地域で形態にバリエーションが認められ, 一部は, 後期中葉以降も継続する形式は香東川下流域産土器を構成するものに限定される。

いずれにしても, 後期初頭は, 中期末から続く器種組成の型式変化を基軸として成立する点が重要である。良好な一括資料が少ないため, 判然としない部分もあるが, 中期末の器種組成の傾向を引き継ぐ非常にシンプルな土器組成の後期初頭 (1) と各器種のバリエーションが出現する後期前葉 (2) という変化となる可能性がある。ただし, 上天神遺跡のように, 後期 1～2, 後期 2～期の時期幅をもつ資料があり, 段階的な変化となるのか, 資料状況から本来は同時期のバリエーションが 2 段階にみえてしまっているのかは今後の検討課題である。このような前提のもとで, 後期初頭の特徴を整理しておきたい。1 期は既述のとおり, 中期末からの連続性が強く, 土器組成も単純であるように見え, 壺, 甕の口縁部は短く折り曲げ, 端部を上下に拡張, やや屈曲が緩く, 折り返し位置が低くなる。口唇部形態への施文も凹線文とするもの, 凹線文の沈線化, 無文などが共存するようになり, 体部形態もやや丸みを帯びる。調整は外面がタタキ後にハケ調整を施した後に体部下半をヘラミガキで仕上げる。内面はヘラケズリが上位まで及ぶなどの特徴を有するが, 個体での時期の識別は難しい面もあり, 組成での比較が必要となる。2 期は, 壺, 甕, 高坏, 鉢において器種分化が明確になり土器組成が多様化する。

以上の型式群の分節を通時的に整理すると, 中期末から継続性の強い後期 1 期, 器種が多様化が発現する後期 2 期という大きな流れで捉えることができるが, これまでも指摘されているように, 当該期は, 大枠の意味では凹線文土器群の傾向を引き継ぐ点に加え, 吉備地域と類似した器種組成や形態をとるものが多い点を特徴として指摘でき, 器台の出現などはその顕著な例である。器種組成の多様化, 後期中葉における器台の消滅や土器組成全体として独自性が強まるとともに, さらに香東川下流域産土器群のようなより製作地域を限定できる土器群が出現する [大久保 2003, 渡邊 2012] ことから, 中期から継続するある種の連続性の最終段階と位置付けることもできる。

併行関係 併行関係を考える上で, 参考となる他地域系統の土器群がまとまって出土する遺跡としては, 善通寺市旧練兵場遺跡, 高松市上天神遺跡, 同市天満宮西遺跡などの平野低地部の中心的な集落をあげることができる。持ちこまれているもしくは模倣された土器群の系統は, 様々な地域のものがあるが, その中で主体を占めるものは, 距離的に近接する地域からのものである。例えば,

上天神遺跡、天満宮西遺跡では生駒西麓系の土器群〔大久保 1995, 濱田 2009〕で、広口壺 B（垂下口縁、円形浮文）、高坏 B（柱状脚高坏）の搬入品や模倣品が多量に認められ、旧練兵場遺跡では、安芸や吉備地域のものが主体を占め、明確に差異が認められる。また、他地域における事例〔信里 2004, 2005〕としては、河内の久宝寺遺跡龍華地区 07056 竪穴建物、巨摩廃寺沼状遺構上層、亀井遺跡 SD3010、亀井遺跡 II SD14、摂津の古曾部・芝谷遺跡から出土する後の香東川下流域産土器群へとつながる土器群などの存在から、後期前葉と接点をもつものと考えられる。福岡市板付周辺遺跡、那珂遺跡でも搬入品が認められ、これらの資料から北部九州後期前葉新段階（高三瀨新段階）と接点をもつことが既に指摘されている〔信里 2005 など〕。いずれにしても、当該期に限定して搬入土器や模倣土器がまとまって認められる点は重要である。

c. 小結：讃岐地域における後期のはじまり

土器からみえることを端的にまとめるならば、中期末の在来系土器群の継続的変化と多様化が混在した時期が後期のはじまりといえる。具体的には、土器相を構成する土器群が中期からの連続的な型式変化の中で、器種（形式）組成が多様化、型式の変異幅の多様化（調整など）、外来系土器を含めた土器相の複雑化が同時に生じている点の特徴である。特に、器種（形式）の多様化は顕著で、上天神遺跡では、複数の細別形式の甕が認められる。これらの現象と集落動態と対比してみると、後期の集落は平野低地部に新たに形成され、中期から継続する状況が認められない点の特徴で、土器に認められる継続性は集落の動向という表現型としては確認できず、不連続性として把握できる。また、限定的な集落数の中で外来系土器が集中する交易などの中心的な集落は限定的でかつ、分散して存在している。これらの集落で出土する他地域系統の土器群の系統には、既述のとおり偏りが認められる。このことと、河内、摂津、福岡平野などの他地域において、後の香東川下流域産土器（高松平野産）に繋がる土器が搬入されている点を合わせて考えるならば、土器相を多様化させているようにみえる背景となる集団間の関係は、地域単位ではなく、特定の集団が中心となって関係形成の活発化が生じたといえそうである。搬入土器や土器製作への影響関係が、移動の頻度を示している〔森岡 1993 など〕と考えるならば、以上のような土器相における影響関係が限定的に認められる後期前葉の時期は、それ以前との連結的な集落・地域間の移動や関係性とは異なり、直接的かつ限定的な集落間（集団間）における移動と考えられ、そして、その量が最も多かった時期といえるであろう。

仮に中期からの継続的な集団関係の中で、他地域との活動が活発化（凹線文が素地か）したのであれば、上記の現象はどのように理解できるであろうか。また、既に指摘されている後期初頭の長頸壺、短頸壺などの器種（形式）の広域的な共有現象〔赤塚 2002, 川上 2011〕をどう捉えることができるであろうか。後者の現象は、ある一定の関係性の素地がないと共有現象は形成されないと想定でき、中期後半の凹線文の広がりという文様の共有から限定的な器種の共有へと変化したようにもみえる。もし、後期以降の新たな関係性によってこういった広域現象が生じたとするならば、土器の使用などという何らかの背景とともに、類似形態の共有に至る過程を想定する必要があるだろう。本稿では、土器に認められる継続性を重視し、凹線文の共有を一定程度の素地としつつも、本質的には既述した個別の集団間の関係が人々の頻繁な移動を伴う形で活発化したことで、後期前葉の土

器相の多様性が生じたと想定しておきたい。これは同時に横断的な連続性は次第に弱まっていたともいえるであろう。一方で、土器における地域色（例えば、高松平野における香東川下流域産土器〔大久保 2003〕や白い土器〔乗松 2007〕）が後期中葉にかけて次第に形成され、以後、各地で展開することを考えても、やはり後期前葉の土器相は次なる動きへの画期として捉えるべきもので、後期の開始期の土器相は、まさに後期中葉以降の土器相への変化が胎動した段階といえる。

香東川下流域産土器群などの地域色の出現 高松平野では、器種に認められる形態的特徴（細別器種）、調整などのバリエーションの存在は平野内の小地域差を反映している可能性があり、後期前葉以降、中葉にかけてこの傾向は強まっていく。このことは土器相全体としてはある種の規範の緩みとして認識できるもので、集落の低地部への進出をはじめとする新たな集落形成さらには、集団間の新たな関係性の再構築の中で、地形に区分された平野単位の中で小規模な地域集団の形成を示す現象の一つとして把握できると考えている。その顕著な事例が高松平野の一角で製作、使用され、他地域へも搬入される香東川下流域産土器群である。必ずしも土器群のみに象徴的に現れるわけではないであろうが、当該期の集団間関係のあり方の一端が表現型として、物質文化に投影されている現象と考えられる。このような土器群の成立は、中期末に系譜を求めることができる器種群を基調としつつ、上天神遺跡で認められるような外来系土器群（特に生駒西麓産や備前地域）及びその製作者による影響が、胎土選択などの視覚的要素においてインパクトを与え、形態、組成、技法、胎土の選択というまとまりとして特化していったものと考えられる〔濱田 2009〕。

以上から、讃岐における後期のはじまりは、微地形に区分された平野内部での新たな集落形成さらには新たな集団間関係が生じる中で〔渡邊 2014・2016〕、短期間に特定の集団移動（活動）の広域化と頻繁化が同時に起きたもしくは起こらざるを得なかった段階といえ、その中で、他地域との接触によって逆に地域やそのまとまりが強くなり意識されはじめることとなったといえるであろう。（渡邊）

（3）播磨地域

a. 分類

播磨地域では、特に後期前葉から中葉の良好な資料が不足している。分析資料は小神辻の堂遺跡（溝-21）、表山遺跡（段状特殊遺構）、延吉遺跡（SH03）、新方遺跡 44 次調査（SB402・403）、東有年・沖田遺跡（竪穴住居 1・土坑 40）、小神南遺跡（32-土坑）、安坂城の堀遺跡（土坑 1）、上菅生遺跡（竪穴住居 1）を基礎資料としながら、存続時期の限られている表山遺跡、芝添遺跡、畑田遺跡（SR01）、市之郷遺跡（SD08）、小神南遺跡、周世入相遺跡（土坑 22）、新宮宮内遺跡、竹万宮の前遺跡資料を参考資料として扱い、検討した。なお周世入相遺跡は広口壺、甕、鉢、器台の器種で他資料にみられない多様な型式があり、良好な一括資料とはいえないため参考に留めた。

本稿は、上記の資料群についてそれぞれの器種ごとの形態・技法・文様等の属性の有無を整理し、一括資料ごとに諸属性の存否を分析した結果、得られた変遷観である（表 3）。そのため、形式的に先後関係が推定された場合であっても、あくまで一括資料を切り離すことはしていない。中期末については参考資料として、福田片岡遺跡土坑 2 資料を基軸に、養久山・前地遺跡 494- 土器群で補うこととした。

播磨地域における後期前葉の主要器種は広口壺、長頸壺、短頸壺、無頸壺、甕、鉢、高坏、器台であり、その分類は下記のとおりである（図7）。

広口壺 垂下口縁をもつもの（9・19）、端部に面をもち内面ヘラケズリを行うもの（10）、口縁部を立ち上げ頸部に擬凹線をもつもの（11）、素口縁のもの（21）がある。

長頸・短頸・無頸壺 脚付短頸壺（12）、無頸壺（13）は中期後葉からの系譜がたどれるものだが、脚部に擬凹線がなく、また口縁部が肥厚しないものが出現している。長頸壺（14・22～25）は口縁部形態に擬凹線、直口、端部に面をもつ、開くなど様々なバリエーションがみられる。型式的に口縁が開くものが新相に位置づけられるが、一括資料として十分な資料の蓄積があるわけではない。**甕** 中期中葉以降に発達した瀬戸内系の跳ね上げ口縁甕の系譜をもつもの（15・16）と、口縁端部が肥厚しないもの（17・18・26・28）、素口縁のもの（27）があるが、いずれも内面ヘラケズリをもつ。なお18は底部形状が特徴的で、北播磨に一般的である。

鉢 くの字口縁のもの（42・43）、甕の分割成形の下半部と同じもの（44）がある。

高坏 坏部は一部に中期末のように口縁部が肥厚するものがあるが（34）、中期末の脚部形態・技法を踏襲するもの（34・35）、脚部の形態がラッパ状に変わるものの円板充填のみ踏襲するもの（38・47）、円板充填も踏襲しないもの（39・48）、柱状脚をもつもの（36・37）に大きく分かれる。このほか瀬戸内系のもの（32）、有段口縁をもつもの（45）、椀状の坏部をもつもの（46）がある。

器台 口縁部が垂下するもの（40）、端部に面をもつもの（49・50）、口縁上下に大きく拡張するもの（41）がある。

b. 編年・併行関係

編年 『弥生土器集成と編年—播磨編—』[長友編 2007。以下『集成と編年』とする。]では後期を5段階に分けており、本稿の取り扱う範囲はV-1～3となるが、V-2と3は型式的に分類できても一括資料で分離できないため、ここでは後期前葉1としてV-1を、後期前葉2～後期中葉としてV-2・3を取り扱う。

中期末は、いわゆる播磨型壺を代表とする突帯による加飾が衰退し、代わって凹線のみによる加飾が行われる時期である。後期前葉になると、壺では内面ヘラケズリ（10・11）や無頸壺等の器種組成（13）、甕では口縁端部の拡張（15・16）や擬凹線と内面ヘラケズリ（15・16・18）、高坏では脚部形状とその成形技法（34・35・38）などに中期の名残を残す。一方で、広口壺には垂下口縁のもの（9）が主要器種として出現するほか、中期末の水差から把手が取れて小型の長頸壺（14）が出現し、高坏では坏部が有稜のもの（36～39）が主流となるとともに柱状脚のもの（36・37）が新たに出現する。器台では筒部施文技法が凹線から擬凹線に変化している。中期末から後期前葉の変化は、中期的器種組成が消滅して後期的な器種が出現しながらも、内面ヘラケズリや擬凹線といった中期的属性をいまだ保持しているという段階である。

なお、小神辻の堂遺跡溝-21資料及び表山遺跡段状特殊遺構資料にのみ、拡張口縁・擬凹線口縁の広口壺（10）、小型長頸壺（14）、外面下半ミガキ・ケズリの甕（16・17）、柱状脚の高坏（36）が存在している。一方で、素口縁や内面ハケ調整の広口壺、外反口縁や内外面ハケ調整の長頸壺、くの字口縁及び内面ハケ調整、外面タタキ調整の甕、くの字口縁の鉢、典型的な有稜高坏やラッパ

状中実脚の高坏、素口縁や筒部無文の器台は認められていない。これが『集成と編年』のV-1期に該当する。

後期前葉1～後期中葉になると、一部には残存するものの(20) 中期的属性がほぼ消滅し、代わって素口縁や内面ハケ調整の広口壺(21)、外反口縁や内外面ハケ調整の長頸壺(22～25)、くの字口縁で外面タタキを残す甕(28)、くの字口縁の鉢(42・43)、典型的な有稜高坏やラッパ状中実脚をもつ高坏(48)、筒部が無文の器台(49・50)といった属性が出現する。これは『集成と編年』におけるV-2・3期にあたるが、現在の資料群の分析では細分が困難と考えている。『集成と編年』の成果では、東西播磨で有稜高坏坏部に外反度の進展がみられるとし、また西播磨では外面ハケ・タタキ仕上げの甕の出現及び分割成形技法の出現をメルクマールとする。しかし今回分析した後期前葉から後期中葉の資料群で、外面ハケ調整の甕を持たない事例は1例もなかった。

併行関係 併行関係を考えるうえで重要な資料として、東瀬戸内地域との形態的関連が指摘される表山遺跡段状特殊遺構出土の広口壺(11)や姫路市芝添遺跡出土の高坏(32)が挙げられる。この2遺跡は、遺跡全体で出土した資料が型的にまとまりがあり、後期前葉に限定される時期と推定される。またその意味で、表山遺跡では後の長頸壺につながる小型長頸壺(14)や柱状脚(36)、後期型の器台(40)が出現していること、高坏には円板充填技法しかみられないことなどは、後期のはじまりの併行関係を様式的に比較するうえで重要な情報となろう。

c. 小結：播磨地域における後期のはじまり

後期前葉の新しい土器様式 播磨は東瀬戸内地域にあたり、凹線文の成立地とも目されることもある地域である。当然ながら「瀬戸内系」である凹線文は地域の土器様式に深く根ざし、口縁端部に擬凹線をめぐらせ、内面ヘラケズリを行うといった特徴に代表される瀬戸内系の影響を強く受けた後期初頭の土器様式は、播磨地域にあっては前段階からの自然な流れをうかがわせるものである。しかしその播磨においてさえも、中期と後期の間に新たな土器様式の存在を認めないわけにはいかない。それが垂下口縁壺(9)、小型長頸壺(14)、柱状脚の高坏(36・37)といったそれまでの土器様式からでは系譜が追えない器種群の存在である。

これらはいまだ確証は得られていないものの、本研究では「生駒西麓系」と評価されているが、V-1期とした小神辻の堂遺跡の溝-21や表山遺跡の段状特殊遺構では、瀬戸内系である拡張口縁や擬凹線をもつ広口壺に混じって、すでに垂下口縁の広口壺や柱状脚を持つ高坏が出土している。つまり、これらの新しい土器様式は段階的に受け入れられたわけではなく、一括様式として受け入れられた可能性が高いことを意味している。ただし表山遺跡に顕著だが、広口壺などは特に型式のバリエーションが豊富であり、様式として特定しづらい一面がある点に注意はしておかなくてはならない。

なお、播磨地域における後期前葉の集落遺跡は、それ以前の中期後葉の集落遺跡数と比べると圧倒的に少ない。特に小神辻の堂遺跡や表山遺跡などは後期前葉の時期にのみ営まれる遺跡であり、純粋な中期後葉の土器は含まれていない。そして当然ながら中期後葉の集落遺跡に後期前葉の土器群は含まれていないのであり、「移住を契機として生産する土器様式を変更した」という、やや不可解な事実が浮かび上がってくる。この変化は、移住を契機として起きたものなのか、もしくはこ

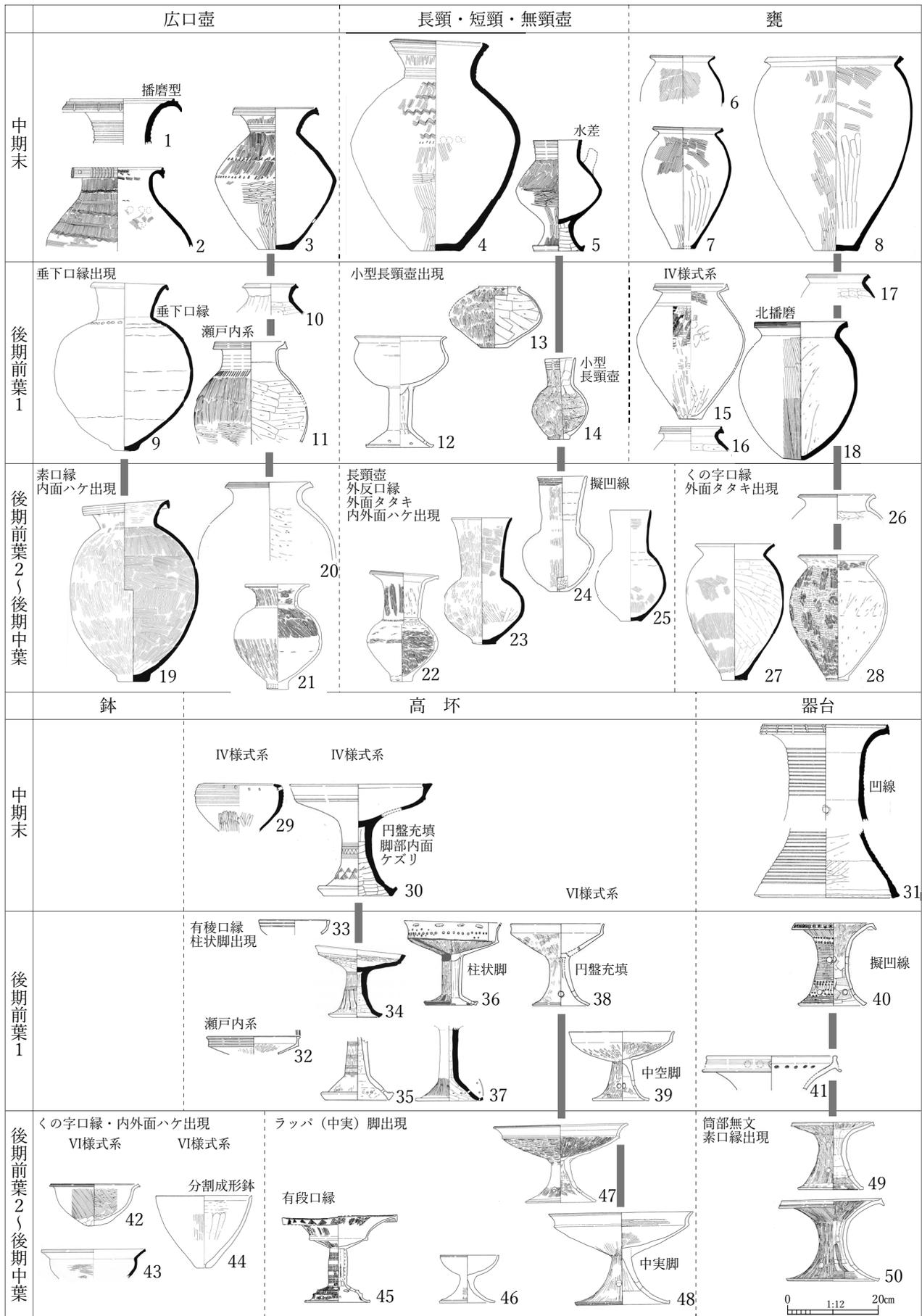


図7 土器編年図（播磨地域）

の変化が移住を引き起こす一原因となっていたのかはわからないが、中期から後期にかけての土器様式の変化からみる限り、瀬戸内の要素が純粋に発展しつつも、それまでになかった東方からの様式が受け入れられているということになるのだろう。

後期中葉の土器群 ではその後、後期中葉にかけて播磨地域の土器様式はどうなったのか。結論からいうと、口縁端部の擬凹線や内面ヘラケズリといったいくつかの名残を残すものの、垂下口縁の広口壺、長頸壺、外面タタキの甕、分割成形鉢、有稜高坏など総体的には近畿地方の土器様式圏に入ってしまった。そして後期後葉になると、完全に同一の方向性を持つようになる。播磨地域の土器様式にとって、後期は瀬戸内から近畿への転換期であったといえる。(荒木)

(4) 摂津地域

a. 分類

現状における後期前葉の資料の分布の偏りを踏まえ、北摂地域（大阪府域）を主な対象として主要器種を以下のとおり分類する（図8・9）。

広口壺 形態と器面調整を分類し、その組み合わせによって類型を設定する。形態Aは、平底に肩のはった体部、短く直立した頸部に口縁部を外反させ、端部を拡張するものである。口縁端部には退化した凹線が加えられ、頸部に列点文などをもつ個体も多い。形態Bは、突出底にいちじく形ないし球形の体部、直線的に外反した頸部に垂下口縁をもつものである。形態Cは、突出底に球形の体部をもち、頸部は直立したのち口縁へ強く屈曲し、端部が下方へ拡張されるものである。形態Dは、突出底に扁平な体部、強く外反した頸部に素口縁をもつもので、端部は面をもつものと丸く収めるものがある。調整は、外面ミガキないしハケで内面ナデのものをa、外面ハケで内面ケズリのをb、外面タタキで内面ケズリのをcとする。実際の資料に認められる主な組み合わせはAa, Ab, Ac, Ba, Ca, Daの6類型である。

長頸壺 球形の体部に直線的に上方へ伸びた口頸部をもつもの。体部高15cm程度以下の小型のサイズを基本とする。外面は、ミガキないしハケ調整、内面はハケないしナデ調整で仕上げられる。体部最大径が中位にあり、平底気味のものをA、体部最大径がやや上位にあり、突出底をもつものをBとする。

短頸壺・水差形土器 短頸壺は、縦長の体部に短い口頸部で、体部高15～20cmの中～小型のサイズが基本。外面は、ミガキないしハケ調整、内面はケズリないしナデ調整で仕上げられる。口縁部に擬凹線、頸部に列点文を伴うものがあるほか、記号文を持つものが多いことが特徴である。水差形土器は、短頸壺と類似した器形・調整で肩部に把手を伴うもの。

甕 口縁部形態と器面調整を分類し、その組み合わせによって類型を設定する。口縁部が短く外反するものをA、強く外反して端面を拡張するものをB、長く外反するものをCとする。調整の分類は、広口壺のa～cに、外面タタキで内面ナデのものをdとして加える。実際の資料に認められる主な組み合わせはAa, Ab, Bb, Bc, Cc, Cdの6類型である。そのほか、受口状口縁をもついわゆる近江系が一定量認められるが、在地の土器の分類には含めていない。

高坏 いわゆる有稜高坏を対象として脚部形態と坏部形態を分類し、その組み合わせによって類型を設定する。坏部から脚部が明瞭な屈曲点なしに移行するものをA、坏部と脚部の間に屈曲点があ

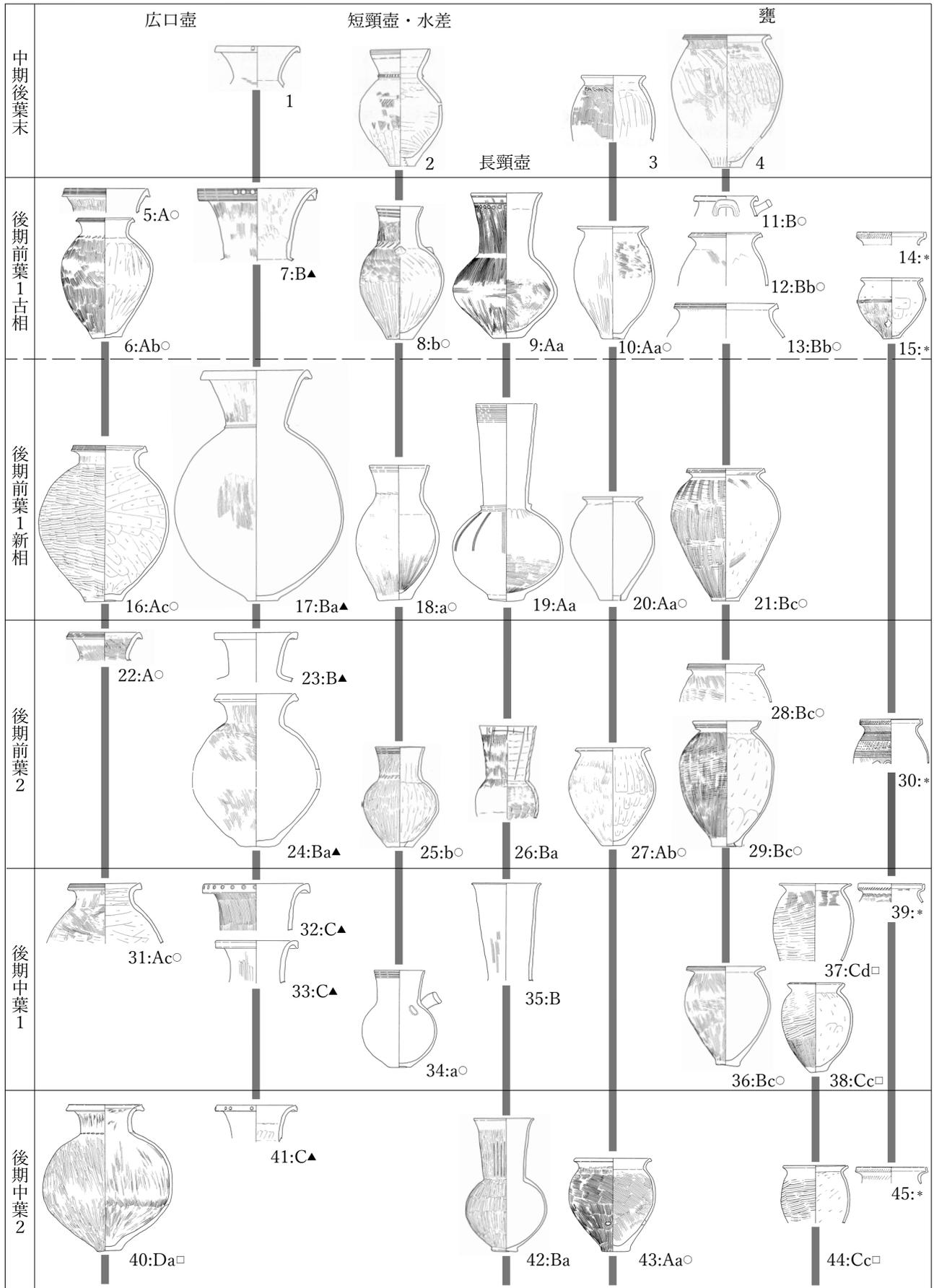


図8 土器編年図(摂津地域)(1)

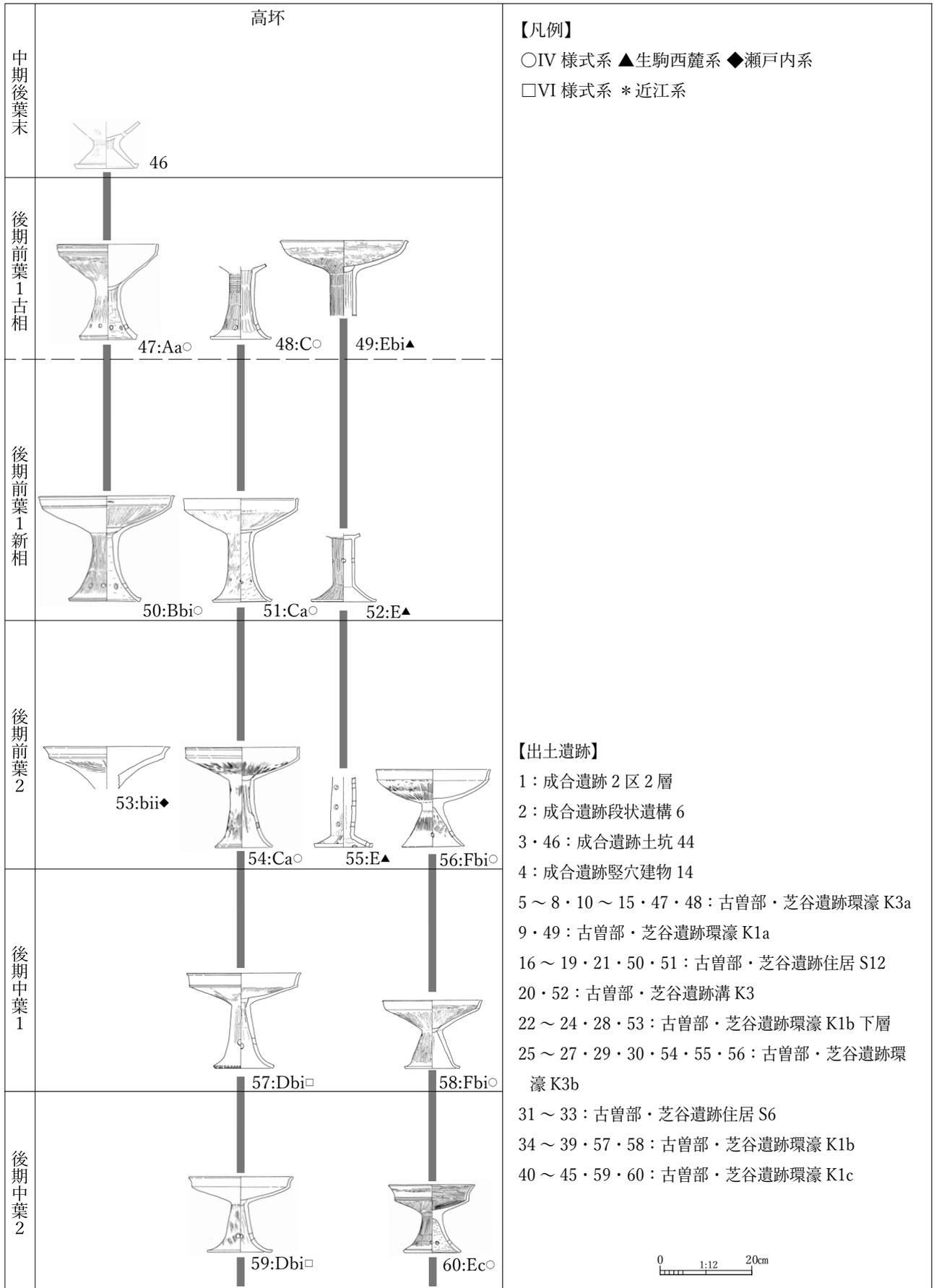


図9 土器編年図(摂津地域)(2)

り、裾に向かって緩やかに広がるものを B、太い筒形の脚注部の裾が緩く外反するものを C、円錐形の脚柱部の裾が強く外反するものを D、円筒形の脚柱部の裾が明瞭な屈曲点をもって外反するものを E、坏部からハの字状に広がるものを F とする。A・B は、基本的に内面ケズリ調整、C～F は内面ナデあるいは未調整で仕上げることを特徴とする。坏部形態は、口縁部が上方へ直立するものを a、やや外傾するもののうち端部に面を持たせるか丸く収めるものを bi、外傾しつつ口縁端部を拡張して水平な面を形成するものを bii、強く外反するものを c とする。実際の資料に認められる主な組み合わせは、Aa, Ba, Ca, Cbi, Dbi, Dc, Ea, Ebi, Fbi の 9 類型である。なお、口縁部形態 bii に組み合う脚部形態は現状では不明である。

器台 中期以来の器種で、文様や透かし孔のあり方など多様であるが、さしあたり器高 30 cm 以上の大型のものを A、30 cm 未満のものを B としておく。

系統 第 2 章第 1 節の系統に関する記述に基づき、上記してきた器種と系統の関係性について下記のとおり考えているが、IV 様式系に関しては、後述するように中期末以来播磨地域との共通性が顕著である点に注意が必要である。また、長頸壺については、体部調整にもとづけば生駒西麓系に位置づけられる可能性がある。

- ・ IV 様式系：広口壺 A、短頸壺、水差形土器、甕 A・B、高坏脚 A・B・C、器台
- ・ 生駒西麓系：広口壺 B・C、高坏脚 E
- ・ 瀬戸内系：高坏坏部 bii
- ・ VI 様式系：広口壺 D、甕 C、高坏脚 D

b. 編年・併行関係

摂津地域では、森田克行によって、長期間を対象とした編年案が提示されている [森田 1990]。ここでは、これに適宜必要な修正を加えることにより、後期前葉から中葉にかけての土器様相の変遷を 4 段階（細別 5 段階）に整理する⁽⁹⁾。

中期末 当該期の資料はきわめて少ないが、高槻市成合遺跡出土土器のうち新相に位置づけられるもの、吹田市中ノ坪遺跡 3052 土坑などをこれにあたるものとして確認しておく⁽¹⁰⁾。全体として無文化の進行が顕著であり、櫛描き文はごくわずかとなる一方、凹線文および退化凹線文が存在感を増している。摂津形広口壺は僅少となり、体部最大径をやや上位にもち、内面にケズリを加えたもの（次段階以降の広口壺 A）が増加する。また有段口縁の壺は減少し、変わって直口壺、短頸壺の類が大型のものから小型のものまで幅広く用いられるようになる。甕については、口縁端部を拡張して凹線を施し、内面ケズリ調整を加えるといった広口壺と共通の特徴をもつものが増加する。高坏や鉢など、その他の器種は、中期的なものを維持しているが、いずれも粗雑化が著しい。

本段階の土器様相は、内面ケズリ調整の多用をはじめとして、播磨地域との共通性の高まりを示しており、瀬戸内系の土器の一端としても理解が可能である。

後期前葉 1 中期末からの連続性が顕著な段階で、古相と新相に分けて把握することが可能である。古相については、良好な事例は少ないものの、古曾部・芝谷遺跡環濠 K3a、同環濠 K1a を挙げることができる。広口壺については IV 様式系の A が主体であるが、生駒西麓系の B も一定の割合を占め、より大型の後者と相対的に小さいものまで幅広い前者というサイズの違いが看取できる。ま

た、広口壺Aについても外面ハケ調整のbが主体で、タタキ調整のcの出現は新相より顕著になる。広口壺より小さな貯蔵具として、多数の短頸壺が出土する一方、長頸壺はごく少数のAが認められるのみである。甕については、口縁部を拡張し、内面にケズリを加えるBbが主体を占める一方で、中期以来のAaも一定量が認められることを特徴とする。さらに前段階までほとんど認められなかった近江系甕が突如多数出現することは地域間交流のあり方を考えるうえで重要である。高坏は、IV様式系の脚部形態A・Cに加え、柱状脚のEも認められる。器台は、全体量が少ないが大型のA、小型のBの双方が含まれる。

次に新相として、古曾部・芝谷遺跡住居S12、茨木市郡遺跡3013溝、豊中市新免遺跡第22次SH10を挙げておこう。広口壺は、引き続きAが主体でより大型のBがこれに組み合わせられる様相は変わらないが、外面タタキ調整のAcの存在が顕著となるのが前段階との大きな相違点である。その他の壺では、短頸壺が主体となる一方、長頸壺はまだ少ない。甕については、Aが減少して主体となったBの中で、広口壺Aと同様に外面タタキの調整bが顕著となる。高坏は、脚部Aがほぼ姿を消してBおよびCが主体となる。

このようにこの段階の土器様相は、瀬戸内地方との近縁性が顕著なIV様式系を主体としつつ、これに一定量の生駒西麓系が組み合うことが特徴である。内面ケズリ調整など、中期以前には播磨地域以西に分布した特徴が顕著にみられるようになる。これによって中期以来播磨地域との共通性が高かった北近畿地方の土器様相との類似性が高くなっている点も注目される。また、近江系土器が多数搬入されるが、在地の土器様式への影響は、ほぼ認められない。

後期前葉2 古曾部・芝谷遺跡環濠K1b下層、環濠K3bが挙げられる。広口壺には、引き続きA、Bがあり、Bについては搬入品だけでなく、在地生産されたものおよびサイズの小さいものが増加することが指摘できそうである。その他の壺では、長頸壺の比率が増加するが、水差形土器や無頸壺もこの段階ではまだ一定数が認められる。甕については、バリエーションが豊富であるが、引き続き内面ケズリのものの割合が高い。高坏については、脚部Bが姿を消し、Cが主体となるとともに、新たにハの字状に開いた脚部Fが加わる。

このようにこの段階は、生駒西麓系の在地土器への定着や高坏Cの主流化といった後期的様相の確立によって特徴づけられる。また前段階に引き続き近江系土器が搬入されており、受口状口縁風の甕など、わずかながら在地土器による模倣がなされている。また、讃岐系土器も長頸壺や高坏などが搬入されており、高坏口縁biiは、これを模倣したものと考えられる。

後期中葉1 良好な事例は少ないものの、古曾部・芝谷遺跡環濠K1b、住居S6を挙げることができる。壺については、短頸壺が姿を消す一方、長頸壺が増加する。水差形土器や無頸壺は、きわめて稀な存在となる。甕は、VI様式系のCが出現し、Bとともに用いられるが、内面ケズリの調整cが多く、分割成形技法の痕跡は不明瞭である。高坏は、前段階以来のCに加えてVI様式系のDが一定量を占めるようになる。

このように、この段階の土器様相は、甕および高坏におけるVI様式系の出現によって特徴づけられる。

後期中葉2 古曾部・芝谷遺跡環濠K1cを挙げることができる。広口壺については、IV様式系のAが姿を消す一方、VI様式系のCが出現する。長頸壺は、鉢をベースとしたBが大半となる。水差

形土器や無頸壺は、きわめて稀である。甕でも、IV様式系のBは消長し、VI様式系のCが主流となるが、いまだ分割成形技法の痕跡は不明瞭である。高坏は、VI様式系のDが主体となる。器台は、いまだ大型のAが残存するようである。

このように、この段階の土器様相は、全体的なVI様式系の主流化によって特徴づけられる。また、近江系の甕の搬入も継続している。

併行関係 他地域との併行関係を直接確認できる搬入資料としては、生駒西麓系の垂下口縁をもつ広口壺Aや柱状脚の高坏、近江系の甕、讃岐系の高坏を挙げることができ、いずれも後期前葉の時間幅に収まるものとして矛盾ないと考えられる。形態的類似性からは、高坏の脚部形態に関して河内地域と類比可能なものが多く、後期前葉1のIV様式系の変容、後期前葉2における定型化、後期中葉1におけるVI様式系の出現といった相似た変遷をたどる。一方、製作技法からみると、後期中葉においても、内面ケズリ調整の壺・甕が多く、分割成形技法はあまり採用されていない⁽¹¹⁾。摂津地域において、分割成形技法の本格的採用は、後期後葉に下るものと考えられ、河内・大和地域との大きな相違となる。

c. 小結：摂津地域における弥生時代後期のはじまり

摂津地域における後期前葉の土器様式は、IV様式系を基本としつつ、生駒西麓系が一部の器種を補完し、これに少量の近江系および讃岐地域からの搬入品が加わることを特色とする。

IV様式系の評価と播磨地域との関係性 これらの系統のなかで主体を占めるとともに、もっとも評価に悩むものがIV様式系である。これらの土器は、いわゆる瀬戸内的な特徴を有し、研究史上も瀬戸内からの人の移動と関連付けて解釈されてきたものであるが〔西谷 1999〕、ここでは高槻市成合遺跡における近年の調査成果〔伊藤・笹栗編 2014〕により明らかとなった中期末、すなわち古曾部・芝谷遺跡出現直前の様相との連続性を評価したい。成合遺跡出土土器は、無文化の進展と壺・甕における内面ケズリ調整及び退化凹線をもつ口縁部等を特徴とするものであり、近隣では、奈カリ与遺跡や有鼻遺跡をはじめとする摂津北西部の三田盆地に類似する資料が認められる。そして、この三田盆地が土器および遺構（いわゆる一〇土坑）により、播磨地域からの人の移住があった可能性がきわめて高いと考えられる場所であること〔山崎 1997・2013〕を踏まえれば、これらの遺跡において認められる土器の特徴もこのような事象を背景とした、播磨地域との関係性において評価すべきものと考えられる。

山陽系土器群の広がり 三田盆地への移住者の故地である播磨地域では、弥生中期から加古川・由良川ルートを通じた北近畿地域との交流が盛んであることが知られており〔与謝野町 2005 など〕、後期前葉においても、壺・甕・鉢などの各種の器種において、体部内面ケズリ調整および退化凹線をもつ口縁部といった特徴が共有されるなど、顕著な親縁性を示す。これらの土器は、さらに西側の吉備地域まで形態・文様を少しずつ違えながら漸移的に推移しており、これを仮に“山陽系土器群”⁽¹³⁾と呼べば、摂津地域のIV様式系はその広がり⁽¹³⁾の東南端に位置することになる。このように、一時的ながら瀬戸内から日本海沿岸におよぶ広域土器様式圏が形成され、摂津地域は後述するような“畿内”の他の土器様式圏との接点としての位置を占めるようになったものとみることができる。このことは、凹線文土器の波及に際し、文様は共通でも製作技法の面であくまで“畿内”の様相を

示していた中期後葉の摂津地域のありようからの大きな変化といえよう〔深澤 1994〕。また、これらの土器様相は、点と点を結ぶような単発的な影響伝播ではなく、リレー式かつ継続・恒常的な交流を反映したものであったと考えられることも重要である。

瀬戸内系と瀬戸内航路 これに対し、讃岐地域からの搬入品として、古曾部・芝谷遺跡及び芝生遺跡において、高坏複数点および細頸壺1点が搬入されているほか、甕についても可能性のある個体が認められる。点数としてとりたてて多いわけではないが、後期前葉の近畿地方における讃岐産土器の分布は、限定的であり〔中川・秋山 2004〕、瀬戸内海を通じた交流をうかがわせる資料として重要である。具体的な形態として、讃岐地域との直接的交流、もしくは河内湖の対岸に位置し、より多く讃岐産土器が分布する中河内地域と讃岐地域との交流に伴う人の往来を反映するものである可能性を指摘できよう。

近江系と淀川ルート 東との関係では、後期前葉1以降、近江系土器が多数搬入されることが特筆される。器種は大半が甕であるが、当該期には山城地域にも多数の近江系土器が分布しており、山城～近江地域との交流が一挙に活発化したことが窺われる。中期後葉における近江地域への凹線文土器の波及は、瀬戸内から日本海側を経由したものであったのに対し〔深澤 1994〕、後期前葉には、淀川を遡って琵琶湖へ至る交流ルートが形成されたものと考えられる。

河内系と大和川ルート 一方、生駒西麓系からは、南側に接する河内地域との関係性を窺うことができる。後期前葉には、後期中葉以降に対して、多くの生駒西麓産の搬入品が認められる。器種としては広口壺および高坏が大半を占めており、都出比呂志の分類〔都出 1989〕を再編した秋山浩三の土器移動の類型〔秋山 1989〕でいえば、特定の器種に重きをおいて搬入されるb類にあたるが、広口壺については、その法量及び重量からして内容物の交換のためというよりは、当該土器自身の価値を求めた結果の移動と思われる。さらに特徴的なのは、この壺が器形・装飾・調整技法が結びついたセットとして在地の土器様式に受容されることにより、中期後葉の広口壺にとってかわることである。一方の高坏は、柱状脚をもつものであり、摂津の凹線文系との対比という観点からは、ケズリ調整を伴わないことを特色とする。ケズリ調整の不採用は、広口壺についても共通する特徴であり、それに代わる成形技術として、製作工程の中で適宜半乾燥を行う分割成形技法が重要な役割を果たしたのと考えられる。

このようなことから、強い横方向の回転を特徴とする中期的土器製作技術体系の崩壊を背景に、製作コストの高い器種について、いち早く分割成形技法が採用された生駒西麓産土器⁽¹⁴⁾が多数搬入され、模倣されることになった、という可能性を考えておきたい。また、このような土器の影響関係は、隣接する河内地域との交流によるものであるが、それにより、河内・大和間をつなぐ大和川ルートと接点をもつことになることも重要であろう。

VI様式系の広がり 一方、後期中葉のVI様式系の本質は、分割成形技法に基づく体系的な土器づくりにあるが〔三好 2019〕、後期中葉の摂津地域においては、その表層的な模倣に留まっている。当該期において高度な土器製作技術体系を発展させている河内地域との差は明瞭であり、近畿地方に広く波及するVI様式系技術の中心地と周辺といった関係性をみてとることができる。

畿内北部における交流の結節点 以上の考察から、土器様相からみた摂津地域の後期のはじまりを次のようにまとめることができる。すなわち、西日本の広い範囲において、文様および強い横方向の

回転を特徴とする中期的土器製作技術体系が崩壊ないし動揺する中、摂津地域は中期末以来の地域間関係を下敷きとしつつ、山陽～北近畿におよぶ広い土器様式圏の“畿内”地域における窓口的な位置を占めることとなった。その背景として、この地に居住した地域集団が西の播磨地域の集団との恒常的なコミュニケーションを継続しつつ、大和川ルート、淀川ルートおよび瀬戸内航路等、多数の交流路を通じた遠隔地間のネットワークを形成したものと考えられることができる。(三好)

(5) 河内地域

a. 分類

河内地域における後期前葉から中葉の主要器種を以下のとおり分類する(図10・11)。

広口壺 Aは、突出底に球形ないし紡錘形の体部、直線的に外反した頸部に垂下口縁をもつものである。体部高40 cm以上の大型品から20 cm程度の小型品まで幅広いサイズのものがある。外面はミガキ、内面はナデ調整で仕上げられ、口縁部外側面には、円形浮文や竹管文が加えられることがある。Bは、突出底に球形の体部をもち、頸部はやや短く、中ほどから強く屈曲し、口縁端部は粘土の貼り付けにより下方へ肥厚するものである。口縁部外側面には、擬凹線文および竹管文を加えた円形浮文が施されることがある。Cは、突出底に扁球形の体部、強く外反した頸部をもつもの。体部高15～20 cm程度の中～小型のサイズを基本とし、素口縁をもつことが一般的である、相対的に大きいものは、口縁端部を拡張して文様を持つことが多い。

長頸壺 球形の体部に直線的に上方へ伸びた口頸部をもつもの。体部高15 cm程度以下の小型のサイズを基本とする。まれに垂下口縁をもつものがある。体部最大径が中位にあり、平底気味のものA、体部最大径がやや上位にあり、突出底をもつものをBとする。

短頸壺 縦長の体部に短い口頸部を持ち、体部高15～20 cmの中～小型のサイズが基本。ミガキあるいはハケ調整で仕上げるものと、タタキの痕跡をそのまま残すものがある。頸部・口縁部に擬凹線や列点文を伴うものがあるほか、記号文を持つものが多いことが特徴である。

甕 口縁部形態と器面調整をそれぞれ分類し、その組み合わせによって類型を設定する。口縁部が短く外反するものをA、有段口縁となるものをB、長く外反するものをCとする。調整は、外面(ケズリの後に)ミガキあるいはハケで内面ナデのものをa、外面ミガキないしハケで内面ケズリのものをb、外面タタキで内面ナデのものをc、外面タタキで内面ケズリのものをdとする。実際の資料に認められる主な組み合わせはAa, Ab, Ac, Bb, Bc, Ca, Cb, Ccであり、混淆が顕著である。

高坏 高坏は、いわゆる有稜高坏を対象として脚部形態と坏部形態をそれぞれ分類し、その組み合わせによって類型を設定する。脚部が直線的に広がってハの字状を呈するものをA、下方へ緩やかに伸びるもののうち、裾近くが外反するものをB、中ほどから強く外反するものをC、脚部が柱状で裾が屈曲するものをD、小型でハの字状に開くものをEとする。坏部形態は、口縁部が内傾するものをa、上方へ直立するものをb、やや外傾するものをc、強く外反するものをdとする。実際の資料に認められる主な組み合わせは、Aa, Ab, Bb, Bc, Bd, Cd, Db, Dc, Eb, Ec, Edである。

器台 中期以来の器種で、文様や透かし孔のあり方など多様であるが、さしあたり器高30 cm以上の大型のものをA、30 cm未満のものをBとしておく。

系統 第2章第1節の系統に関する記述に基づけば、当該期の河内地域において認められる主な土器は、IV様式系、生駒西麓系、瀬戸内系、VI様式系のいずれかに比定できるものが多い。器種分類と系統の関係性は、下記のとおり考えているが甕については折衷的なあり方が顕著である。また、長頸壺については、体部調整にもとづけば生駒西麓系に位置づけられる可能性がある。

- ・IV様式系：短頸壺、高坏脚 A・E、器台 A・B
- ・生駒西麓系：広口壺 A・B、甕 Aa および甕の体部調整 a、高坏脚 D
- ・瀬戸内系：甕 Ab、Bb および甕の体部調整 b
- ・VI様式系：広口壺 C、甕 Cc および甕の体部調整 c、高坏脚 B・C

b. 編年・併行関係

河内地域では、当該期に関してすでに多くの編年案が提示されている〔井藤 1983、寺沢・森井・1989、三好 1993、若林 1999b〕。ここでは、長期間を対象として、体系的な検討がなされた寺沢薫・森井貞雄の編年を踏まえつつ、これに適宜必要な修正を加えることにより、後期前葉から中葉にかけての土器様相の変遷を4段階に整理する。⁽¹⁵⁾

中期末 良好な資料として、亀井遺跡Ⅱ-SK05・25、亀井・城山遺跡Ⅸ-b層、亀井遺跡SD-03E・03W、西ノ辻遺跡N地点出土土器が挙げられる。低地の土器と生駒西麓地域の土器は、形態・調整・装飾・胎土を異にする別の土器体系に属するものだが、平野部ではかなりの割合の生駒西麓産土器が出土する。両者は組み合わせて用いられることが一般的であるが、土器の属性には混淆が少ないことが特徴である。なお、生駒西麓系はすでに無文化が進行しており、また、体部下膨れの壺および高坏等において分割成形技法の採用が始まっているものとみられる〔森井 1982：p.23〕。

後期前葉1 久宝寺遺跡竜華地区07056 堅穴建物、亀井遺跡Ⅱ-SD12・SD14、亀井遺跡-SD04が挙げられる。中期に続き低地の胎土を持つ土器と生駒西麓産土器が共に用いられるが、後者の比率は著しく減少する。一方で、生駒西麓系器種が低地の胎土で生産されるようになり、広口壺については完全にIV様式系に置き換わる。当該期の広口壺は大型品から中小型品までAであり、より小型の短頸壺および長頸壺との組み合わせで用いられた。長頸壺については、ごくわずかにBも認められるものの、圧倒的にAが多い。甕については、成形・調整が著しく粗雑化しているものの、中期以来のAaが多い。一方で内面にケズリを加える瀬戸内系のものも一定数が生産される。広く瀬戸内地域に通有の有段口縁をもつBbに加え、くの字形口縁のAbが認められるが、後者のタイプの生産地は、讃岐地域の中の一部の集落に限られる可能性があり（第2章第2節 讃岐地域）、讃岐地域と河内地域の間の交流が特定の集団間においてなされた可能性を窺わせるものである。また、ごくわずかながら外面タタキ調整の甕も認められるが、タタキ目が水平ないし右下がりに施されるものが多い点が特徴的である。⁽¹⁶⁾高坏は、生駒西麓系のDbが増加しつつもIV様式系のAa・Abが残存することを特徴とする。器台は、通有のBが主体であるが、大型のAも散見される。

このようにこの段階の土器様相は、IV様式系と生駒西麓系の器種の組み合わせによって構成されるようになることが最大の特徴である。これは低地の集落で生駒西麓系が在地の器種として定着する一方で、生駒西麓の集落においてIV様式系の器種が生産されるようになることによって生じた現象であり、生駒西麓地域と低地の土器様式の融合とみることができる。また、引き続き生駒西麓系

の壺と高坏において分割成形技法が認められる。さらに、讃岐系を中心とする瀬戸内系土器が多数搬入されるが、在地の土器様式への影響は、甕や壺における内面ケズリ技法という限定的な範囲に留まっている。

後期前葉2 良好な資料として、亀井遺跡Ⅱ-SX03、亀井遺跡SD3008が挙げられる。広口壺は、引き続きAが主体であり、この段階では鉢をベースとした器種横断的な分割成形技法の存在は認められない。広口壺と短頸壺、長頸壺の組み合わせは前段階から継続している。長頸壺は、Aに対してBの比率が高まる。水差形土器や無頸壺もこの段階ではまだ普遍的な存在である。甕は、引き続きAaが多いが、調整はさらに粗雑化し、外面ケズリ放しのものが多い。Abも少数認められるほか、瀬戸内系のBも生産されるが、搬入品と比べるとかなり在地化が進んでいる。また、わずかではあるが、全面タタキのAcが出現する。ただ、依然として鉢は少なく、分割成形技法の体系化は次の段階を待たねばならない。高坏は、脚部Aの流れを引くBが新たに出現する。口縁部は、内傾したaがほぼ姿を消し、直立したbが主体となる。この結果、当該期の高坏は、Ab、BbおよびDbによって構成されるものとなる。器台は、引き続きBが主体であるが、大型のAもわずかに残るようである。

このようにこの段階の土器様相は、Ⅳ様式系の減少およびⅥ様式系の出現の端緒が認められることによって特徴づけられる。

後期中葉1 良好な資料として、城山遺跡SB1001、西ノ辻遺跡⁽¹⁷⁾I地点出土土器、長原遺跡99-15次SD807中下層、長原遺跡31工区SB01、池島・福万寺遺跡溝30、弓削遺跡溝上部が挙げられる。広口壺は、大型品ではAが減少し、代わってBが主体となる。中小型品については、短頸壺が減少するとともにⅥ様式系の広口壺Cが増加し、代替的な位置を占めるようになる。長頸壺はAが消長し、ほとんどがBで占められるようになる。これらの壺の大半は、鉢をベースとした分割成形技法によるものである。一方、水差形土器や無頸壺は、きわめて稀な存在となる。甕は、定型化した分割成形技法によるものとなるが、外面調整については、タタキを残すものとともに、ハケあるいはケズリで仕上げたものが一定の割合を占めることがこの後の段階との顕著な相違である。また、有段口縁をもつ甕Bは、安定した存在として一定の割合を占めるが、内面調整はナデ仕上げのものも多い。高坏は、脚部Aが消滅してⅥ様式系のBが主体となり、口縁部は外反を強めたcが加わる。器台は、Bが主体でAはみられなくなる。

このように、この段階の土器様相は、生駒西麓系の減少およびⅥ様式系を特徴づける分割成形技法の採用開始によって特徴づけられる。

後期中葉2 良好な資料として、長原遺跡02-8次南区弥生時代後期土器集積、萱振遺跡13次SD201、段上遺跡溝100が挙げられる。各器種において、前段階にみられたⅥ様式系への移行の様相がより顕著となる。短頸壺はさらに減少して、横長の鉢をベースとした広口壺と縦長の鉢をベースとした長頸壺の組み合わせが明瞭となる。甕については、調整の粗雑化が進み、型式としてはCcを主体であるが、前段階以来の多様な様相が継続している。高坏については、脚部Cが主体となるとともに、口縁部はさらに伸長し、外反を強めたdが大半を占める。器台は小型化が進行する。

このように、この段階の土器様相は、鉢をベースとした器種横断的な分割成形技法の体系化を特徴とするものと評価することができる。

搬入土器 讃岐地域の土器の出土が顕著で、器種も甕、高坏、長頸壺、鉢と幅広く、直接的交流の

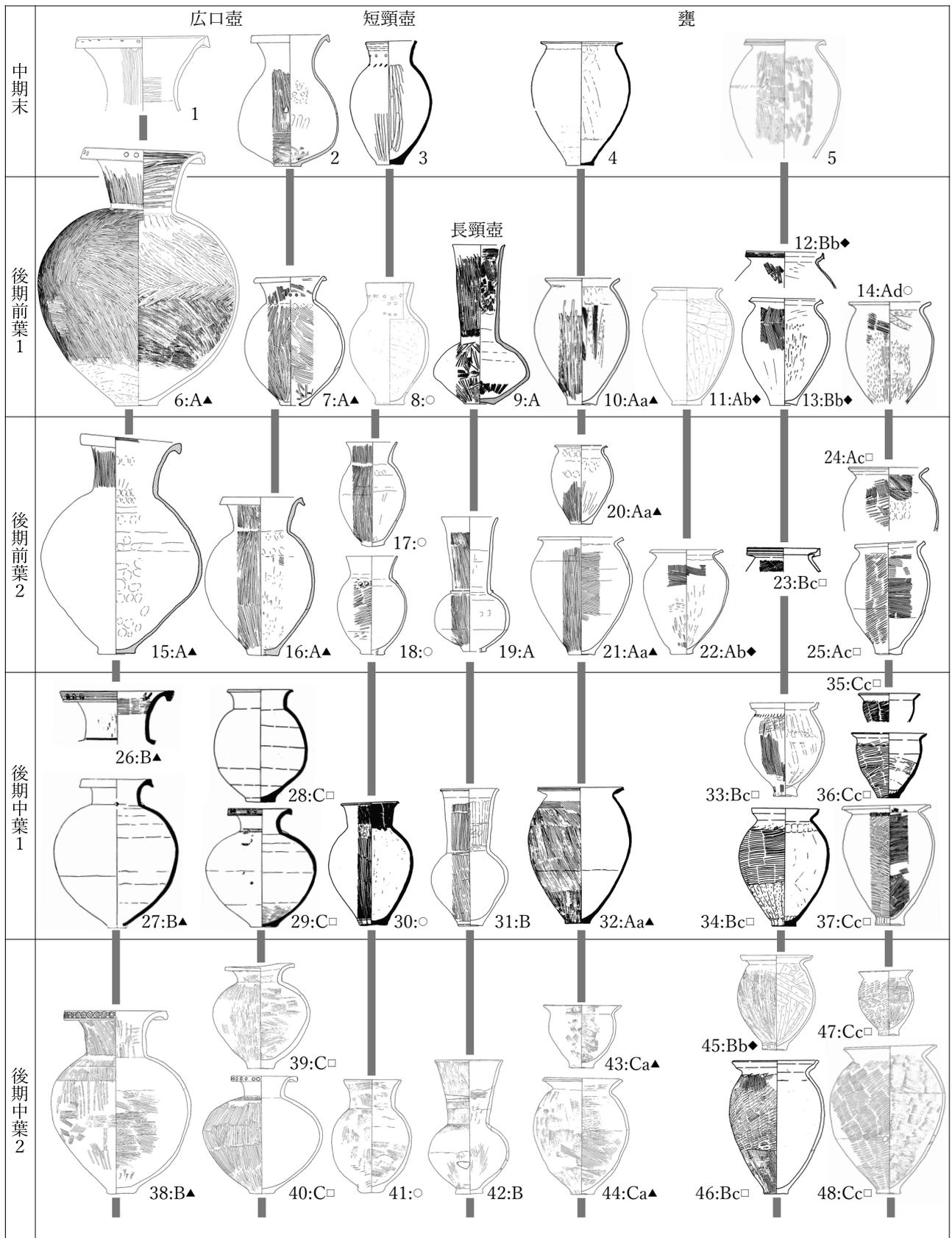


図10 土器編年図(河内地域)(1)

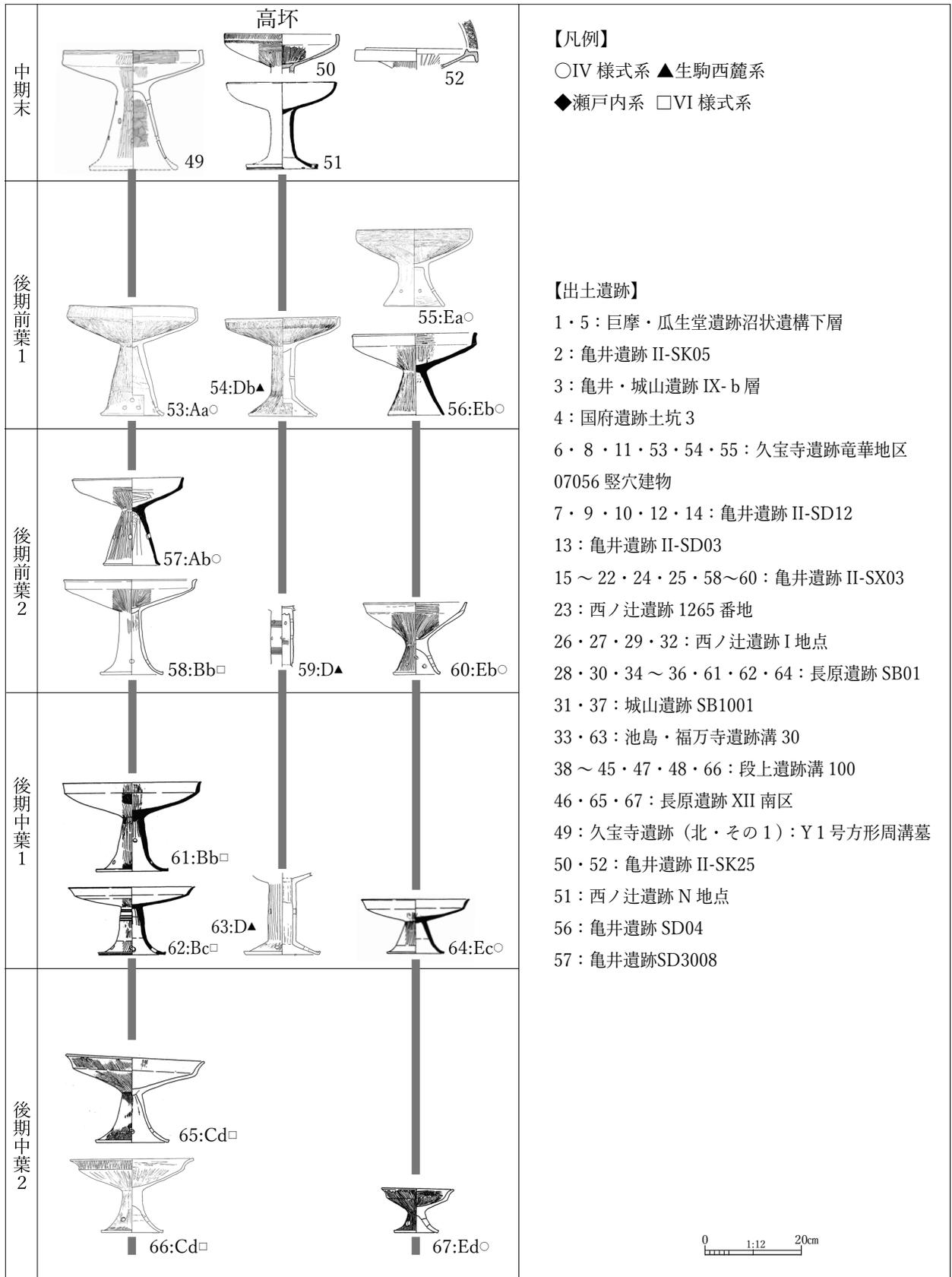


图 11 土器編年図（河内地域）（2）

存在を物語っている。一方、瓜生堂遺跡では、土佐地域から搬入された甕が報告されている。西日本でも希少な太平洋側の交流を示す物証として特筆すべきものである。

c. 小結：河内地域における弥生時代後期のはじまり

IV様式系の変容と生駒西麓系の浸透 河内地域における後期前葉の器種構成は、生駒西麓地域と低地の土器様式の融合によって特徴づけられる。中期段階のいわゆる低地の土器がここでいうIV様式系につながるものだが、短頸壺、水差、高坏、器台などが無文化を進めつつ残存する一方、有段口縁壺、広口壺、大型鉢あるいは甕など大型器種はのきなみ消長し、生駒西麓系に置き換わる。このような器種のサイズと系統の関係性から、後期への変化は、中期的な大型土器製作技術の放棄と生駒西麓系への転換という性格をもつことが理解されよう。それは、櫛描き文や凹線文の盛行と関連した強い回転運動を伴うものから、後期中葉に達成される分割成形に基づいた薄く丈夫な土器へという変化の過程に位置するものと考えられる。その一方で、高坏脚部Aや短頸壺、器台などについては、低地の形式が生駒西麓産土器に取り入れられており、両者の境界線の希薄化によって新たな土器様式が生じたものといえる。中期段階には、相接しながらもあえて異なる特徴を保ち続けた2つの土器体系の融合の意義は、当該期の集落動態などと関連付けてさらに掘り下げて考える必要があるだろう。

他地域との交流 また、後期前葉の河内地域では、他地域との交流を示す資料が多いことも重要である。とりわけ讃岐地域については、器種も壺・甕・鉢とさまざま、遠隔地間の直接的交流の存在を物語っている。ただし、河内地域の土器様式への影響は、主に甕の内面ケズリ技法という限定的な範囲にとどまっている⁽¹⁸⁾。そして、このことは、後期前葉になされた、薄い土器をいかに簡便に効率よく作るか、という試行錯誤の一環として、他地域の土器製作技法が参照されたことを示すものと理解される。

VI様式系の成立 そして、この試行錯誤の到達点が、後期中葉を特徴づける鉢をベースとした器種横断的な分割成形技法の体系化である。その背景について考えるならば、中期以来ながら分割成形技法を採用し、後期中葉に極めてシステムティックな土器生産を行った生駒西麓地域がこの展開をリードした可能性が高いものと思われる〔三好2019〕。

周辺への波及と広域土器様式圏の形成 畿内地域全体をみた場合、各地において後期前葉に生駒西麓系、中葉にVI様式系が認められるようになる。本稿の検討の結果、河内地域は、この双方の発信源と考えられることとなった。この現象の意義の解釈にあたっては、集落動態を含めた広範な観点からの考察が求められるところであるが、さしあたりここでは、生駒西麓系土器の技術的卓越性という技術論的観点と、遠隔地交流の窓口としての重要性という地政学的観点、この双方の必要性を指摘しておきたい。(三好)

(6) 紀伊地域

a. 分類

紀伊地域における中期末から後期前葉の土器様相は、広口壺及び高坏を中心にIV様式系（A系統）から生駒西麓系の土器（B系統）へと変化する。甕はIV様式に存在した口縁部を上下に拡張し、凹

線文を施す甕に内面ヘラケズリが施されるようになる（C系統）。そして、後期中葉にはこれらのB系統・C系統が独自に変化しつつも、甕・壺においては分割成形技法を採用したⅥ様式系の製作技法（D系統）が採用され、口縁端部にタタキ目を施す「紀淡型Ⅴ様式甕」[田中2013]など独自の地域性が発現する。分類に際しては、器種名の後ろにA・B・C・Dで系統を、さらに細分形式についてはa・bとし、型式変遷が追えるものについては1・2・3とした。

壺は垂下口縁をもち、口縁端部に円形浮文を施す、生駒西麓系の広口壺Bが後期前葉に出現し、これに弥生時代中期から残存する紀伊Ⅳ様式系の受け口状を呈する受口壺A、突帯文壺の系譜を引く直口壺Aが伴う。甕Cについては内面ヘラケズリをもち口縁端部が直立し凹線文を施すものが主体を占めるが、次第に口縁部の凹線が失われ、さらには内面ヘラケズリも失われる。甕Cは外面調整と口縁端部により2つに細分できる（Ca, Cb）。後期中葉2以降には、Ⅵ様式系の甕Dが増加し交替する。高坏Bは柱状脚をもつ脚部Baと、中期の高坏Aから派生した短く裾が広がる脚部Bbの2種類が共存し、坏部は深い椀形Baと稜をもち直立する形状Bbとの2種類が存在し、それぞれが脚部と組み合う。

b. 編年・併行関係

紀伊地域の既往の編年についてはこれまでも検討が行われてきたが、中期末から後期前葉にかけての一括資料が少なく、表採品やグリッド調査により得られた資料を基に編年が検討されてきた[土井1989, 前田1995]。このため、後期前葉の基準資料には中期末の資料を含んでおり、中期と後期の分別が困難であった。中期末の土器様相については無文化を指標として設定されており、中期末の資料の多くには後期前葉の資料を含んでいる。その結果、これまでの中期末・後期前葉については、中期後半から後期中葉までの資料を含み、他地域の併行関係の把握に困難をきたしていた。

その後、丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡（かつらぎ町）、平井遺跡（和歌山市）、旧吉備中学校校庭遺跡（有田川町）などの発掘調査により、中期末から後期前葉の一括資料が増加し、土器資料が明らかでなかった橘谷遺跡（和歌山市）の一括資料が公開され、中期後葉、中期末から後期前葉への連続的な変化が一括資料から検証可能となった。このため、本稿では中期末を再設定し、後期前葉の再検討を行った（表4・5）。

編年については、良好な一括資料が依然として少ないため、型式組列が明確な主要器種である広口壺、甕、高坏について検討を行うこととする。（図12・13）

中期後葉 広口壺Aには口縁部及び頸部に幅広の凹線文が施される。突帯文が減少し、断面三角形の貼り付け突帯をもつ直口壺Abと、突帯文壺から派生した、受け口状の口縁部をもつ受口壺Aaで占められる。突帯文は紀ノ川下流域に多く、その他の地域では凹線文及び櫛描き文が多用される。

中期末 直口壺Abにおける突帯文はわずかとなり、無文化が著しい。受口壺Aa、広口短頸壺である広口壺Abも同様であり、凹線文を施すのみである。広口壺Abには口縁部及び頸部に凹線文が施され、肩部には粗い櫛描き文が施される。口縁部外面には素文の円形浮文の貼り付けが目立つ。甕は外面タタキを残す粗製の甕Aa、外面をハケまたはナデにより平滑に仕上げるAb、体部外面をヘラケズリする紀伊型の系譜を引く紀伊型甕Acが認められる。高坏についても屈曲部に凹線文が施されるのみであり、プロポーションもやや丸くなる。搬入土器では生駒西麓産甕（10）や広口

表4 地域間での併行関係

本稿	寺沢・森井 1989	濱田 2001	大和弥生 2003
中期後葉	河内Ⅳ-3	Ⅳ-古	Ⅲ-4
中期末	河内Ⅳ-4	Ⅳ-新	Ⅳ-1・2
後期前葉1	河内Ⅴ-0	Ⅴ-前葉	Ⅴ-1
後期前葉2	河内Ⅴ-1		Ⅴ-2
後期中葉1	河内Ⅴ-2	Ⅴ-中葉	Ⅵ-1
後期中葉2	河内Ⅴ-3		Ⅵ-2
後期後葉	河内Ⅵ-1		Ⅵ-3
	河内Ⅵ-2		Ⅵ-4

表5 既往の編年区分との対応関係

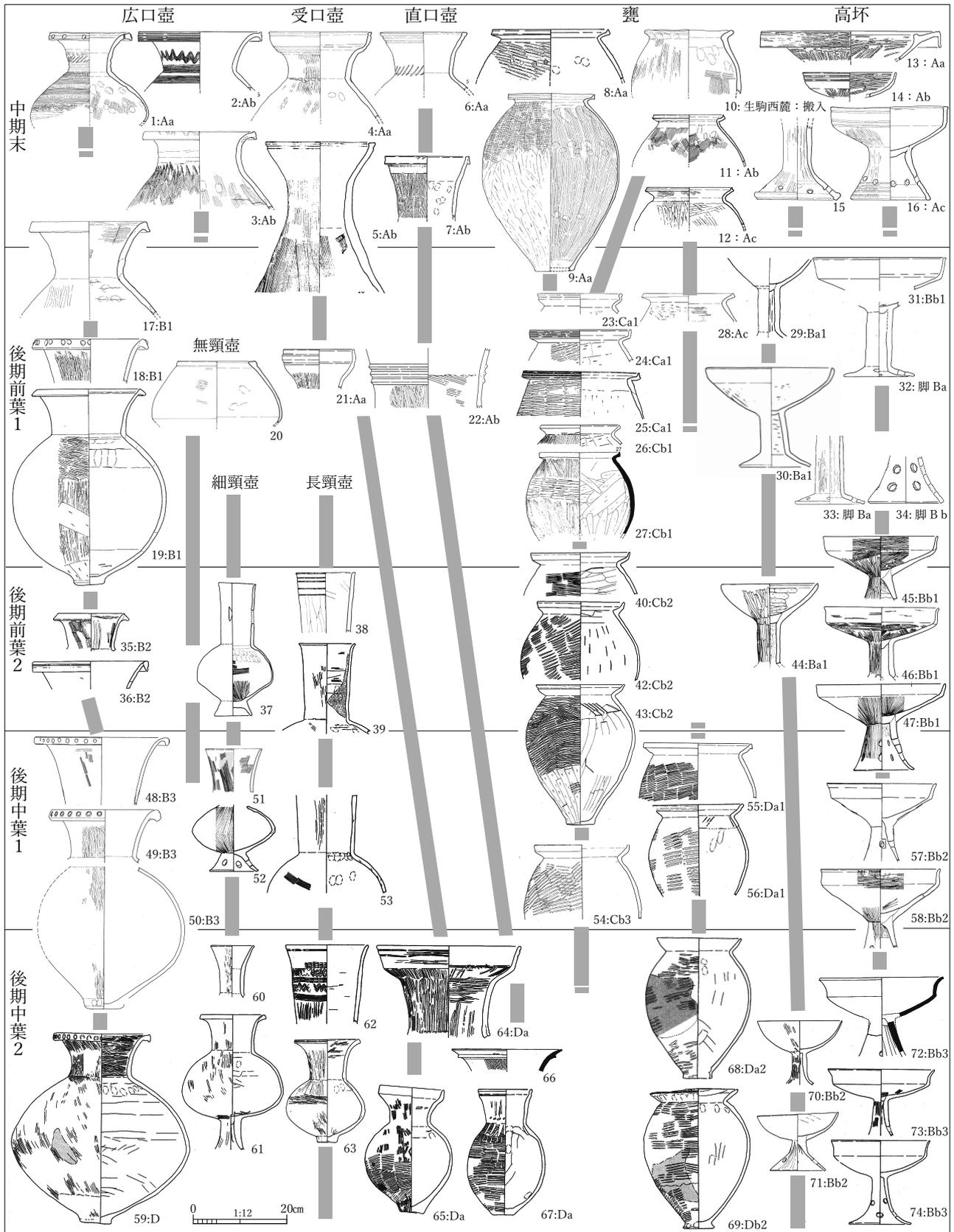
本稿	土井 1989	前田 1995
中期後葉	Ⅳ-I	Ⅳ-I
中期末		Ⅳ-2
後期前葉1	Ⅳ-2 *2	Ⅳ-3 *2
後期前葉2	Ⅴ-1 *3	Ⅴ-1 *4
後期中葉1	Ⅴ-2 *4	Ⅴ-2
後期中葉2	Ⅴ-3	Ⅴ-3
後期後葉	Ⅴ-4	Ⅴ-4
	Ⅴ-5	Ⅴ-5 / 庄内古
庄内古段階	Ⅴ-6	庄内新
	庄内	

- *1 中期末を新たに設定。
- *2 河内・大和地域の後期前葉資料が相当。
- *3 Ⅴ-I指標の船岡山遺跡がやや新しい様相を示す。
- *4 Ⅴ-1との弁別不明確。
- *5 紀伊地域では新古が区分可能

	紀ノ川上・中流域	紀ノ川下流域・亀ノ川流域	有田川流域・日高川流域
中期後葉	丁ノ町・妙寺遺跡 土坑1・3 2次6200溝 西飯降Ⅱ遺跡 1次溝1・3 Aトレンチ包層 堂坂遺跡	宇田森遺跡 2次A溝 宇田森遺跡 1次方形周溝墓 吉田遺跡 61次SX7上層 太田・黒田遺跡 61次SX7最上層	岡村遺跡(S55) SK01 岡村遺跡(S58) SD05 岡村遺跡(S58) SD07 平井遺跡 44竪穴竪建物 滝ヶ峯遺跡 165 滝ヶ峯遺跡 C区溝状遺構 158
中期末	丁ノ町・妙寺遺跡 2次自然流路9 1次竪穴建物1・7 丁ノ町・妙寺遺跡	太田・黒田遺跡 SE001 鳴神Ⅴ遺跡 SK01・02 SK01・03 SK01・04	小松原Ⅱ遺跡(H22) 024・004竪穴建物 富安1遺跡 068・293土坑 小松原Ⅱ遺跡(H25) 003・028竪穴建物 小松原Ⅱ遺跡 SD22 東郷遺跡 SD02中層
後期前葉1	丁ノ町・妙寺遺跡 土坑4・8・溝3・2 船岡山遺跡 SB01・02 船岡山遺跡 SB03 北山三嶋遺跡 29532竪穴建物	橋谷遺跡 SB01・02他 奥山田遺跡 SX01 橋谷遺跡(関大) SB01・02・03・溝他 西田井遺跡 S1161・1162 西田井遺跡 S1164・601	星尾山遺跡 表採 野井奥の谷遺跡表採 宮原奥の谷遺跡表採 旧吉備中学校校庭遺跡 竪穴建物2・9 竪穴建物6・8 旧吉備中学校校庭遺跡 1・3・5
後期前葉2	西飯降Ⅱ遺跡 2次溝1310 船岡山遺跡 SB0510・ SK01・649 船岡山遺跡 SB06・08・09 船岡山遺跡 SB04・07	船岡山遺跡 SB01・02 船岡山遺跡 SB03 船岡山遺跡 SB04・07 船岡山遺跡 SB01	東郷遺跡 SD22 東郷遺跡 SD02中層 中村Ⅱ遺跡 Ⅱ区竪穴建物
後期中葉1	西飯降Ⅱ遺跡 2次溝1310 船岡山遺跡 SB06・08・09 船岡山遺跡 SB04・07	山口遺跡 5次SD10 弘西遺跡 SRO3 田屋遺跡 SB01	野井奥の谷遺跡表採 宮原奥の谷遺跡表採 旧吉備中学校校庭遺跡 竪穴建物2・9 竪穴建物6・8 旧吉備中学校校庭遺跡 1・3・5
後期中葉2	1次竪穴ABC 血繻遺跡 船岡山遺跡 SB04・07	船岡山遺跡 SB01 船岡山遺跡 SB04・07	野井奥の谷遺跡表採 宮原奥の谷遺跡表採 旧吉備中学校校庭遺跡 竪穴建物2・9 竪穴建物6・8 旧吉備中学校校庭遺跡 1・3・5

一括資料 時期幅あり

図12 一括資料の配列



中期末 (1, 3, 4, 9~12, 15, 16) : 丁ノ町・妙寺遺跡自然流路9, (5) : 亀山遺跡表採, (2, 7, 8, 13, 14) : 太田・黒田遺跡61次SX7最上層
 後期前葉1 (17, 20) : 丁ノ町・妙寺遺跡自然流路9, (18, 21~24, 26, 31, 34) : 橘谷遺跡2, 4, 5次トレンチ調査, (19) : 宇田森遺跡SX01, (25~29) 亀山遺跡表採, (28, 33) : 平井遺跡32溝, (30) : 鳴神V遺跡SK051, (32) : 弘西遺跡SX01, (27) : 滝ヶ峯遺跡1-65
 後期前葉2 (35, 38) : 船岡山遺跡SK01, (36, 7, 40, 44, 47) : 船岡山遺跡SB01, (39, 42) : 旧吉備中学校校庭遺跡竪穴建物2, (43) 船岡山遺跡SK649, (45) : 船岡山遺跡SB10, (46) : 旧吉備中学校校庭遺跡竪穴建物9
 後期中葉1 (48, 57) : 弘西遺跡SR03, (49, 50, 54, 56) : 山口遺跡SD10, (52, 55, 58) : 船岡山遺跡SB09, (51, 53) : 西田井遺跡SI161
 後期中葉2 (59, 61, 62, 64, 65, 67~70, 73, 74) : 旧吉備中学校校庭遺跡竪穴建物1, (60, 63, 71) : 西田井遺跡SI601, (66, 72) : 血繩遺跡1次竪穴A・B・C

図 13 土器編年図(紀伊地域)

壺が散見される。

後期前葉1 広口壺は垂下口縁部をもつ広口壺Bとなり、広口壺の頸部は外上方に大きく開き、口縁端部は大きく垂下させる(B1)。文様は口縁部端部には円形浮文・竹管文が認められるのみでそれ以外の部位は無文化する。受口壺Aa、直口壺Abは残存するがいずれも凹線文、突帯文のみで無文化する。甕は口縁端部を上方に拡張させ、端面に退化凹線文を施し、体部内面にはヘラケズリを施す甕Cとなる。高坏は後期前葉には柱状脚をもつ高坏Bが主体を占めるが、中期後半から残存する高坏Aから派生した短く裾が広がる脚部Bbをもつものも存在する。

搬入土器として生駒西麓産の広口壺Bや高坏Bなどが橘谷遺跡、宇田森遺跡で認められるほか、東部瀬戸内からの搬入品とみられる広口壺が丁ノ町・妙寺遺跡で認められる。

後期前葉2 広口壺Bは頸部が太くなり、頸部の開きも緩やかになる。口縁端部も短く垂下し、断面三角形のものも存在する(B2)。口縁端部に退化凹線文が施されるものも半数近く存在する。甕Cは口縁端部の立ち上がりが外上方に広がり、端面への退化凹線文が省略される(C2)。高坏Bは裾が広がる脚部の高さが増し、柱状脚が減少する。坏部上半は直立する(B2)。

後期中葉1 広口壺Bの頸部の開きが緩やかになり、口縁端部の垂下も広がるようになる(B3)。体部も最大径が体部中央に移行し、横方向に広がる。高坏は坏部で稜をもち坏部上半が開く有稜高坏である高坏Bが主体となり、坏部下半が長く坏部が深くなる。脚部はラッパ状に裾が広がる(Bb2)。甕Cは外面にタタキ目を残すもので、口縁部端部にわずかに面をもつものが多い(C3)。分割成形技法をもつ甕Dについては全形が判明するものが少ないが、出土した底部や体部下半において分割成形技法が認められる。甕Dの口縁部は端面を持つものや、受け口状に端部を上方に拡張するものが認められる(Da1)。

後期中葉2 旧吉備中学校校庭遺跡、西田井遺跡などで良好な一括資料が認められる。壺、甕においては分割成形技法が認められ、広口壺Bからの系譜を引き、新たに分割成形技法を採用した広口壺Dへと変化する。受口壺、直口壺においても分割成形技法が認められる。甕は甕Dが主体となると考えられ、口縁端部が弱い面を持つものあるいは、丸くまたは尖って終わるものが主体となる(Da2)。一方で、口縁端部にタタキなどによりキザミ目を施す甕Dが出現する(Db2)。高坏は坏部上半が拡張され、外反して広がるものへと変化する、脚部も裾広がりものとなる(Bb3)。

併行関係 併行関係については、後期前葉1の一括資料が少なく、他地域での後期前葉2の段階を含み時間幅を想定せざるを得ない。しかしながら、生駒西麓や東部瀬戸内地域からの搬入土器が確認されており、大部分が他地域の後期前葉1と併行する(図5)。また、後期中葉1以降は、おおむね他地域と併行関係を追うことができる。なお、紀伊地域内部の地域性については紀ノ川下流域では、中期以来の突帯文の残存などが認められるものの、後期前葉以降には高坏の型式変遷が各遺跡で共通するなど、おおむね地域内部の地域性は解消する。

c. 小結：紀伊地域における後期のはじまり

土器づくりの変化 紀伊地域における後期前葉については、壺、高坏については、中期後葉に河内地域の生駒西麓で出現した垂下口縁をもつ広口壺Bや柱状脚をもつ有稜坏部の高坏Bへと交替し(B系統の出現)、結果として無文化が進行する。また甕においては前段階からの系譜をもつタタキ

を有する甕 Aa, 外面をハケ調整する甕 Ab において, 瀬戸内地域からの影響により内面ヘラケズリが導入され甕 C へと変化する (C 系統への変化)。一方で, 中期後葉からの系譜を引く受口壺 A, 直口壺 A 及び紀伊型甕の系譜を引く甕 Ac も一定期間残存するが, 伝統的な地域性は大幅に後退する (A 系統の残存と後退)。

B 系統の出現, C 系統への変化に伴い同時に搬入土器も認められることから, 土器製作技法の変化に人の移動を伴う可能性を指摘できる。また, B 系統の出現に伴い, 土器の胎土の色調や焼成が大きく変化し, にぶい赤褐色や明褐色のものが増加し, 焼成もやや甘くなる印象を受ける, 土器づくりに必要な粘土採取地や焼成方法などについても一定の変化が認められる。甕や壺についても中期後葉までは様々な系統や製作技法が複数併存していたが, 特定の系統, 器種に集約化されていく点に土器づくりに関して大きな変化が認められると考えられる。この背景については在地の土器づくりの衰退と外部からの土器づくりの移入にあると考えており, 集落動態の変化と連動するものと推察される。

地域性と地域間交流 後期前葉 1・2 に消失した紀伊地域の地域性は, 再び後期中葉 2 以降に認められる。口縁端部にキザミ目をもつ紀淡型 V 様式形甕 (甕 Db) が出現し, 紀伊半島沿岸部及び淡路島を含む紀淡海峡周辺や和泉地域に分布する [田中 2013]。甕のほかにも, 後期中葉以降, 壺の頸部が屈曲し広がるものが増えるなど阿波・讃岐地域の影響が認められ, 後期中葉以降の分割成形技法の展開後は, 隣接地域との関係により紀伊地域としての地域性を発現する。(田中)

(7) 大和地域

a. 土器の分類

分類 弥生時代中期末から後期中葉にかけての大和地域では, 主な器種として広口壺, 長頸壺, 直口壺, 無頸壺 (台付を含む), 水差, 甕, 高坏, 鉢, 器台が挙げられる (図 14・15)。

広口壺は主に口縁部・頸部形状から分類した。広口壺 A は拡張気味の幅広い口縁部, 体部との境目から強く外半する頸部からなる。体部調整は外面上半ハケ→下半ヘラミガキ, 内面ナデの例がある。広口壺 B は垂下口縁, 体部との境目から直線的に外反する頸部からなる。体部調整は外面ヘラミガキ, 内面ハケかナデの例が多い。広口壺 C は狭い面のある口縁部, 体部との境目から緩く外湾する頸部からなる。体部調整は外面ヘラミガキかナデ, 内面ハケかナデの例が多い。

長頸壺は, 丸みを帯びた体部に直線的な口頸部, 調整は外面ミガキ, 内面ハケかナデの傾向がある。よって体部の成形技法を重視し, 底部が平らな長頸壺 A と, 底部が小型突出底である長頸壺 B に分類した。

甕は, 調整の方法に関わらず, く字口縁で口縁部は肥厚しない形が基本である。その為, 調整を重視して分類した。甕 A は外面タタキ→ハケ→下半ヘラケズリ, 内面ハケかナデを施すが, 継時的に外面調整の省略が進行する。甕 B は外面・内面ともヘラケズリを施す。甕 C は外面ヘラミガキ, 内面ハケかナデを施す。甕 D は外面タタキ, 内面ハケかナデを施す。

高坏は脚部形態から分類した。高坏 A は裾が緩く広がるもので, 外面ヘラミガキ, 内面ヘラケズリである。高坏 B は裾が直線的に広がるか先端が折れ曲がるもので, 外面ヘラミガキ, 内面ヘラケズリ (後にナデ) である。高坏 C は柱状のもので, 外面ヘラミガキ, 内面ナデである。いづ

れも基本的には円板充填法を採用する。高坏Dは形のみに着目すれば高坏Bの延長といえるが、分割成形を採用する。高坏の細分要素として坏部を次の通り、1) 皿状で口縁部が屈曲して立ち上がるもの、2) 小型で椀状のもの、3) いわゆる「結合形」と呼ばれるものに分類した。坏部は外面・内面共にヘラミガキを施す。なお、坏部2は少数ながら高坏A～C全ての形式で存在する。

鉢は体部形状と製作技法を重視して分類した。鉢Aは口径が器高を凌ぎ、底部は平らである。鉢B口径と器高が同程度、底部は小型突出底である。外面調整ヘラミガキかナデ、内面ハケ・ナデの例が多い。

器台は中期から後期中葉まで製作技法の大きな変化はみられず、細分していない。後期前葉までは凹線文の施文が続く。外面ヘラミガキ、内面ナデである。

系統 大和地域の土器の系統は大きくIV様式系、生駒西麓系、VI様式系の3系統に分けられる。瀬戸内系については、後期前葉にのみ模倣品が存在するが、系統として成立するほどではない。

IV様式系は中期に凹線文を含む西方の土器製作技術の影響を受けた大和地域在来の系統である。中期には壺や台付器種など多くの器種を生み出し、また、櫛描き文器種を写し取っていった系統である。⁽¹⁹⁾この系統の土器は連続成形で製作される。成形時の小休止の痕跡はあまり目立たず、土器形状の変化点は緩やかで、底部は薄く平らである。IV様式系には広口壺A、甕A・B、高坏A・B、鉢A・B、器台が含まれる。

生駒西麓系は後期前葉に出現する。後期前葉に近畿地方各地に広まった系統である。この系統の土器は連続成形より成形時の小休止の痕跡が目立ち、器種によっては分割成形志向のものも存在する。底部はやや突出する。生駒西麓系がIV様式系を融合するような現象はみられず、後期前葉から中葉にかけて両系統が並存する。生駒西麓系には広口壺B、長頸壺A、甕C、高坏Cが含まれる。

VI様式系は後期前葉2頃から出現し始め、後期中葉以降は主流となる。この系統の土器は分割成形で製作され、土器形状の変化点が著しく明瞭であり、粘土紐接合痕が残るものも多い。底部は小型で突出する。VI様式系には広口壺C、長頸壺B、甕D、高坏D、鉢Cが含まれる。

b. 編年・併行関係

大和地域においては中期末～後期中葉の資料に恵まれており、弥生土器編年研究は蓄積され、時期の細分化が進んでいる。本稿では先行研究のうち、藤田三郎・豆谷和之の編年観に準ずる[大和弥生文化の会編2003]。時期区分はそれぞれ大和第IV-2様式を中期末、同第V-1・2様式を後期前葉1・2、同第VI-1・2様式を後期中葉としている。各段階の資料は以下の通りである。

【中期末】唐古・鍵遺跡19次SD-204第14層、同13次SD-02、清水風遺跡1次SD-01、同2次SR-102、八尾九原遺跡1次SK-201、【後期前葉1】平等坊・岩室遺跡11次SD-02、唐古・鍵遺跡13次SD-02、05、同19次SD-204第8層、同47次SD-2101、同61次SD-101B、102B、【後期前葉2】唐古・鍵遺跡20次SK-104、芝遺跡22次溝61、堅穴住居1、【後期中葉】白土遺跡SE-01、舟戸・西岡遺跡住居跡、唐古・鍵遺跡37次SK-2122、同33次SK-125、SD-109、SK-133、四分遺跡(藤原宮3次)SE813、SD666、一町遺跡7次SD-03、鴨都波遺跡11次土坑10、9、2、溝14、能峠中島遺跡SI-01

中期末 中期中葉以来継続するIV様式系が主体である。壺・甕の体部下半には縦ハケないしヘラケ

⁽²⁰⁾ズリ、高坏脚部内面にはヘラケズリを施すなど凹線文に伴う土器製作技術が色濃く残る。

後期前葉 1 近畿地方各地で当該期に成立する生駒西麓系の土器が大和地域でも出現し、土器の種類が豊富である。特に高坏は高坏 C 類や坏部 2・3 類の出現から多様化が著しい。高坏 B 類は円板充填法が目立たなくなり、脚部内面調整はヘラケズリからナデ⁽²¹⁾に変わる。高坏 C 類は円板充填法を用いるが、脚部から坏部までの連続成形は不可能な形状であることから、広口壺 B とともに、土器製作において効率的な分割成形の例となったことが想定できる。IV 様式系は継続し、台付器種で消失するものがある一方、甕 B や直口壺が新出するなど、依然として幅広い形式が存在している。甕 A の中には底部形状が小型で厚みのあるものが散見され始める。

後期前葉 2 IV 様式系・生駒西麓系による多様な土器様式であることは、前段階同様であるが、VI 様式系の広口壺 C が出現し、長頸壺 A は長頸壺 B に、鉢 A は鉢 C に写しとられる。広口壺 A・B と広口壺 C の関係については、調整の面からみれば、広口壺 C は調整が広口壺 B に近いことから生駒西麓系との繋がりが想定できる。高坏 B 類は円板充填法の痕跡が残らなくなる。

後期中葉 IV 様式系の広口壺 A・甕 B・高坏 A 類・直口壺・無頸壺、生駒西麓系の甕 C・高坏 C 類が消失し、前段階以前に比べて簡素な土器様式となる。VI 様式系独自の new 出器種は目立たず、甕 A は外面調整がタタキで終了する甕 D に、高坏 B 類は挿入付加法で成形する高坏 D 類に写しとられる。広口壺 B を除く壺・甕は鉢 B を基底とした分割成形で作られるようになる。

併行関係 大和地域と他地域の土器との時間的併行関係については、川上洋一が大和地域の土器の搬入状況から検討しており [川上 2004]、その成果を参考に考察を進める。

中期末～後期前葉には、瀬戸内（吉備）地域、生駒西麓地域、近江地域などからの土器の搬入がみられる。特に瀬戸内地域からの搬入土器の例は、当該期に多く集中する。中期末には唐古・鍵遺跡 19 次 SD-204 第 14 層から備前 IV-2・備中 IV-2～4 の壺が出土している。後期前葉 1 には同 SD-204 第 8 層から備前 IV-2・備中 IV-2～4 の甕が出土し、同様の例が複数ある。他方、唐古・鍵遺跡 20 次 SK-104（後期前葉 2）からは瀬戸内地域の模倣品と判断できる甕が 1 点出土している。内面には括れ部付近までケズリ調整を施し、備中地域の後期前葉頃の甕の製作技法と共通する [平井 2002]。生駒西麓地域の土器は、弥生時代を通して後期前葉まで普遍的に存在する。中期末には唐古・鍵遺跡 19 次 SD-204 第 14 層から広口壺が、清水風遺跡 2 次 SR-102 から台付無頸壺が出土し、生駒西麓 IV に該当する [濱田 1993]。後期前葉 1 には唐古・鍵遺跡 13 次 SD-05 や同 19 次 SD-204 第 8 層から無頸壺が出土し、生駒西麓 IV～後期初頭に該当する。後期前葉以降は近江地域の搬入土器が存在する。後期前葉 2 には唐古・鍵遺跡 20 次 SK-104 から近江第 V-1～2 様式の甕が出土している。

以上のことから、少なくとも大和地域と瀬戸内（吉備）地域・生駒西麓地域・近江地域の間では中期末～後期の変化がほぼ同時に達成されたと判断できる。

c. 小結：大和地域における後期のはじまり

大和地域では、中期末には IV 様式系が主体で、様々な器種が作られた。また、基本的に土器は薄く丁寧に作られ、凹線文や櫛描き文で飾られる。後期前葉 1 には生駒西麓系が加わり、器種こそ中期末とは異なるが多様な器種が存在する。分割成形の嚆矢となる土器が作られ始める。後期前葉 2

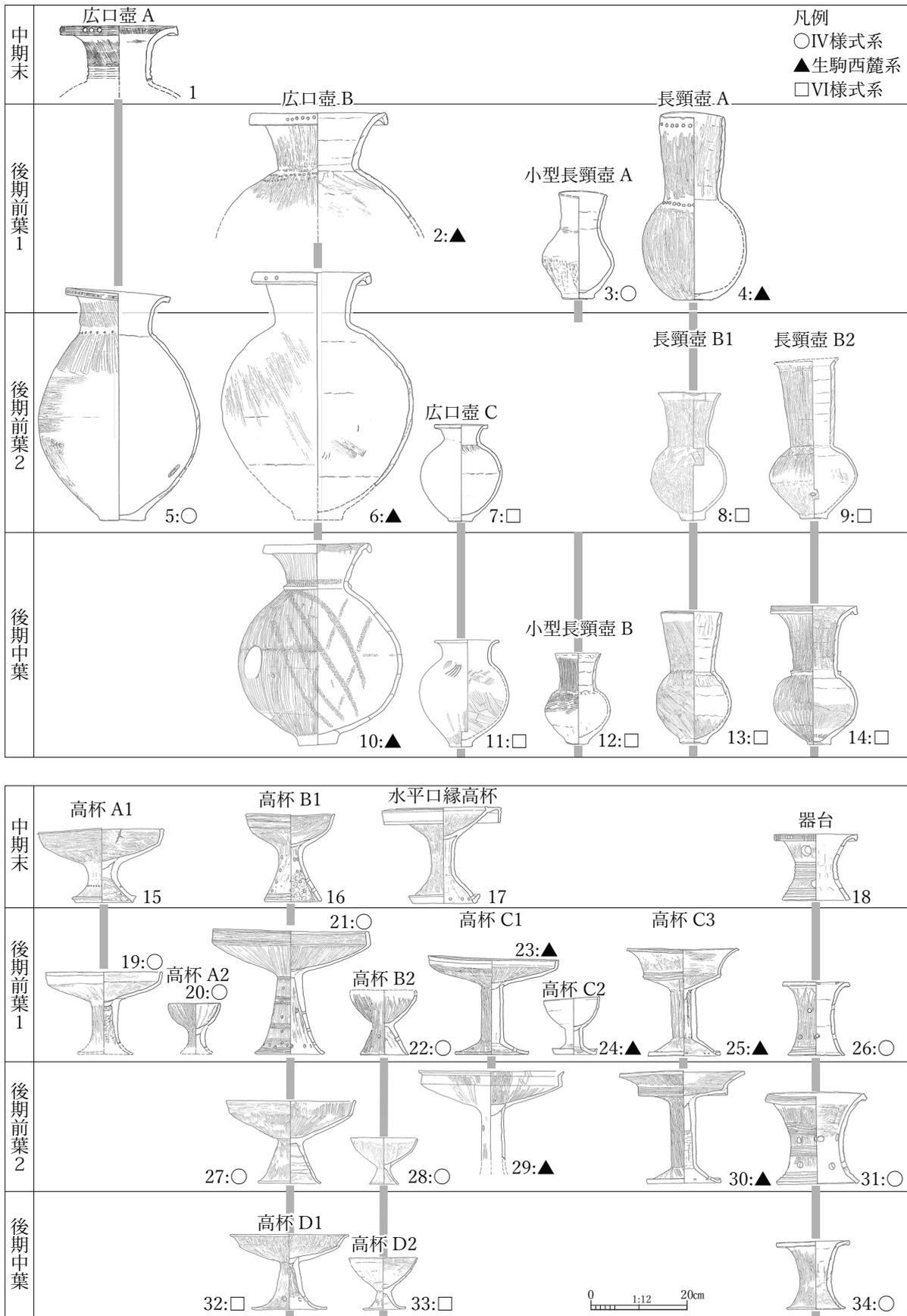
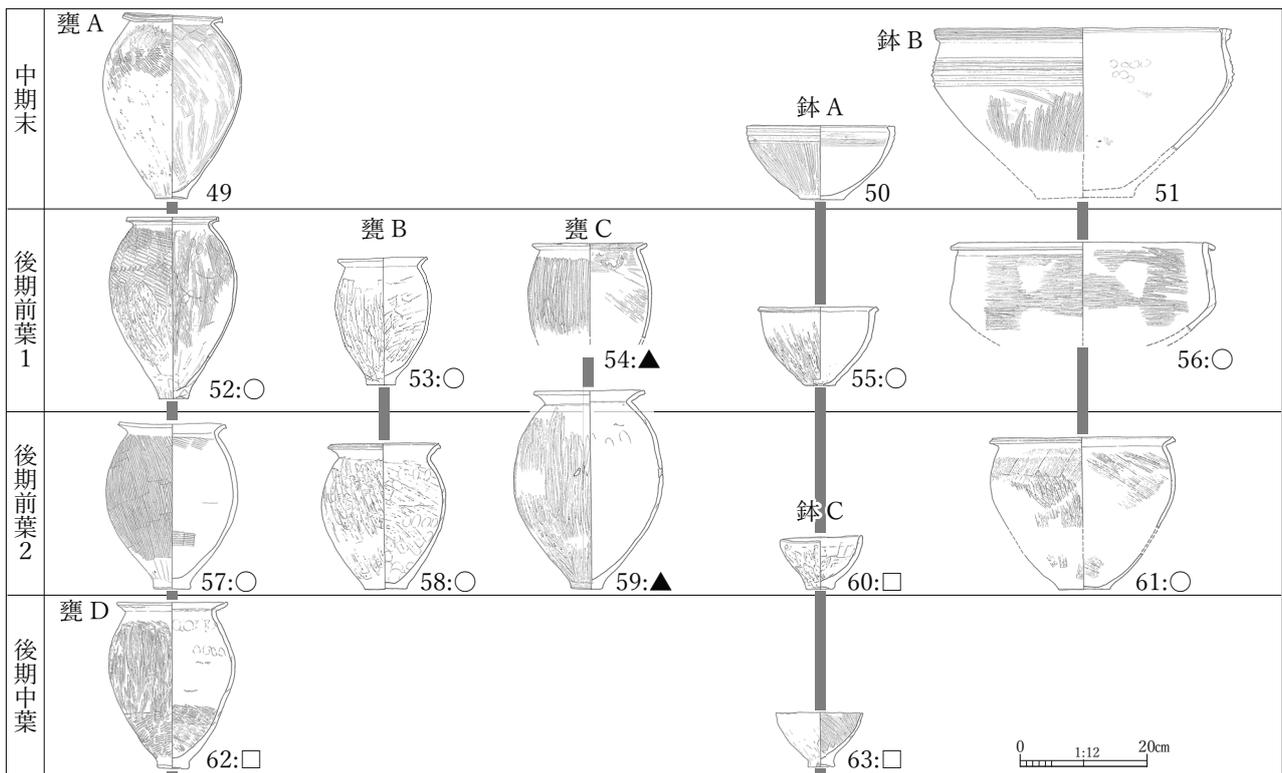
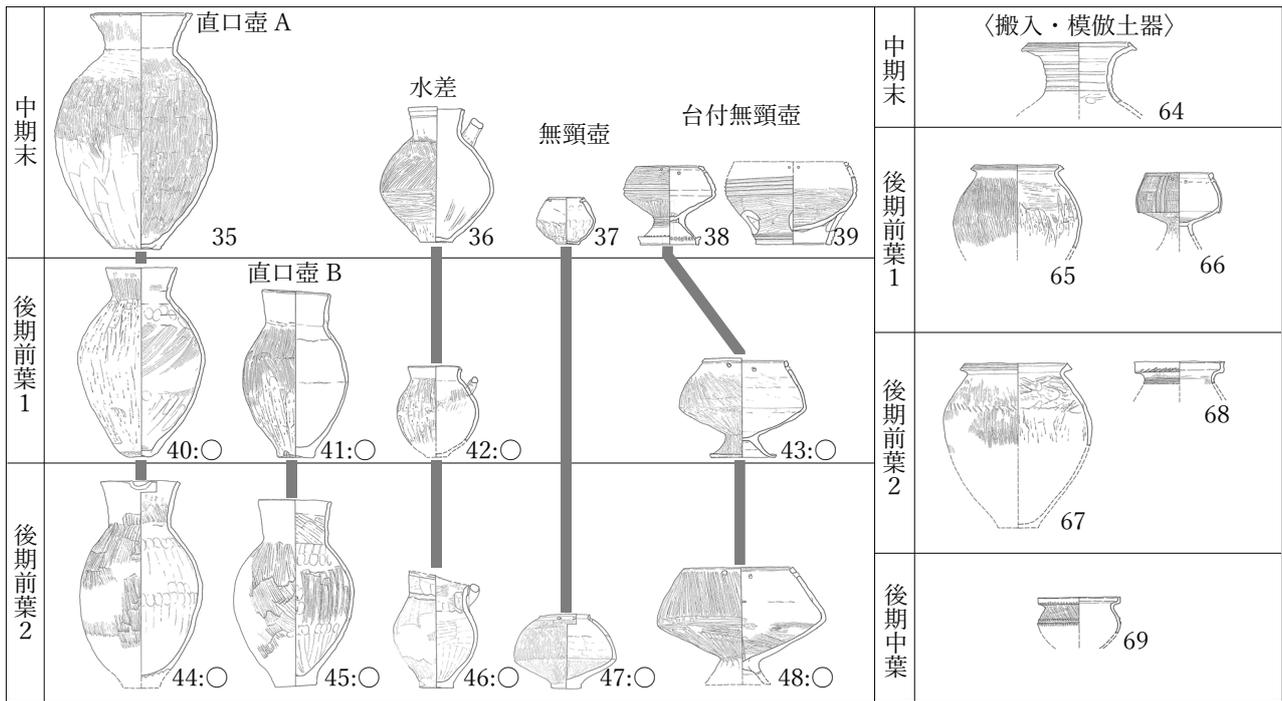


图 14 土器編年図（大和地域）（1）



【出土遺跡】 東唐・鍵遺跡：1・50・51・64・(19次SD-204 14層)・20・22・24・40・52・54・66 (同8層)
 2・3・19・25・42・55 (61次SD-101B・102B)・4・21・23・26・43 (47次SD-2101)
 5～7・30・31・44・45・48・58・59・61・68・(20次SK-104)・12・62・(33次SK-125)・32・(同SD-109)
 33・63 (同SK-133)・13・34・(37次SK-2122)・36・41・53・65 (13次SD-02)・56 (同SD-05)
 9・60・67・(13次SD-04)
 芝遺跡：8・46・47・57 (22次溝61)・28 (同竪穴住居1), 白土遺跡：10 (SE-01), 一町遺跡：11 (7次SD-03),
 四分遺跡 (藤原宮3次)：14 (SE813)・69 (SD666), 大福遺跡：27・29 (3次大溝),
 清水風遺跡：15・16・49 (2次SR-102)・17・18・35・37～39 (1次SD-01)

図 15 土器編年図 (大和地域) (2)

は基本的に後期前葉1の多様性を継続する。他方、IV様式系からVI様式系へ移り変わる器種が現れ、本格的に分割成形に移行し始めるのがこの段階である。後期中葉には、IV様式系と生駒西麓系の大半が消失し、VI様式系を主体とした簡素な土器様式が成立する。同時に、器台を除く諸器種は分割成形で作られるようになる。以上のことから、後期開始を以て出現した生駒西麓系をきっかけにVI様式系成立に向けて土器製作が変わり始めたといえる。生駒西麓系はほぼ後期前葉のみに限定される系統ではあるが、IV様式系に比べ、生駒西麓系はより分割成形に近い製作技法を採る為、VI様式系の成立にあたり生駒西麓系の影響が大きいことが想定できる。VI様式系の分割成形はやや粗雑だが大きさの揃った土器を一度に数多く製作することが可能な方法である。IV様式系からVI様式系への変遷は、土器に込められる意味が変わり、土器製作から使用までの合理性を重視した結果といえよう。後期前葉にその時期限定の器種が多く存在するのもVI様式系成立までの過渡期であるためと考えられる。(杉山)

(8) 山城地域

a. 分類

山城地域は現在の京都府南部の京都盆地に相当する。京都盆地には、北から桂川、東から宇治川、南から木津川が流れ込み、流域ごとに小地域を形成する。こうした小地域ごとに存在する後期の地域色の存在は以前から指摘されているものである[都出1974]。本来なら小地域単位での検討が必要であるが、まとまった資料のある弥生時代中期後葉から後期中葉にかけての遺跡は限られている。そのため、本論では小地域ごとに差異がある前提のもと山城地域全体の遺跡を対象とする。山城地域における後期前葉から中葉にかけての主要器種の分類は以下の通りである(図16・17)。

壺 広口壺は、頸部がゆるく屈曲するものをA、頸部が強く屈曲するものをBとする。いずれも口縁端部について、拡張ないし垂下するものをa、拡張しない素口縁のものをbとし、加飾するものを1、無文を2とする。短頸壺は、直線的に上方に短く伸びる口縁部をもち、頸部上方や口縁部外面に凹線文系の文様をもつものをA、口縁部が短く伸び無文をBとするが、当該期にAは確認できない。長頸壺は、球形の体部に長く伸びる口縁部をもち、細頸壺は、強く締まる頸部に長く伸びる口縁部をもち、受口状口縁壺(以下受口壺)は、受口状の口縁部をもち、口縁部外面に櫛描き列点文、体部上半に櫛描き直線文・波状文を施す。

甕 くの字状口縁甕(以下くの字甕)は、口縁が強く外反するものをA、口縁がゆるく外反するものをBとする。端部を拡張するものをa、素口縁をbとし、加飾するものを1、無文を2とする。受口状口縁甕(以下受口甕)は、明瞭な立ち上がりのある受部をもつものをA、低い立ち上がりの受部をもつものをBとし、加飾するものを1、無文を2とする。小型の甕に相当する受口状口縁鉢(以下受口鉢)は、明瞭な立ち上がりのある受部をもつものをA、低い立ち上がりの受部をもつものをBとし、平底をa、台付をb、加飾するものを1、無文を2とする。

高坏 坏部が有稜となるものをA、椀形をB、大きく外反し深い坏部のものをCとする。Cはいわゆる結合形土器とされるものである。いずれも脚部について柱状脚をa、直線的に開く脚をb、外反しながら開く脚をcとする。脚bは現状では確認できない。また、台付鉢として成立しつつ変遷していくいわゆるワイングラス形高坏をEとする。

器台 受部と脚部が不明瞭なものを A、屈曲が明瞭なものを B とする。

系統 以上の器種は、後期前葉段階では大きく 5 つの系統に整理することができる。中期後葉から変容しつつ残存する IV 様式系、畿内地域で共通性の高い生駒西麓系と VI 様式系、瀬戸内地域からの系譜を引く瀬戸内系、近江地域からの系譜を引く近江系である。

IV 様式系には、凹線文を施す広口壺 Aa1、甕 Aa1 の一部、有稜高坏、器台がある。中期後葉から継続するもので、器形や技法を継承しつつ凹線文を施さないものもある。

生駒西麓系には、広口壺 B、柱状脚高坏がある。生駒西麓産の搬入品を含み、一定程度在地化するが数量は限られる。

VI 様式系には、分割成形技法を用いる壺、タタキ甕、付加技法を用いる高坏がある。後期前葉段階では、生駒西麓系と同様に在地化する数量は限られる。

瀬戸内系には、くの字甕 Aa1 の一部が該当するが IV 様式系との峻別は難しい。搬入は少ないが甕の一定量を占める。在地のくの字甕である甕 Ba の成立に影響を及ぼしている可能性がある。

近江系には、受口状口縁をもつ壺・甕・鉢がある。受口壺・甕・鉢は、近江地域をはじめとして、山城・伊賀・美濃・越前・若狭地域で在地化したものも多く、近江地域に限定できる土器ではない。山城地域でも在地の土器として定着していることを考慮すると、本来的に地域名を冠すべきではないと考えるが、ここでは他地域との比較の関係上便宜的に近江系としておく。

b. 編年・併行関係

山城地域における弥生時代中期後葉から後期中葉にかけての編年は少ないものの、弥生時代全体を通しての編年が森岡秀人によって提示されている [森岡 1990]。この編年を参照しつつ、代表的な資料を合わせて検討した結果、大きく 3 段階にまとめることができる。今後の資料の増加によっては 4 段階となる可能性もある。

中期後葉 良好な資料が少なく土器様相の全体は捉えにくい、代表的な資料として市田齊当坊遺跡 SKC162・478a, SHC92, STA97 がある。全体的には IV 様式系が主体で近江系も存在する。IV 様式系は広口壺、高坏、鉢などがあり、畿内地域とその周辺地域で共通性の高いものである。一方で近江系は、前後の時期の土器様相からみて、受口甕以外に受口壺も存在している可能性が高い。近江系には IV 様式系の製作技法の影響を近江地域と同様に受けていない。甕は、IV 様式系が多数を占め、さらに近江系の受口甕が一定量を占める。くの字甕はケズリ調整を内外面に施す甕 7・8 や内外面ハケ調整のち下半にミガキ調整を施す甕 6 など IV 様式系と瀬戸内系が混交し多様性がある。この段階の土器様相は、IV 様式系を主体とする中に一定程度の近江系が併存する状態といえる。

後期前葉 良好な資料は少ないが、代表的な資料として木津城山遺跡 SX05、中久世遺跡 SD6、長法寺遺跡 R846 次 SD01、中臣遺跡 52 次 1・4 号住居がある。IV 様式系が畿内地域と同様に変遷し、無文化が急速に進行する。近江系は連続的な変化にとどまり、加飾傾向も変化しない。なお、相対的に古い様相をもつ木津城山遺跡 SX05 と中久世遺跡 SD6 (後期前葉 a) と同様の資料はごくわずかで、後出的な様相をもつ長法寺遺跡 R846 次 SD01・中臣遺跡 52 次 1・4 号住居 (後期前葉 b) と同じ様相の資料は山城地域全域で点的であるが確認できる。後期前葉 a が資料不足のため、現状では後期前葉 ab を明確な時間差として設定しないこととする。

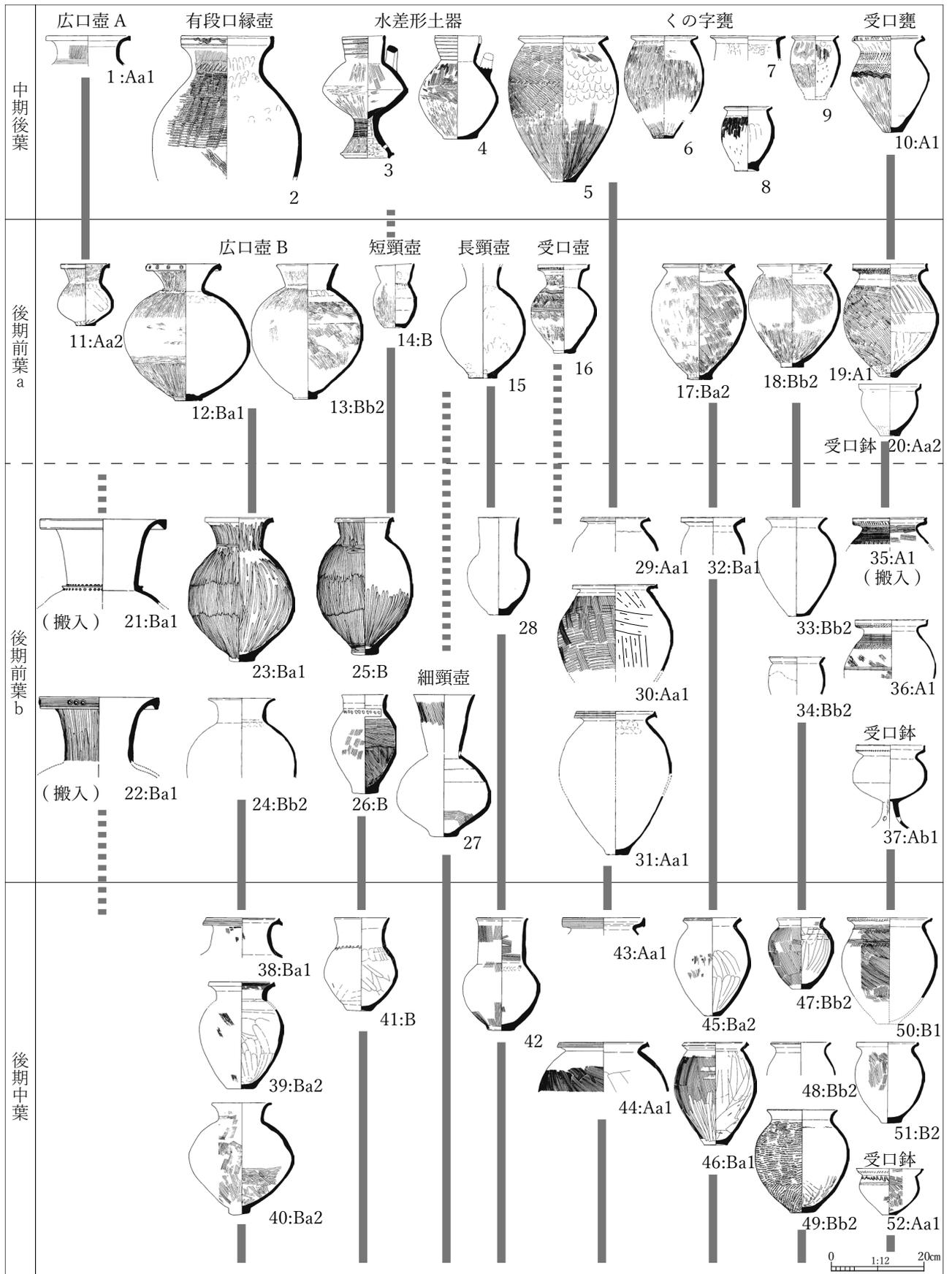


図16 土器編年図(山城地域)(1)

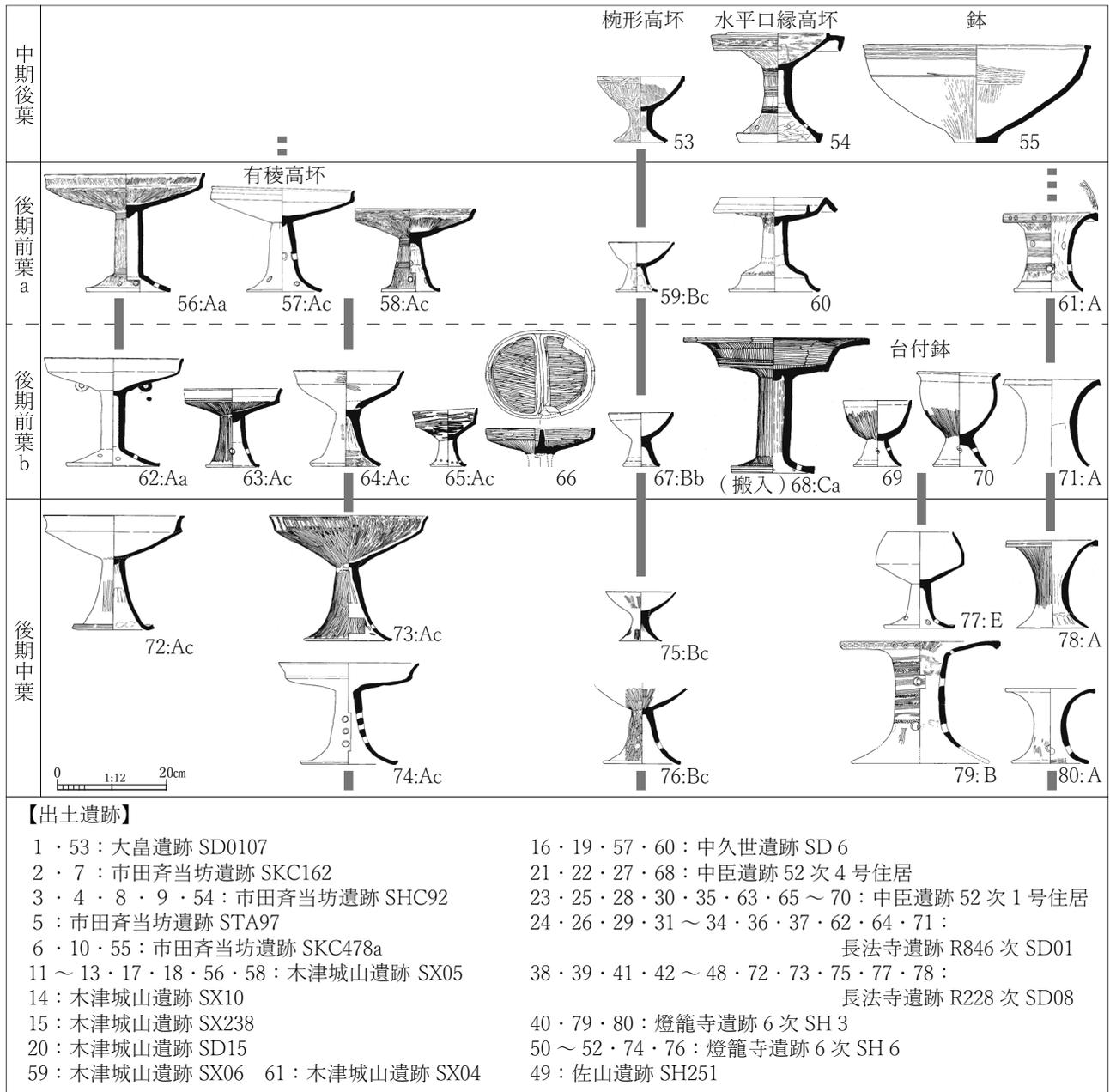


図 17 土器編年図 (山城地域) (2)

壺では、長頸壺と細頸壺が出現し、壺の底部には突出底が多くなる。生駒西麓産の広口壺 B の存在から河内地域との交流も伺える。Ⅳ様式系の短頸壺は凹線文が消えて粗雑化し、壺における比率が高まる。受口壺は、受口甕と比べて出土数が少なく、近江湖南地域からの搬入品も多い。

甕は、瀬戸内系の甕が大型、在地のくの字甕が中・小型、受口甕が中型と大きさによって系統が異なる傾向にある。瀬戸内系の甕は、製作技法が定着し在地で製作する。木津城山遺跡出土の甕 Bb (17・18) は在地のくの字甕で、内外面をハケ調整で仕上げるのが特徴的である。外面ハケ調整の前にタタキ調整を施している可能性があるが、丁寧なハケ調整のため確認できない。この甕は、摂津地域で出土する外面ハケ調整で内面ケズリ調整の瀬戸内系の甕を在地化したものか、中期後葉の甕 6 の最終外面ミガキ調整をやめたものの可能性がある。なお、こうした甕が南丹波地域で成立

した可能性も指摘されている〔高野 2009〕。受口甕・鉢は引き続き在地化しており、形態や加飾は近江地域と共通する。受口鉢は、近江地域と同様にこの段階から顕在化し、煮沸具ではない台付受口鉢も一定量存在するようになる。

高坏は、畿内地域で共通性の高い高坏となる。大きく水平に開いた有稜の坏部に短く立ち上がる口縁部を持つ高坏 A は、中期後葉の高坏から変遷するものである。脚部は外反して広がる脚が多いが、柱状脚も一定量含む。その他、やや深めの坏部をもつ高坏や浅い坏部の椀形高坏、外面ハケ調整の台付鉢なども存在するが個体差が大きく多様である。なお、高坏 62 は坏底部に把手がつく北近畿系の高坏であり、北近畿地域との併行関係を示す。

器台は、擬凹線文や円形浮文などで加飾したものや無文のものがああり、中期後葉の凹線文系の器台から連続的に変遷する。

後期中葉 代表的な資料としては長法寺遺跡 R228 次 SD08、燈籠寺遺跡 SH03・06 がある。山城地域全域で遺跡数・資料数とも増加する。土器様相は後期前葉を引き継いでおり、大きな変化が少ない。長法寺遺跡例が古相を示し、燈籠寺遺跡例が新相を示す。この段階の特徴としては、受口甕・鉢の在地化が進み、近江湖南地域と変化の方向性が異なりつつある点にある。受口甕・鉢の加飾は減る傾向にあり、口縁部は端部が短く立ち上がる形態となる。こうした形態は、近江地域北半と近い傾向にあり注目できる。また、前段階に比べて高坏の多様性はなくなり形状が安定する。甕は外面ハケ調整、内面ケズリ調整のくの字甕がやや多く、瀬戸内系の技法を引き継いでいるといえる。一方、後期の畿内地域で特徴的なⅥ様式系のくの字タタキ甕 49 のような甕は少数派で、比率が増えるのは後期後葉以降である。突出底をもつ広口壺、くの字タタキ甕、付加技法を用いる高坏の存在から、いわゆる分割成形技法を導入しているといえるが、土器様相全体に占める比率は低い。

併行関係 山城地域における後期前葉段階は、有稜の坏部をもつ高坏 A の形態からみて、大和地域の和Ⅴ様式〔藤田 2003〕、河内地域のⅤ様式〔寺沢・森井 1989〕、摂津地域のⅤ様式〔森田 1990〕に併行する。詳細にみると、後期前葉 a は、高坏 A の脚部が外反して広がる b が主流で坏部の立ち上がりが小さいことから、和Ⅴ-1 様式、河内地域のⅤ-0 様式、摂津地域のⅤ-0 様式にあたり、それぞれの様式でもやや新しい要素をもつ。広口壺の球体化した体部も新しい要素である。そのため、中期後葉と後期前葉 a の間に想定できる後期最初期の資料が欠落した状況にあるといえる。後期前葉 b の高坏 A は、坏部の立ち上がりが高くなりつつあることから、和Ⅴ-2 様式、河内地域のⅤ-1 様式、摂津地域のⅤ-1 様式にあたる。これらの併行関係は、生駒西麓産の広口壺や近江湖南地域の受口甕といった搬入品からみても矛盾しない。

c. 小結：山城地域における弥生時代後期のはじまり

中期後葉末の山城地域では、神足遺跡や市田斉当坊遺跡といった大規模な集落が廃絶していく。続く後期前葉では遺跡数が大きく減少し、後期中葉に再び遺跡数が増加する。こうした傾向は、特に調査密度の高い桂川右岸の乙訓地域で詳細に検討されており、さらに山城地域全体で共通する現象であることが指摘されている〔柏田・古川・浅井 2016〕。

遺跡の動態と同様に、土器様相も後期前葉に変化する。中期後葉に主流を占めたⅣ様式系が変容しつつ無文化する傾向にあり、畿内地域で共通性の高い変化である。また、瀬戸内系が引き続き存

在するが、これらは隣接する摂津地域を介しての流入を想定できる。

注意が必要なのは、後期前葉でも最初期に相当する土器群が確認できない点である。調査密度の高い乙訓地域において後期前葉最初期の資料が十分に確認できない現状からみて、今後この時期の資料がみつかるとしても、現状の傾向を覆すほど大幅な増加は見込めない。後期前葉最初期の資料が確認できないからといって、この時期のみ山城地域全域が無人状態にあるとは考え難い。そのため、山城地域の土器様相が畿内地域と共通化するのが一段階遅れた可能性を指摘しておきたい。

後期前葉には内外面ハケ調整の甕 Bb が出現し主流となる。前述のように、瀬戸内系の甕やⅣ様式系の甕の一部が変容して山城地域在地の甕の一つとして成立した可能性がある。また、こうした内外面ハケ調整の甕以外にも、中期後葉から続く瀬戸内系や近江系の甕も確実に併存している。このように多系統の土器が併存し混在している状況こそが山城地域の特徴といえる。多系統の混在がよく現れているのが高坏で、坏内部を2分割する高坏 66 など、中葉に続かない多様な形状の高坏がある。これらの高坏も現状で把握できていない系譜を持つ可能性がある。

続く後期中葉になると、器種が絞り込まれる傾向にある。高坏 A の形態が畿内地域で共通する変化を示すのに対して、くの字タタキ甕が主流を占めない状況からは、器種の選択的な受容のあり方を示しているといえる。近江地域でも同様に器種の受容は選択的であり、隣接する両地域で類似した傾向を示す点が注目できる。

山城地域における近江系は、多くの搬入品があるだけでなく、在地の土器様相の一角を占め続けており、継続的な土器情報の交流を伺うことができる。後期中葉以降には、土器群に占める近江系の比率が高めの遺跡が目立つ一方で、近江地域の土器とは変化の方向性が異なっていく。これは、近江系の在地化が進み近江地域との土器情報の交流が薄れたことを意味している。つまり、後期中葉以降は山城地域の独自性が発現する段階と評価することができる。(中居・浅井)

(9) 近江地域

a. 分類

近江地域は現在の滋賀県に相当する。琵琶湖の周囲と琵琶湖に注ぐ河川の両岸に形成された平野からなり、琵琶湖を囲むように湖北・湖西・湖東・湖南の4つの小地域でとらえることができる。弥生時代中期後葉から後期中葉にかけての遺跡は、特に湖南に集中する傾向にある。そのため今回の検討では、まとまった資料のある湖南の土器群を検討の対象とする。近江地域における後期前葉から中葉にかけての主要器種の分類は以下の通りである(図 18・19)。

壺 広口壺は、頸部がゆるく屈曲するものを A、頸部が強く屈曲するものを B とする。いずれも口縁端部について、拡張ないし垂下するものを a、拡張しない素口縁のものを b とし、加飾するものを 1、無文を 2 とする。短頸壺は、直線的に上方に長く伸びる口縁部をもち、頸部上方や口縁部外面に凹線文系の文様をもつものを A、口縁部が長く伸び無文を B とする。長頸壺は、球形の体部に長く伸びる口縁部をもつ。細頸壺は、強く締まる頸部に長く伸びる口縁部をもつ。受口状口縁壺(以下受口壺)は、頸部が長く伸びるものを A、頸部が短いものを B とする。

甕 くの字状口縁甕(以下くの字甕)は、口縁が強く外反するものを A、口縁がゆるく外反するものを B とする。端部を拡張するものを a、素口縁を b とし、加飾するものを 1、無文を 2 とする。

受口状口縁甕（以下受口甕）は、明瞭な立ち上がりのある受部をもつものをA、低い立ち上がりの受部をもつものをBとし、加飾するものを1、無文を2とするが、当該期の湖南ではBに相当するものは少ない。小型の甕に相当する受口状口縁鉢（以下受口鉢）は、明瞭な立ち上がりのある受部をもつものをA、低い立ち上がりの受部をもつものをBとし、平底をa、台付をb、加飾するものを1、無文を2とする。

高坏 坏部が有稜となるものをA、椀形をB、大きく外反し深い坏部のものをC、水平口縁をDとする。いずれも脚部について柱状脚をa、直線的に開く脚をb、外反しながら開く脚をcとする。また、台付鉢として成立しつつ変遷していくいわゆるワイングラス形高坏をEとする。

器台 受部と脚部が不明瞭なものをA、屈曲が明瞭なものをBとする。

系統 以上の器種は、後期前葉段階では大きく4つの系統に整理することができる。中期後葉から変容しつつ残存する凹線文系、中期以来の在地色の強い櫛描き文系、後期における畿内地域からの系譜を引く後期畿内系、瀬戸内地域からの系譜を引く瀬戸内系である。他地域の検討では、中期後葉の土器の系譜をまとめてⅣ様式系としているが、近江地域においては畿内地域で共通性の高い凹線文系と在地の櫛描き文系が併存する点に特徴があることから、2つを分けて扱うものとする。後期畿内系は、他地域の検討では生駒西麓系とⅥ様式系とされているものである。近江地域においては明確に峻別できる系統として認識できないためまとめて扱う。

凹線文系には、広口壺Aa1、短頸壺A・B、くの字甕、有稜高坏、器台がある。器形や技法を継承しつつ凹線文を施さないものもある。

櫛描き文系には、受口状口縁をもつ壺・甕・鉢があり、いずれも在地の器種である。中期後葉までは、櫛描き文を施す広口壺などの受口状口縁以外の器種もあるが後期に続かない。他地域の検討では「近江系」として認識されているが、近江地域では在地の系譜であり、近江地域以外の広域で在地化もしている。そのため、ここでは在地で系譜のたどれる櫛描き文系として扱うこととする。

後期畿内系には、広口壺B、短頸壺B、細頸壺、長頸壺、高坏Cなどがある。後期における畿内地域とその隣接地域で共通性の高い器種である。

瀬戸内系には、くの字甕Aa1の一部があるが、数は少なく凹線文系との峻別も困難である。搬入は少なく、畿内Ⅴ様式系の一部として摂津・山城地域を介して二次的に流入したものとする。

b. 編年・併行関係

近江地域における弥生時代中期後葉から後期中葉にかけての編年は各種あるが、弥生時代全体を通しての編年が兼康保明によって提示されている〔兼康 1990〕。この編年と筆者の編年〔中居 2010〕を参照しつつ、その後に増加した資料を加えながら検討した結果、大きく3段階、詳細には4段階にまとめることができる。

中期後葉 代表的な資料としては、下鈎遺跡溝A1060・5001がある。凹線文系と櫛描き文系の大きく2つの系統がある。凹線文系は広い器種に及び、畿内地域と共通性がある。一方で櫛描き文系は、受口壺・甕以外にも櫛描き文で加飾する細頸壺・広口壺など多岐にわたり、凹線文系の製作技法の影響を受けていない。この段階の受口壺は、細頸の小型品や受部の大きな大型品など、形態や大きさに多様性があり個体差も大きい。甕には、凹線文系に加えて瀬戸内系の甕も一定量存在するが、

多数を占めるのは櫛描き文系の受口甕である。受口甕は、外面を粗いハケ調整のち櫛描き文による加飾、内面をナデ調整で仕上げる。この製作技法は後期末まで一貫して引き継がれるものである。口縁内面に加飾を施す受口甕 15 は一段階前に多い要素で、この段階には少数派である。口縁部外面の櫛描き文による加飾は、列点文、波状文、鋸歯文と多様性がある。口縁端部は丸く仕上げるか緩やかな面をもつのが基本である。この段階の土器様相は、多様な櫛描き文系の器種を補完する形で凹線文系の器種を幅広く導入しており、選択的に外来系の器種を受容しているといえる。

後期前葉 代表的な資料としては、八夫遺跡 SD9301 と服部遺跡 SD201 がある。前段階に比べて土器群全体の様相が変化したように見える。それは凹線文系が畿内地域と同様の方向性で変容するため、土器の大きさが中期末よりも小型化するためである。短頸壺、くの字甕、器台などには凹線文を施さなくなるが、系譜としては中期後葉から継続する器種である。櫛描き文系も中期以来連続的に変化しており、土器様相に断絶がない。そして、中期後葉と同様に凹線文系の製作技法は櫛描き文系の製作技法に影響を与えていない。なお、後期最初期（後期前葉 a）の様相をもつ八夫遺跡例と同様の資料は他に確認できず、後出的な様相（後期前葉 b）をもつ服部遺跡例に類する資料は近江地域全域で確認できる。八夫遺跡例が他に先行して器種の置き換えが進んだ資料の可能性があることから、ここでは後期前葉 ab を明確な時間差として設定しないこととする。

壺は、底部が突出底となる広口壺や、後期畿内系の細頸壺や長頸壺が出現する。生駒西麓産の広口壺 B の存在から河内地域との交流も伺えるが、搬入品は前後の段階でも確認できる。受口壺はこの段階で形態が安定し、受口甕と調整技法や施文方法の共通性が高まる。

甕は、櫛描き文系の受口甕が甕の大半を占める。受口甕の口縁端部には内傾する面をもち、加飾には前段階の多様性がなくなり定型化する。瀬戸内系や凹線文系の甕は減少していき、客体的な存在となる。受口鉢はこの段階から顕在化し、煮沸具ではない台付受口鉢が一定量存在するのも特徴的である。台付受口鉢は、山城地域の長法寺遺跡 R846 次 SD01 [木村 2006] や伊勢地域の六大 B 遺跡 SK3 [三重県埋文センター 2006] でも確認でき、受口状口縁をもつ多様な土器が近江地域外に広がることを示す。なお、台付受口鉢の祖型は中期後葉から確認できるが、その数は希少である。

高坏は、凹線文系の有稜高坏が畿内地域と同様に变化する。大きく水平に開いた有稜の坏部に短く立ち上がる口縁部を持つ。脚部は、直線的に広がり端部がやや開く脚が多くを占め、柱状脚は少数である。水平口縁高坏はこの段階までわずかに残存する。その他、椀形高坏も存在するが個体差が大きい。また、後期畿内系の高坏 C が出現するが、次の時期までは継続しない。

器台は、前段階の凹線文を施す大型品が消え、後期につながる形態に変化する。棒状・円形浮文や列点文などで加飾しており、数量も比較的多い傾向にある。

後期中葉 代表的な資料としては中沢遺跡 SD132、錦織遺跡 C 地点、伊勢遺跡 4 次五角形住居がある。近江地域全域で遺跡数が増加し良好な資料も多い。土器様相は後期前葉を引き継いでおり、大きな変化が少ない。この段階の特徴は、受口壺が減少する点と受口鉢が扁平化していく点にあるが、受口鉢の煮沸具としての用途は変わらない。また、畿内地域で盛行するいわゆる分割成形技法は、突出底をもつ壺 46・49 や付加技法を用いる高坏 84 で部分的に確認できるのみである。

併行関係 近江地域における後期前葉は、有稜の坏部をもつ高坏 A の形態からみて、大和地域の大和 V-1・2 様式 [藤田 2003]、河内地域の V-0・1 様式 [寺沢・森井 1989] に併行する。詳細にみると、

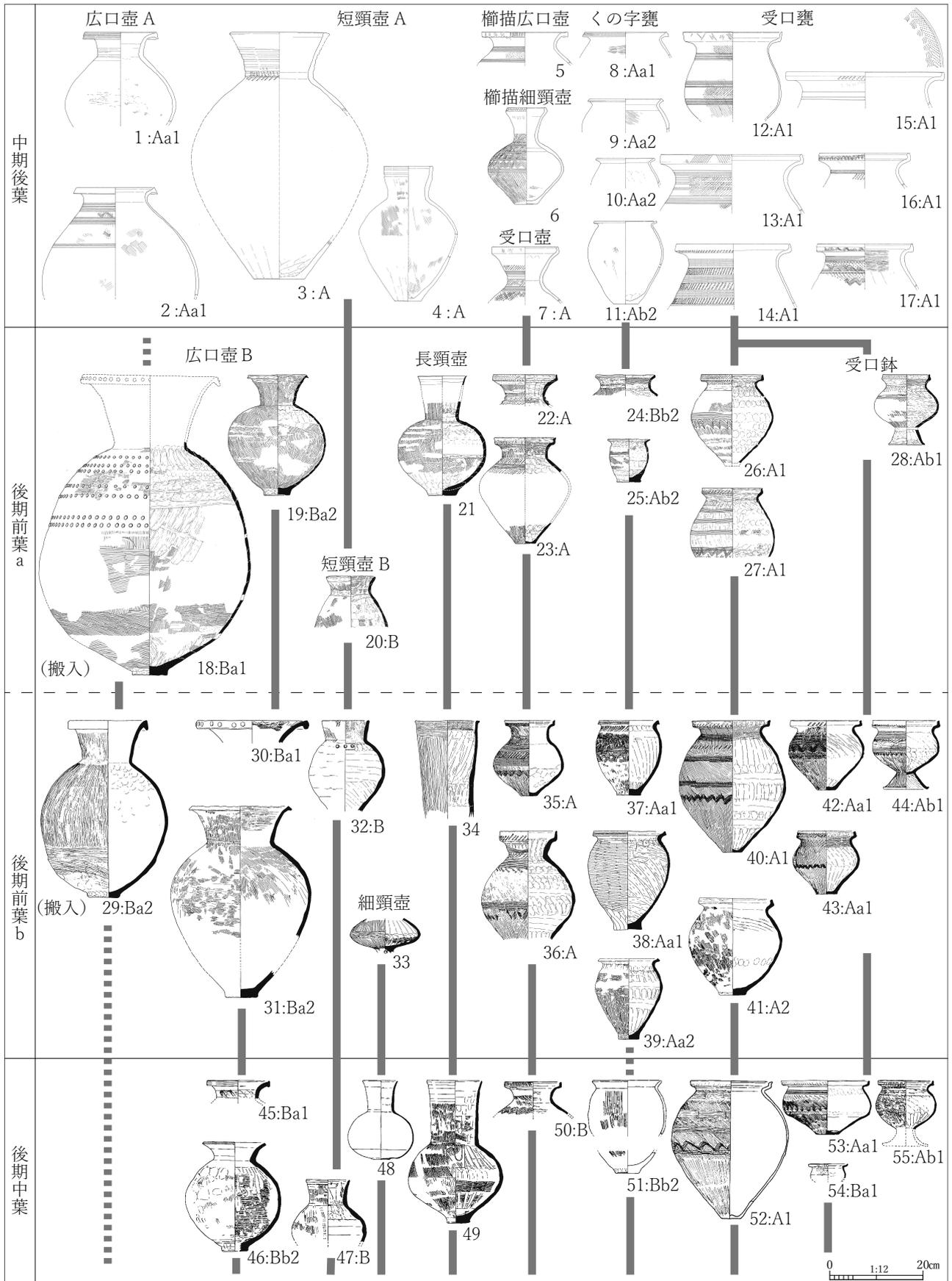


図18 土器編年図(近江地域)(1)

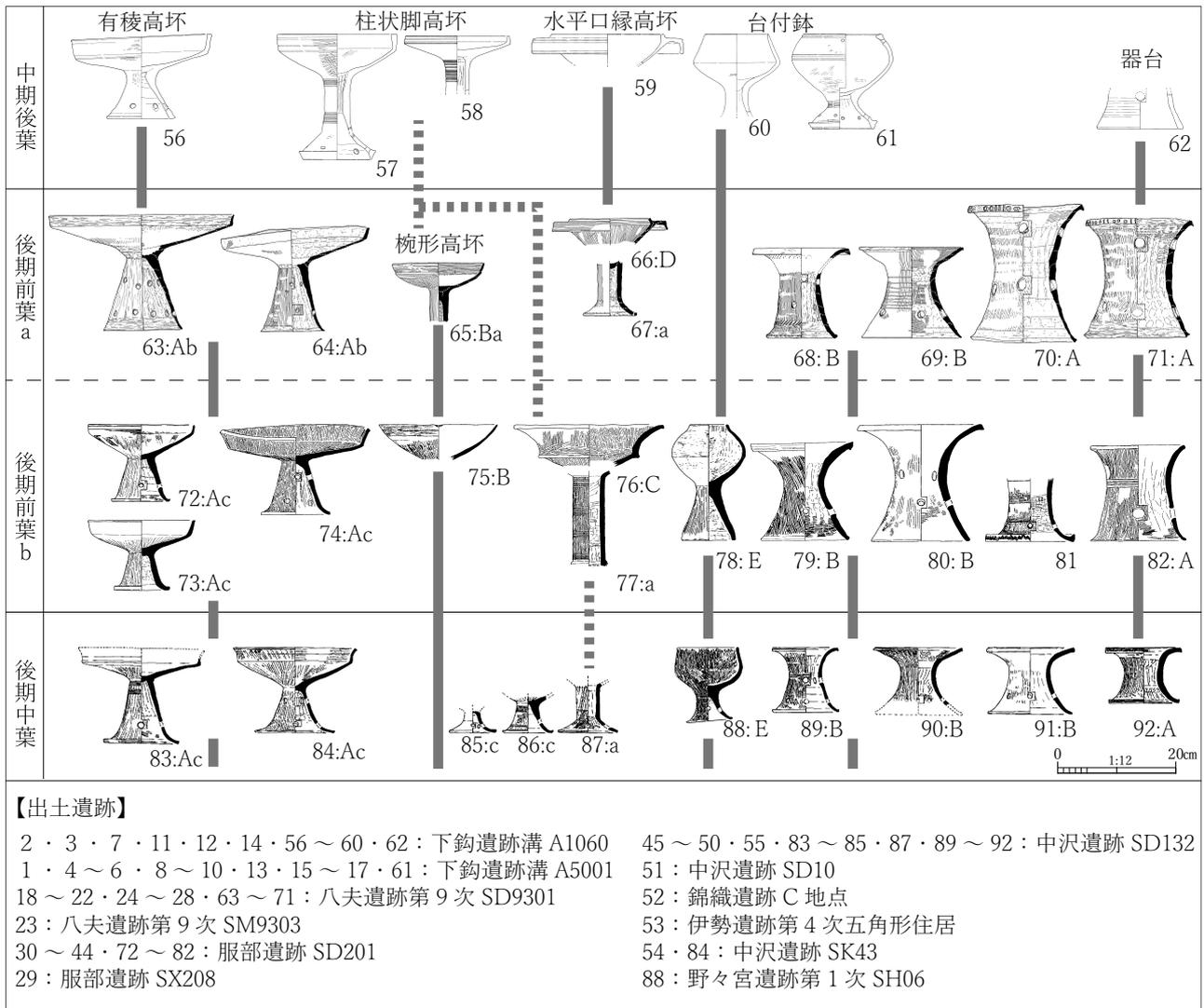


図 19 土器編年図（近江地域）（2）

後期前葉 a は高坏 A の脚部が比較的高く、外側に外反せずに広がらないことから大和 V-1 様式、河内地域の V-0 様式に併行する。後期前葉 b の高坏 A は、脚部が外反して広がり、坏部も立ち上がりが高くなることから大和 V-2 様式、河内地域の V-1 様式に併行する。河内地域との併行関係は、搬入品の広口壺 B からみても矛盾しない。

伊勢湾沿岸地域では八王子古宮式に併行する [赤塚 2001]。指標遺跡の八王子遺跡では、近江湖南地域からの搬入品が胎土分析で複数確認されており、在地化した受口甕も多数出土している [矢作・赤塚 2003]。八王子遺跡出土の受口甕・鉢は口縁端部に明確に内傾する面をもつため、近江地域の後期前葉以降と併行することは確実である。

c. 小結：近江地域における弥生時代後期のはじまり

中期後葉の近江地域では、最初に述べたように遺跡数が湖南に偏る傾向にあり、後期前葉でも大きな変化がない。後期前葉の湖南の集落様相は、分散化と縮小の傾向があるとの指摘がある [戸塚 2016]。湖南に注目した場合には集落規模の縮小等が存在するものの、近江地域と周辺地域を合わせて相対的にみた場合には減少幅が小さい。湖南の集落は、場所を移動し規模を縮小させつつも

巨視的には継続傾向にあるといえる。土器様相も同様で、中期後葉から後期前葉への変化は在地の櫛描き文系からみた場合は連続的である。そのため、土器からみた近江地域における弥生時代後期の始まりは、断絶性より継続性が強いといえる。中期後葉段階における外来的な要素といえる凹線文系の器種は、基本的に搬入品ではなく在地で製作したものである。これらの器種は、後期前葉に畿内地域と同様の変遷をたどるが、やはり製作技法を取り入れ在地で製作したものが大半である。つまり、櫛描き文系の在地土器群を補完するために外来系の土器製作技術を用いる様相は大きく変化していないといえる。こうした様相が古墳出現期まで継続することはすでに指摘されている〔伴野 2006〕。以上の点から、土器からみた近江地域における後期の始まりは、継続性の強い在地の櫛描き文系土器群を補完する外来系土器群が変化した時期であると評価できる。

櫛描き文系の受口壺・甕・鉢は、近江地域を超えて山城・伊賀・伊勢・美濃・越前・若狭地域などで確認でき、それぞれの地域で在地化している。これらの地域は、中期段階から近江地域との土器の情報共有が盛んな地域である。近江地域外の各地で定着していることを評価すると、「近江系」という地域名を越えた土器群であることは、以前に指摘したことがある〔中居 2016〕。

一方で、摂津地域のような中期段階に土器の情報共有が盛んでなかった地域において、受口壺・甕・鉢が多く出土する現象も確認できる。摂津地域の古曽部・芝谷遺跡では、まとまった数の受口壺・甕・鉢が出土しているものの搬入品が多く、在地の土器に大きな影響を及ぼしていない。これらの土器の一部は摂津地域に隣接する山城地域からの搬入品を含むであろうが、一部は近江湖南地域からの搬入品である。当該期に各地で確認できる土器として生駒西麓産の土器が代表的であるが、近江湖南地域産の土器も各地で確認できることは注目できる。後期前葉においても集落の顕著な小規模分散化がなく、比較的安定した集落群を維持していた近江湖南地域だからこそ、多くの土器を各地に搬出することができたと考えたい。

在地の土器様相に影響のない摂津地域と異なるのが尾張地域低地部である。尾張地域低地部の八王子古宮式の成立には、近江地域からの影響が大きいと評価されている〔赤塚 2001〕。近江地域の櫛描き文系を発信源とする受口状口縁をもつ土器群は、尾張地域と摂津地域の違いのように地域によって影響関係が強弱があるものの、後期前葉において広範囲に拡散し各地に影響を与えた土器群の一つであると評価できる。(中居)

(10) 伊勢地域

a. 分類

弥生時代後期前葉に伊勢地域でみられる主要な器種は、次のように分類される(図20)。

甕 基本的に平底のものが多く、口縁部の形態により、くの字状口縁甕と受口状口縁甕に大きく分けられる。くの字状口縁甕は、口縁部が頸部から単純に外反する。これについては、a) 頸部が強く屈曲するもの、b) 頸部が緩やかなカーブを描いて屈曲するもの、に細分され、さらにa)は、1) 口縁端部を拡張しないもの、2) 口縁端部を拡張して面を作り、凹線を施すもの、の2つに細分される。受口状口縁甕は、口縁部が屈曲し受口状を呈するものである。

このほかに、低い脚台が付く台付甕が少数認められる。口縁部形態にはくの字状口縁と受口状口縁があると思われるが、全体が遺存するものが少なく不明確である。

壺 大きく広口壺，受口状口縁広口壺，短頸壺，長頸壺，直口壺，水差形壺，袋状口縁壺，細頸壺，無頸壺に分けられる。

広口壺は球形の体部をもち，口縁部が頸部から外反して大きく広がる。a) 口縁端部をあまり拡張しないもの，b) 口縁端部を大きく垂下させるもの，に細分される。受口状口縁広口壺は基本的に大型の壺で，口縁部が大きく屈曲して立ち上がり受口状を呈する。短頸壺は中型の壺で，縦長の体部に短い口縁部が付く。a) 口縁部が単純に外反し広口壺状となるもの，b) 口縁部が受口状を呈するもの，に細分される。長頸壺は頸部から口縁部が直立気味に長くのびる。頸部から口縁部の長さは体部の半分以上となる。直口壺は頸部から口縁部が直立気味に短くのびる。頸部から口縁部の長さは体部の半分以下となる。水差形壺は直口壺の肩部に横方向の把手が付くものである。袋状口縁壺は口縁部が内湾し，瓢形を呈する。細頸壺は算盤玉形の体部に細長い口縁部が付く。無頸壺は球形の体部で，頸部を持たないか，ごく短い口縁部が付くものである。

高坏 有稜高坏，椀形高坏，ワイングラス形高坏，有段高坏に分けられる。有稜高坏は口縁部付近が短く屈曲する浅い有稜の坏部を持つものである。脚部形態により，a) 脚部が柱状脚のもの，b) 脚部がメガホン状に直線的に開くもの，に細分される。椀形高坏は口縁部が屈曲しない椀形の坏部を持つものであるが，これについても脚部形態で細分できる。有稜高坏と同様の a) 脚部が柱状脚のもの，b) 脚部がメガホン状に直線的に開くもの，のほかに c) 小型でラッパ状に若干外反しながら開く低い脚を持つものが認められる。ワイングラス形高坏は無頸壺状の小型の坏部を持つ。有段高坏はやや特殊な形態のもので装飾性が高く，坏部・脚部が屈曲して段をなし，屈曲部に突帯を巡らせるものが目立つ。

器台 全形が判明するものが少ないが，とりあえずは筒形器台と大型器台に分けておく。筒形器台は円筒形を呈するものである。形態や文様等で，さらに細分できる可能性がある。口縁部と脚裾部は緩やかに外反する。大型器台は器高が 30 cm を超えるような大型の器台である。

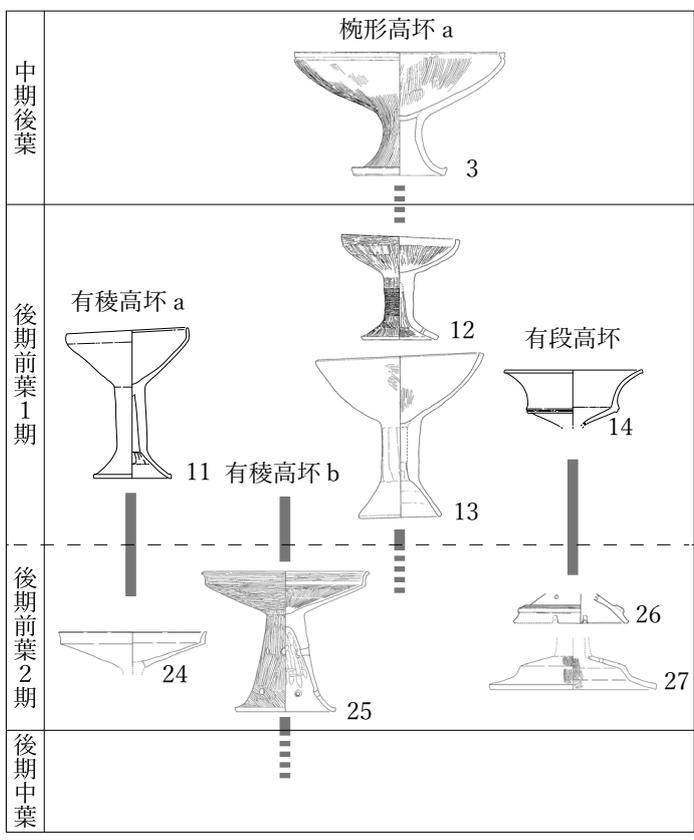
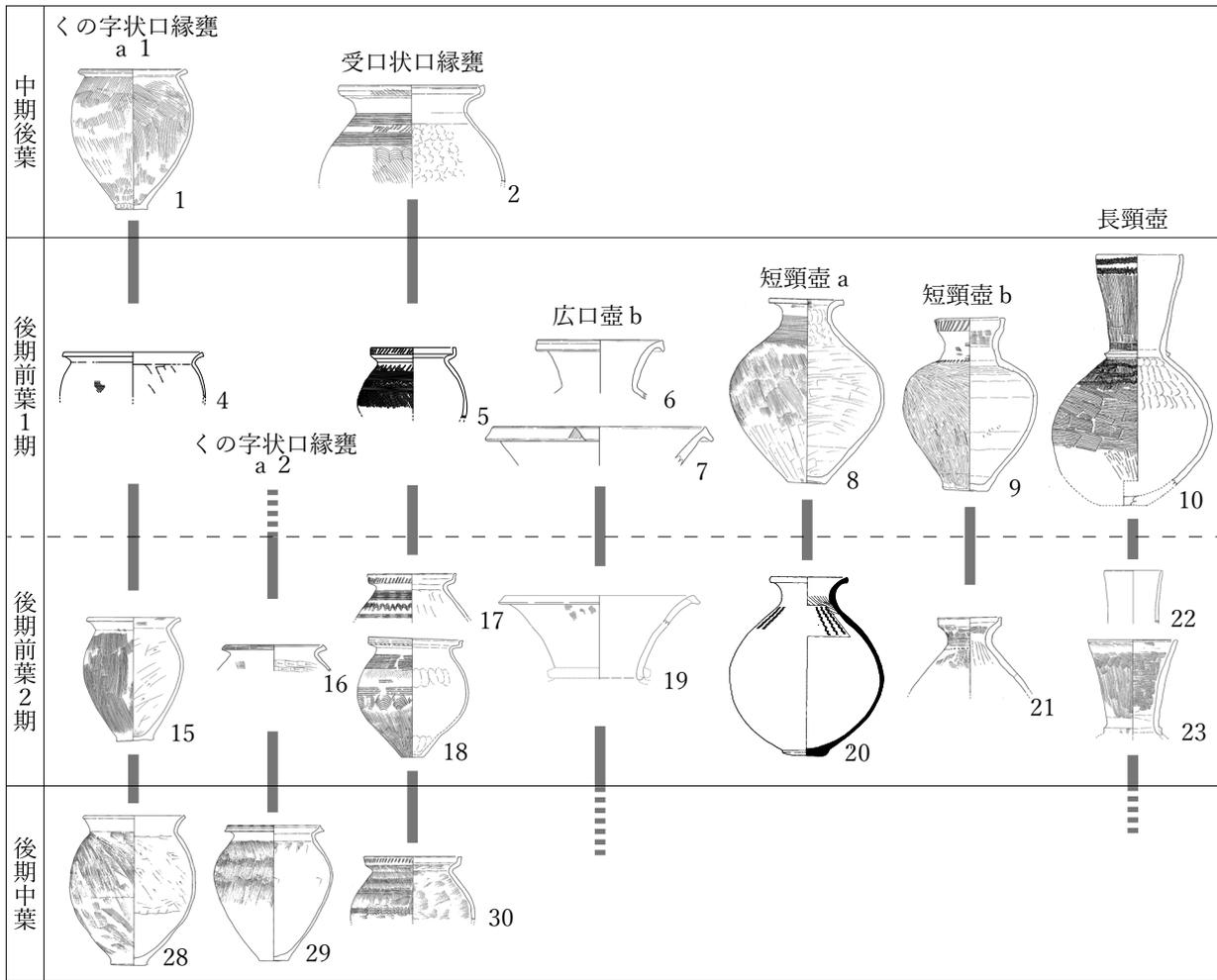
鉢 椀形鉢とくの字状口縁鉢に分けられる。椀形鉢は平底の底部から直線的あるいは内湾しながら体部が外方へ開き，椀形を呈する。くの字状口縁鉢は口縁部がくの字状を呈するものである。

系統 これらの各器種は，(Ⅰ) 伊勢地域の中で中期後葉の凹線文系に系譜が辿れるもの，(Ⅱ) 伊勢地域の中で中期後葉の櫛描き文系等に系譜が辿れるもの，(Ⅲ) 伊勢地域に特徴的にみられるが中期後葉からの系譜が辿り難いもの，(Ⅳ) 近江地域からの影響を受けたもの，(Ⅴ) 畿内地域及びそれ以西の地域からの影響を受けたもの⁽²²⁾，の 5 群に大きく分けられる。

I 群に含まれるものには，広口壺 a，袋状口縁壺，受口状口縁広口壺，無頸壺などがある。椀形高坏 a のうち脚が短いものもこれに含まれる可能性が高い。くの字状口縁甕 a1 については形態や調整にバリエーションがあり系統的な整理が難しいが，I 群の範疇で捉えられるものがある。凹線文自体は衰退し施されることはほとんどないが，これらを凹線文系とする。

II 群に含まれるものには，くの字状口縁甕 b がある。伊勢地域では中期後葉によくみられ，基本的に頸部や口縁部の内面にハケを施し，大和形甕の系譜を引く可能性がある。この他に，広口壺 a の一部にも中期の櫛描き文系の壺との関連が窺われるものがある。これらを在地系とする。

III 群に含まれるものはごく少ないが，短頸壺 a は頸部が不明瞭な特徴的な形態で，伊勢地域特有の器種とみられる。これらを在地新出系とする。



- 1 : 納所遺跡 SK416
- 2 : 納所遺跡 SK150
- 3 : 久留倍遺跡 SR578
- 4 : 川原表B遺跡 SB 5
- 5 : 川原表遺跡 SB 4
- 6・7・16・26 : 八重垣神社遺跡 SR069
- 8・9 : 小谷赤坂遺跡 SK362
- 10・12 : 金剛坂遺跡 SX714
- 11・14 : 川原表B遺跡 SB 3
- 13 : 小谷赤坂遺跡 SX386
- 15・18・25 : 六大B遺跡 SK 3
- 17・21 : 小谷赤坂遺跡 SH388
- 19・22 : 24・27 : 磐城山遺跡 SH0622
- 20 : 大藪遺跡 SX 1
- 23 : 納所遺跡 SR 4
- 28 ~ 30 : 堀町遺跡 SK305

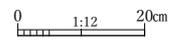


図 20 土器編年図 (伊勢地域)

Ⅳ群に含まれるものには、受口状口縁甕、短頸壺 b がある。受口状口縁甕には搬入品も多いとみられる。短頸壺 b は近江地域に類似する器形のものがあり影響を受けていると思われるが、体部の形態にⅢ群の短頸壺 a との共通性が窺われるものもある。これらを近江系とする。

Ⅴ群に含まれるものは、広口壺 b、長頸壺、水差形壺、細頸壺、有稜高坏 a・b、有段高坏、大型器台、筒形器台など、多岐にわたる。ほとんどの器種は畿内地域の広い範囲で後期前葉に認められる。これらを畿内系とする。

畿内系の中でも、水差形壺や筒形器台は畿内地域では中期後葉にも広くみられ、Ⅳ様式系の器種といえよう。また、くの子状口縁甕 a1 の一部にも、伊勢地域の凹線文系の土器群ではなく新たに畿内地域のⅣ様式系の甕から影響を受けて製作されたものが含まれる可能性があり、そうしたものはⅤ群の範疇で捉えられよう。⁽²³⁾

広口壺 b や柱状脚を持つ有稜高坏 a については、生駒西麓地域の土器様式との関係も考えられる。椀形高坏 a の中で長い柱状脚を有するものについても同様であろう。ただし、伊勢地域の高坏の柱状脚は柱状部と脚裾部の屈曲が明瞭でなかったり、脚部内面のケズリが顕在化しないため、直接的な影響ではなく生駒西麓地域以外の地域を介した二次的な影響とみた方がよい。

一方、同じくⅤ群に含まれるくの子状口縁甕 a2 については瀬戸内海沿岸地域の影響を受けていると考えられる。瀬戸内系としておきたい。

b. 編年・併行関係

後期前葉の土器群の特徴 伊勢地域で中期から後期への土器様式の変化として大きなメルクマールとなるのは、中期の土器様式を構成する複数の系統のうち、凹線文系以外が衰滅することである。当該地域の中期後葉の土器様式は凹線文系以外に櫛描き文系、ハケメ文系、沈線文系といったいくつかの系統からなるが〔石井 2012〕、これらに含まれる器種は後期前葉にはほとんどみられない。そして、凹線文系も急激に衰退していく。

その一方で、在地新出系と畿内系の器種が新たに出現し主体となる。特に、畿内系に含まれる器種の多くは伊勢地域では中期後葉にはみられないもので、こうした新しい器種群の出現により、器種組成が大きく変化する。

さらに、器種組成だけでなく調整や文様など製作技法にも変化が明瞭に認められる。調整については、甕や壺の体部外面のケズリが顕在化する点の一つの特徴である。甕の中でも普遍的なくの子状口縁甕 a1 や、在地新出系の短頸壺 a などで認められる。これは、中期後葉段階ではケズリの後にハケやミガキが施されていたものが、それらが省略・簡略化されることにより、ケズリが顕在化してきたとも考えられる。また、くの子状口縁甕 a1 では体部内面の調整にもケズリが目立つようになる。

文様は全体的に減少し、壺類では中期後葉以来の直線文、波状文、簾状文、列点文などが口縁部や頸部、肩部外面などに若干施される場合が多い。さらに、波状文や簾状文には粗雑なものも多く、歪みが大きかったり工具の振幅や静止幅が一定でない。使用される工具も目が粗いものが多くなり、シャープさを欠く。また、波状文などを縦方向に施すものも目立つ。この他にも、中期後葉段階ではほとんどみられなかった赤彩が壺や高坏を中心に顕在化する点が注意されよう。丸や線などの記

号的な赤彩を施すのも特徴的である。

一方、後期前葉と後期中葉との区分については、後期前葉のものよりも口縁部が長く伸び外反傾向を示す有稜高坏の出現と主体化が、大きなメルクマールとなる。こうした高坏の脚部は長脚で、外反しながら開くラップ形となり、透孔が円形の一段に定型化する。また、甕全体に占める台付甕の比率が急激に高まる。壺や高坏の文様においては、後期前葉に残存した波状文や直線文、列点文といった櫛描き文が体系的に整えられる。全体の器種組成についても、畿内系の器種のいくつかは消滅し、在地新出系もみられなくなるなど、変化が認められる。

後期前葉の細分 後期前葉の土器様式は、2つの小様式に分けることができる。これらは、前後の時期の土器様式との連続性から時期差として把握できると考えられるため、後期前葉1期と2期とする。1期の代表的な資料は金剛坂遺跡 SX714、川原表 B 遺跡 SB1、小谷赤坂遺跡 SX386、辻子遺跡 SK237 などがある。2期の代表的な資料には六大 B 遺跡 SK3、磐城山遺跡 SH0622、小谷赤坂遺跡 SH388 などがある。八重垣神社遺跡 SR069 は1期から2期にかけての時期幅を持つとみたい。

1期と2期を区分する特徴の一つは、凹線文系の衰退・消滅である。1期にみられる凹線文系の器種のうち、受口状口縁広口壺、椀形高坏 a、無頸壺、袋状口縁壺などは2期にはほとんど残らず、消滅していく。もう一つの特徴は、畿内系の中でも2期から出現もしくは増加する器種が存在することである。細頸壺や長頸壺がそれに該当する。瀬戸内系のくの字状口縁甕 a2 も2期から顕在化する可能性がある。また、高坏については柱状脚が漸減し、有稜高坏 b が増加する傾向を示す。

他地域との併行関係 ここで示した後期前葉1・2期は、有稜高坏の様相などからみて、概ね赤塚次郎が尾張平野低地部で設定した八王子古宮Ⅰ・Ⅱ式〔赤塚 2001〕に対応すると考えられる。ただし、2期と八王子古宮式に後続する山中式の併行関係には不明瞭な部分があり、少なくとも、赤塚次郎が設定した山中Ⅰ式〔赤塚 2001〕の初頭は2期と平行する可能性が高い。八王子古宮式についても、Ⅱ式の時期幅の中で山中Ⅰ式が成立し一時並存したと考えられている。

畿内地域の土器様式との併行関係については、新しく出現した畿内系の器種が手掛かりとなる。畿内系の器種組成や一部の器種の特徴については、大和地域の和次第Ⅴ様式〔藤田 2003〕との類似性が強い。畿内系の器種のほとんどは大和第Ⅴ様式にもみられる。各器種の細かい属性をみても、甕や壺の体部外面のケズリの顕在化は大和第Ⅴ様式でも認められ、また器台の透孔が基本的に円形でなく楕円形や涙滴形を呈する点なども共通するだろう。

したがって、今のところ搬入品の抽出には至らないものの、伊勢地域の後期前葉1・2期は大和第Ⅴ様式と併行関係にあると考えられる。1期から2期へのⅣ様式系器種（凹線文系・櫛描き文系）の消滅や柱状脚の高坏の減少などの変化は、大和第Ⅴ-1様式から第Ⅴ-2様式への変化とも対応することから、概ね1期は大和第Ⅴ-1様式、2期は大和第Ⅴ-2様式に併行すると考えておきたい。ただし、2期は大和第Ⅶ-1様式に若干食い込んでいる可能性も考えられる。

河内地域の土器様式との併行関係についても、搬入品が出土しておらず直接的な接点を見出すことは困難であるが、やはり器種組成や各器種における特徴の共通性から、1・2期は河内第Ⅴ-0・1様式〔寺沢・森井 1989〕と併行する可能性が高い。

また、八重垣神社遺跡 SR069 出土の瀬戸内系のくの字状口縁甕 a2 は、直接的な搬入品ではないと考えられるものの、口縁部を拡張し擬凹線を施す点や、内面のヘラケズリが頸部やや下まで施され

ている点からみて、瀬戸内海沿岸地域の編年においても後期前葉に位置づけられるものと思われる。

c. 小結：伊勢地域における後期のはじまり

伊勢地域の中期後葉から後期前葉への土器様式の変化において、中期を通じて土器様式を主体的に構成していた櫛描き文系、ハケメ文系、沈線文系といった複数の系統の衰滅は、土器様式の構造自体を大きく変化させるものであった。さらに、中期後葉において大きな影響力を持った凹線文系の土器群も衰退の一途を辿り、後期前葉1期の中で消えていく。したがって、中期後葉の土器様式からの連続的な変化によって後期前葉の土器様式が生み出されたのではなく、別に外部からの大きなインパクトの存在を考えねばならない。

こうした点からみると、伊勢地域の後期前葉の土器様式は、主にV群の器種群の伊勢地域への導入によって成立したと考えるのが妥当であろう。在地新出系の器種も、その影響を受けて出現した可能性が高い。V群の主体をなす畿内系の器種は多岐にわたっており、畿内地域のIV様式系に加えて生駒西麓系からの影響を窺わせる要素も含む。したがって、畿内地域における土器様式の変化が波及する中で、器種組成の一部が受容されたとみられる。

さらに、先述の通り畿内系の各器種の属性のいくつかには、畿内地域の中でも特に大和地域との共通性が看取される。現状では、大和地域と伊勢地域の中間に位置する伊賀地域や、大和地域と同じく伊賀地域を介してつながる山城地域南部の後期前葉の土器様式が不明瞭な点に課題が残るものの、伊勢地域の後期前葉の土器様式の成立に際しては大和地域から大きな影響が及んだものと考えておきたい。

一方、他地域からの影響としては、近江系の存在も考慮せねばならない。尾張地域の八王子古宮式の成立には近江湖南地域からの影響が大きく関わっていたと考えられているが、その経由地として伊勢地域が想定されており[矢作・赤塚 2003]、実際に伊勢地域では後期前葉の受口状口縁甕には近江地域からの搬入品と推定されるものが目立つ。しかしながら、後期前葉の近江系の器種は少なく、近江地域と伊勢地域の土器様式は中期から連続的に影響関係を保ち続けていることからみても、後期前葉における土器様式の変革に大きく関与したとは考え難い。

近江地域の土器様式からの影響の受け方は、伊勢地域と尾張地域低地部との間で差異があった可能性もある。伊勢湾沿岸地域の後期前葉の土器様式については、「孤立分散的」といった表現もなされ小地域単位での地域色が強調される傾向があるが[石黒 1987]、地域間で後期前葉の土器様式の成立にかかる地域間交流の様相が異なっていたことも、こうした見解を導く一つの要因と考えられる。(石井)

③……………集落様相からみた弥生時代後期への移行過程

(1) 分析の枠組み

a. 研究史

変化の認識 弥生時代集落研究において、中期と後期とで集落到立地の変化がみられることは、す

でに1940年代の弥生時代研究の開始期には注意されていた〔森本 1943〕。

その後、小野忠熈による高地性集落研究によって、中期から後期への過渡期における集落の立地変化が西日本を中心に日本列島の広い範囲で認められることが明らかにされ、大きな社会の変動が想定されるようになった〔小野 1953・1959〕。小野は、集落の消長や立地変化について検討し、集落の高所立地傾向が著しい時期の一つとして中期末から後期初頭を挙げている。そして、集落が高所に営まれた背景として、社会的な緊張関係など人為的な要因を主要因と考えた。洪水や気温上昇が要因となった可能性も考慮しているが、遺跡における堆積土層の検討や古気候に関する研究成果の参照によって、中期の洪水は一時的なもので継続的な高所居住が不自然なことや、中期は低温期にあたり高温を避けるため高所に生活域を求めたとは考え難いことなどを根拠に、これを退けている。この段階ですでに、現在に至るまでの中期から後期への集落の変化に関する基礎的な研究方法や、想定される変化の要因が出揃っているといえる。

また、吉備地域の事例を検討した近藤義郎は、中期から後期にかけて大きな社会変化を想定したが、短期的な社会変動ではなく、平野部の沖積作用が顕著に進行し、後期の段階で鉄器による土木耕作具の技術革新を伴って平野部の水田における灌漑規模が拡大したと考えた〔近藤 1966〕。沖積平野における地形環境の変化が想定されていることは注目される。

近畿地方における研究の進展 その後、近畿地方を中心とする弥生時代集落の研究の進展、特に高地性集落や環濠集落に対する注目度の向上に伴って、中期から後期への変化の要因として、争乱など社会的緊張を重視する考え方が有力化していく。

一方、こうした動きと前後して、自然科学分析の成果に基づく議論が展開される。瓜生堂遺跡における花粉分析や堆積土層の検討等に基づいた洪水発生論である〔田代・中西 1973〕。これは、中期末～後期における温暖化を要因とした海水面の上昇や大規模洪水の発生により、大阪平野低地部は中期末に水没し、生産域の壊滅や生活域の高所への移動といった現象が生じたとする、刺激的な論であった〔安田 1977〕。さらには、先の争乱要因論を併合し、環境変化による混乱と地域の再編に伴って「倭国乱」が勃発したとする。

寺沢薫は、こうした説を取り入れながら、集落の消長に関する精緻な分析を行い、中期後葉から後期前葉への集落の継続性が乏しいことや、立地が変化することなどを示し、集落動態として中期と後期の間の集落の変化を明確化した〔寺沢 1974〕。こうした研究によって、中期と後期の間の「断絶」が、集落の消長や立地変化から把握されるようになっていった。

これらの研究以降、中期から後期への過渡期における集落の断絶と立地の変化が、弥生時代集落研究の中の大きな問題としてクローズアップされていく。そして、その背景に大きな社会変化が想定され、その要因として環境変化と争乱など社会的緊張の二者を想定する流れが有力化していく。ただし、環境変化と社会的緊張のどちらを重視するかは研究者によって差があり、どちらかといえれば社会的緊張を重視する傾向が強まっていったように思われる〔岸本 1995, 森岡 1996 など〕。

その背景には、堆積環境の研究が進むにつれて、大阪平野低地部が水没するような大規模水害の発生に否定的な見解が有力化し、中期後葉から後期前半にかけて小規模洪水が頻発するような状況であったとされるようになってきたことで〔那須 1989〕、大規模かつ短期的な環境変化を想定しにくくなったことがある。そしてまた、人間社会の変化を自然的要因へと帰する環境決定論的な考え

方への反発や、自然科学的な分析に依拠するところが大きい環境変化よりも社会的緊張の方が考古学的に検討しやすいこともあっただろう。

しかしながら、1980年代以降、考古学でも国家形成に関する研究が活発化する中で、国家形成過程における戦い・戦争の位置づけに研究上の関心が集まったことが、弥生時代集落研究にも影響を及ぼしたことが大きな要因であったとみられる。特に近畿地方においては、「倭国乱」との関係が注視されたことから窺えるように、弥生時代後期における社会変化は、その後の古墳の築造に特徴づけられる古墳時代社会へと至る過程に関する議論と不可分の問題であった。

構造変化・多元要因論 しかしながら、暦年代に関する研究が進む中で、「倭国乱」の勃発時期と中期・後期移行期の年代観にずれがあることが明確になると、大規模争乱との直接的関係という視点は後退する。

近畿地方では、中期から後期への集落動態の広域的な検討が行われるなど当該期の社会変化についての関心は維持されるが[第45回埋蔵文化財研究会実行委員会1999]、集落動態に中期から後期への画期が看取しにくい地域があるなど地域差の存在も指摘されるようになり、当該期の社会変化の急進性・広域性に対する評価は揺らぎをみせる。そして、中期から後期への社会変化に関する議論は、石器から鉄器への転換による物流構造など集団間関係の変化や、争いの主要因としての鉄流通の問題など、多様な社会的背景を絡めたものとなっていく、中期から後期への社会変化を単一の要因へと帰すのではなく、複合的要因を考慮する傾向が強まる。それに伴い、社会変化の主要因を探ろうとする姿勢は弱まっていく。

こうした動向の中、弥生・古墳時代研究において、集団間の関係や紐帯に関する研究への関心が高まったことも一つの背景として、弥生時代集落研究では集落構造自体の変化を墓域や生産域も視野に入れながら詳細に分析し、物流や集団関係の変化など、社会構造の変化として中期から後期への変化を具体化しようとする動向が顕在化した。

若林邦彦は、集落の動態から想定されていたほど中期から後期にかけての集団関係の急激な変化は見出しがたいとし、近畿地方の大規模集落の縮小・消滅の背景を、親族集団間の利害調整機能の拡大に求める。そして、中期から後期への社会変化の背景に、政治的変動や突発的な自然要因など特別な短期的要因を想定する必要はないとした[若林1999a]。

他地域の集落研究においても、中期から後期への過渡期における集落立地・構造の変化は指摘されつつも、その要因を争乱・環境変化など特定の要因に帰さず、より複合的な要因の帰結であること、大陸との交流の動向に影響を受けた集団関係の変化として把握する研究がなされている[小沢2000、溝口2001]。

環境変化に対する再注目 ただ、近年の弥生時代中期から後期への集落動態や社会変化に関する研究は、再びその要因として環境変化を重視する方向へと向かいつつあるように思われる。

その背景には、花粉分析など自然科学分野における古気候研究の進展によって、中期後葉から後期前葉に相当する時期に寒冷化や多雨化があったことを裏付けるような事象が多く確認されるようになってきたことや[金原1998・2011]、C14年代測定の精度の向上と測定データの蓄積により、過去の特定の気候イベントや長期的・短期的な気候変動傾向と、歴史的事象を対比させる試みが盛んに行われるようになったことがある。中でも、木材年輪セルロース酸素同位体比を用いた年間降

水量の変化に関する研究成果による影響は大きい。

また、発掘調査に際して堆積環境に関するデータの収集が盛んに行われるようになり、一定の情報が蓄積され、それを利用する研究が進展したことも大きな要因である。近畿地方の弥生時代研究においては、大庭重信による大阪平野をフィールドとした研究がその最たるものといえる。大庭は、発掘調査等によって蓄積された微地形や堆積環境に関するデータを活用した集落動態論を展開し、平野内における詳細な集落および生産域の立地・移動の様相と、堆積環境の変化を重ね合わせて把握した〔大庭 2014〕。

近畿地方以外でも、九州地方や中国・四国地方などでは、海浜部で見られる「クロスナ」の堆積や砂丘形成状況から、弥生時代集落の消長・立地変化と気候変動との関係が指摘されてきている〔甲元編 2007, 愛媛大学考古学研究室 2016〕。そうした研究の中では、中期後葉における寒冷化と砂丘形成の活発化によって海浜部への定着的な居住が困難になり、集落が高所へ移動したとの考えも示されるなど、環境変化と中期から後期にかけての集落立地の変化の関係が積極的に評価されている〔村上 2016〕。

こうした研究は、以前の洪水発生論などのように急激な環境変化が集落に短期的・直接的な影響を及ぼすことによって社会が変化したのではなく、ある程度の時間幅を有した気候変動が生業など集落維持活動や集団間関係への間接的な打撃となって社会の変化が引き起こされたものとみている点で、新たな環境変化要因論といえるだろう。

b. 集落の検討における方向性

研究史を概観すると、近畿地方では中期から後期への移行期に大きな社会変動が存在し、それは広範に及ぶものであったという認識は、ほぼ定着していると思われる。そして、その要因の追求と古墳時代開始を射程に入れた社会変遷像の解明という2点が主要な課題とされてきたが、現在は、気候変動など環境変化に関する研究の進展に刺激される形で、その2点が複合的に議論されるようになってきている。

集落動態に関する検討 ただ、根本に立ち返れば、社会変動の存在の認識自体は集落の消長や立地変化など集落動態に関する検討に、ほぼ全面的に依拠している。中期から後期への移行期における集落動態の画期の存在を前提に、環濠集落の解体や高地性集落の盛衰、土器様式の変化、石器の消滅や鉄器の普及、そして環境変化などに関する議論が重ねあわされてきた。したがって、集落動態における画期をどのように把握するのが、中期から後期への移行期における社会変遷の有無やその性格についての考察を左右するといえるだろう。

集落動態の検討では、具体的な作業としては旧国や一つの平野ないし河川流域程度の地理的範囲を対象として行われることが多いが、各地域で認められる画期を広範な社会変遷として歴史的に評価するためには、各地域の集落動態の比較検討によって変化を面的に捉え、それらの連動性について考察することが必要となる。その点において注意すべきは、集落動態における中期から後期への画期に地域差を認めうる点である。これまでの研究では、中期から後期への社会変遷の存在が前提化され、それに対する追究が重視される中で、こうした地域差は個別事象として捨棄される傾向があった。しかしながら、そこには集落動態の画期の認識・把握に大きく関わる問題が内包されてい

る。

近畿地方でこれまでに行われた中期から後期にかけての集落動態の広域にわたる比較検討では[第45回埋蔵文化財研究集会実行委員会1999, 古代学研究会2016], 地域間の比較に際して土器様式による時期区分に関する問題に積極的に踏み込むことがなかった。そのため, 地域や論者によっては後期の土器様式を大きく前半・後半に区分し, それに基づく2期区分によって集落動態が検討されている場合も多い。しかしながら, 後期を前葉・中葉・後葉の3期に区分してみた場合, 後期中葉に集落が沖積平野内で増加する傾向をみせる地域があることも鑑みれば, 2期区分ではそうした傾向の一部が中期から後期への変化の中に取り込まれてしまい, 本来の変化の様相を捉えきれない可能性もある。

つまり, 地域差として認識されたものが, 本来的な集落動態の違いであるのか, 時期区分の差異に起因するみかけ上のものであるのか, 現状では明確になっていないのである。集落動態に地域差が存在するならば, その追求は社会変化の実態や要因に関して考察するための一つの手段ともなりうるが, まず各地域で後期を3期区分して集落動態を検討し, その比較検討によって地域間の集落動態の共通性や差異を明確化することが, 中期から後期への社会変化を考えるための基礎作業として必須であろう。

集落の立地変化に関する検討 こうした3期区分に基づく作業は, 多くの地域で確認されており, 後期における重要な変化として注目されてきた集落の高所立地傾向について, 集落が高所へ移動する過程をより詳細に把握することを可能にするだろう。

一方で, これまでの中期から後期への変化を対象とした研究では, 集落の高所への移動に視点が偏りがちで, 低地も含めた地域全体における人間活動の変化という視点に乏しかったことは否めない。特に, 後期前葉に集落の存在が希薄化するとされてきた低地における人間活動の様相は十分に把握されているとはいえない。そのため, 環境変化の要因として想定されることが多い低地における洪水等の自然災害の発生や, その人間活動への影響についても, 具体的な資料に基づいて広域的に明確化されている状況ではない。

しかしながら, 地域における社会の変化を具体化していくためには, 高所への居住傾向という面だけでなく, 地域全体における人間活動の様相やその変化について目を配る必要があるだろう。後期前葉における人間活動の痕跡を, 高所・低地に関わらず地域内において総合的に把握する必要がある。さらに, ひと口に集落の高所立地傾向といっても, いわゆる高地性集落のような平地との比高差の大きい地点以外に, 低地内の相対的な高所における立地も想定される。したがって相対的低地から前者への移動を「高地移動」, 後者への移動を「低地内移動」と呼び分けるような対応が必要だろう。「高地移動」は, 山地, 丘陵および段丘の比較的高位の部分などへの移動, 「低地内移動」は, 三角州, 沖積平野, 扇状地および段丘の比較的低位の部分などへの移動をさすが, 具体的な判断は, 地理的条件および集落動態を鑑みながら地域ごとに行うことが望ましいと思われる。

集落に関する検討の方向性 以上の点を踏まえ, 本共同研究では近畿地方における弥生時代中期から後期にかけての集落動態の詳細化を一つの検討の核とする。

対象地域としては摂津・河内・和泉・大和・紀伊の5地域とするが, 集落動態の広域連動性の明確化を射程に入れ, 紀伊半島東部の伊勢地域も加える。併せて行う土器に関する検討の中で提示す

る編年に基づいて、各地域とも後期を前葉・中葉・後葉の3期に区分し、中期から後期への過渡期における集落数や建物数、集落規模、集落立地などの変化の様相や、各地域における集落動態の異なる詳細な把握を試みる。

低地部における人間活動やその変化、土地利用などについては、本来ならば大庭重信が大阪平野で行ったような微地形を踏まえた精緻な検討を行うことが望ましいが [大庭 2014]、それには埋没微地形に関する詳細なデータの蓄積が必要で、現状では多くの地域で実践可能なものではない。そこで、それに代えて当該地域における後期前葉の遺跡を集成し、その際に遺物のみが出土した遺跡も集成対象とすることによって、低地部も含めた地域全体の人間活動の様相を総合的に把握していく。

また、後期前葉の遺構・遺物出土遺跡の集成に際して、低地部における後期前葉の遺構面の基盤層や遺構の埋土・覆土の堆積状況などについても情報を収集する。大阪平野では中期から後期への過渡期に低地部の生産域に河川氾濫等による影響があり、それが集落の移動とも関係することが示されているが [大庭 2014]、こうした生産域への自然災害による影響については、大阪平野以外の地域では十分な検討に足る調査事例が少ないこともあって、検討が進んでいない。そしてまた、こうした自然災害が集落域に直接及ぼした影響の有無や規模、頻度についても、決して明らかにされているとはいえないだろう。大阪平野などでは、大規模な河川氾濫等による集落への壊滅的なダメージを想定する説は払拭されつつあるとはいえ、各地において、低地部やその周辺の微高地に位置する集落で実際にどの程度の自然災害の影響があったのか、具体的な状況を把握しておく必要はあると思われる。

そこで、今回の検討では、一つの試みとして、収集した基盤層や遺構埋土・覆土に関する情報を基に遺構形成から埋没に至る堆積環境を復元し、自然災害など環境変化の具体相や、集落の選地や変遷にかかる影響を読み取ることの可能性について模索してみたい。

なお、集落等の立地について複数地域における比較検討を行うためには何らかの統一的な地形区分の基準が必要であるが、今回は比較的広汎に整備されている国土地理院による土地条件図による地形区分を用いる。土地条件図が整備されていない地域もあるが、そうした場合には都道府県土地分類基本調査のデータ等の代替資料を参照する。

以上のような検討を基礎として、それに各地域における後期後葉の代表的な集落の構造に関する情報等を加味し、近畿地方南部の弥生時代中期から後期への社会変化の、より詳細かつ具体的な内容を明らかにする。そして、土器様式の変化から窺われる集団間関係や社会の変化との総合を図り、当該期に想定されてきた「社会変化」の具体像について考察することとしたい。(石井)

(2) 河内地域

a. 中期から後期への集落の動態

対象と方法 河内地域における弥生時代集落は膨大であるため、ここでは、対象を中河内地域に限定して集落動態について集成表に基づき概観することとしたい。本来、この分析は、各時期の集落の悉皆的検討に基づいてなされるべきものであるが、筆者の力量にかんがみ、さしあたり集成作業は後期前葉を中心として進め、その前後のデータについては、三好孝一によって1999年に示された成果 [三好 1999] により補うこととした。後者は、約20年前になされたものであり、現在まで

に多くの類例が加えられているはずであるが、後述するような後期前葉の特徴を窺う上では、意義があると考え次第である。

全体的動向 表6・7のとおり、中河内地域の遺跡数は、中期後葉から後期前葉にかけて減少した後、後期中葉に倍増し、後期後葉にもその規模を継続する。また、これに先立つ動向として、中期後葉前半から中期後葉後半にかけて、総遺跡数はあまり変わらないものの、明瞭な遺構が検出された遺跡が減少している点には注意が必要である。弥生中期における遺跡数のピークは、中期後葉の前半にあり、後期前葉に先立つ中期後葉後半にはやや減少傾向に転じている可能性があるということになる。

なお、当該地域のこれまでの集落動態の分析 [三好 1999, 大庭 2014 など] では、弥生後葉が前半・後半の2期区分とされて本稿でいうところの後期中葉の様相が“後期前半”に含められたため、後期前葉の集落の減少は明瞭には捉えられていなかった。今回の分析の条件上の制約を考えれば、事態は実際にはさらに劇的であった可能性があるものであり、古墳時代に向かう社会の展開を考察するうえでの前提条件の修正を促すものとして強調しておきたい。

エリア別の動態 次に、生時代中期の集落分析の研究史 [酒井 1984] において重要視されてきた直径5kmを目安に当該地域をエリアA～Gに区分し、それぞれの動態について概観してみよう (図21)。

Aは、河内湖東岸に位置し、鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡を中心とする。鬼虎川遺跡は、前期以来の拠点集落で、銅鐸をはじめとする青銅器の鑄造も行われているが、中期後葉後半には、退潮がみとれ、より標高の高い西ノ辻遺跡に中心が移動する。後期以降もこの傾向が続くが、後期前葉には両遺跡ともに顕著な遺構は確認できない。

Bは、Aの南側に位置する生駒山西麓のエリアである。中期後葉の遺跡は多くないが、池島・福万寺遺跡では、大規模な水田が検出されている。また、丘陵上に高地性集落として山畑遺跡が営まれる。後期前葉にも遺跡は少ないが、高地性集落である岩滝山遺跡が営まれ、後期中葉へ継続する。池島・福万寺遺跡では水田が断絶ないし縮小化し、近隣の大竹西遺跡に中心を移す [井上 2017]。後期中葉になると、一挙に遺跡数が増加するほか、池島・福万寺遺跡においてふたたび大規模な水田が営まれる。

Cは、Bの南側に位置する生駒山西麓のエリアで、恩智遺跡を中心とする。高地性集落である高尾山遺跡をはじめ、中期後葉に比較的多くの遺跡が営まれたが、後期前葉には、現状では遺跡が認められない。その後、後期中葉に遺跡数が一挙に増加する。

Dは、河内湖南岸に位置するエリアである。中期後葉には広範囲に遺跡が広がっていたが、中期後葉後半に巨摩～若江北遺跡の範囲に中心が絞り込まれ、後期前葉にもその傾向が継続する。後期前葉の瓜生堂遺跡では、配石遺構が検出されており、近隣に護岸施設が所在した可能性がある。また、瓜生堂遺跡および巨摩遺跡では、多数の讃岐産土器が出土している。

Eは、Dの南に位置するエリアである。中期後葉を通じて、多数の集落が営まれるが、後期前葉の安定した居住域は、亀井遺跡を中心とした領域に集約される。後期中葉から、遺跡が一挙に増加するのは、他のエリアと同様の動向である。

Fは、Eの東側に位置するエリアである。中期後葉には、多数の遺跡が営まれるが、後期前葉には、小阪合遺跡で方形周溝墓、中田遺跡で包含層が検出されたにとどまっている。

表6 集落動態（中河内地域）（1）

地域区分	遺跡名	立地	標高(m)	中期後葉(前半)	中期後葉(後半)	後期前葉	後期中葉	後期後葉	遺構・遺物 (後期前葉の主なもの)
A	鬼虎川	三角州性低地	2						
A	西ノ辻	扇状地性低地	5						
A	鬼塚	扇状地性低地	15						
A	芝ヶ丘	段丘(中・低位)	15						溝
A	皿池	扇状地性低地	20						
B	山畑	中起伏山地	70						
B	縄手	扇状地性低地	15						
B	段上	扇状地性低地	15						
B	上六万寺	扇状地性低地	15						
B	岩滝山	中起伏山地	80						竪穴建物
B	貝花	段丘(中・低位)	20						
B	馬場川	段丘(中・低位)	20						
B	楽音寺	段丘(中・低位)	15						
B	花岡山	中起伏山地	80						
B	池島・福万寺	扇状地性低地	3						
B	大竹西	扇状地性低地	3						灌漑施設
B	太田川	扇状地性低地	15						
B	水越	扇状地性低地	15						
B	郡川	扇状地性低地	20						
B	教興寺	扇状地性低地	25						
C	恩智	扇状地性低地	15						
C	神宮寺	段丘(中・低位)	25						
C	高尾山高地性	中起伏山地	270						
C	大泉	扇状地性低地	20						
C	安堂	扇状地性低地	16						
D	宮ノ下	三角州性低地	1						
D	新家	三角州性低地	-2						
D	稲葉	三角州性低地	0						
D	西岩田	三角州性低地	-1.5						
D	瓜生堂	三角州性低地	0						配石遺構、讃岐産土器
D	巨摩	三角州性低地	0						方形周溝墓、貨泉、讃岐産土器
D	上小阪	三角州性低地	-1						土坑、柱穴
D	山賀	扇状地性低地	1						溝
D	新上小阪	扇状地性低地	2.5						土坑、溝
D	若江北	扇状地性低地	0						竪穴建物、溝、柱穴
D	若江	扇状地性低地	1						
D	友井東	扇状地性低地	1.5						
D	萱振	扇状地性低地	5						
D	西郡廃寺下層	自然堤防	5						
D	美園	扇状地性低地	2.5						

Gは、河内台地の北・西端から旧西除川沖積地に位置するエリアである。中期後葉には、瓜破遺跡、瓜破北遺跡において、集落が営まれるが、後期前葉の集落様相は不明瞭となる。その後、後期中葉以降、小規模な居住域が多数散在する状況となる。

小 結 中河内地域において、後期前葉が遺跡数の激減する大きな変革期であることは先述のとおりであり、多くのエリアで断絶が認められる。その一方で、エリアDおよびEについては、比較的大きな規模を維持しており、大型集落が広範囲に一定の間隔をもって多数分布した中期に対して、集落の著しい偏在性とエリア間の格差を特色として指摘できるであろう。また、資料が激減することは間違いないが、それでも畿内の他地域と比較すれば、遺構・遺物ともに相対的に多く所在することが特筆される。

表7 集落動態（中河内地域）（2）

地域区分	遺跡名	立地	標高(m)	中期後葉(前半)	中期後葉(後半)	後期前葉	後期中葉	後期後葉	遺構・遺物 (後期前葉の主なもの)
E	佐堂	自然堤防	3.5						
E	久宝寺	扇状地性低地	4.5						竪穴建物、水田、讃岐産土器
E	加美	扇状地性低地	6						
E	亀井北	扇状地性低地	4.3						
E	亀井	扇状地性低地	6						土坑、柱穴、溝、貨泉、石製権、讃岐産土器
E	竹濶	扇状地性低地	6						
E	城山	扇状地性低地	6.5						粘土採掘坑
E	跡部	自然堤防	4.5						
E	太子堂	自然堤防	10						
E	喜連東	自然堤防	8						方形周溝墓
E	長原	扇状地性低地	8						
E	八尾南	扇状地性低地	10						
E	木の本	扇状地性低地	7						
E	植松	扇状地性低地	10						
E	植松南	扇状地性低地	10						
F	東郷	扇状地性低地	5						
F	成法寺	扇状地性低地	10						
F	小阪合	扇状地性低地	10						方形周溝墓
F	矢作	扇状地性低地	10						
F	中田	扇状地性低地	8						
F	東弓削	扇状地性低地	10						
F	志紀	扇状地性低地	7.5						
F	田井中	扇状地性低地	8.5						
F	弓削	扇状地性低地	15						
F	本郷	扇状地性低地	12						
G	瓜破	段丘(中・低位)	6						貨泉
G	瓜破北	扇状地性低地	6						
G	照ヶ丘矢田	自然堤防	5						土坑、溝
遺跡数				35	32	20	47	48	
遺構あり				24	15	14	19	22	
包含層				11	17	6	28	26	

※濃いトーン：明確な遺構を検出 薄いトーン：流路埋土や包含層等から遺物が出土

b. 遺跡の立地変化と堆積環境

立地変化 遺跡所在地を中起伏山地、段丘(中・低位)、扇状地性低地、三角州性低地、自然堤防に区分し、時期ごとの推移を整理したものが図22である。扇状地性低地が最も多く、これに三角州性低地および自然堤防を加えたいわゆる沖積地が大勢を占めるといふ大勢は変わらないものの、中期後葉後半から段丘上の遺跡が加わり、後期中葉～後葉に増加をみせる。とはいえ、その割合は全体における約1割程度であり、弥生中後期を通じた低地集落の卓越と後述する「低地内移動」による高所立地化が本地域の特色である。先行研究においても、弥生中期末の河内湖の水位上昇により、湖岸に立地する集落の水没や湿地化が生じたことが指摘されているほか、後期前葉に平野南部において河川氾濫が活発化したことが明らかにされている[松田 2008, 大庭 2014, 井上 2020 など]。以下では、エリアごとの様相を堆積環境とともに確認しておきたい。

堆積環境 エリア A の鬼虎川遺跡における古環境の分析によれば、弥生中期前葉の軽微な冷涼化により、基準水位が低下したことによって水田耕作に適した環境へ変化したが、中期後葉以降、湿潤と乾燥を繰り返す不安定な環境へと変化し、後期以降は水田も営みにくい状況にあったとされている[金原・金原 1997]。集落動態としても、中期前葉から中期後葉、後期と段階的に標高の高い東側(西ノ辻遺跡)へと居住域が移動する様子が確認できる[秋山・大木 2010]。

エリア B の池島・福万寺遺跡では、中期末から後期初頭にかけて、流路の大規模化や新たな流

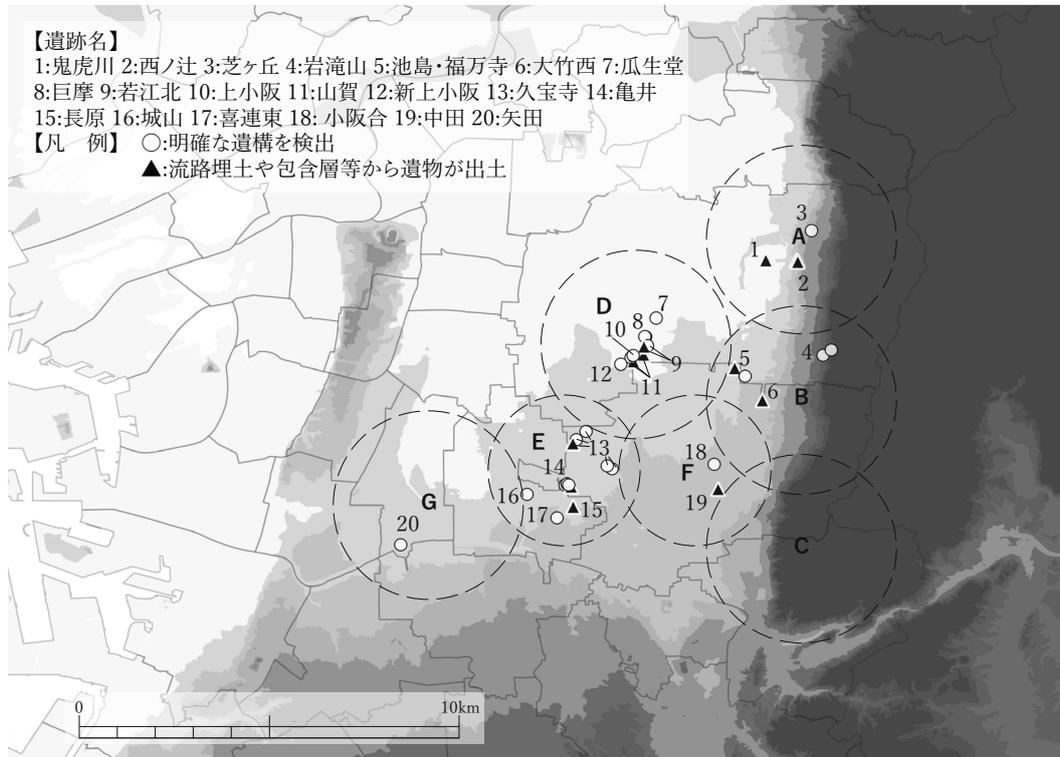


図21 中河内地域の後期前葉遺跡分布図

路の形成が生じ、耕作地としての環境が不安定化し、人間活動は不明瞭となる。そして、これと入れ替わるように隣接する大竹西遺跡において、大規模な水田構成が形成されるという〔井上 2017〕。その後、後期中葉からは、再度池島・福万寺遺跡においてきわめて大規模かつ重層的灌漑体系を持つ水田が経営される。

エリアDの瓜生堂遺跡の北東部にあたる大阪府文化財センター99・01年度調査区は、中期後葉には、北に河内湖岸が接する位置にあり、微高地上に集落と墓域が形成されるが、集落形成時に水位が上昇し、盛土（最大厚40cm）による遺構面の嵩上げにより、これに対処した可能性が指摘されている。その後、後期前葉には植物遺体を多量に含んだ土壌化層が全体を覆うことから湿地化したものと思われ、遺構は微高地上の集石遺構が主なものとなる。さらに後期後葉には、滞水～乾燥を繰り返す環境に変化したとされている。一方、瓜生堂遺跡からやや内陸側に位置する若江北遺跡では、中期中葉に後背低地として水田が営まれた後、河川堆積によって埋没。中期末から後期初頭に微高地化し、居住域として土壌化を繰り返したが、後期後半には、再び後背湿地化し、部分的に形成された微高地上が墓域として利用された。

エリアEの長原遺跡および加美遺跡では、長年にわたる発掘調査の蓄積により、標準層序・基本層序が設定されており〔小倉・趙 2001, 趙 2003〕、両者の対比により広域的な古地形の復元が可能となっている。この成果と遺構の分布状況の関係性を総合した大庭重信の検討により、次のような景観と土地利用の変遷が復元されている。すなわち、NG8B層上面において中期中葉～後期前葉の遺構が形成された後、北部の久宝寺リッジ周辺において、後期前葉に生じた河川氾濫による堆積

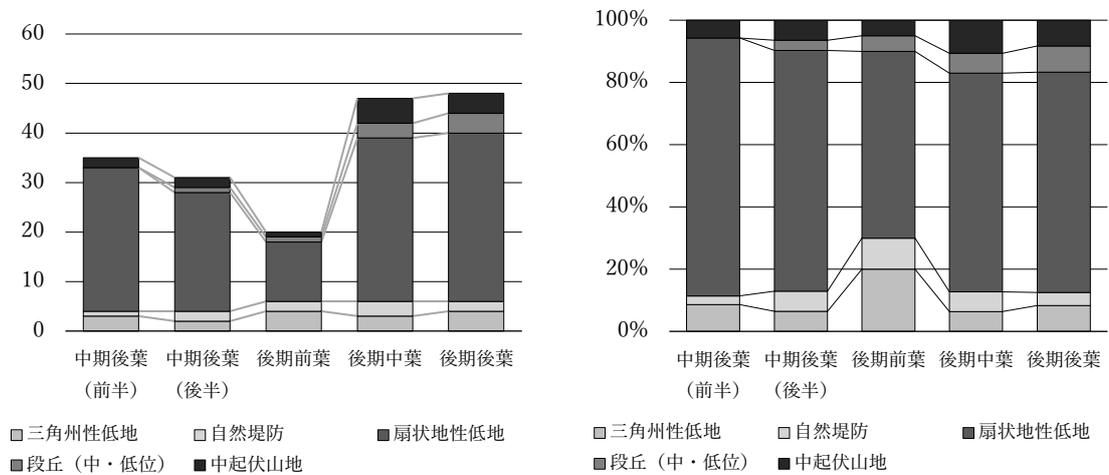


図 22 集落立地の推移

層 (KM7B 層) が厚く堆積し、前時期の水田や墓を覆う。この堆積の影響により、周辺に位置するリッジ間の低地も後背湿地化した。こうした環境の悪化を受けて後期中葉の居住域は、長原遺跡、八尾南遺跡など本エリアの南側の相対的高地へとその中心を移す。さらに後期後葉にも北部では、引き続き河川氾濫が頻発し、KM6B 層の堆積がリッジ間の窪地を埋めつつ、側方へと広がる。また、南部でも河川氾濫が生じ、八尾南遺跡の居住域・水田が埋没するが、新たに形成された微高地は、ふたたび人間活動の舞台となったという [大庭 2014]。

他方、このエリアの中央に位置する亀井遺跡では、前期から後期後葉まで継続的に遺構が形成されたことが知られているが、その堆積をみると、この期間を通じて土壌化した粘質土の形成が継続しており、安定した微高地であり続けたことが理解できる。

小 結 上記した事例から、大きく 1) 河内湖の水位の上昇ないし低地の環境悪化 (鬼虎川、瓜生堂)、2) 河川氾濫に伴う微高地と湿地の関係性の変化 (池島・福万寺、若江北、久宝寺) という 2 種類の動向の存在をみてとることができる。このうち、1) については、中期後葉から始まった可能性が高く、当該期から顕著となる降水量の増加との関連性が指摘される現象である [井上 2020]。もう一方の 2) も同様の環境変化と関連するものと考えられており [井上前掲]、集落の移動を惹き起こした。しかしながら、ここで注目すべきは、これらの現象によって、低地の全体が居住不適地化するような事態は考えにくく、いずれの現象も居住域が近隣の相対的高地へと移動する「低地内移動」による対処がなされたと考えられる点である。また、このような大きな変動の一方で、安定した環境に立地する亀井遺跡が規模を維持している事実は、当該期の集落動態の要因としての環境変化の影響を逆の側面から示唆するものであるといえよう。

c. 集落構造及び社会の変化

集落の動態と規模 これまで見てきた通り、後期前葉は河内地域における大きな変動の時期である。先述の遺跡数の推移にもとづき、改めて集落動態について整理してみると、前時期からの継続 12 例、断絶 20 例、新規出現 8 例を数え、前後の時期と比較して断絶の割合が圧倒的に大きいことがわかる。

この動向は、河内湖の水位上昇及び河川氾濫の頻発により、多くの集落が移動ないし廃絶を余儀なくされたことを反映したものと考えられる。集落の移動は、当該期に近畿地方で広く認められる高所立地化の傾向に包含されるものであるが、基本的にその目的地は、隔絶した高地ではなく、低地内の標高の高い地点に留まるものであった。このような活発な「低地内移動」は、近隣地域と異なる河内地域の特徴を示すものである。これに対し、高地性集落出現の画期は、すでに中期後葉に認められ、瀬戸内地域における動向と連動するものと考えられる。

このような移動・廃絶により、集落数が著しく減少するとともに、個々の遺跡で検出される遺構・遺物の量も極端に少なくなる。このことから、わずかに認められる集落もその大半が小規模化している可能性が高い。一方で、亀井遺跡や瓜生堂遺跡に後続する若江北遺跡など、ごく少数ながら大規模な集落もあり、大小二極に分化した状態として理解することができる。

集落構造 次に、個々の集落の構造を論じるうえでは、若林邦彦が提唱した基礎集団／複合型集落という分析枠組みが重要な論点となる〔若林 2001〕。当該地域の旧地形復元に基づき、詳細な集落分析を行った大庭重信は、基礎集団の認定については消極的であるものの、中期中葉・後葉の大規模な居住域の中に、墓域や水田を異にする複数の集団が存在する可能性を認めている〔大庭 2014: p.57〕。そして、そのような様相が中期後葉後半に大きく変化すると指摘している点に注目しておきたい。すなわち、この時期、各集落の生産域が拡大し、互いに接しあうようになるのと同時に、集落の領域を明示するような大型方形周溝墓の築造（加美 Y1・2号墓、長原 SX01・02）や居住域を区画する大溝の掘削（亀井、跡部、長原）といった集落全体としての領域意識や統合意識の高まりが看取できるという。後期前葉においても、先述の二極化した集落様相の下で、大規模な集落、なかでも大溝が維持される亀井遺跡については、このような中期後葉の傾向が引き続き継続したとみることができる。

集住化と集団組織原理 さらに大庭は、これに先立つ変化として、前期・中期前葉の小規模分散した集落様相から、中期中葉・後葉にかけて集住化が進行したこと、およびその背景に労働力の集約化による耕地開発の進展が存在した可能性を指摘している〔大庭 2014, p.63〕。今回の動態表は、行政区分上の遺跡の範囲を単位としたため、居住域レベルの分析により、中河内地域全体においてこれを跡付けることは難しいが、中期後葉前半から後半への遺構検出遺跡数の減少は集住化傾向を反映したものである可能性があり、集落不在のエリアも現れる後期前葉は、この傾向のさらなる進行を示す可能性がある。

一方、複合型集落については、その具体的な人間関係として、溝口孝司によって、これをクランの分節のような血縁原理に基づく集団が複数集合したもの（いわゆるキーキングのタイプ4）とみる理解が提案されているところである〔溝口 2006, 若林 2008〕。ここでは、この仮説を踏襲しつつ、中期後葉後半にみられる統合強化の傾向について、集団組織原理の変化という観点からさらに次のような推論を加えておきたい。すなわち、集落の一体性の強化から想定されるのは、複数の集団間の血縁的差異を越えた、同一集落に居住する事実を紐帯とした協業・統合であり、それを可能にするものとして、血縁原理と対置しうる集団組織原理、すなわち地縁原理の強化を想定すべきではないだろうか。なお、2000年代以降の研究史では、弥生時代において、在地首長制論および新進化主義的な意味での首長の存在および首長による経済的コントロール等が否定され、これに代わるも

のとして血縁原理が重視されることが多くなっているが、地縁原理は、これと対をなす普遍的原理として想定しうるものであり、首長の存在の否定とも矛盾しない。

人口減少の可能性 上記のような形で集住化が考えられる一方で、亀井遺跡や若江北遺跡においても、中期の大型集落を越えるような規模へと発展するわけではないこと、そして地域全体において大勢を占めるのは遺構・遺物の量が顕著な減少を見せる遺跡であるという事実は看過できない。このことは、この現象を集住化のみによって説明することが困難であることを示しているのであり、後期前葉の土器が前節でみたような型式学的推移を示し、相応の時間幅をもつと考えられることをふまえば、ここで認められる遺跡数の減少は、当該期における人口減少を根本的な要因としたものと理解することが妥当であろう。

後期中葉以降の変化と集団構造 一方、後期中葉～後葉には、遺跡数の増加と居住域の小型化が認められ、各エリアにおいて小規模な居住域が多数散在する様相を呈するようになる。その理由が問題となるが、大庭はこれを「地形単位ごとに分散して耕地開発を進める、より効率的な土地利用が志向されたこと」によるものとみる [大庭 2014 : p.63]。さらに、居住域相互の関係性に関わる動向として、「この時期（後期後半）に分散した複数の居住域が一つの水田域を営む形態、すなわち耕地を介した地縁的な集落の結合形態が出現し、古墳時代以降に引き継がれる」という [大庭 2016b : p.58]。

たしかに後期の水田は、重層化した構成を特色とし、その背景には中期よりも複雑化した労働編成およびその統括者の存在が想定されているところであり [大庭 2013]、居住域の小規模分散化が単純に集団 / 社会関係の分解を示すとは考え難いであろう。耕地経営は、特定の土地に水を引き、耕起する仕事であり、これを大規模・体系的に運用するためには、ともにその土地を耕す集団相互の連帯が重要となることは理解しやすい。先述の中期後葉から後期前葉の解釈の延長線上で考えるならば、さらなる地縁原理の強化により、耕地共有を軸とした効率的な居住形態が可能となった可能性を考えるべきではないだろうか。この様相は庄内式期を経て古墳時代前半期においても基調となっており、古墳時代へ向かう様相変化のはじまりとしてきわめて重要な意味を持つ。

このようなことを踏まえ、本稿では、弥生中期後半から後期前葉にかけて顕著な人口減少と、それを背景とした集団組織原理における地縁原理の強化が生じ、居住形態や生業形態、さらには権力のあり方等に大きな変化をもたらしていったと考えておきたい。

集落分布と相互の関係性 次に、マクロにみた場合の、中河内地域における集落分布の構造的特徴についてみておこう。既にみたように、後期前葉には、各エリアにおいて集落が1～2か所に集約される。これに加え、そのような各エリアの集落において特徴的な遺構・遺物が検出されていることにも注目しておきたい。具体的には、河内湖岸の瓜生堂遺跡における集石施設、生駒西麓の岩滝山遺跡の高地性集落、瓜生堂、久宝寺、亀井遺跡における多数の讃岐系土器、大規模集落を維持する亀井遺跡の石製権おもりなどが挙げられる。

讃岐系土器として認識されているものは、高松平野に特徴的な香東川下流域産と考えられるものであり、その器種は壺、甕、高坏、鉢など幅広く、かつ両地域の間地点の資料はごくわずかである。このことから、直線距離にして約140 km離れた遠隔地との直接交流を示すものと考えられている [濱田 2009]。亀井遺跡の石製権については、時期を特定しにくい、型式の組み合わせから後

期前葉に位置づけられる可能性が示唆されている資料であり〔中尾 2018〕、本遺跡において、厳密な重量の把握を必要とするような交易あるいは手工業生産がなされたことを示している。瓜生堂遺跡の集石施設については、多数の杭と石材が二次堆積したものであり、解釈は難しいが、河川の末端に位置することから灌漑施設というよりは、湖岸に設けられた船着き場的な機能を想定しておくのが妥当ではないかと考えられる。岩滝山遺跡からは、大阪湾から河内湖およびその南に広がる平野が一望でき、瀬戸内海を通じた海上交易ルートの末端を監視するのにふさわしい立地である。

このように考えてみれば、当該期中河内のエリア間において、交易を軸とした広域連携がなされた可能性がおぼろげながら浮かび上がってくるのではないだろうか。それはすなわち港湾、交易（ないし手工業）センター、監視といった各種の機能を地域内で分け持つ状態を想定するということである。

集落からみた弥生後期のはじまり 以上で述べてきたことをまとめれば次のようになる。中河内地域において、弥生後期前葉には多くの集落の移動（低地内移動）・廃絶と顕著な人口減少が生じ、中期後葉から進行していた集住化傾向もその極致に達した。それは、中期後葉から生じた環境変化（降雨量の増加）を背景としたものであり、集団組織原理の変化（地縁の強化）が促進された可能性がある。残存したわずかな集落は、遠距離交易を軸として相互に連携し、中河内地域は近畿地方の西方との交易の窓口として機能した。その後、後期中葉には、集団組織原理の変化がいっそう進行し、地縁原理で結びついた多数の小規模集落が散在する、古墳時代へと続く集落景観が一般的となっていく。（三好）

(3) 和泉地域

a. 中期から後期への集落の動態

対象と方法 和泉地域の弥生集落については、大型集落である四ツ池遺跡及び池上曾根遺跡を中心に近畿地方でもいち早く注目され、研究が積み重ねられてきた〔石神 1977, 石部 1977, 乾 1996, 秋山・小林 1998, 秋山 2007, 樋口 1998 など〕。地域全体の動態を整理したものとして、下田遺跡の報告に伴う西村歩の考察〔西村 1996〕や『みずほ』誌上における池峯龍彦、山崎頼人による検討〔池峯 2006, 山崎 2006〕があるほか河川流域ごとの様相整理もなされている〔池峯 1993, 河田 2000, 市村・奈良 2009〕。以下でこれらの成果をふまえつつ、改めて資料の確認とその解釈を行うこととしたい。

和泉地域の海岸線は、東北から南西まで 40 km 以上を測り、大阪湾に注ぎ込む多くの河川によって領域区分がなされる。ここでは、河川流域を基本としつつ、面積および遺跡の多寡に基づいてこれに適宜上流・中流・下流などの細分を加え、表 8～10 のとおり細別地域（以下でエリアとよぶ）の設定を行う。さらにこれらの上位の区分として、各エリアの位置関係及び集落の動向に基づき、和泉北部北半、同南半、和泉南部という 3 つの地域にまとめて把握することとする。

具体的な作業として、中期後葉から後期後葉にかけての遺構・遺物検出例の集成及び帰属時期の確認（時期区分の基準資料は、表 11 のとおり）を行ったうえで、後期前葉を基準とした下記のような分類により、集落及び地域としての様相の整理を行う。

- ・ A 継続型：中期後葉から後期前葉を経て以降の時期へと継続する集落・地域

- ・ B 中断型：中期後葉に集落が営まれたが、後期前葉の遺構・遺物は認められず、後期中葉ないし後葉になって再度確認される集落・地域
- ・ C 断絶型：中期後葉に集落が営まれたが、後期前葉以降の遺構・遺物が認められない集落・地域
- ・ D 新興型：中期後葉及び後期前葉に集落が確認できず、後期中葉ないし後葉になって遺構・遺物が認められるようになる集落・地域
- ・ E 移動型：中期後葉に営まれた集落が後期前葉に廃絶し、新たにエリア内の他の地点において居住が開始される地域及び新たに居住が開始された集落

全体的動向 まず、和泉地域全体をみると、表 10 最下段の集計のとおり、遺跡数は、中期後葉をピークとし、後期前葉にかけて激減した後、後期中葉にやや増加し、さらに後期後葉に倍増する。検出された建物数も中期後葉が最も多く、続く後期前葉及び中葉については、広範囲が調査された観音寺山遺跡および滑瀬遺跡において多数が報告されているため、遺跡数の動向とは一致しないが、それらを除けば極めて少ない状況で、後期後葉にはかなり増加する。

エリア別の動態 先述のエリア区分に従ってそれぞれの集落動態について概観してみよう。

三国ヶ丘台地は、和泉の北端、上町台地から南に続く段丘上に位置する。古墳時代中期に百舌鳥古墳群の築造開始に伴い大規模な開発が進められるエリアであり、弥生時代の集落は少なく、中期後葉に複数の遺跡が所在するがいずれも小規模である。エリアの集落動態類型は C 断絶型にあたる。

石津川下流域は、縄文時代から継続する大型集落の四ツ池遺跡を中心とする地域で、南東に近接する下田遺跡においても多数の建物遺構が検出されているが、後期前葉の遺構・遺物は少なくともエリア内の報告資料としては見当たらない。その後、後期中葉から再び遺構が認められるようになり、後期後葉から古墳時代にかけて多数の建物遺構を伴う集落が継続していく。エリアの集落動態類型は B 中断型にあたる。

石津川中流域は、河口からやや遡った谷底平野～完新世段丘を中心とするエリアで、中期後葉に多数の集落が営まれたものの、後期前葉の事例は見当たらない。後期中葉の遺構・遺物を伴う遺跡が複数認められるが、その後古墳時代かけての継続性は不明瞭である。エリアの集落動態類型は B 中断型にあたる。

石津川上流域は、石津川及び和田川を遡った更新世段丘及び山地斜面を中心とするエリアで、野々井西遺跡や伏尾のように中期後葉から標高の高い立地に集落が営まれている点が特徴である。後期前葉にも、伏尾、昭和池、野々井西、野々井といった多くの遺跡が営まれており、後期中葉に減少しながらも一定数が継続した後、後期後葉にいずれも廃絶する。エリアの集落動態類型は A 継続型にあたる。

王子川流域は、信太山丘陵から大阪湾に向かって北西に広がる段丘を中心とするエリアで、中期後葉の集落は認められない。後期後葉には、丘陵上の惣ヶ池遺跡⁽²⁶⁾をはじめとする複数の集落が営まれており、エリアの集落動態類型は D 新興型にあたる。

槇尾川下流域は、河口付近で松尾川、牛滝川と合流して大津川と名を変える槇尾川の右岸下流に形成された広い段丘上を中心とするエリアである。和泉地域最大の規模を誇る池上曾根遺跡、古墳時代から古代にかけて和泉の中心的位置を占める府中・豊中遺跡群など多くの集落が中期後葉に営

まれている。しかしながら、少なくともエリア内の報告資料として、後期前葉の遺構・遺物は見当たらない状況である。その後、後期中葉からふたたび資料が増加し、古墳時代にかけて多数の集落が営まれるようになる。エリアの集落動態類型はB中断型にあたる。

槇尾川中流域は、河口から5～8kmほど遡った河岸段丘上を中心とするエリアで、中期後葉に多数の建物を含む集落検出され、後期前葉にも万町北遺跡においてごくわずかに継続した後、廃絶する。エリアの集落動態類型はC断絶型にあたる。

松尾川中流域では、兩岸の段丘上に遺跡が形成されており、中期後葉に和気、軽部池、寺田遺跡など多くの集落が営まれた後、そのほとんどが後期前葉に廃絶する。一方で、丘陵上に新たに観音寺山遺跡が出現して多数の建物が営まれ、後期後葉へと継続する。その後、後期中葉からは、再び低地において集落が複数営まれ、観音寺山と併存する形となる。エリアの集落動態類型はE移動型にあたる。

牛滝川中流域では、兩岸の段丘上に遺跡が形成されており、中期後葉に軽部池西、山ノ内、多治米宮内など複数の集落が営まれた後、後期前葉にはそのいずれもが廃絶する。その後、後期中葉からは、再び多数の集落が出現し、中には上フジ遺跡⁽²⁷⁾のように丘陵上に所在するものも含まれる。エリアの集落動態類型はD新興型にあたる。

天野川流域は、後に断層地形を活かして築かれた久米田池を含むエリアで、中期後葉に下池田遺跡をはじめとするいくつかの集落が営まれる。後期前葉にはほとんどの集落が廃絶する一方、下池田遺跡では、同じ立地において居住が継続しており、和泉地域全体を見渡した場合でもきわめて稀なあり方として注目される。また、高所に立地する集落としてどぞく遺跡が出現するが、公表されている資料を見る限り、後期後葉に下るものと考えてよい。エリア全体を見た場合の集落動態類型はD新興型とするのが妥当であろう。

春木川流域では、栄ノ池、尾生遺跡を中心に中期後葉の集落が営まれるが、後期前葉の資料は知られていない。その後、後期後葉には再び集落が確認できるため、エリアの集落動態類型はB中断型にあたる。

津田川流域には、土生、畑遺跡が所在し、後期中葉に集落が営まれたが、後期前葉の資料は知られていない。その後、後期後葉には再び集落が確認できるため、エリアの集落動態類型はB中断型にあたる。

近木川流域は、石才南遺跡を中心とし、中期後葉には多くの集落が営まれたが、後期前葉の資料は知られていない。その後、後期後葉には再び集落が確認できるため、エリアの集落動態類型はB中断型にあたる。

檜井川流域は、檜井川兩岸沿いに遺跡が分布するエリアである。中期後葉に檜井西、三軒屋遺跡といった段丘上の集落に加え、棚原、新家オドリ山遺跡といった丘陵上の集落が認められることが特徴である。後者の様相が不明瞭ながら、後期の建物もあるとされることから、とりあえずエリアの集落動態類型はE移動型にあたるものと考えておきたい。

男里川流域では、中期後葉に男里遺跡をはじめとする多数の集落が営まれたが、後期前葉にはそのほぼすべてが廃絶する。一方で、丘陵上に新たに滑瀬遺跡が出現して多数の建物が営まれる。滑瀬遺跡は、後期前葉のうちに廃絶し、後期中葉からは、再び低地において集落が複数営まれるよう

表8 集落動態（和泉地域）（1）

地域区分		遺跡名	類型	立地	標高 (m)	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	その他遺構 (後期前葉)	備考	
大別	細別											
和泉 北部 北半	三 国 ヶ 丘 台 地	東浅香山	B	更新世段丘	11~12							
		今池	C	盛土地（谷底平野）	11~12							
		大仙西町	C	盛土地（海岸平野）	6~7							
	石 津 川 下 流 域	浜寺元町	C	盛土地（海岸平野 （浜堤））	5~7							
		四ツ池	B	盛土地（谷底平野） ~更新世段丘	5~11						後期の竪穴建物3棟が報告されて いるが、時期を細分できず	
		下田	B	盛土地（谷底平野）	5~7							
		鶴田町	B	盛土地（谷底平野）	8~9						後期後葉の建物数は庄内式並行期 と分離できず	
	石 津 川 中 流 域	毛穴	B	完新世段丘	17							
		鈴の宮	B	完新世段丘	17							
		西浦橋	C	谷底平野~ 完新世段丘	20~23							
		菱木下	C	更新世段丘	23~27							
		万崎池	B	更新世段丘	26~27							
		小阪	C	谷底平野	33							
	石 津 川 上 流 域	伏尾	A	更新世段丘	30~34							
		昭和池	A	更新世段丘	45							
		野々井西	A	谷底平野~山地斜面	30~38							
		野々井	A	谷底平野~完新世段 丘	28~30							
		大庭寺	C	谷底平野~完新世段 丘~更新世段丘	28~32							
	和泉 北部 南半	王 子 川 流 域	水源池	D	更新世段丘	7						
			大園	D	更新世段丘	5~7						
			惣ヶ池	D	山地斜面	50~60						竪穴建物の帰属時期の詳細は不 明
横 尾 川 下 流 域		池園	C	更新世段丘	4							
		池上曾根	B	更新世段丘	5~10							
		虫取	B	更新世段丘	6~7							
		豊中	B	更新世段丘	16							
府中	B	更新世段丘	20									

表9 集落動態（和泉地域）（2）

地域区分		遺跡名	類型	立地	標高 (m)	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	その他遺構 (後期前葉)	備考
大別	細別										
和泉 北部 南半	横尾川 中流域	池田下	C	完新世段丘	43~46	15/0、墓					
		池田寺	C	更新世段丘	53~54	1/0					
		万町北	A	更新世段丘	60~61	4/0、墓	1/0				
	松尾川 中流域	和気	B	更新世段丘	22~23	2/0					
		軽部池	C	更新世段丘	24	17/7					
		小田	B	更新世段丘	20~21						
		寺田	B	更新世段丘	26~27	3/0					
		観音寺山	E	山地斜面	60~70		53/+	47/+	20/+	環濠、溝、土坑	
	牛滝川 中流域	西大路	D	更新世段丘	18~19			1/0			
		今木	D	更新世段丘	20				2/0		
		軽部池西	B	更新世段丘	20~21				1/0		
		山ノ内	B	更新世段丘	24~26				2/0		
		山直北	D	更新世段丘	30						
		多治米宮内	D	更新世段丘	30						
		上フジ	D	山地斜面	82				5/0		
	天野川 流域	春木八幡山	D	砂丘	5						
		春木宮ノ上	D	更新世段丘	5						
		春木天ノ川	D	盛土地（氾濫平野）	3~4						
		吉井	D	更新世段丘	7						
		箕土路	C	更新世段丘	16~17						
		下池田	A	更新世段丘	18	墓	1/0	1/0	1/0	土坑、溝	
岡山矢取		C	更新世段丘	30							
岡山八ツ川		D	更新世段丘	31							
どぞく	D	山地斜面	60~75					4/0			

表 10 集落動態 (和泉地域) (3)

地域区分		遺跡名	類型	立地	標高 (m)	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	その他遺構 (後期前葉)	備考	
大別	細別											
	春木川流域	栄ノ池	B	更新世段丘	14						竪穴建物5棟, 掘立柱建物15棟, 方形周溝墓2基が報告されているが, 細別時期不明。	
		尾生	D	更新世段丘	33~35				10/2			
	津田川流域	土生	B	更新世段丘	15~18							
		畑	B	更新世段丘	35					1/0	III~IV様式の方形周溝墓	
和泉南部	近木川流域	脇浜	C	盛土地 (海岸平野)	2							
		今池	B	更新世段丘	20							
		石才南	B	更新世段丘	24~29					4/0	弥生後期の竪穴建物2棟が報告されているが, 細別時期不明。	
		森下代	C	更新世段丘	49							
	梶井川流域	船岡山	D	更新世段丘	8							
		湊	D	谷底平野	5~8							
		梶井西	C	更新世段丘	8.5						墓	
		岡ノ崎	C	更新世段丘	11~12						墓	
		諸目	C	更新世段丘	8~9						墓	
		三軒屋	C	更新世段丘	22~25						1/0、墓	
		棚原	C	更新世段丘~山地斜面	50						4/0	
		新家オドリ山	A?	山地斜面	38						+/0	中期後葉から後期にかけての建物10数棟
	男里川流域	男里	C	更新世段丘	8~18							32/0、墓
		滑瀬	E	山地斜面	52~71					15/5		溝, 土坑, 柱穴
		平野寺 (長楽寺) 跡	D	更新世段丘	18							
		向山	B	更新世段丘	27~28						4/0	
向出		B	谷底平野~更新世段丘	23~24						5/0		
神光寺・蓮池		C	更新世段丘	28							墓	後期の溝の報告があるが詳細不明
流域	番川	淡輪	C	更新世段丘	27~28						2/0	
海峡	紀淡	小島北磯	B	谷底平野	2~3							
遺跡数						52	8	18	39			
建物検出数						152	78	56	84			

※下段は竪穴建物数/掘立柱建物数 上段は黒:建物あり, 濃いトーン:建物以外の遺構あり, 薄いトーン:遺物のみあり

になる。エリアの集落動態類型はE移動型にあたる。

番川流域では、淡輪遺跡で中期後葉の集落が営まれたが、後期前葉の資料は知られていない。その後も弥生時代の資料は確認できず、エリアの集落動態類型はC断絶型にあたる。

東川流域では、小島北磯遺跡で中期後葉の遺構が発見されているが、後期前葉の資料は知られていない。その後、後期後葉には再び遺構が確認できるため、エリアの集落動態類型はB中断型にあたる。

小 結 上記してきた各エリアの様相を大別した地域の観点から改めてまとめておこう（表12）。

まず、最も北の三国ヶ丘台地から南に隣接する石津川上流域・中流域・下流域を和泉北部北半とすると、弥生前期から下流域の四ツ池遺跡が地域の拠点としての位置を占めていたところ、中期前葉から中流域にも集落が進出し、中期後葉からは丘陵上を含む上流域で集落が営まれるようになる。これにより、中下流域の低地に営まれた集落と一定期間併存した後、後期前葉に至ってそれらの集落が一時的に廃絶する一方で上流域では居住の継続が確認される。その後、後期中葉から中下流域の集落で再度遺構・遺物が検出され、後期後葉からは、下流域に中心が戻ることが確認できる。このように流域全体を見た場合には、下流域から上流域、さらにまた下流域へと中心が移動するような状況が確認できる。流域面積が広く、集落数も多いため、エリアの細分を行ったが、水系を共有する密接な社会的関係性で結ばれた集団による同一の要因に対する反応があらわれた可能性が想定できよう。

次に、王子川流域以南の広義の大津川流域に近い範囲を和泉北部南半とする。ここでは、前期後半から中期後葉にいたる長期間にわたり池上曾根遺跡が地域の中核的位置を占めていたところ、後期前葉には明確な継続が確認できない。一方、南の松尾川流域の丘陵上に位置する観音寺山遺跡において大規模集落が営まれており、地域内の中心が移動したことが明らかである。また、この地域の集落動態のもう一つの特徴として、D新興型が多いという点にも注目しておきたい。具体的には、王子川流域、牛滝川中流域、天野川流域であるが、和泉地域全体をみてもこの類型は、和泉北部南半に集中している。

最後に、近木川以南を和泉南部としてまとめておくと、これらの地域では、B中断型が大勢を占める一方で櫻井川流域及び男里川流域は、E移動型にあたると思われる。各エリアの集団関係は、

表11 和泉地域における土器編年基準資料

	和泉北部北半	和泉北部南半	和泉南部
中期後葉	・四ツ池第81地区 SD005・006・008 ・下田1次 SA-5 ・野々井西谷底	・池田下溝3 ・府中 SZ01 ・池上曾根大型井戸1埋土	・石才南 401-OD ・男里(センター) 堅穴住居 27
後期前葉	・野々井 II55-OS ・野々井西1号住居址	・観音寺山 W 地区溝 ・観音寺山 N 地区濠跡	・滑瀬9号住居址 ・滑瀬自然流路
後期中葉	・四ツ池第45地区 B溝 ・四ツ池第83地区土器溜 B ・下田(センター) SD2206	・池上曾根 J 地区 3号井戸 ・府中 59-II 地区 SX-03 下層	・小島北磯(センター) 第5層
後期後葉	・下田(センター) SA2216 ・鶴田町 SD007	・西大路 926-OR ・下池田(センター) 64溝東部 ・山ノ内1次堅穴住居 866-OD	・石才南 III14-OT ・向出 00-1区 B区自然河川第2層

表 12 和泉地域における地域ごとの集落様相の比較

地域区分		集落動態 類型	高地性集落※				銅鐸（型式）
大別	細別		中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	
和泉 北部 北半	三国ヶ丘台地	C 断絶型					
	石津川下流域	B 中断型					浜寺昭和町（扁平鈕式新段階） 下田遺跡（扁平鈕式新段階）
	石津川中流域	B 中断型					菱木（突線鈕 3 II b 式） 伝泉北郡鳳村家原付近（不明）
	石津川上流域	A 継続型	○	○	○		伝泉北郡陶器村（外縁付鈕 2 式）
和泉 北部 南半	王子川流域	D 新興型				○	
	槇尾川下流域	B 中断型					池上曾根遺跡（突線鈕 2 式か 3 式 破片，突線鈕 4 式か 5 式破片）
	槇尾川中流域	C 断絶型					
	松尾川中流域	E 移動型		○	○	○	
	牛滝川中流域	D 新興型				○	
	天野川流域	D 新興型				○	
	春木川流域	B 中断型					神於町（外縁付鈕 1 式）
	津田川流域	B 中断型					流木町（扁平鈕式古段階，扁平鈕 式？）伝泉南郡貝塚町付近（不明）
和泉 南部	近木川流域	B 中断型					
	檜井川流域	C 断絶型	○				
	男里川流域	E 移動型		○			林昌寺（扁平鈕式新段階）
	番川流域	C 断絶型					
	紀淡海峡	B 中断型					

※山地斜面に立地するもの

基本的にそれぞれの内部で完結したものとみて大過ないと思われ，今後の調査の進展によって新たな集落が発見されることにより E 移動へと認識を改めることとなるエリアが出てくる可能性は十分にある。

b. 遺跡の立地変化と堆積環境

立地変化 和泉地域の弥生集落の定着は，海岸近くの低地付近に始まることが指摘されており，中期から段丘上への進出が開始される [池峯 2006]。特に中期後葉には，和泉北部北半の昭和池遺跡，野々井西遺跡，あるいは同南部の棚原遺跡，新家オドリ山遺跡などの高地性集落が出現している。これらは，瀬戸内海東端部に位置する河内や摂津とも軌を一にした現象であり，中期段階では，低地の集落とも併存している。また，石津川流域では，高地性集落ほどの隔絶した比高差を持つわけではないものの，標高の高い上流域で集落形成が活発化していることに注目しておきたい。

後期前葉に至ると、各河川流域において標高の低い地点に所在する遺跡のほとんどが中断ないし廃絶する一方、ごく少数の高地性集落において多数の建物跡が検出される。相対的な人口分布の大きな変化があったことが明らかであり、本稿の分類で言う「高地移動」の典型的な事例となる。ただ、たとえば石津川流域を見た場合、当該地域では、高所の集落は中期後葉から継続しており、四ツ池遺跡からの移動として単純に説明はできないことに注意が必要である。

また、もう一つ特徴的な動向として、後期後葉から新たな高地性集落が出現し、かつそれらが和泉北部南半に集中することが挙げられる。研究史上、惣ヶ池遺跡やどぞく遺跡については、観音寺山遺跡と併存する時期としての評価が試みられることも多かったが、改めて報告資料を確認する限りでは、高地性集落のなかの古相ではなく、寺沢薫のいう第2次の後半〔寺沢 2003b〕に属するものとみることが適当と考えられる。この動向と先に見たD新興型が本地域に集中することの間には、有機的な関連性があった可能性が考えられよう。

堆積環境 堆積環境については、詳細な古地形の復元はなされておらず、後期前葉における情報は少ないが、石器や漁撈具の出土から高所でも比重の変化はあれ中期同様の生業が継続したことは確認できる。一方で、全体的に標高の高い石津川上流域においては高地性集落以外の集落も後期前葉に継続していることから、低地の環境悪化という要因が影響を及ぼした可能性は否定できない。ただし、それでも低地の全体が居住不適地化するような事態は想定しがたく、近畿地方の中でもとりわけ劇的な様相をみせる「高地移動」の背景として社会的要因を加味した解釈を模索することが妥当であろう。

c. 集落構造及び社会の変化

集落構造 中期後葉の四ツ池遺跡、池田下遺跡、男里遺跡といった大型集落では、内部に居住域あるいは墓域が複数確認されており、いわゆる複合型集落⁽²⁸⁾にあたるものと考えられる。

後期前葉の観音寺山遺跡、滑瀬遺跡でも複数の単位が認められ、中期的な様相が継続している。一方、後期中葉以降は、観音寺山遺跡のような例外を除いて複合型集落は認められなくなり、小型の居住域が多数散在する様相を示すようになる。このような集落構造の推移は、近畿地方に広く共通するものであるが、和泉地域はその典型的な姿を示すものといえよう〔森岡・三好・田中 2016〕。

社会の変化 和泉地域のエリア別の集落動態を概観した場合、後期前葉の資料を欠くB中断型が最も多く、また後期を通じて居住が再開されないC断絶型も北から南まで散らばっていることがわかる。その一方で、D新興型は、和泉北部南半に集中し、小規模な居住域が地域内各所に散在する様相を呈する点が特徴的である。高地性集落の分布をみた場合も、後期中葉まで各地に散らばっていたところ、後期後葉になると和泉北部南半に集中するようになる。高地性集落が何らかの社会的緊張を反映したことは確かと考えられるが、後期後葉の分布からはそのような集団間関係が、当該期においては和泉北部南半の内部を主な範囲としていた可能性が考えられよう。古墳時代の集落動態及び首長墓系譜の検討から、本地域には有力集団が複数併存したことが想定されるところであり、多数の集団が連携・競合しながら生活を営んでいる状況が弥生後期の集落様相に表われている可能性がある点は興味深い。

和泉北部北半については、細分したものの、石津川流域を中心として連動性の高い様相を示して

おり、中核となる下流域の四ツ池及び下田遺跡の存在が顕著である。その後、庄内式期から古墳時代前期を通じて、河内地域と和泉地域の接点として発展し、古墳中期に至るとそれまで人の活動が希薄であった周辺部が王権の墓地（百舌鳥古墳群）及び窯業生産の拠点（陶邑窯跡群）として大規模に開発されることとなる。

和泉南部については、広い範囲を便宜的にまとめたが、集落動態には共通性が高く、実態としては個々の河川流域ごとに完結性の高い集団関係が結び結ばれていた可能性が高いものと考えられる。このことは古墳時代の集落動態及び首長墓系譜の様相とも整合的である。

以上の3つの大別地域と銅鐸の分布状況に一定の相関関係が見て取れることも興味深く、古墳時代前期への歴史的展開をふまえて、さらなる解釈を深める必要があると思われるが、これについては別の機会において果たすこととしたい。

集落からみた弥生後期のはじまり 以上で述べてきたことをまとめれば次のようになる。和泉地域の弥生集落の最盛期である中期後葉を経て、後期の開始とともに低地に所在する多くの集落が廃絶する。一方で、中期後葉から出現し始めた高地性集落については大規模なものを含め、後期前葉にも複数の存在が確認されており、当該期において顕著な人口減少と集落立地の「高地移動」が生じたものと考えられる。

このような劇的な変化が生じた背景として、低地の自然環境の悪化と、高地性集落及びそこに巡らされた環濠からうかがわれる社会的緊張があったものと考えられる。そしてそれは、環境変化に対する受動的な反応ではなく、各地の集団の政治的動向を反映したものと考えられるのであり、集落動態パターンの地域差は、そのプロセスとそこで醸成された権力構造の差異を表している可能性がある。

このような和泉地域の様相は、当該期の近畿地方に広く共通する社会変化の典型的なあり方を示すものとして極めて重要な位置にあるといえよう。（三好）

(4) 紀伊地域

a. 中期から後期への集落の動態

紀伊地域では、早くから沿岸部において高地性集落が数多く確認されてきたこともあり、拠点集落の衰退と高地性集落への移行という図式で中期から後期への集落動態が理解されてきた。中でも土井孝之は集落遺跡の集成に基づき集落動態の把握を行い、中期後葉までは沖積平野部の拠点集落が存続するが、中期末～後期中葉から高地性・類高地性集落へと移行することを示した。そして、後期中葉～後葉には集落の再編成が行われ、新出の拠点集落が形成することを明らかにした〔土井 1994〕。また、集落立地の変遷と高地性集落の存続時期を検討した前田敬彦は、紀北地域と紀南地域に集落動態の差異を見出し、紀北地域は後期前半まで高地性集落が存続する一方、紀南地域では後期後半まで高地性集落が存続することを示した〔前田 1995〕。さらに高地性集落の存続時期と銅鐸の埋納時期について、関連が認められることを指摘した。

既往の研究における中期末、後期前葉の一括資料の位置付けについての齟齬は、すでに前章で触れた。こうした編年観の見直しと調査資料の増加に伴い、これらの中期から後期への移行について集落動態を検討した結果、大きく5つの集落動態が確認できた（表13・14）。

①中期末～後期前葉に衰退し、後期中葉・後葉から再び増加する平地の集落遺跡。

1) 中期末まで継続：太田・黒田遺跡，西飯降Ⅱ遺跡，岡村遺跡，小松原Ⅱ遺跡

2) 後期前葉Ⅰまで継続：平井遺跡，鳴神Ⅳ遺跡，東郷遺跡，中村Ⅰ遺跡

②中期末～後期前葉から新たに出現し、後期中葉まで継続する丘陵上の集落遺跡。

：橋谷遺跡，弘西遺跡，亀山遺跡，奥山田遺跡，滝ヶ峯遺跡，船岡山遺跡，星尾山遺跡

③後期中葉・後葉～庄内式期に新たに出現する丘陵上の集落遺跡。

：府中Ⅳ遺跡，中村Ⅰ遺跡（丘陵上），紀南地域の集落遺跡（南部川・富田川・田辺湾沿岸）

④後期中葉・後葉から新たに出現する平地の集落遺跡。

：田屋遺跡，西田井遺跡，北田井遺跡，山口遺跡，井辺遺跡，相方遺跡，東家遺跡，東洪田遺跡

⑤中期後葉から後期後葉まで継続する集落遺跡。

：丁ノ町・妙寺遺跡，六十谷遺跡，旧吉備中学校校庭遺跡

集落動態の画期についてはこれまでの指摘のとおり、中期末から後期前葉に画期が認められるとともに、後期中葉・後葉に画期が認められる地域も存在する。これらの地域では平地での拠点的な集落の衰退と、丘陵上での新たな集落の出現（高所移動）という現象も認められることから、集落動態の画期がやや遅れる地域も存在する。特に紀ノ川下流域以外では、後述する立地変化と同様に漸移的な画期であると指摘できる。また、遺跡数を比較すると、後期前葉に大幅に減少し、後期中葉から後期後葉にかけて再び遺跡数が増加することになる（表14）。一方、遺跡数に対する建物遺構数を比較すると中期後葉の遺跡数に対する建物遺構数に対し、後期後葉の遺跡数に対する建物遺構数は減少し「小規模散在」することとなる〔田中 2016〕。

b. 遺跡の立地変化と堆積環境

中期末から後期前葉の集落立地の変化については、後期中葉にかけても丘陵上に立地する遺跡数が増加する（高所移動）。一方で、立地を変えず後期前葉への継続する集落遺跡が存在する。平地の集落が中期末で衰退し、後期前葉より丘陵上へ移行する現象も認められるものの、紀ノ川上・中流域、有田川流域及び日高川流域では、中期後葉から後期まで平地において集落遺跡が継続する例、平地と丘陵上の集落遺跡が共存する例、丘陵上ではなく河岸段丘上や平地でも別のエリアに集落が出現する例（低地内移動）が認められ、状況はより複雑となる。

変化の時期についても、日高川流域の中村Ⅰ遺跡では、中期後葉から後期前葉Ⅰは平地で継続するが、後期中葉Ⅰには丘陵上へ移動するという現象が認められ、これまで紀南地域で後期後葉以降に認められた丘陵上への立地変化（高所移動）の時期差が、紀北から紀中・紀南への段階的な地域偏差として認められる。この点は集落動態の画期が遅れる点とも関連し、中期末から後期前葉の集落立地の変化が周囲に順次、南へと波及していく状況を示す。

また、この集落立地の変化の差異については、前述した集落動態の画期と同様に地域差以外にも、弥生時代中期後葉の集落規模も反映している可能性がある。太田・黒田遺跡，岡村遺跡，小松原Ⅱ遺跡などは中期後半には複数棟の竪穴建物で構成され、青銅器も保有するなど比較的規模が大きい。こうした大規模な集落では、中期末から後期前葉への集落動態の変化が明瞭に認められる。

表 13 集落動態 (紀伊地域) (1)

地域区分	遺跡名	類型	立地	標高 (m)	中期後葉/末	後期前葉	後期中葉	後期後葉	主要遺構 (後期前半)	主要遺物 (後期後半)	備考
紀ノ川上・中流域	血繩	①-1	河岸段丘	95~105	7/0			3/0	竪穴遺構A・B・C	石鏃	
	東家	④	氾濫平野	89~92				1/0			
	市脇	①-1	氾濫平野	88.0	1/0			6/0			
	柏原	-	低位段丘	120~124	12/0						
	上田	③	段丘先端	100~					竪穴遺構		詳細不明
	学文路Ⅲ	③	丘陵斜面	110~					土器出土		
	中飯降	-	低位段丘	80~82	2/0						
	西飯降Ⅱ	①-1	低位段丘	75~80	30/0		3/0	2/0	溝1310		後期中葉1主体
	丁ノ町・妙寺	⑤	低位段丘	73~75	2/0	1/0	4/0	1/0	竪穴建物17,土器棺蓋6,多数(土坑14・18・土坑51),溝32,自然流路9	瀬戸内搬入壺,生駒西麓搬入甕,矢柄研磨器,紡織具	竪穴建物17・自然流路9はIV様式からの継続
	佐野	①-1	扇状地	59	2/0		4/0	9/0	5号住居址		
	船岡山	②-3	河岸段丘丘陵	47~60		4/0	7/0	7/0	落ち込み状地形,SB01・02・05・06,SK1・SK87・SK234	生駒西麓産壺,鉄鏃,ヤリガンナ,刀子,鉄斧,石鏃,石刃,石砲丁,投弾,砥石,叩石,磨石,石皿,勾玉,管玉,土製紡錘車	
	東洪田	④	低位段丘	55~58				3/0			
	東田中神社	①-1	低位段丘	12~14	4/0						
	北山三嶋	③	低位段丘	34.0			4/0		29・30・31・32竪穴住居		31・32火災住居
吉田	①-1	氾濫平野微高地	12~14	12/0			12/0				
紀ノ川下流域北岸	山口	④	扇状地	13~14					SD10,拡張区包含層		後期中葉1主体
	川辺	④	氾濫平野微高地	10~11	5/0			2/0			
	宇田森	①-2	氾濫平野微高地	8.5~9.0	8/0	1/0	7/0	4/0	SX01	生駒西麓搬入壺,石鏃	後期中葉2,庄内の遺物混じる,宇田森銅鏃
	北田井	①-1	氾濫平野微高地	7~10	4/0			4/0			
	西田井	④	氾濫平野微高地	6~7			12/0	13/0		鉄器製作,玉造り	
	田屋	④	氾濫平野微高地	5.0~6.0	1/0		2/0	3/0			
	府中Ⅳ	③	低位段丘丘陵	22~27				13/0			
	弘西	②	中位段丘	30~31		2/0			SH01・SH02,谷(SX01)	石鏃	SH02火災住居,谷に分断
	橘谷	②	丘陵	50~98		5/0			空壕,1号・2号住居址,1号~3号住居址,溝2,ピット群,段状遺構a~d	生駒西麓搬入壺,石鏃,石錐,投弾・投石,石斧,砥石,叩石,鉄鏃,銅鏃,銅不明品	1・2号住居址火災住居,橘谷銅鏃
	六十谷	⑤	低位段丘	8.0~9.5					堀状遺構	石鏃多数	中世の堀から出土,有本銅鏃
	平井	①-2	低位段丘	10~13	5/0			2/0	59土坑,32溝,包含層,4層1次,3-3層3次	泥除未成品	IV様式から連続
	晒山	③	丘陵上	55					表採		
	雨ヶ谷	②	丘陵上	65~70					1号墳周辺包含層		晒山古墳群
	木ノ本Ⅰ	④	扇状地	4.0				1/0			
加大地域	④	砂浜扇状地	1.0~10								

堆積環境については特段の変化は認められず、洪水痕跡や大溝の埋没は中期末から後期前葉には認められない。しかしながら、太田・黒田遺跡において再び遺構・遺物が認められる後期中葉では、自然流路が存在するなど居住遺構が明確ではない。

表14 集落動態(紀伊地域)(2)

地域区分	遺跡名	類型	立地	標高(m)	中期後葉/末	後期前葉	後期中葉	後期後葉	主要遺構(後期前半)	主要遺物(後期後半)	備考
紀ノ川下流域南岸	鳴神IV	①-2	氾濫平野微高地	3.0					SK051,SK052		段構成土下で検出
	秋月	-	氾濫平野微高地	2.6							
	太田・黒田	①-1	氾濫平野微高地	2.5~3.0	36/2				SD-12	石庖丁,石斧,叩石,石杵	太田・黒田銅鐙
	井辺	④	氾濫平野微高地	1.0~2.0				19以上/0		石皿・石杵、銅鐙片	
	奥山田	②	低位段丘丘陵	20~30		1/0			竪穴住居1,土坑2,濠状遺構(溝59)		
	岩橋高柳	④	氾濫平野微高地	4.0~7.8			1/0				
	天王塚山、知事塚古墳	②	丘陵	130~155					落ち込み(天王塚山遺跡),古墳墳丘盛土(天王塚山遺跡,知事塚古墳)	大型石庖丁,石斧,サヌカイト剥片(天王塚山遺跡),石鏃(知事塚古墳)	天王塚古墳=天王塚山遺跡
	相方	④	丘陵裾	4.0~6.0							
	寺内古墳群	④	丘陵	80					表採		寺内28号墳
	菖蒲谷	-	丘陵	30	墓域				台状墓(ST01~04),SK47,SD04(中期後半)	石鏃	中期後半,2km東吉里銅鐙
滝ヶ峯	②	丘陵	77~85		3/0			Aトレンチ,Bトレンチ,空壕,竪穴建物(H50地点,165地点か,165地点か),土坑	石庖丁,石鏃,砥石,磨石,凹石,投擲,土製紡錘車,不明鉄器,貝輪,貝塚	貝塚の上部から 陸奥文鏡	
滝ヶ峯II(多田)	③	丘陵	50					表採			
亀の川流域	岡村	①-1	氾濫平野微高地	5.0~4.0	4/0						
	亀川	①-1	氾濫平野微高地	14~19	8/0			2/0,墓			
	溝ノ口	①-1	河岸段丘	50~54	5/0			1/0			
有田川流域	田殿尾中	①-1	扇状地	18~21	4/0			2/0			
	旧吉備中学校校庭	⑤	氾濫平野微高地	18	1/0	2/0	10/0	16/3	竪穴建物2・9	石鏃,ガラス小玉、石皿・石杵、鉄器製作	内行花文鏡(小型仿製鏡)
	天満I	④	氾濫平野微高地	20~22							
	宮原奥の谷	③	丘陵	30~50					表採		
	星尾山	②-2	丘陵	150~200					表採	石鏃	野井銅鐙
	野井奥の谷	③	丘陵	100~110					表採		
日高川流域	龜山	②	丘陵	70~98					溝,開墾中出土,表採	石鏃,石斧,砥石	龜山(朝日谷)銅鐙
	小松原II	①-1	氾濫平野微高地	6.0~7.0							
	東郷	①-2	氾濫平野微高地	8.0					SD22		後期後半主体,鐘巻銅鐙
	尾ノ崎	①-1	海岸段丘	12					包含層		
	中村I	①-2	氾濫平野微高地	3.0					V区竪穴建物1,V区土坑3・6・7,V区自然流路	容器形木製品,石斧,砥石,磨石	自然流路は弥生前期中期含む
	中村II	③	丘陵上	15~30			1/0	2/0	I・II・IV区竪穴建物		
遺跡数					32	19	29	37			
建物遺構数					155	18	31	119			
建物遺構数/遺跡数					4.8	0.9	1.1	3.2			
丘陵/遺跡数(%)					28.1	52.6	51.7	13.5			

* 下段は竪穴建物数/掘立柱建物数 上段は遺構・遺物からみた集落動向(トーンは強弱を示す)

c. 集落構造及び社会の変化

次に個別集落の様相から後期前葉の生業の特質と集落構造について検討する。そして後期前葉の集落と銅鐸の埋納について推察を試みたい（表 15）。

後期前葉の集落 橘谷遺跡は紀ノ川下流域北岸に位置し、空壕 4 条、段状遺構 2 列、竪穴建物 5 棟が検出されている。遺物は多数の投弾・投石のほか、石庖丁、青銅製品（銅鏃）が出土している。また、丘陵頂部より橘谷銅鐸（扁平鈕式新段階）が出土しており、丘陵上の集落遺跡の存続時期とほぼ同時期に銅鐸が埋納されたと考えられる。橘谷遺跡は遺物分布域から隣接する弘西遺跡と同一の集落と推定されているが〔大木 2015〕、谷及び尾根筋に分節された複数の居住域が存在していることから面的な広がりはない。竪穴建物の同時併存数 7 棟以上（焼失建物含む）と遺物散布域の広さから判断すると古曽部・芝谷遺跡及び観音寺遺跡のような複合型集落〔若林 2001〕規模の居住域に復元される。低地では宇田森遺跡が中期後葉から後期前葉に縮小しつつも後期後葉まで継続し、橘谷遺跡と重複する時期がある。

滝ヶ峯遺跡は亀ノ川流域の北岸に位置し、竪穴建物 3 棟以上、空壕 1 条、ピット多数、土坑、そして空壕を埋める形で貝塚を検出している。石庖丁、石鏃、投弾、紡錘車、不明鉄器、貝輪、虺龍文鏡が出土している。遺物分布域は広く、滝ヶ峯Ⅱ遺跡と同一集落と考えられているが〔前

表 15 青銅器と集落の対応関係

青銅器（銅鐸・鏡）		集落遺跡	
青銅器	時期	集落遺跡	存続時期
橘谷銅鐸	扁平鈕式新段階	橘谷遺跡 (橘谷Ⅳ遺跡)	中期後葉～後期中葉 1
宇田森銅鐸	突線鈕 2 式	宇田森遺跡	中期前葉～中期後葉, 後期前葉～後期後葉 1～庄内
重圏文鏡（仿製鏡）	布留式期の竪穴建物	北田井遺跡	中期前葉・中期後葉, 後期後葉～布留
有本銅鐸	扁平鈕式古段階	六十谷遺跡 (2km南)	中期前葉～中期後葉, 後期前葉・庄内
太田・黒田銅鐸	外縁付鈕式 1 式	太田・黒田遺跡	中期前葉～中期末, 後期中葉～庄内・布留
内行花文鏡（破鏡）	漢鏡 6 期（庄内式期の溝）		
虺龍文鏡（破鏡）	漢鏡 5 期? (V-1・2 表採)	滝ヶ峯遺跡	中期末～後期中葉
東吉里銅鐸	扁平鈕式新段階	城ヶ森遺跡	内容不明
		菖蒲谷遺跡 (2 km東)	中期後葉～後期中葉 1
野井銅鐸	扁平鈕式新段階	星尾山遺跡	後期前葉～後期中葉
		野井奥の谷遺跡	後期中葉
内行花文鏡（小型仿製鏡）	後期前葉：北部九州 (後期後葉の竪穴建物)	旧吉備中学校校庭遺跡	後期前葉～後期中葉
小松原（朝日）銅鐸	外縁付鈕式 2 式	小松原Ⅱ遺跡	中期前葉～中期後葉
亀山(朝日谷)銅鐸 1～3 号	扁平鈕式新段階	亀山遺跡	中期末～後期中葉 1
鐘巻（道成寺）銅鐸	突線鈕 5 式	東郷遺跡	中期後葉, 後期前葉, 後期中葉 2～庄内・布留

田 1995], 丘陵及び谷筋により複数の分節が認められ, これらの集落の存続時期も弥生時代後期前葉から後葉までと幅広い。

滝ヶ峯遺跡の貝塚からは, ハイガイ, ハマグリ, ヒメタニシ, フトヘナタリなど潮間帯で捕採できる貝類が出土している。ハマグリ貝殻成長線分析では, 夏季を中心としながら他の季節にも及ぶことが指摘されており, 出土量からは貝採取が生業において重要な位置を占めていたと推測される [池田 1999]。また通年の居住も指摘されており, 丘陵上ではあるが, 海浜部での生業が認められる。平地では岡村遺跡が中期末まで存在するが, 後期前葉には存続せず後期後葉に再び集落が形成される。

丁ノ町・妙寺遺跡は紀ノ川上・中流域北岸, 低位段丘上に位置し, 自然流路を挟んだ東西に二つの居住域が認められる。居住域は弥生時代中期後葉から後期前葉, 後期後葉まで継続し, 竪穴建物 17 は中期末葉から後期前葉まで住居を拡張しつつ使用される。特筆される遺構としては, 東部瀬戸内系 (吉備 V-1) の広口壺を用いた土器棺墓が検出されている。居住域を東西に区分する自然流路 9 の花粉分析及びプラントオパール分析ではシイ属とクリを中心とする森林が広がっており, プラントオパール分析では樹木が多く, イネ科は少ないことから居住に伴って新たな開発が行われたとみられる。近接する西飯降Ⅱ遺跡は中期後葉にかけて竪穴建物 30 棟からなる居住域が確認されており, 後期前葉以降には規模を大幅に縮小するが, 隣接する丁ノ町・妙寺遺跡では継続する。両遺跡では標高差はそれほど認められず, 立地の変化は認められず低地内移動と似た現象といえる。この点は紀ノ川上中流域は相対的に標高が高く, 低位段丘上に集落遺跡が立地するという特性があるためとみられる。

船岡山遺跡は, 紀ノ川上・中流域に位置し, 紀ノ川南岸からせり出した丘陵のような河岸段丘 (現在中島) に立地する。後期前葉 (後期前葉 1 はごく一部) から後期中葉 2 まで継続し, ヤリガンナ, 鉄鏃, 鉄斧, 刀子などの鉄器の出土が認められ, 石器は磨石, 台石, 砥石が多く出土する。集落構造で特筆すべきなのは, 居住域内部には単位が認められ, 重複・拡張関係, 出土土器から竪穴建物 2 棟から 3 棟からなる単位が存在し分節が認められる。未発掘の居住域を考慮に入れると, さらに数単位の建物遺構が存在することから竪穴建物 6~8 棟が併存し, 中期後葉までの集落遺跡と規模の面では大差はない。

亀山遺跡は日高川流域の亀山丘陵上に位置する。亀山の中腹, 東丘陵尾根筋で開墾中に遺物出土しており, 中期末から後期中葉 2 までの時間幅が認められる。遺物採集地点から遺跡の範囲は東西約 300 m, 南北約 200 m の規模を推定されており [川崎 2005], 亀山の南山麓に位置する小松原Ⅱ遺跡は中期末で衰退し, 明確な立地変化が認められる。亀山遺跡北では亀山銅鐸 (扁平鈕式新段階) が出土しており, 前述の橘谷遺跡と同様の状況を示す。

生業の継続 生業については水田遺構の調査例が少ないが, 中期末から後期前葉にかけて太田・黒田遺跡では水田遺構の検出が少なくなるという傾向があり, 生産域の環境悪化を認めることができる。しかしながら, 後期前葉の丘陵上の集落では橘谷遺跡, 天王塚山遺跡, 滝ヶ峯遺跡, 船岡山遺跡等で石庖丁の出土が認められ, 平井遺跡では土坑内部から泥除け未成品が出土している。後期前葉においては, 丘陵上の集落遺跡においても農具の出土が認められ, 水田稲作を行っていることは特筆される。また滝ヶ峯遺跡では, 潮間帯で採取できる貝類が出土しており, 平地や海浜部での生業が認められる。これらのことから, 居住が丘陵上に変化しても, 水田耕作や海浜部

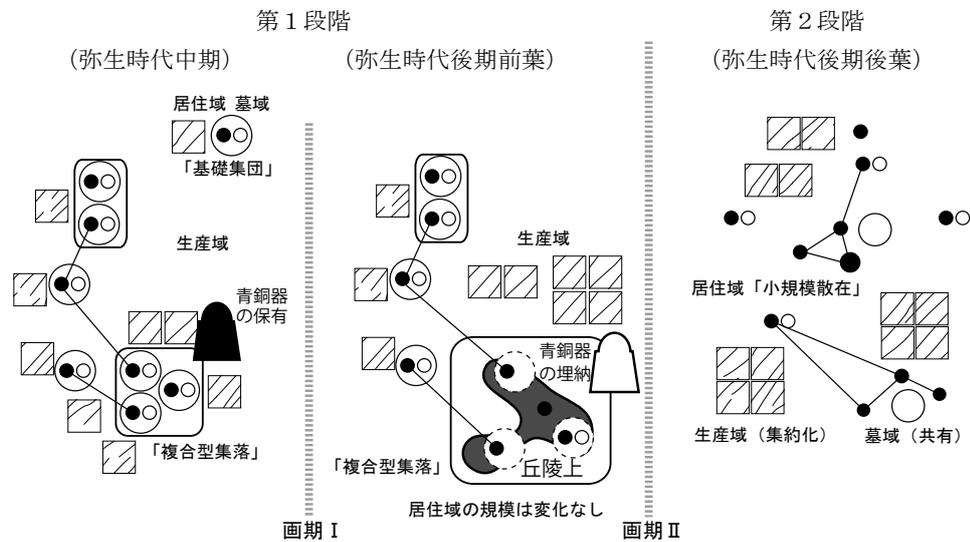


図 23 紀伊地域における集落構造の変遷模式図 [森岡・三好・田中 2016 を改変]

での生業が継続していることを示しており、生業の変化ではなく、居住域の立地変化である点が明確となる。

集落の構造 紀伊地域の集落構造の変化についてはすでに検討したが [図 23, 田中 2016], 中期後葉～後期前葉には、墓・居住域から 6～8 棟程度の単位が存在する。これについては、すでに若林邦彦が指摘する「基礎集団」と同じ規模を有しており [若林 2001], 基礎集団が複数存在する「複合型集落」では青銅器の保有も認められる。後期前葉には、観音寺山遺跡、寛弘寺遺跡、古曾部・芝谷遺跡例からは、建物の同時併存数は中期後葉と大差なく、同時に集落内部には分節性が認められる。環濠による区画も存在し、集落構造の変化は認められないと判断される。このため、中期末から後期前葉への集落動態及び集落立地の変化の要因としては、集団の居住形態に基づく集落構造の変化は無関係であるといえる。こうした点については、紀伊地域では、船岡山遺跡、橘谷遺跡の建物遺構数や遺物散布範囲から同様の傾向が読み取れ、集落内部に分節を伴いながら中期後葉と同規模の居住域からなる集落構造が復元できる。一方、後期後葉以降には新たに、居住域のみが散在し、2～3 棟程度の単位が広範囲に展開する。墓地を伴う場合もあるが不明確になり、「小規模散在」化が指摘できる。

こうした点については、中期の複合型集落が丘陵上へ展開し、「立地にみる集落形成パターンの解消」とみる別の視点が存在する [若林 2006]。しかし、集落動態や集落立地の変化からは、平地から丘陵上へと変化することは明白であり、立地変化については新たな説明を用意する必要がある。むしろ立地を問わず集落遺跡が増加するのは後期中葉以降であり、集落形成パターンの解消はこの段階に当てはまる。

銅鐸の埋納と集落変化 中期末から後期前葉の集落動態と集落立地の変化と集落構造が継続する点からは、なんらかの短期的な理由により集落の移動があったと考えられる。石庖丁の出土や潮間帯での貝採取からみても、生業や生産の方法ではなく居住域に変化が認められることは明らかである。

この点について、すでに紀伊地域では高地性集落の存続時期と銅鐸埋納時期の対応関係が指摘されており〔前田 1995〕、青銅器の出土と丘陵上に立地する集落の対応関係について再び検討する。

これまでも高地性集落と銅鐸の対応〔藤田 1989〕について指摘されてきたが、紀伊地域では、所謂「高地性集落」である丘陵上の橘谷遺跡、星尾山遺跡、亀山遺跡において扁平鈕式新段階銅鐸の出土が認められる。おおむね銅鐸の年代と埋納時期、集落の存続時期が対応し、後期前葉の丘陵上の集落において銅鐸埋納を行ったことが明らかである。こうした銅鐸埋納については、埋納を行った中期的な集団結合に変化が生じたとみることができ、これまで検討してきた、同時併存数、環濠、グルーピングにみられる分節性から導き出された中期末から後期前葉への集落構造の継続性とは異なり、集団結合に新たな変化が現れるものとみられる。また、高所に移動することによる埋納については、不安定な状態にある集落の安寧を目的とする意見もあり〔前田 1995〕、こうした集落構造と銅鐸の埋納から中期末から後期前葉には、なんらかの短期的な理由により居住域の移動が行われたと考えられる。その理由については集落動態や集落立地が段階的に変化していく点とも関わるのだろう。一方、後期中葉・後葉には集団は小規模分散傾向になり、墓域との非対応も指摘できる。丘陵上では、尾根、谷筋に分断された地形であるため、集落内部での分節化はより進展したものと考えられる。こうした丘陵上での居住形態の変化を経ることが、低地で集落が再編成された後期中葉以降の集落構造の端緒となると考えられる。そして、それに伴い後期後葉にかけて堅穴建物も円形から方形へと変化し、居住構成も変化するとみられる。(田中)

(5) 大和地域

a. 集落の動態

検討の視座 大和地域における後期前葉の集落動態については、唐古・鍵遺跡のように一部の大規模集落を残して集落が小規模化・分散化するという理解がある〔安藤 2011 ほか〕。このほか、川部浩司は唐古・鍵遺跡のほか平等坊・岩室、坪井・大福といった他の大集落においても環濠が再掘削される時期として評価する〔川部 2009〕。奈良盆地の弥生社会全体に通じる変化が起きた時期ということになろう。しかし、古代学研究会シンポジウムの集成成果では、遺跡単位では中期から継続、後期前半のみ、後期後半へ継続する遺跡のいずれもあり、多様とする〔中野ほか 2016〕。

また丘陵性（高地性）の集落が増加することにも注目がされてきた。丘陵性の集落じたいが後期前葉に出現するとされ〔寺沢 2016 など〕、この時期の特色とされる。ただしその評価については、周辺集落と協業的で一過性的〔川部 2009〕とするものと、環濠の再掘削とあいまって緊張状態を強調するものと〔福家 2012〕があり、こちらも両極端である。

以上の先行研究について気をつけておかねばならないことは、そもそも後期前葉の報告事例が少ないためか、後期前葉と中葉とをまとめて「後期前半」とする枠で議論では中期と比して変化した側面が強調され、一方で後期前葉と中葉を切り分ける議論では中期からの継続性が意識される傾向があるといえる点である。

分析対象とする資料については、大和弥生文化の会による集成成果〔大和弥生文化の会 1995〕や、寺沢薫による集落動向の分析〔寺沢 2016〕でも、これまで未報告の事例が多数紹介されている。しかし報告がなされ検証が可能な資料は限られたものしかないのが実情だ。このなかでは、たとえば

橿原市四分遺跡のように、両者で後期前葉の資料が十分存在するとされるような資料でも、筆者は奈良文化財研究所藤原地区収蔵庫で報告済みの高坏1点を除いて確認することができなかった。資料は膨大であるので見落としの可能性はあるが、それでも僅少であることには変わらない。

ここでは、あくまで検証可能な事例として報告がなされた資料について中心的に取り扱い、寺沢の成果を適宜参照する形で論を進める(表16・17)。地域は盆地内を北和・中和・南和・葛城の各地域に区分する。各遺跡の立地の記載にあたり、土地条件については奈良盆地は国土地理院により十分なデータが開示されていないが、少なくとも低地部は谷底平野・氾濫平野と大和川水系に伴う自然堤防が入り組んでいる状況であり、併せて「低地」とする。ただし同じ低地でも盆地中央から周囲の山地にかけては緩やかに傾斜して比高差があり、低地内移動については各遺跡の所在地の標高をもとに適宜言及する。

b. 遺跡の立地変化と堆積環境

遺跡の立地 まず低地の遺跡についてみると、北和および中和では、少なくとも小規模な遺跡でも前段階(中期後葉)から継続して営まれるなかで後期前葉の人間活動が希薄な集落も多い。加えて多くの遺跡では後期前葉を挟んで後期中葉には顕著な人間活動を再開している。特に平等坊・岩室、唐古・鍵、多、芝、坪井・大福、中曾司、四分など、弥生時代の長い期間にわたって盛行する歴代遺跡[石野 1973]であり、代表的な拠点集落とみなされる遺跡では中期後葉までで廃絶することなくその後も継続している。ただし唐古・鍵遺跡を除けば、前後の時期に比して後期前葉の遺構は溝や土坑が多く、集落の実態はみえづらい。同じ地点で人間活動はある程度は継続していたことも間違いのない一方、特に低地部の遺跡では建物跡の検出例がほとんどなく、規模が縮小している遺跡が多いと評価できる。この傾向が特に顕著であるのが南和地域で、拠点集落では先に触れた四分遺跡をはじめ、中曾司遺跡でも人間活動の存在が希薄である。

高地移動の事例として、丘陵性の遺跡については後期前葉から中葉にかけて出現するものが目立つ。基本的には寺沢の高地性集落第Ⅰ-Bもしくは第Ⅱ類型に位置付けられる[寺沢 2014]。調査により比較的遺構が検出されているのが東大寺山遺跡、別所裏山・豊田山遺跡、六条山遺跡で、これらの遺跡は後期前葉に出現する。北和の三井岡原遺跡・舟戸西岡遺跡、中和の庄司山遺跡は後期中葉に入ってから顕在化する。これらは周辺の低地部からの比高差30~40m程度のものが多い。東大寺山遺跡は近傍の長寺遺跡と入れ替わるように大きな規模で出現するため、集団の移動が説かれてきた[辻本 1993]。ただしこうした動きは限定的で、付近では他に丘陵性の遺跡として別所裏山・豊田山遺跡や庄司山遺跡が展開するものの拠点集落である平等坊・岩室遺跡は中期から継続していることに注意したい。

このような中で低地内移動を示す動きもまた看取できる。北和では平城京下層北寄りの遺跡群、南和では吉備遺跡など桜井市域の遺跡群、葛城地域では扇状地でも比較的標高が高い地点へ後期前葉に小規模な遺跡が広がる様相がみて取れる。これらの小規模集落は実態不明なものが多く、拠点集落とは距離があり関連性は明確ではないが、現状では拠点集落と呼べるような大きさの規模をもつとは考えられない。また中期後葉までの拠点集落についても唐古・鍵遺跡を除いて大きな規模を保っているかは不明であり、むしろ先にみた四分遺跡のように確実に規模が縮小しているものも含

表 16 集落動態 (大和地域) (1)

地域	遺跡名	所在地	立地	現標高 (m)	中期後葉	後期			その他の遺構	備考/主要遺物
						前葉	中葉	後葉		
北和	芝辻	奈良市	沖積平野	60~65					河川	中部瀬戸内搬入、絵画土器?
	三条	奈良市	扇状地	65~70					区画遺構、溝、土坑、流路	木製品
	四条大路	奈良市	扇状地	60~65		1/0				
	杉ヶ町	奈良市	扇状地	70~75						
	柏木 (大安寺西)	奈良市	沖積平野	60						
	六条山	奈良市	丘陵	80		1/0	2/0	5/0	土坑、流路	
	西畑	生駒市	丘陵	110~130	3/0					
	慈光院裏山	大和郡山市	丘陵	60~65						
	白土	大和郡山市	扇状地	55~60						
	発志院	大和郡山市	扇状地	50~55						
	廿日山	平群町	丘陵	60~80	9/0					
	三井岡原	斑鳩町	丘陵	60~73			1/0	4/0		
	舟戸西岡	王寺町	丘陵	50~60			1/0			
中和	伴堂東	三宅町	沖積平野	40~45						
	和邇・森本	天理市	扇状地	75~80						
	森本・窪之庄	天理市	扇状地	70~85					溝?	
	別所裏山 豊田山	天理市	丘陵	90~100			6/0			
	長寺	天理市	扇状地	65~70						
	東大寺山	天理市	丘陵	110~130		5/0	2/0			
	布留	天理市	扇状地	60~90						
	アゼクラ	天理市	扇状地	55~65						
	庄司山	天理市	丘陵	80~110			1/0	1/0		
	平等坊 岩室	天理市	扇状地	50~55			32/0		環濠、井戸、大溝	拠点集落
	清水風	天理市/ 田原本町	沖積平野	45~50						
	唐古・鍵	田原本町	沖積平野	50~55	1/0				環濠、井戸、溝、土坑	拠点集落、近江・伊勢湾搬入
	十六面 薬王寺	田原本町	沖積平野	45~50						
	保津宮古	田原本町	沖積平野	45~50						
	羽子田	田原本町	沖積平野	45~50						
	多	田原本町	沖積平野	50~55					溝、中~後期建物?	拠点集落
東安塔	安塔町	沖積平野	40~45							

※下段は竪穴建物数/掘立柱建物数 上段は遺構・遺物からみた集落動向 (トーンは強弱を示す)

表 17 集落動態（大和地域）（2）

地域	遺跡名	所在地	立地	現標高 (m)	中期後葉	後期			その他の遺構	備考/主要遺物
						前葉	中葉	後葉		
南和	芝	桜井市	扇状地	65~70		2/0		4/0	溝、井戸	拠点集落
	吉備	桜井市	扇状地	75~80					河道	
	上之宮	桜井市	扇状地	90~100						
	城島	桜井市	扇状地	80~85						
	大福	桜井市	沖積平野	60~65					大溝	近江系
	中曾司	橿原市	沖積平野	55~60						拠点集落
	土橋	橿原市	沖積平野	55~60						
	下明寺	橿原市	沖積平野	60~65						
	坪井・大福	橿原市	沖積平野	60~65					土坑、溝	拠点集落
	四分	橿原市	扇状地	75~80	3/0				後期層位から方形周溝墓2	拠点集落
	山田道跡	橿原市	扇状地	100~110						
	畝傍山	橿原市	丘陵	70~80						
	忌部山	橿原市	丘陵	~109	1/0				溝状遺構	
	一町	橿原市	扇状地	70~75					溝	
	曲川	橿原市	沖積平野	60~65					溝	
上ノ山	橿原市	丘陵	80~100					大溝、方形土坑		
葛城	鴨都波	御所市	扇状地	95~100	6?/0				土坑、土壙墓	拠点集落
	巨勢山境谷	御所市	丘陵	130~150					溝	
	国見山	御所市	丘陵	~229						
	今出	御所市	扇状地	95~100						
	中西	御所市	扇状地	105~110						
	寺口布施	葛城市	丘陵	120~130						
	下田味原	香芝市	扇状地	45~50						
					遺跡数	34	38	39	41	※すべてを網羅したものではない
					建物遺構数	23	11	14	20	※時期幅ある場合両方にカウント
					建物遺構数/遺跡数	67.6	28.9	35.9	48.8	
					丘陵/遺跡数	14.7	26.3	23.0	17.0	

※下段は竪穴建物数/掘立柱建物数 上段は遺構・遺物からみた集落動向（トーンは強弱を示す）

まれていると考えられる。高地移動、低地内移動を示す集落と従来の拠点集落の規模の差は大きくないと見積もられ、結果として集落が分散化する状況と捉えられよう。中期後葉までの低地の拠点集落が規模を縮小するにしても維持されている状況も考え合わせれば、それまでの社会関係を維持しつつ分散化が行われたものと捉えられる。

このように奈良盆地では低地の拠点集落を維持しつつ、より安定した高所を指向して低地内移動と高地移動がともに行われるものと捉えることができる。奈良盆地内で遺跡数の大きな増減はないとされるが〔寺沢 2016〕、それは低地の集落で消長するものと新たに高地移動や低地内移動を示す事例がともに一定数存在するためである。また寺沢の分析と本稿の分析ではともに検討の対象から外しているが、奈良盆地に隣接する小盆地の宇陀地域では後期前葉になって遺跡数が増加するとみられ〔大和弥生文化の会 1995〕、大きくみて地域をまたいだ高地移動が起こったものと捉えることも可能である。後期前葉に新たに出現する集落は、六条山遺跡のように竪穴建物を伴う遺跡は限られるが、遺構を伴い後期前葉から中葉以降に確実に定着した集落が多いことがわかる。ただし北和でも西寄りの地域では西畑遺跡や廿日山遺跡などは中期後葉で廃絶し、忌部山遺跡や国見山遺跡では中期後葉から継続するものを含むことは注意が必要である。より高所を一様に目指すのではなく、小地域を越える移動を要した事象の存在が考えられる。単純に環境変化のみで高所移動が行われたのではないことが示唆される。この点は現状では遺構や特異な遺物を絡めた分析を十分に行うことができないため置いておくより他ないが、考慮に入れておきたい。

以上のように一部地域で特異な状況を示すものの、全体としては低地の遺跡の立地があまり変化しない一方で低地内移動および高地移動により高所に根差す遺跡が増加し、全体として分散化する傾向を確認することができる。

遺構の埋没状況と溝の開削について これまで中期後葉には洪水により遺跡が埋没するイメージが語られてきた。これは唐古・鍵遺跡で谷や環濠を埋めた、いわゆる北方砂層を生じた洪水砂の影響が全体に敷衍したものとみられるが、他の遺跡ではどうであろうか。後期前葉には唐古・鍵遺跡では井戸や土坑が多いが、一方でその他の遺跡では流路や溝のみ検出された事例が多い。一見して継続する集落が多い反面、他の遺構の数も密度も少ないなかで流路が目立つ様相は土地の不安定化を想起させる〔小池 1998〕。

溝や流路からの出土例のなかには、最下層から後期前葉の土器が出土し時期が明確なもの〔平等坊・岩室〕と、埋土中から他の時期の土器と混在して出土し、遺構の上限を示すに過ぎない事例（坪井・大福）がある。このように大規模環濠集落でも、すべての事例において環濠の再掘削をみるのは難しい。一方で先にみた四分遺跡のように、前後の時期の遺構の加密度から考えれば明らかに後期前葉のみ著しく落ち込む遺跡もある。四分遺跡は他の拠点集落と異なり唯一一定規模の河川（飛鳥川）の側に位置している点は示唆的であるが、基本的に中期末の遺構は人為的に埋められた状況で、流路も中期から後期まで機能していたものとされており、人間活動希薄化の背景として災害の痕跡を端的には見出しがたい。

この点で注意を惹くのは中期後葉から後期前葉にかけて継続して機能したとみられる遺構が一定数みられることである。例えば土坑の資料では下層に中期後葉の土器が、上層は後期前葉の土器が出土し、順に埋没したと捉えられるものが存在する。このような事例は唐古・鍵遺跡でも存在し、

洪水後、中期後葉のうちに比較的間を置かず人間活動を再開したものと捉えられる。そのほかの遺跡でも、洪水等の災害により一度に埋没するような事例は多くなく、一部の低地遺跡に限定的な状況とみられる。

藤田三郎は唐古・鍵遺跡の後期の環濠について排水機能が十分ではないものをわざわざ掘削していることから土地の安定化を示唆するが〔藤田 2009〕、一方で唐古・鍵遺跡第 61 次調査 SD-101B のように、中期後葉に開削され後期前葉を通じて浚渫されていたと捉えられる事例も存在しており、比較的頻繁に管理を行う必要がある程度の流水があったとも考えられる。唐古・鍵遺跡や平等坊・岩室遺跡では後期前葉に環濠の再掘削をおこなっているものの、他の遺跡も含めて時期が特定できる例では遺構の上限が後期前葉の中でも V-1 期に集中するわけではなく、V-2 期に開削される事例も一定量存在する。後期前葉に入って遺構の埋没状況に急激に変化がみられるというわけではないが、後期前葉を通じて前後の時期よりも溝の管理に頻繁に手が入っているとみられる点は注意でき、流水量が全体として増加している可能性がある。もともと唐古・鍵遺跡では中期に度々洪水の影響があったとみられているが〔藤田 2009〕、これらは単発的・突発的な災害による事象とも考えられ、他の遺跡の状況も考え合わせると全体としてはむしろ後期前葉のほうが恒常的に降水量が多いと捉えてよいのではないだろうか。もちろん中期後葉の洪水を引き起こした災害が引き金となった可能性は十分にある。排水機能が乏しいとされる唐古・鍵遺跡における後期の環濠も、流水や洪水の対策というよりは土地の水抜きや湿気抜きが目的とみることも可能であろう。ただしある程度規模は縮小しつつも中期以来の盆地低地の拠点集落は維持されているため、全体として著しく居住不適地化したとは考え難い。むしろ溝を活用することで環境変化にはよく対応していると捉えてよい。後期中葉から後葉にかけては、丘陵性の遺跡が減るとともに建物数が増加するので、人間活動は順を追って回復するものとみることができる。

c. 集落構造及び社会の変化

以上のように、奈良盆地の弥生時代中期後葉から後期前葉にかけては、拠点集落では一見して継続的にもみえるが、遺跡の規模としては全体として縮小しているとみてよい。その中で、高地移動や低地内移動の事例が目立つようになることが注目される。多くの低地の集落では中期から後期へ継続する中で後期前葉のみ人間活動がみえないか少ない遺跡が複数存在し、遺構の密度が下がり流路や溝しか確認できない状況である。そのため集落構造に触れることができるのは唐古・鍵遺跡程度であるが、これが後期前葉という時期の短さを示すのか、もしくは環境変化による人口減少といえるかは判断が難しい。ただし低地では頻繁な溝の活用により、降水量の増加を伴う環境変化にも十分対応できており、あくまで低地における生業は継続したうえで高所移動がおこなわれたものと捉えられる。いっぽうで一部の丘陵性遺跡が中期後葉で断絶する状況は、高所での居住を維持できなかった事例の存在を示している。これらのことから単純に環境変化への対応とのみ捉えることはできず、社会関係の変化の存在も考慮する必要があるだろう。(山本)

(6) 伊勢地域

a. 中期から後期への集落の動態

伊勢地域の中期後葉の集落のうち、規模の大きなものは菟上遺跡や久留倍遺跡、境谷遺跡などのように段丘縁辺部に形成されることが多い(表18・19)。一方で、谷底・氾濫平野内の微高地上にも納所遺跡や上箕田遺跡など、比較的規模が大きな集落が形成されている。

これらの中期後葉の集落は、いずれも後期前葉には継続しない。谷底・氾濫平野内の微高地上に立地する大規模集落の盛期は中期中葉にあり、中期後葉には規模の縮小傾向が認められる[石井2010]。そして、後期前葉には遺構・遺物は僅少となり、居住域は確認できない。段丘縁辺部の比較的高所に立地する集落は中期後葉に規模を大きくするが、そうした集落も中期末には衰退・消滅し、後期前葉には遺構・遺物が認められなくなる。

後期前葉の遺跡からみても、居住域が確認されている中野山遺跡、辻子遺跡、磐城山遺跡、宮ノ前遺跡、小谷赤坂遺跡、川原表B遺跡、北野遺跡では、いずれも中期後葉に居住域が形成されていた痕跡は確認できず、やはり中期から後期への集落の継続性は低いことを示している。

さらに、居住域だけでなく、墓域についても中期後葉から後期前葉への継続性は低い。寺垣内遺跡のように中期後葉の方形周溝墓と後期前葉の方形周溝墓がみられる事例もあるが、小牧北遺跡、曾崎嶺遺跡、月よべ遺跡、大藪遺跡など、多くの遺跡では後期前葉に限って数基の方形周溝墓からなる墓域が形成される。

こうしたことから、伊勢地域では中期後葉から後期前葉への集落の継続性は極めて低いと考えられ、中期末を境に集落の位置が一斉に変化した可能性が高い。それに加えて、後期前葉には集落数が減少しているとみられる。堅穴建物などの存在から居住域の存在が確認されている中期後葉の遺跡が少なくとも25遺跡程度あるのに対して、後期前葉の遺跡は先述の7遺跡しかなく、中期後葉と後期前葉の時間幅の差を考慮しても、集落数にはかなり差があるとみてよい。遺物のみが出土している遺跡数を比較すると、その差はさらに大きい。

なお、後期前葉の集落の中には、以降に継続するような事例が認められる。磐城山遺跡や小谷赤坂遺跡では後期中葉にも居住域が形成されており、集落として継続している可能性がある。ただし、墓域については後期中葉への継続性は弱い。後期前葉の墓域には小牧北遺跡や八重垣神社遺跡、舞出北遺跡のように方形周溝墓と共に土器棺が存在する事例があるが、後期中葉以降は土器棺が墓域内で確認できないため、埋葬原理自体に変化があり、それが墓域の継続性にも関わっている可能性がある。

b. 遺跡の立地変化と堆積環境

立地変化 中期後葉の集落には、段丘上に立地するものと、谷底平野・氾濫平野内の自然堤防などの微高地上に立地するものがある。

谷底平野・氾濫平野内の微高地上に形成された集落には納所遺跡や涌早崎遺跡のように比較的規模が大きいものも存在するが、全体的に集落は中位段丘上などやや高所に立地する傾向が認められる。段丘上に立地する集落の中には先述のように大規模なものもいくつかある。そうした大規模集

表 18 集落動態 (伊勢地域) (1)

地域区分	遺跡名	立地	標高 (m)	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	その他遺構 (後期前葉)	備考
員弁川・朝明川流域	宮山	更新世段丘	47.7~47.9	5~8/4?			墓		掘立柱建物時期不確定
	菟上	更新世段丘	30.0~48.0	66~118/33		2/0	2~/0		
	久留倍	更新世段丘	14.0~20.0	20/0、墓		2~/0	8~15/0		
	上野	完新世段丘	6.0~7.1	22~/2、墓					
	小牧北	更新世段丘	47.7~47.9		墓				
	辻子	扇状地	8.8~9.8		3~/0			水田?	水田時期確定できず
	中野山	更新世段丘	51.8程度		6/1	3/0			未報告
鈴鹿川流域	菅野	更新世段丘	36.2	1/0					
	境谷	更新世段丘	43.0~44.0	30~50/0					詳細不明
	居敷	更新世段丘	42.8	1/0					
	北ノ添	更新世段丘	9.2程度	3/0					
	磐城山 (3~7次)	更新世段丘	36.9		4/0	2~/0	32~/0	環濠?	
	西ノ岡B	更新世段丘	47.0	墓				環濠?	周溝墓も後期?
	八重垣神社	谷底平野・氾濫平野	10.5~11.1		墓				
安濃川流域	納所	谷底平野・氾濫平野	5.0程度	3~7/0、墓					
	長	山地斜面等	25.5~40.7	160/14~					
	山籠	山地斜面等	14.0~18.0	10/0					
	辻の内	自然堤防	15.5程度	1/0					
	北端	谷底平野・氾濫平野	16.5程度	2/0					
	六大B	完新世段丘	9.7		0/1?				
	宮ノ前	谷底平野・氾濫平野~完新世段丘	8.8~11.9		2/0				
	蔵田	谷底平野・氾濫平野	5.8~6.9		0/2~?			水田?、堰	掘立柱建物時期不確定
雲出川流域	大角	谷底平野・氾濫平野~自然堤防?	49.3程度	2?/0					時期遡る可能性あり
	鳥居本	更新世段丘	15.3	1/0、墓					
	馬ノ瀬	更新世段丘~山地斜面等	40.0	2/0					
	木造赤坂・井手ノ上	谷底平野・氾濫平野~完新世段丘	5.0~5.4	7/0					
	舞出北	自然堤防	4.1~4.4		墓	墓			周溝墓状の遺構
	小谷赤坂・清水谷	更新世段丘	36.3		7~/0、墓?	44/3		環濠?	
	阪内川	谷底平野・氾濫平野~自然堤防	3.5程度	15~/0、墓?		4/0			
	川原表B	山地斜面等	67.0~70.0		6/0				

表 19 集落動態（伊勢地域）（2）

地域区分	遺跡名	立地	標高(m)	中期後葉	後期前葉	後期中葉	後期後葉	その他遺構(後期前葉)	備考
榑田川流域	寺垣内	谷底平野・氾濫平野～自然堤防	12.0程度	墓	墓	墓	墓		
	金剛坂	更新世段丘	10.0～15.0	墓	墓				一部未報告
	北野	更新世段丘	14.0程度		2/0	8~/0、墓	37~/0、墓?		詳細不明
	曾祢崎	谷底平野・氾濫平野～完新世段丘	5.0～5.3		墓				
宮川流域	坊主山A	更新世段丘	41.2程度	1?/0					詳細不明
	月よべ	完新世段丘	28.0程度		墓				
	大藪	完新世段丘	2.2～2.5		墓	墓			
建物検出遺跡数				19	9				
竪穴建物検出数				352～431	30				

※中期後葉の遺跡は建物が出されたもの、後期中葉・後葉の遺跡は中期後葉・後期前葉の遺構が出されたもののみ示した

※下段は竪穴建物数/掘立柱建物数 上段は黒：建物あり、濃いトーン：建物以外の遺構あり、薄いトーン：遺物のみあり

落はいずれも段丘縁辺部に形成されており、小さな谷を集落域に取り込み水場としたり、居住域とは別にやや離れた段丘上に墓域を形成するといった様相が認められる。

また、長遺跡のように段丘斜面を中心に形成される集落も中期後葉に特徴的にみられる。ただし、こうした斜面立地集落は平野から離れた高所に位置するのではなく、谷底平野・沖積平野に面した比較的比高差が小さい斜面に立地している。

後期前葉には、中期後葉よりも集落の高所立地傾向が明確となり、ほとんどの集落が河川の氾濫や土石流の影響が及ばないような段丘上に立地する。中野山遺跡や磐城山遺跡、小谷赤坂遺跡などは中期後葉の集落と同様に段丘の縁辺部に位置するが、中期後葉の集落との継続性は不明瞭で、新たに形成された可能性が高い。

一方、辻子遺跡や宮ノ前遺跡のように、小規模な扇状地や段丘裾部の緩斜面など谷底・氾濫平野に接するやや高い場所に立地する集落もある。後述のように、これらの集落は洪水や土石流等の被害を被る場所に立地しており、自然災害を完全に避けることが目的ではなく、生産域近くに居住することが志向された可能性がある。段丘上の集落と同様に中期後葉からの継続性は認められず、新たに形成された集落であるとみられる。付近の中期後葉の集落には谷底・氾濫平野内の微高地に立地するものもあり、相対的な高所を指向した低地内移動として捉えられよう。

注目されるのは、平野部との比高差が大きい丘陵尾根上に立地する集落が存在することである。川原表B遺跡は標高67～70m、丘陵裾部との比高差約40mとかなりの高所に立地し、竪穴建物が6棟検出されている。伊勢地域においてはこうした集落は他に確認されておらず、中期後葉や後期中葉にも同様の集落は認められない。川原表B遺跡は典型的な高地性集落といえるが、顕著な高地移動の例であり、こうした集落の存在も後期前葉の一つの特徴である。

以上からみると、全体的な動向として、後期前葉の集落は中・高位段丘上などへの高地移動を指向したものと考えられる。今のところ、谷底・氾濫平野内の微高地上で後期前葉の居住域は検出されていないことは、こうした傾向を裏付けており、中期後葉と大きな違いとして認めうるだろう。

ただ、墓域の中には舞出北遺跡や寺垣内遺跡のように自然堤防上に立地するものもある。後期前

葉の居住域には墓域を伴うものが確認できず、当該期の墓域は居住域から一定程度離れた場所に形成されていた可能性が高い。

また、谷底・氾濫平野の微高地上では、墳墓以外に後期前葉の土坑や溝が少数検出された事例がある。蔵田遺跡では、やや時期が不確定ながらも後期前葉の可能性のある堰状遺構や水田も検出されている。当該期には、谷底・氾濫平野内の微高地上は居住域ではなく墓域や生産域などとして利用されていたと推測される。こうしたことから、谷底・氾濫平野内でも水田耕作をはじめとする人間活動が広く行われていたことも窺われ、自然条件等によって低地部での活動が困難な状況であったとは考えにくい。

堆積環境 しかしながら、谷底平野・氾濫平野における居住痕跡が確認できない点からは、やはり後期前葉には低地部での居住が避けられていたとも考えられる。その原因としては、やはり自然災害による影響も考慮しなくてはならない。それについては、谷底平野・氾濫平野内の微高地やその付近に立地するいくつかの遺跡における土層の堆積状況が参考となろう。

雲出川沿いの自然堤防上に立地する舞出北遺跡では、後期前葉の方形周溝墓の可能性のある溝や土器棺墓が確認されているが、土層観察に基づいた堆積環境に関する分析が行われており、弥生時代後期中葉の遺構面は土壌化が進んでいることが指摘されている。つまり、後期前葉から中葉にかけて遺跡付近の土地は離水傾向にあり、頻繁に浸水するような環境ではなかったものと推測される。遺構も洪水砂で埋積している様相は確認できない。

辻子遺跡は扇状地に立地し居住域が確認されているが、当該扇状地は小河川による開析谷の開口部に形成された小規模なもので、河川の氾濫や土石流等の影響を被りやすい環境下にある。実際に、後期前葉の土坑の埋土最下層は砂層となっており、遺構形成後すぐにこうした粗粒堆積物が流入するような流水の影響を受けていることが窺える。ただし、居住域に隣接して検出された後期前葉の水田の可能性のある遺構は、上面が褐灰色粘土で被覆される。強い水流や土石流による堆積とは考えにくく、土坑の埋没状況とはやや異なる。同じ扇状地上でも場所によって堆積環境に差異があったものとみられる。

宮ノ前遺跡では、居住域が段丘裾部の緩斜面に立地する。そのため、土壌の流出・堆積が繰り返されていたと考えられている。発掘調査で検出された後期前葉～中葉の竪穴建物2棟のうち、斜面下方に位置するSH5については、遺構形成前後の堆積状況が判明している。SH5は淡緑灰色砂混シルト層を掘り込んで構築されているが、ほぼ同一面で縄文時代中期の土坑も検出されている。したがって、縄文時代中期から弥生時代後期までに堆積した土層は流失したと考えられる。

それに対して、SH5の検出面と、SH5直上で検出された飛鳥時代の竪穴建物SH8の検出面との間には、70 cmほどの厚い土層の堆積が認められる点は注意される。このことから、弥生時代後期から飛鳥時代までの間には、土層が大きく流失することがなかったと考えられる。これは、SH5自体が深さ40 cm程度遺存しており、それほど上部が削平されていないことから推測できる。そして、SH5の直上に堆積した土層は、黒色泥炭土とされるものである。斜面上方では薄くなっているが、ほぼ調査区全体にわたって堆積しており、20～30 cmほどの厚さが認められる。これは激しい流水等によって運ばれた土砂とは考えにくく、斜面上方から流入したとしても、比較的静穏な状況下で堆積した可能性が高い。土壌化層とも考えられよう。

こうしたことから、弥生時代後期中葉～後葉にかけては堆積環境が安定していた可能性が考えられる。ただし、写真からみる限りSH5の埋土は黒色に近く、本来は黒色泥炭土層の上面からSH5が掘り込まれていた可能性も残される。その場合は、弥生時代後期前葉～中葉の遺構面は土壌化が進んでいたという解釈も可能で、これは先の舞出北遺跡の状況と整合的といえる。

これらの例からは、伊勢地域では後期前葉に洪水等の自然災害が発生し、谷底・氾濫平野やその周囲に影響が及ぶこともあったが、この時期に特に甚大な被害が発生した痕跡は見出しがたい。谷底・氾濫平野内の微高地上では居住や生産活動が著しく困難な状況ではなかったと思われる。

c. 集落構造及び社会の変化

集落規模と居住単位 伊勢地域の中期後葉の比較的規模の大きな集落においては、居住域にいくつかの居住単位が存在する。一つの居住単位は数棟から10棟程度の竪穴建物で構成され、大規模な集落の場合はその居住単位が5単位以上存在するものもある。今のところ最も規模が大きな菟上遺跡では、全体で120棟ほどの竪穴建物が検出されているが、3棟の建物が重複する場合もあり、同時期に並存したものは40棟程度であったとみられる。

中期後葉には、こうした大規模集落が複数存在するほか、竪穴建物数棟からなる小規模な集落も各所に存在する。大規模集落と小規模集落の複合体として地域社会を形成していたものと考えられる。

一方で、後期前葉の集落はいずれも小規模で、竪穴建物数は多くても10棟に満たない。検出された建物数がやや多い遺跡では建物同士が重複する例もみられ、実際には5棟前後の竪穴建物からなる集落が一般的であった可能性が高い。集落規模については中期後葉と後期前葉の時間幅の差が関わっている可能性もあるが、これまでに検出された建物数や遺物量からみれば、時間幅の差を考慮しても中期後葉に比べて明らかに集落は小規模化していると考えてよい。特に大規模な集落は認めがたく、ほぼ同規模程度の集落が地域内に散在するような状況と推測される。こうした集落の小規模性もあって、居住域が複数の居住単位から形成される様子は明瞭ではない。

集落の構造の変化 集落の構造にも、中期後葉から後期にかけて変化する点が認められる。

一つは、儀礼空間の存在である。中期後葉の菟上遺跡では、集落中心部に大型の掘立柱建物が存在している。建物の機能については推定が困難であるが、集落内での儀礼等に関わる建物であった可能性がある。しかしながら、後期前葉の集落では、今のところこうした大型建物の存在は見出し難く、それに代わるような儀礼関連施設が存在した痕跡も確認できない。ただ、大規模流路において井泉関係の儀礼が活発に行われていた六大A遺跡では、後期中葉以降に儀礼が盛行するようになる点は注意できる。後期前葉を境に儀礼を行う主要な場が集落外へと移っていった可能性も考えられる。

もう一つは、環濠のような集落域の区画施設の存在である。伊勢湾沿岸地域では、中期後葉には環濠を設ける集落はほとんどみられず、尾張地域の大规模集落である朝日遺跡などでも中期後葉段階には環濠は埋没が進むなどして不明瞭となっている。後期になると環濠を設ける集落が増加するが、顕在化するのには後期中葉以降である。伊勢地域でも、後期中葉以降に環濠状の区画溝を設ける集落が増加し、後期後葉～終末期にかけて顕在化する。

こうした集落域における区画溝の存在は、後期前葉まで遡れるか不明瞭である。磐城山遺跡では居住域の縁辺部で大溝が検出され環壕と推定されているが、遺構内から出土した土器は後期中葉～終末期が主体で、後期前葉まで遡りうるか不明である。後期前葉～中葉にかけて集落が営まれた小谷赤坂遺跡では、尾根を分断するように複数の大溝を設けているが、やはり掘削が後期前葉まで遡るとは確定できない。しかしながら、中期後葉段階で不明瞭であったこうした区画施設が後期前葉を境に顕在化していくことは注目される。

このように、後期前葉の集落構造がやや不明確ではあるものの、少なくとも中期後葉から後期中葉にかけて集落構造が大きく変化しており、後期前葉は集落構造の変化の画期となった時期と位置付けられる可能性がある。

社会の変化 集落の高所立地傾向は中期後葉から始まっているとみられる一方で、同様に集落が高所に立地する後期前葉への集落の継続性が極めて低い点や、より高所への居住傾向が強まる点、そして、それらが自然災害による集落への直接的影響を要因としない可能性が高い点からは、中期後葉から後期前葉にかけての集落の変化は、当該期に生じた何らかの社会の変化を反映していると推測される。その社会変化の起因自体は、気候変動やそれに伴う生産域への影響などに求められるかもしれないが、伊勢地域では、まだ当該期の生産域の様相が詳細には明らかになっておらず、今後の課題といえる。しかしながら、原因となった事象は措いても、集落の小規模・散在化は、生業や集団間関係などにおいて、中期後葉の社会とは異なる状況を生み出したと考えざるを得ない。

今のところ集落の発掘調査事例が少なく、集落構造からは分業や階層化の進行など、社会構造に関する具体的な変化を読み取るだけの情報は得られないが、集落が小規模化・分散化したことは、地域内の協働、物流、婚姻など集団間関係を維持するために、集落間のネットワーク・紐帯の構築が重要化するとともに、より効果的な集落間の連携構築手段が必要とされたことは想像に難くない。そうした手段の一つに、共同での儀礼の催行があったと思われる。六大 A 遺跡のような居住域外での儀礼が後期前葉を境に顕在化することからは、集落の成員が少人数となり各集落単位での大規模な儀礼の催行が困難になる一方で、散在する複数の集落の結束を強める必要性が高まり、その結果、儀礼の場が集落内から集落外の共同の儀礼施設へと移っていったとも考えられよう。

ただし、方形周溝墓の様相からみると、伊勢湾沿岸地域では中期後葉に埋葬原理が変化するようであるが、中期後葉から後期前葉へは大きな変化は明瞭には看取できない [石井 2015]。むしろ、階層化の進行を示すような明瞭な変化は、集落構造にも変化が明確化する後期中葉から後葉にかけての時期に認めうる。これを参照すれば、中期後葉から後期前葉への社会変化は、集団間関係を急激に解体・変容させるようなものではなく、むしろ大きな変化は後期中葉から後葉にかけての時期に生じたと推測される。後期前葉の集落の小規模・散在化を契機として、それに応じた新たな社会構造へと変化し、集団間関係にも変化が顕在化していくのが後期中葉段階と考えることができよう。(石井)

④……………弥生時代後期への移行過程

(1) 土器の様相

最後に、前節までの検討の成果をまとめ、各地域の様相の総合を図っておきたい。土器については、系統の共通認識のもと、3時期区分に基づく後期前葉の把握を試みた。

中期から後期への移行 検討の結果、各地域において後期前葉の土器群を抽出し、搬入品および共通性の高い型式から、それらの併行関係を確かめることができる(表20・21)。これにより、後期前葉の土器には、近畿地方全体におよぶ共通の特徴があり、各地域においてこの段階を経ることによってはじめて中期と後期の土器様式が連続的に捉えられることが確認できた。これらのことは、既往の研究成果〔寺沢・森岡編1989・1990、濱田2001等〕を改めて詳細に検証したものと言えるが、前後の時期と比較して、やはり後期前葉の資料は少なく、当該期に集落数の減少が生じた可能性が高いものと考えられる⁽²⁹⁾。

次に、各地域の様相を既往の評価の観点からふまえて確認しておこう。近年、濱田延充によってなされた後期前葉の土器に関する体系的な検討において、中期からの土器様相の変化として、1) 器種構成の変化、2) 土器装飾の無文化、3) 土器製作技法の変化、4) 地域色の変化の4項目が挙げられている〔濱田2014〕。

汎西日本の現象としての器種構成の変化 器種と系統の関係を地域別に整理した表22をふまえて、濱田の指標について確認すると、1) については、今回の検討でも、第Ⅳ様式に認められた器種(受口壺、直口壺、屈曲する体部を持つ鉢、水平口縁の高坏)の消失と広域分布器種(長頸壺、短頸壺、有稜高坏など)の出現、およびその結果としての構成の単純化を確認することができる。これらの変化は、既往の研究において北部九州から中部瀬戸内や近畿、さらに東海地方にまで至る汎西日本の現象であることが指摘されているが〔赤塚2002、川上2011〕、その背景には、後述する瀬戸内海航路を通じた交流/交易が存在した可能性が高いものと思われる。

文様の減少と広域的な地域ブロックの形成 2) は、櫛描き文・凹線文の消失を指摘したものであり、今回の検討においても、おおむね追認できる。しかしながら、わずかに残存した文様のあり方をみると、対象地域内において次のような地域性が認められることに注目すべきであろう。すなわちそれは、a) 壺・甕・鉢など主要器種の口縁部に退化凹線を加える讃岐・播磨・摂津地域、b) 無文を基本として、一部の壺の口縁部に円形浮文ないし竹管文が施される程度の河内・大和・紀伊地域、c) 壺・甕・鉢の口縁部および肩部に、各種の櫛描き文を施す近江・伊勢地域という3つのブロックである⁽³⁰⁾。a) ブロックは、いわゆる瀬戸内系の土器であるが、瀬戸内海の北岸と南岸では様相が異なっており、北岸には、後述する山陽東部系土器群が広く分布している。b) ブロックは、近畿地方の南部にあたり、文様としては中期以来の生駒西麓系の施文の系譜を引くものと考えられる。c) ブロックは、近江およびその周辺地域において広く認められるもので、文様は中期以来の近江系の系譜を引くものである。

そして、施された文様に着目すれば、退化凹線および櫛描き文が横方向に連続性を持って展開す

表 20 各地域における搬入・模倣土器とその年代的 위치づけ

	讚岐	播磨	摂津	河内	紀伊	大和	山城	近江	伊勢
讚岐・広口壺C	★ (後期前葉1～2)			● 久宝寺電華07055高まり (後期前葉2)					
讚岐・広口壺D	★ (後期前葉2)		● 古曾部・芝谷住居K5 (後期前葉1～2)						
讚岐・直口壺A	★ (後期前葉1～2)		● 古曾部・芝谷包含層 (後期前葉1～2)	● 瓜生堂99-6区包含層 (後期前葉1～2)					
讚岐・甕A	★ (後期前葉1～2)			● 瓜生堂99-6区S061304 (後期前葉1～2)					
讚岐・甕C	★ (後期前葉1～2)			○ 久宝寺電華07056竪穴建物 (後期前葉1)					
讚岐・高坏F	★ (後期前葉1～2)	● 芝添 (後期前葉1～2)	● 古曾部・芝谷住居O1 (後期前葉1～2)	● 亀井II SD-14 (後期前葉1～2)					
河内・広口壺A	● (後期前葉1)	● 周世人相土坑22 (後期前葉1～2)	● 古曾部・芝谷礫濠K1a (後期前葉1)	★ (後期前葉1～2)	● 橋合2.4.5次トレンチ調査 (後期前葉1)	○ 唐古・鍵 20次SK-104 (後期前葉1～2)	● 中臣52次4号住居 (後期前葉1～2)	● 八夫第9次SD9301 (後期前葉1～2)	○ 八重垣神社SR069 (後期前葉1～2)
河内・無頸壺				★ (中期後葉)					
河内・高坏D	● (後期前葉1～2)	○ 小神辻の堂21-溝 (後期前葉1～2)	○ 古曾部・芝谷包含層 (後期前葉1～2)	★ (後期前葉1～2)	○ 弘西SX01ほか (後期前葉1)	○ 唐古・鍵 47次SD-2101 (後期前葉1～2)	○ 木津城山SX05 (後期前葉1～2)		
近江・甕A1			● 古曾部・芝谷住居K3 (後期前葉1)			● 唐古・鍵20次SK-104 (後期前葉2)	● 中臣52次1号住居 (後期前葉1～2)	★ (後期前葉1～2)	● 川原表B遺跡SB4 (後期前葉1)

【凡 例】
 ★：起源地
 ●：搬入品
 ○：模倣品
 下線：起源地と搬出先・模倣地の年代にずれがあるもの
 ()：出土遺構の所属時期

表21 編年の併行関係

讃岐	播磨	摂津	河内	大和	紀伊	山城	近江	伊勢
中期後葉2	中期末	中期末	中期末	中期末	中期末	中期後葉	中期後葉	中期後葉
後期前葉1	後期前葉1	後期前葉1	後期前葉1	後期前葉1	後期前葉1	後期前葉	後期前葉	後期前葉1期
後期前葉2	後期前葉2 ～後期中葉	後期前葉2	後期前葉2	後期前葉2	後期前葉2	a	b	a
		後期中葉1	後期中葉1	後期中葉	後期中葉 1・2	後期中葉	後期中葉	後期中葉
								後期前葉2期

るものであるのに対し、浮文・竹管文は個々に独立した単位の施文（すなわち粘土の貼り付けないし竹管の押捺）を横方向に展開するものであるという違いを認めることができる。このことから、これらの文様の本質的な違いは、施文の際の土器の回転運動と密接に関連することが推測される。そして、それは土器装飾にかんする単なる嗜好の違いというよりは、回転運動の利用の程度という土器製作の基本的条件に関連したものとみるべきではないかと考えられる。

製作技法の変化と小地域性 3) は、主にタタキ技法の評価に基づいて、製作台を使用しない土器製作技法の確立の可能性が論じられたものであるが、本稿の検討によれば、濱田が指摘するようなタタキ技法の顕在化は、後期中葉以降に下るとみてよく、その評価には見直しが必要である。とはいえ、調整の粗雑化や器壁が厚くなることなど、中期後葉からの製作技術の変化は確かに認められるのであり、その具体的な様相が先に見た3つの地域ブロックごとに異なっている点に注目したい。そして、調整の異同の意味を理解するための仮説として、ここでは、弥生中期から後期にかけての土器製作のもっとも本質的な課題は、薄く強靱な器壁をいかに形作るか、という点にあり、その解決策として、①櫛描き文や凹線文と関連した強い回転運動による成形（中期）、②一定程度の乾燥を加えた後に器壁を薄くするケズリ調整（中期～後期）、③適宜乾燥工程を加える分割成形および粘土を叩き締めることにより強靱さを生むタタキ技法の組み合わせ（後期中葉以降に発展）、④詳細は不明ながら外面に粗いハケ、内面に強いナデを残す調整法（中期～後期）という4種類の成形・調整技法が存在したものと考え、それぞれの様相を確認してみたい。

a) ブロックでは、中期以来の壺・甕の内面への②ケズリ調整が継続し、かつ頸部付近までと、その対象範囲を拡大する^(32, 33)。b) ブロックにおける主要器種の調整は、内面をナデ仕上げとすることを特徴とするが、外面調整には中期以来の伝統を引き継いで細かな地域性が認められる。具体的には、河内地域の生駒西麓系の甕が外面②ケズリ後にミガキ仕上げとするのに対し、大和地域の壺・甕は外面②ケズリ放しが多い⁽³⁵⁾。残るc) ブロックの在地的な土器においては、全体的にサイズの小型化は認められるものの、④ハケ・ナデ調整が継続しており、製作技法上の大きな変化を見積もる必要性は低いと思われる。

このように、中期の終わりをもって①回転運動が弱まった後、②ケズリを内面に用いるブロック a)、②ケズリを外面に用いるブロック b)、④ハケ・ナデ仕上げを継続するブロック c) といった形で調整の地域性が形成されたものと考えられる。それは大卒において文様のあり方と対応しているが、ブロック b) における大和地域と河内地域の調整の差のように、基層的技術の異同に基づく、より小さなまとまりも見いだせる。さらに、後期中葉に至ると、これらの地域色を払拭するように

表 22 地域別にみた主な文様・調整・系統

【概要】

		讃岐	播磨	摂津	河内	大和	紀伊	山城	近江	伊勢
主要文様		退化凹線			無文(浮文・竹管文)				楡描文	
調整(甕)		内ケズリ			外ミガキ	外ケズリ		内外ハケメ		
主要系統*	大型壺	瀬戸	生駒	生駒	生駒	生駒	生駒	生駒	生駒	生駒
	中小型壺	瀬戸	IV	IV	生駒	IV	IV	IV	近江	近江
	甕	瀬戸	IV	IV	生駒	IV	IV	IV	近江	近江
	高坏	瀬戸	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV
	器台	瀬戸	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV	IV

*IV: IV様式系、生駒: 生駒西麓系、瀬戸: 瀬戸内系、近江: 近江系

【系統別詳細】*

		讃岐	播磨	摂津	河内	大和	紀伊	山城	近江	伊勢
IV様式系	大型壺					■				
	中小型壺		■			■		■		
	甕		■		■	■	■	■		■
	高坏		■		■	■	■	■	■	■
	器台	■	■		■	■	■	■	■	■
生駒西麓系	大型壺	■	■						■	■
	中小型壺				■	■				
	甕				■	■				
	高坏	■	■		■	■	■	■	■	■
	器台	■	■		■	■	■	■	■	■
瀬戸内系	大型壺	■								
	中小型壺	■	■							
	甕	■	■					■		
	高坏	■	■					■		
	器台	■	■					■		
近江系	大型壺									
	中小型壺							■	■	
	甕			■				■	■	■
	高坏			■				■	■	■
	器台			■				■	■	■
VI様式系*	大型壺		■	■	■	■	■	■	■	
	中小型壺		■	■	■	■	■	■	■	
	甕		■	■	■	■	■	■	■	
	高坏		■	■	■	■	■	■	■	
	器台		■	■	■	■	■	■	■	

*トーンの濃淡は、土器の多寡を示す。

**VI様式系のみ後期中葉、他は後期前葉の様相を表す。

VI様式系の③分割成形及びタタキが盛行することになる。

地域色と系統構成 最後の4)に関しては、広範で斉一的な土器様式の分布が指摘されたものであるが、これまで見た通り、後期前葉の土器様相は、単純に斉一的とはいいがたく、器種構成、文様、製作技法のそれぞれのレベルにおいて異なった分布圏が重層するのが実態である。さらに、各器種には、弥生中期以来の複数の系譜（系統）が存在しており、その具体的な様相はより複雑であることが窺われる。

表22により、このような器種と系統の関係について確認すると、後期前葉における各地域の土器様式は、器種ごとにさまざまな系統を組み合わせた、モザイク状の様相を呈することが分かる。後続する後期中葉の畿内では、地域色を払拭するようにVI様式系が席卷することとこれを対比すれば、その特徴は一層明瞭に理解できるであろう。

また、既往の指摘のとおり〔濱田 2001 : p.25〕、中期から後期への移行は、弥生土器史上最大の変革といえるものであるが、一方で畿内地域において基調となるのは、中期以来のIV様式系であり、両者は断絶しているわけではないということは重要である。そのうえで、各地の系統構成をふまえて特に注目すべきと思われる動向として、ア) 生駒西麓系大型壺の広範な移動と模倣、イ) 河内地域と讃岐（高松平野）地域間の活発な土器移動、ウ) 河内地域と大和地域の親縁性の高まり、エ) 近江系土器分布範囲の拡大、オ) 山陽東部系土器分布範囲の東（摂津地域）への拡大を挙げておきたい。

生駒西麓系をめぐる動向 ア) は、後期前葉の近畿地方および東部瀬戸内地域で認められる広域的な現象である。これについては、強い横方向の回転運動を特徴とする中期的土器製作技術体系の崩壊を背景に、製作コストの高い器種について、いち早く分割成形技法が採用された生駒西麓産土器が多数搬入され、模倣されたという可能性が考えられる（第2章第4節摂津地域）。

イ) は、瓜生堂遺跡をはじめとする中河内地域の遺跡において、香東川下流域産の壺、甕、高坏、鉢が出土し（第2章第5節河内地域）、対する高松平野の上天神遺跡、天満宮西遺跡において、生駒西麓系の広口壺や高坏が多数認められることを指し（第2章第2節讃岐地域）、遠隔地間の直接的交流を裏付けるものと考えられる。香東川下流域産の土器は、さらに西方の北部九州でも出土しており、高松平野の地域集団が北部九州から大阪湾にいたる瀬戸内航路を通じた交流ないし交易の担い手となった可能性が高いものと思われる。

ウ) は、大和地域においては、壺や高坏だけでなく甕についても生駒西麓系が分布するなど、河内地域の影響が強く認められることに注目するものである（第2章第7節大和地域）。中河内地域における生駒西麓産土器と低地部の土器の融合を前提として（第2章第4節河内地域）、当該期における大和川ルートにおける土器の親縁性が高まっている。弥生中期以来の河内地域と大和地域の関わりについては改めて指摘するまでもないが〔佐原 1970〕、当該期における関係性の一層の強化が想定される。その一方で、大和地域の壺・甕に一定量が認められる体部外面のケズリ調整仕上げは、中期以来の在地的な製作技法の強固な残存を示すものである。

近江系の動向 エ) の近江系については、受口状口縁をもつ壺・甕・鉢が、近江地域に留まらず、山城・伊賀・美濃・越前・若狭地域においても在地化することが指摘されており（第2章第8節山城地域・第2章第9節近江地域）、前述した西の山陽東部系土器群に対し、東に形成された広域土

器様式圏としての評価が可能である。さらに、この範囲の外では、摂津地域、とくに古曽部・芝谷遺跡において多数の搬入品が認められ、淀川ルートを通じた交流が活発化したことが窺われる（第2章第4節摂津地域）。

山陽東部系土器群の動向 オ)については、中期末以来の地域間関係を下敷きとしつつ、山陽東部～北近畿におよぶ広い土器様式圏が東へと拡大し、摂津地域が“畿内”におけるその窓口的な位置を占めることとなったものと考えられる（第2章第4節摂津地域）。

土器からみた弥生後期の始まり 上記してきた内容をふまえ、技術論的および分布論的観点の両面に留意しつつ、後期前葉の土器様相とその背景についてまとめておきたい。

後期前葉には、中期後葉に広く普及した強い回転運動を用いた土器製作技術が放棄されるとともに、広域分布器種が各地で共有されることにより、一見斉一的な様相を示す。しかしながら、その内部には、主要な文様を共有する3つの地域ブロックが存在し、製作技術の面をみればさらに細かな地域性が内包されている。ここでいう器種構成の“斉一性”は、汎西日本的な広がりをもち、共通の時代背景の下に形成された、長距離交流／交易を軸とする遠隔地間のネットワークを前提としたものと考えられる。これに対し、文様にみられる広域的な地域ブロックは、河川流域を中心とした基幹的な交流ルートを通じた地域集団間の相互作用を基礎とするものと考えられ、また、製作技術の地域色は、基層的な技術の共有を示し〔深澤 1986〕、より日常的な集団間のコミュニケーションを反映したものと考えられる。このような重層的な地域色の存在は、VI様式系に席卷され、斉一的な様相を示す後期中葉以降との顕著な違いを示している。

さらに、中期後葉には、旧国単位程度の地域色の上に、凹線文が西から波及したことによる広く漸移的な地理的傾斜が認められたのに対し、後期前葉の広域的土器分布圏の中には、影響の発信源となる地域が認められる点も両者の大きな違いである。このことは、土器の系統構成の分析により特に明瞭となるもので、b) ブロックでは河内地域、c) ブロックでは近江地域が周囲に対して影響力を持ったことが窺える。このうち、河内地域の影響力については、大型広口壺の広がりについてみたような生駒西麓系の製作技術の卓越性という技術的要因と、瀬戸内海航路を通じた西方との交流の窓口という地政学的要因とがあいまって生じた可能性が高いと思われる⁽⁴⁰⁾。

このように後期前葉の土器様相は、きわめて複雑な内容をもつものであり、そのすべてに言及することは困難であるが、回転運動の弱まりという土器製作の基本前提の変革と、それに代わる技術の模索による地域色の発現を本質とするものとみることができるとともに、各地で生じたこれらの現象から、当該期における遠隔地間の交流の活発化と地域間関係の再編を窺うことができる。これに後続する後期中葉には、ほぼ後の令制畿内に相当する広い範囲において〔濱田 2014 : p.11〕、斉一的かつ閉鎖的なVI様式系土器が分布することが知られているが、その前提条件は、後期前葉における生駒西麓系や近江系の広範な移動とその背後にある人々の交流によって整えられたと考えられるのである。⁽⁴¹⁾（三好）

(2) 集落動態の画期

本共同研究では、河内、和泉、紀伊、大和、伊勢の5地域の集落を対象として、弥生時代中期から後期への変化について検討してきた。その結果、多くの共通点とともに、いくつかの相違点の存

表23 後期前葉における集落の様相比較

地域	集落						顕著な考古学的データ			
	数	規模	分布密度	高所立地化			環境変化	生業	社会的緊張	
				概要	(中期後葉)	後期前葉**				
摂津*	激減	全体として縮小するもの、一部に複合型が存在	極端に低下	中期後葉から一部で進行し、後期前葉に大規模集落は高所へ移動	大山神社遺跡 伯母野山遺跡 成合遺跡	<u>古曾部・芝谷遺跡</u>	河川氾濫等の痕跡を認めうるが、低地全体が居住不適地化したとは考えられない	交易の窓口(高所)	環濠(古曾部・芝谷遺跡)	
中河内	減少		低下	中期後葉から一部で進行するが、後期前葉にも大規模集落は低地で継続	山畑遺跡 高尾山遺跡	岩滝山遺跡	低地での環境悪化および大規模な河川氾濫が指摘されているが、地域全体が居住不適地化したとは考えられない	交易の窓口(低地) 大規模水田(低地)	—	
和泉	激減		極端に低下	中期後葉から一部で進行し、後期前葉に大規模集落は高所へ移動	野々井西遺跡 棚原	<u>観音寺山遺跡</u> <u>滑瀬遺跡</u>	低地での環境悪化が想定されるが、地域全体が居住不適地化したとは考えられない	磨石・叩石(高所) 石包丁(高所) 漁撈具(高所)	環濠(観音寺山遺跡)	
紀伊	減少		低下	中期末から後期前葉に高所や河岸段丘へ移動	亀山遺跡	<u>橘谷遺跡</u> <u>滝ヶ峯遺跡</u> <u>奥山田遺跡</u> <u>星尾山遺跡</u>	極微地形・微地形程度の変化、花粉分析では森林を開発して集落が移動	水田(低地) 貝類(高所) 磨石・叩石(高所) 水田(高所)	環濠・投弾・焼失住居	
大和	安定		低地の大規模遺跡は縮小、丘陵上の遺跡も小規模	低地では低下	後期前葉に高所立地集落が極端に増加	—	東大寺山遺跡 忌部山遺跡 巨勢山遺跡 国見山遺跡	低地での環境悪化への適応として溝が目立つが地域全体が居住不適地化したとは考えられない	—	環濠
伊勢	減少		縮小	低下	中期後葉から進行し、後期前葉には集落はほぼ完全に高所立地化	—	川原表B遺跡	河川氾濫等の痕跡を認めうるが、低地全体が居住不適地化したとは考えられない	扇状地等緩斜面における水田の顕在化?	高地性集落(狭義)、環濠?

* 大阪府域の様相。宮崎 2000, 岡田 2016 などの内容をふまえて作成。

** 下線は“複合型集落”を示す。

在が明らかとなった(表23)。

遺跡・遺構の数 前節でまとめを行った土器の検討に基づいて、集落動態の精査を行った結果、後期前葉の遺跡数は、前後の時期と比較して非常に少ないという傾向が多く地域において認められた。和泉地域の様相はその最たるものである(第3章第3節和泉地域)。ここでいう遺跡数とは、包含層や流路からの単独の土器の出土事例等をも含むものであり、検出された遺構・遺物の量に着目すれば、その差はさらに歴然としたものとなる。すなわち、建物数の比較によれば、紀伊地域では中期後葉に対して約90%の減少、大和地域でも約半減という結果となる(第3章第4節紀伊地域・第3章第5節大和地域)。さらに、中河内地域では、7つに細分された小地域のうちの3つのエリアにおいて顕著な遺構が認められない状況となる(第3章第2節河内地域)。このように、いずれの地域においても、後期前葉の資料はとにかく少ないというのが実態である。未発見の集落の存在も考えられないわけではないが、高地性集落の存在に対する注意がなされて以来長い年月が過ぎ、

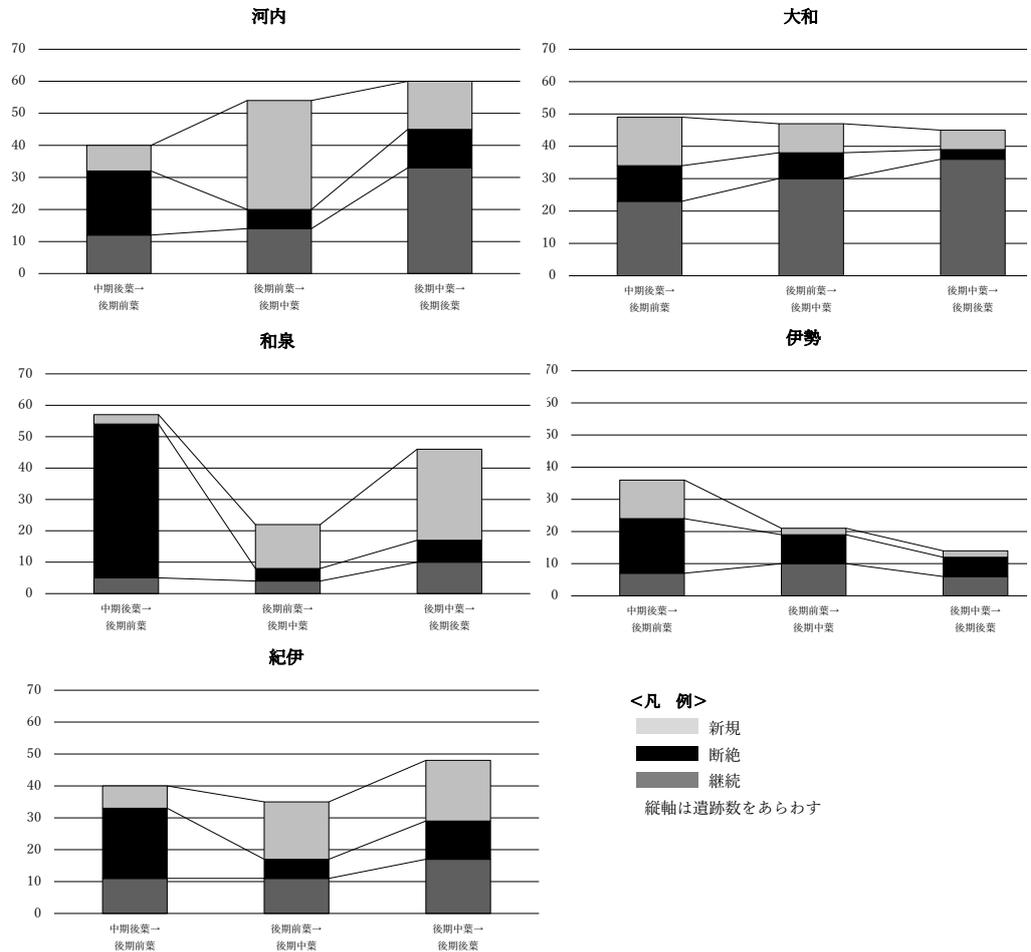


図 24 各地における遺跡の動態比較

全国的に膨大な面積の発掘調査が進んだ今日において、後期前葉の集落だけが発見されないような特殊な事情は考えにくい。

集落動態と分布密度 次に集落の継続性にかかる様相をまとめるため、図 24 において各地域、各時期の集落の継続、断絶、新規出現の数を整理した。これにより、大和以外の各地域において、中期後葉から後期前葉にかけて集落が断絶する例が卓越することを確認できる。個別の遺跡をみても、河内地域の亀井遺跡や大和地域の唐古・鍵遺跡など、中期後葉から集落が継続する例がわずかに存在するが、池上曾根遺跡をはじめとする中期後葉で終焉を迎える遺跡及び後期前葉から新たに形成される遺跡の存在がいずれの地域でも際立つ。この点は従来から注意されてきたが、後期を 3 期区分したことによって、それが土器研究の不備による見かけ上の断絶ではなく、中期から後期への移行期に生じた大きな変動を反映したものであったことがより明瞭に示されたものといえる。

さらに、集落の分布状況にも変化が生じる。中期の分布の状況は、酒井龍一のモデルに示されるように、「拠点集落」が 5 km 程度の間隔をもって並ぶ、高い密度をもつものとして評価されている [酒井 1984]。これに対し、後期前葉には、各地域で集落数が減少し、集落の分布密度が著しく低下する。ただし、中河内地域のエリア D・E のように、一部には集落が密集する場所もあり (第 3

章第2節河内地域), 地域ごとの差が顕著となる。

集落規模と人口変動 集落規模に関しては, 遺構・遺物の減少が示すとおり後期前葉に小型化するものが大半で, 亀井遺跡や唐古・鍵遺跡のような大規模集落はきわめて少数派であるが, それらにおいても中期後葉の規模をしのぐような形で巨大化することはない。このことと先述した遺跡数・建物数の減少及び多くの集落の断絶をあわせて考えれば, この現象は, 複数の集落の統合といった見かけ上の問題ではなく, 当該期における人口減少を根本的な要因としたものであったと解釈することが妥当と考えられる。もちろん中期後葉に対して後期前葉の時間幅が短いという事情も考慮すべきであり⁽⁴⁴⁾, 遺構・遺物の数量の多寡については, それらが営まれ, 累積する期間が影響していることは確かである。しかしながら, 次節で整理するように後期前葉がある程度の期間を有すると考えられるにもかかわらず, 多くの地域において集落の存在自体が確認できなくなる事態を時間幅だけで説明することは困難であり, 考古資料形成の前提となる人口の減少という観点から理解を進めることが必要と考える。

集落構造 上記してきた内容が中期後葉と後期前葉の間の変化を示すものであったのに対し, 集落構造については, 中期からの継続性及び後続する後期中葉との間の大きな差異を認めることができる。すなわち, 複合型集落とよばれるような内部に分節をもつ大規模集落が後期前葉には残存する(唐古・鍵遺跡, 観音寺山遺跡など)一方, 後期中葉以降にこれらのおおむねは消滅し, 小規模な居住域が散在する景観へと移り変わるのである。このような後期前葉と中葉の間の画期については, 弥生時代史における最大の論点の一つとなりうるものと考えるが, これにかかる詳しい考察は別の機会において果たすこととしたい。

集落移動と立地の変化 集落の断絶と新規出現が当該期の広い範囲において共通して認められることはすでに述べたとおりだが, 移動及びそれに伴う立地変化のあり方には, 地域差が認められる。すなわち, 1) 河川氾濫が頻発し, 「低地内移動」が活発に行われた河内地域(第3章第2節河内地域), 2) 低地の大型集落が断絶し, 丘陵上へと向かう「高地移動」が顕著な和泉地域及び紀伊地域(第3章第3節和泉地域, 同第4節紀伊地域), 3) 低地の大型集落が継続しつつも低地内の標高の高い地点及び丘陵上へと集落が分散する大和地域(第3章第5節大和地域), 4) すでに中期後葉に段丘上へと集落が移動している伊勢地域(第3章第6節伊勢地域)という状況である。既往の研究〔宮崎2000, 若林2017, 岡田2016〕によれば摂津地域も2)に類する様相を示すものとみることができる。

さらに, 具体的データにより, 後期前葉の前後を含めた遺跡立地の推移を確認すると(図25), 中河内地域では, 丘陵および段丘上に所在する集落の割合が弥生中期後葉から後期中葉に向かって漸増し, 後期後葉にも同程度で推移するのに対し, 和泉地域, 紀伊地域及び大和地域では, 後期前葉に増加した後, 後期後葉にかけて減少する。特に紀伊地域では, その割合の高さは著しく, また, 小地域単位で傾向に差がみられ, 立地変化が順次南へ波及していくことも特徴的である。伊勢地域では, すでに中期後葉には段丘上などに小規模な集落が散在する景観へと移行しており, 後期前葉の様相と大きな差はない。

上記のことから, 後期前葉から中葉にかけて近畿地方南部の多くの地域に共通する集落の高所立地化傾向はその内部に「低地内移動」「高地移動」あるいはその双方といった地域差をはらんだ形

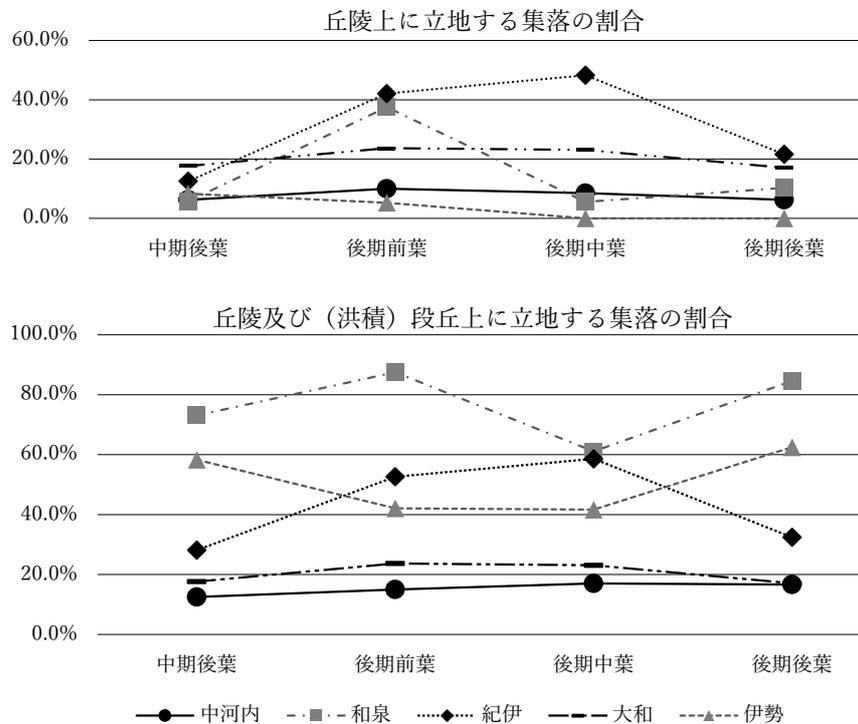


図 25 高所（丘陵および段丘上）立地集落の割合の推移

で展開したが、後期後葉にいたって再び低地志向が強まることによって地域差が解消していくという大きな流れをとらえることができる。

近年このような遺跡立地に注目した研究として、若林邦彦によって大阪平野、奈良盆地および淀川流域を対象とした集落動態分析が進められており、後期において高所立地集落が増加することにより、集落形成パターンの立地による差異が解消に向かい、古墳時代に通有の景観へとつながっていくという指摘がなされている [若林 2006・2009・2017]。この見解はマクロな方向性としては首肯できるものであるが、その検討は後期をひとくくりにしたものであったため、後期の中での変化は捉えられていない点に注意が必要である。これに対し、本研究では、後期を3期区分したことにより、中期から後期あるいは古墳時代にむけて高所立地傾向が順調に進展していくわけではないことが把握できた。このことは、単純に集団の活動領域が高所へと拡大・発展したわけではなく、後期前葉には、集落の立地を改めることを要請するような何らかの個別具体的な要因があったこと、そしてその反応には地域ごとに差があったことを示唆するものである。

高地性集落 そして、高所立地集落の中でも、特にその評価が問題とされてきたのが、麓の低地部との比高差が大きく、弥生時代の開始以来、人が居住することがなかったような高所に立地する集落、つまり狭義の高地性集落である。その研究史は膨大であり、ここで詳細に立ち入ることはしないが、森井貞雄によって示された図 [森井 2014] を参照して、近畿地方全体の動向を概観しておく (図 26)。

まず、中期後葉には、摂津から和泉地域にかけての大阪湾沿岸では、他地域に先んじる形で高地

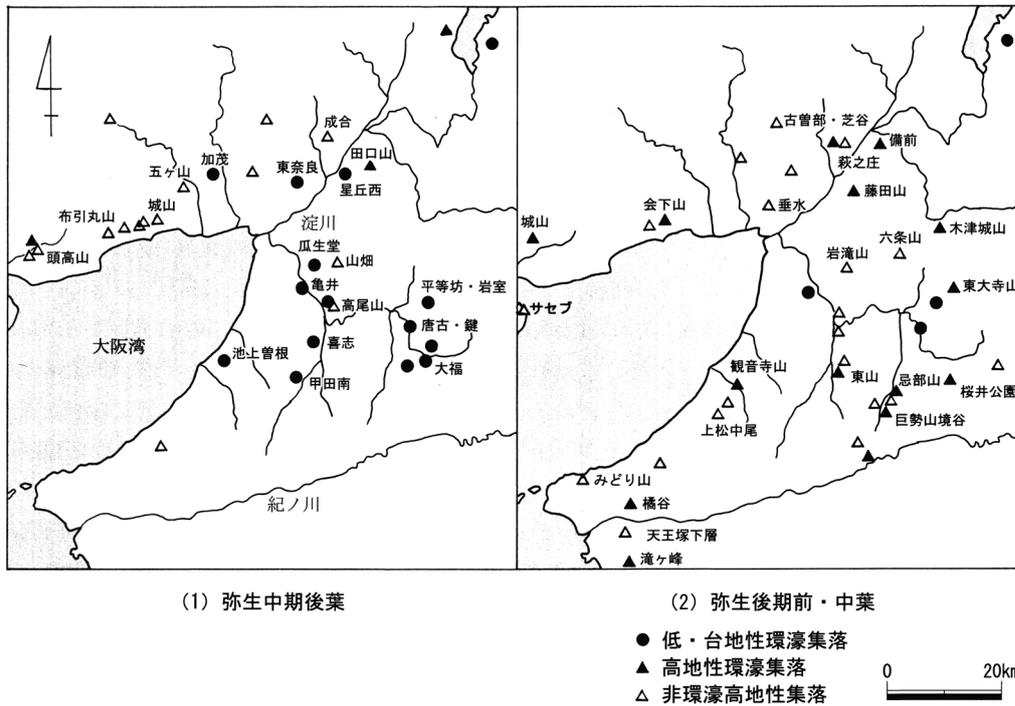


図26 高地性集落分布図 [森井 2014 より]

性集落が出現している。これは、同様の高地性集落が中期に盛行する瀬戸内海沿岸地域との交流という観点から理解すべきものと考えられる。後期前葉にいたると、これらの地域に加え、紀伊地域、大和地域、山城地域などへと分布範囲が拡大する [森岡 1996]。これらについては、海への眺望にすぐれたものが多い中期の高地性集落との対比により、“内陸路に軍事的防衛的監視装置を必要とする社会的緊張関係”が反映された可能性が指摘されているほか [柴田 2004 : p.323]、その分布は、東の東海・北陸地方へも広がり、存続期間も長いことから、“軍事的・政治的な緊張関係が地域密着型の拡大・恒常化を呈した”ことを反映するものといった解釈が示されている [寺沢 2003b : p.107]。また、当該期の一部の地域では、丘陵上に大規模かつ分節を内包する「複合型集落」 [若林 2001] が出現することも重要である。その具体例として、狭義の高地性集落よりは隔絶性の低いものを含む形ではあるが、摂津地域の古曾部・芝谷遺跡、南河内地域の東山遺跡、和泉地域の観音寺山遺跡、紀伊地域の船岡山遺跡、橘谷遺跡等を挙げることができ、寺沢薫が指摘する通り、これらの集落と同時期の低地の大規模集落とは負の相関関係、すなわち同一地域において低地の複合型集落と高地の複合型集落は併存しないという状況にあるようである [寺沢 2003b : p.104]

上記の大まかな動向をふまえ、ひとまず地域における集落の様相を A) 高地性集落あり、B) 丘陵上の「複合型集落」あり (高地性集落も併存)、C) A・Bのいずれもなし、という3類型に分類することができよう。中期後葉/後期前葉の各時期における類型の組み合わせにより、今回の分析対象地域の様相を整理すると、摂津地域=A/B、中河内・和泉地域=A/A、大和・伊勢地域=C/A、紀伊地域=C/Bという形で多様であるが、中期後葉に大阪湾沿岸に出現した高地性集落が、後期前葉に東へと分布を広げるという大きな流れは前述のとおりである。また、摂津地域や河内地

域においては、いずれの時期にも高地性集落が存在するが、個々の遺跡を見た場合、継続するものはきわめて少なく、断絶ないし移動を伴うことに注意する必要がある。

変化の跛行性とその要因 上でみてきたように、後期前葉には、集落の高所立地傾向に広域性が認められると同時に、さまざまなレベルの地域差が存在する。これらのことを理解するうえでは、近年めざましい進展をみせる中河内地域を対象としたジオアーケオロジーの手法に基づく分析の成果が重要である。そこでは、中期後葉後半から河内湖の水位が上昇し、後期前葉に河川氾濫が頻発するようになったことを受けて、居住域が相対的な高所へと移動したことが具体的に示されている[大庭 2014, 井上 2020 ほか]。これらの現象は、当該期の降水量の増加と関連付けて理解されているところであり、広範な高所立地化傾向を招いた要因が気候変動にあると説明できれば非常に明快である。しかしながら、それによってすべてが理解できるわけではない。なぜなら「低地内移動」を主とする中河内地域とは異なり、「高地移動」が顕著となる他の地域では、何故に「低地内移動」に留まらず山地・丘陵へと居を移さねばならなかったか、という次なる疑問を生じることになるからである。

実際、後期前葉の遺構・遺物の検出地点の悉皆的な集成によれば、「高地移動」が顕著な前述 2) 和泉・紀伊(・摂津)および 3) 大和地域においても、低地における人間活動は一定程度継続しており、また後期前葉における遺構の埋没環境を堆積土層から窺う限り、後期前葉に低地が水没したといった状況は確認できず、面的に居住不適地化したとは考え難い。さらに、いくつかの地域でみられるように中期後葉の高地性集落が後期前葉に継続しない点は、低地に対して高地が環境的に卓越していた可能性を否定する根拠となりうるだけでなく、考察にあたって社会的要因を考慮することの必要性を示唆するものである。特に、先に指摘した後期前葉における人口減少との関連性が大きな問題となろう。

人口を左右する基本的要因として生業が大きな問題の一つとなるが、後期になって丘陵上の「複合型集落」を含む高地性集落が発達する一方、低地の集落は低調となる紀伊地域では、農具の出土や貝塚の存在から、高地性集落における低地での水田耕作や海浜部での生業の継続が指摘されている(第 3 章第 4 節紀伊地域)⁽⁴⁵⁾。一方、中期後葉から後期前葉にかけて少数の高地性集落が営まれつつも、居住の中心は低地において継続された中河内地域は、瀬戸内海交易の窓口としての機能を担ったと考えられるが、その起源は中期後葉以前にさかのぼるものと考えられる。また、大規模な水田が営まれたと考えられることも低地で集落が継続したことと関係があるかもしれない。今回の検討において、生業に言及できる成果は少ないが、これらのことから、各地域において低地の利用は継続しながらも、居住域を高所へと移した地域と、低地において継続した地域との差があった可能性が考えられよう。⁽⁴⁶⁾

高地性集落の性格については諸説があるが、その立地および環濠、投弾といった遺構・遺物の存在は、これらの地域における社会的緊張を反映したものである可能性は高いとみてよいだろう。また、紀伊地域においては、高地性集落と銅鐸の埋納との関連性が指摘されており(第 3 章第 4 節紀伊地域)、集団のアイデンティティの危機ないし変質をうかがうことが可能かもしれない。

集落からみた弥生後期のはじまり 上記してきた内容をふまえ、後期前葉の集落様相とその背景についてまとめておきたい。

まず、今回の検討の成果としてもっとも強調したい点は、集落動態の分析により、後期前葉において顕著な人口減少が生じている可能性が高いと考えられることである。そして、それは各地域における多くの集落の断絶を伴うものであり、それにより、集落間の距離の増大あるいは分布密度の顕著な低下を招くこととなったものと考えられる。

もう一つの顕著な傾向として、後期前葉をピークとする集落の高所立地化が挙げられるが、その具体的なあり方には地域差が認められた。すなわち、「低地内移動」により生活の中心を低地で維持した地域と、「高地移動」を行った地域および両者の中間的な様相をもつ地域といった差が生じているのである。そして、この地域差は、各地域における高地性集落の発達とも関連性を有している。

問題はその要因であるが、大きくは気候変動（降水量の増加）を背景としつつも、これに対しては、ある意味過剰な反応とも言える「高地移動」の存在および地域によって移動に時期差があることを考慮すれば、環境変化に社会的要因が絡み合い、地域ごとに様々な反応を惹き起こしたと考えることが妥当であろう。そして、「高地移動」した集落の有する防御的側面に留意するならば、当該期において社会的緊張が相当程度の高まりをみせたことは確かなものと思われ、この点と先に強調した当該期における人口減少との因果関係をどうみることが重要な問題となる。具体的には、たとえば戦乱・抗争によって人口が減少したのか、あるいは人口減少に伴う諸関係の変化が社会的緊張を引き起こしたのか、といった形でいくつかのシナリオを想定することができるのである。この点に関しては、自然科学的手法による分析の成果をも参照のうえで総合的な判断を行うことが必要となるが、本稿では、当該期に想定される抗争の具体像〔藤原 2004〕およびその関係資料の質・量をふまえ、後者すなわち何らかの要因によって広範囲において人口が大幅に減少し、それによって必要となる新たな社会関係の構築と緊張状態に対して、地域ごとにさまざまな形で対処を行ったという解釈の蓋然性が高いものと判断しておきたい。（三好）

（3）弥生時代後期前葉の実年代に関する現状認識

次に弥生時代後期前葉の実年代について現状の認識をまとめておきたい。これまで後期前葉の時期幅の短さが遺構や遺物の多寡に影響しているとする見方もあり、実際にどの程度の時期幅が見積もれるかが議論の上で重要であるためである。

2000年代以降、弥生時代後期開始の実年代をめぐる議論は決め手となる資料が増えないことにより小康状態にある。後期前葉の実年代に関する理化学的分析の成果は点的にしか上がっておらず、そのため舶載文物による交差年代、出土銭貨が実年代を探るのに有効とされてきた。ここでは研究史を逐一紐解く紙幅はないが、前後の時期も併せて理化学分析、交差年代の順に後期前葉をめぐる現状を確認する。

a. 理化学的分析による現状認識

中期後葉の測定値 中期後葉の実年代を点的に示す資料としてまず挙げられるのは池上曾根遺跡で検出された大型建物の柱根の年輪年代 B.C. 52 年があり〔秋山 1996〕、C14 ウィグルマツチの成果とも整合的とされる〔今村ほか 2004〕。また近年、放射性炭素年代測定と年輪酸素同位体比分析が近似する値を示す事例が散見されるようになり、例えば石川県八日市地方遺跡では中期後葉に先立つ

同遺跡 9 期の資料で B.C.2 世紀前後、中期後葉にあたる 10 期に並行する周辺遺跡の資料では B.C.1 世紀の値が示されている [若林 2018]。また京都府城陽市下水主遺跡では、中期末 IV -3 様式の土器を含む盛土（法面覆土）にバックされる流路護岸に使用された木材の残存最外年輪が酸素同位体比分析で A.D.1 年であり、かつ同じ木材の放射性炭素のウイグルマッチング年代は 54 B.C. ~ 10 A.D. (2 σ) で収まることから、異なる分析の成果で合致する成果があがっている [中塚武ほか 2018]。この木材は樹皮まで残存せず、またバックするのは人為的な護岸盛土なので古い時期のものが含まれる可能性が排除されない点は注意が必要であるが、ひとまず中期後葉でも末の年代が紀元後に及ぶとみてよい。このように理化学年代からは、中期後葉が B.C.1 世紀を中心とし、紀元前後を含む年代が示される。

後期前葉への測定値 近畿地方における後期前葉の放射性炭素年代の較正年代は紀元直後である [春成ほか 2011]。しかし後期前葉以降も含めて他の分析ではあまり成果が上がっておらず、加えて少なくとも 1, 2 世紀以降は放射性炭素年代の測定値が実際より古く出るとの指摘があり [中塚武ほか 2018, 中塚良ほか 2018]、特に先に触れた下水主遺跡でも 2 世紀の木材で同様の結果が示されている。少なくとも紀元直後よりは年代が下がる可能性が高い。いっぽう大阪府東大阪市・八尾市池島・福万寺遺跡のセルロース酸素同位体比分析では河内 V-3 様式の時期幅の 1 点に A.D.80 年代半ばから後半が含まれることが示された [井上・中塚ほか 2018]。これは IK 第 11-2a 層下面の杭列 21 のうち最も新しい年代が A.D.78+ α 、同層上面の溜池に伴う杭列 43 の年代が A.D.92 年とされ、同層上面水田面と、同層下面 102 流路〔新〕と溝 30 (FJ 第 11-3a 層下面の遺構だが 102 流路〔新〕と同じ層位と考えられる) から出土した土器がそれぞれ河内 V-3 様式とされることによる [井上 2017]。ただし本稿の土器編年案では溝 30 から出土した土器で河内 V-3 様式とされたもの [井上 2017] は後期中葉 1 に位置付けられ、土器群全体の年代幅も後期前葉から同時期までに収まる⁽⁴⁷⁾。また 102 流路〔新〕では甕 Cc [廣瀬編 2007, 図 184-62] の胴部最大径が中位付近に下がっているが後期中葉以降という以上の評価は難しい。同層上面水田面出土土器については現状では評価が難しい。このように考えると、IK 第 11-2a 層下面の遺構の時期幅としては後期前葉から後期中葉が含まれ、上層の杭列 43 の年代 A.D.92 年を下限として杭列 21 の年代 (A.D.42+ α ~ A.D.78+ α) を含むと捉えることが可能である。以上からは細かな年代については検討が難しいものの、少なくとも後期前葉の下限は A.D.1 世紀の中にあるとみてよい。

年輪年代では注目される成果があり、まず福岡市雀居遺跡三次 II 区 SD02 から出土した木製槽があり、伴う土器は下大隈式古相で固まる。年代は最外年輪が A.D.100 年で +33 年程度となり、北部九州の下大隈式古相（後期後半古相）の年代幅の中に A.D.2 世紀中ごろが含まれる [久住 2015]。これ以前に後期中葉の下大隈式最古相が位置するとされるので、後期前葉の下限はさらに前となり先にみたセルロース酸素同位体比分析の成果とも矛盾はない。他に京都市大藪遺跡で検出された大型建物の柱根が辺材型で最外年輪 A.D.51 年であるが、土器は後期後半（山城 V-3 様式）のため年代に乖離があり参照しがたい。

b. 交差年代による現状認識

土器と鏡 これまで大陸との確度の高い交差年代が追究されてきたのは北部九州地域である。北部

九州における後期前半に位置する高三瀦式は吉備の鬼川市I式を介して前半（後期初頭）が近畿地方における中期末、後半（後期前葉）が近畿の後期前葉と併行する〔寺沢 2014, 久住 2015 ほか〕。後期前葉は甕棺の型式では橋口達也のKIVb新相とc古相の時期となる〔橋口 2005⁽⁴⁸⁾〕。基本的に北部九州の中期末の甕棺墓（～KIIIc）では方格規矩鏡の副葬がみられないことにより下限を新代より遡らせ、かつ鏡式にまとまりがあることから入手後世代をまたがず副葬されるとみて紀元前後とする見方で共通している〔橋口 2000, 柳田 2002 など〕。この後に高三瀦式前半（後期初頭, KIVa式・KIVb古相）が後期前葉との間に挟まるため、ひいては近畿地方における後期の開始は確実にA.D.に入る。漢鏡〔岡村 1984・1993〕の動きをみると、後期前葉ではKIVb新相の甕棺墓から漢鏡4期（B.C.1世紀後葉～A.D.1世紀初め）後半の鏡が、KIVc古相では漢鏡5期（A.D.1世紀中頃～後半）の鏡がみられるようになり、漢鏡の時期を追った順当な流入〔岡村 2013〕をみてとることができる〔久住 2015〕。近畿地方でも後期前葉の京都府木津城山遺跡方形台状墓2から漢鏡5期中～新相となる獸帯鏡が出土しており、少なくとも下限が1世紀後半以降となる。

出土銭貨 日本列島に中国大陸から搬入された銭貨の出土事例としては漢半両・五銖銭、貨泉をはじめとする王莽銭がある。これらは現在日本各地で123か所の出土事例があるが⁽⁴⁹⁾、中世以降の埋納銭に含まれるものが多く（68か所）、弥生時代後期の土器と伴出したもの（58か所）も多くは流路や包含層からの出土が多く検討に堪えない。一方で、時期が絞り込める事例も、これまでよく取り上げられてきた長崎県シゲノダン遺跡や岡山県高塚遺跡、大阪府瓜生堂遺跡の事例に加え、北部九州で事例が増加しているが時期が確定できるものは多くなく、少なくとも遺構に伴うものは後期前葉からという理解に変わりはない。

中世以降の埋納銭については宋銭に混じって渡来した可能性が高く、議論から除外される〔塩屋 1989〕。次に弥生時代後期後半から古墳時代前期の事例が多い。中国銭の多くは流入時期が弥生時代後期後半以降であろうとする指摘はなお有効であり〔橋口 1988, 高倉 1989〕、下限についての議論は意味をなさない。

弥生時代後期の年代を考えるうえで王莽銭、特に当該期の遺構に伴うものとして貨泉が注目されてきたのは周知のとおりである。貨泉の鑄造開始は漢書の記載に齟齬があり、天鳳元年（A.D.14, 食貨志）と地皇元年（A.D.20, 王莽伝）の2説がある。ただし先にみたように貨泉は時期の下限を限定できず、新の滅亡後、後漢王朝によって五銖銭が再び鑄造されるようになる建武16年（A.D.40）以降も鑄造されたとみられる〔蔣 1997, 山田 2000〕。漢書王莽伝で始建国元年（A.D.9）から各郡での鑄銭を開始したとあるのを裏付けるように、貨泉の鑄型は中国国内で広く出土する。加えて漢書王莽伝に地皇2年（A.D.21）に至るまで断続的に私鑄に対する罰則を定めた記事があるため、新代には私鑄がかなり横行していたとされる。

さて日本におけるこれまでの議論の中では戴志強・謝世平の分類が用いられている〔戴・謝 1984, 高倉 1989, 寺沢 2003a〕。そのなかで貨泉はI・II・III類に分類され、それぞれ天鳳年間（A.D.14～20）、天鳳末年～地皇年間（A.D.20～23）、以後建武16年まで（～A.D.40）に年代が充てられている。これは濱田延充が批判、寺沢も呼応して明言したように〔濱田 2006, 寺沢 2014〕、型式分類の差異に対して歴史事象を当てはめて説明したものと取れる。特にIII類の年代幅について議論になるのであるが、単純ではない。先に触れたように官鑄でも多地域多数の工房

の製作にかかると思われる、加えて私鑄銭の存在を考えればなお十分な検討がなされているとはいえない。戴・謝論文は河南省の一例に過ぎず、またⅠ～Ⅲ類の出現の背景として戴・謝論文とは異なる位置づけも可能であり〔久米 1988〕、Ⅲ類が実際に新が倒れる以前から鑄造されていなかったかもお検討が十分ではない。寺沢は規格外のⅢ類が多く後漢中晩期の墓から出土することを強調するが、これらは冥葬用の「雑貨泉」とされ分類外のものである〔蔣 1997, 佐藤 2015〕。こうした「雑貨泉」を除いてしまえば、Ⅲ類の貨泉がすべて漢書食貨志の記載から大きく規格が外れるわけではない。往々にして出土貨泉の重量が軽いことが指摘されるが、青銅は安定した金属と思われがちであるものの鑄の種類によっては基質が破壊され本来より軽くなることもあり〔高 1979〕、注意が必要である。また日本で出土しⅢ類とされるものの中に雑貨泉は含まれない〔佐藤 2015〕。Ⅲ類についてもⅠ・Ⅱ類から型的に崩れているため仮に初鑄には遡らないとしても、上限としては新代まで含まれる可能性を否定できないのが現状である。

日本出土の銭種構成が中国国内における窖藏銭の構成に似ており、これが新の崩壊により放出されたとする推定もあるが〔佐藤 2015〕⁽⁵⁰⁾、一方で窖藏銭の構成は新代末の混乱期における流通銭の実態を示すと考えられ〔山田 2000〕、新代末における中国国内の流通状況が順当に日本列島にも反映されていると捉えることもまた可能である。日本における出土傾向は限定的な貨幣流通の結果とみてもよい〔武末 2009〕。銭種構成からもまた日本列島への流入の上限が新代にある可能性を否定できない⁽⁵¹⁾。

以上を鑑みると、結局貨泉をはじめとする王莽銭から年代を議論する際には、伴った後期前葉の土器の年代の時期幅の中に新代のうち A.D. 14 (20) 年～23 年が含まれる可能性がある、といえるにすぎない。今後中国国内でより日本に近接する地域での分析成果が期待される。消極的な見方と捉えられるだろうが、ただし先にみたように、後期前葉には漢鏡 4 期後半に属する新代の鏡が流入する時期であることも注意しておきたい。無論厚葬墓に副葬された漢鏡と集落域から出土する貨泉を同列に論じることはできないが、後期前葉は貨泉も併せて新代の文物が日本列島にもたらされはじめる時期と捉えられるのは確かである。

c. 後期前葉の実年代

以上を考えあわせれば、近畿地方における後期の開始年代である後期前葉の実年代は A.D. 1 世紀を中心とすることは確からしい。後期前葉の上限については細かな年代の確証をいまだ欠き、あとは研究者の立場により急速伝播を認めるか、鏡など舶載文物の保有期間あるいは相対編年 1 型式の時間幅をどの程度として見積もるかにより前後する。近畿では中期後葉が紀元後に及ぶことに加え北部九州における高三瀆式前半の時間幅を考慮する必要があるが、漢鏡 4 期後半の鏡と貨泉の流入実態如何によっては新代にまで遡りうる。下限はセルロース酸素同位体比分析の成果によれば A.D. 80 ごろまでに収まり、かつ鏡の併行関係からは A.D. 1 世紀後半以降となるのであるから、A.D. 1 世紀第 3 四半期から最も下って A.D. 80 前後まで含む可能性がある。すなわちおおよそ A.D. 1 世紀の第 2 四半期と第 3 四半期を中心とする時期を考えておきたい。(山本)

(4) 環境変化との関わり

a. 社会変化とその要因

社会変化の実態とその背景 弥生時代中期から後期の集落の変化については、集落・建物数の減少とともに集落の断絶、分布密度の低下が認められた。他方、「高地性集落」や丘陵上に新たな集落が出現し、「高地移動」や「低地内移動」といった集落の移動や立地の変化を伴うことが明らかになった。さらに土器編年の見直しの結果をふまえ、本研究では後期を3期に区分することで後期前葉により明確な変化が認められ、集落の変化だけではなく土器の変化を伴う大きな社会変化として認識できた。

第3章の分析の枠組みにおいても研究史の流れを検討したが（第3章第1節）、これまでこうした社会変化を生み出す背景については、「高地性集落の背景に社会的緊張関係による人為的な要因」[小野 1953・1959]のように、当初は社会的緊張が想定されてきた。その後、「倭国乱」との関係を意識した社会的緊張関係が変わって、「後漢を背景とした北部九州による舶載品の流入顕在化による緊張関係」[寺沢 1985]、「金属製品などの必要物資の流通の掌握とそれを巡っての緊張関係」[松木 1996]、「石器から鉄器への転換による流通システムの移行」[禰宜田 1998]や、「大陸との交流の動向に影響を受けた集団関係の変化」[小沢 2000, 溝口 2001]といった交易や物流構造による集団間関係の変化が想定された。しかし、鉄の流通に関しては、近畿地方の鉄器製作技術からは鉄器の出現による流通形態の変化が大きくないとみる意見もあり、鉄などの外部資源の流通を重視する立場に対しては異論がある[村上 1998]。石器の流通形態と鉄器の流通形態は排他的であるとしたうえで、前者の解体に近畿中期弥生社会の崩壊をみる意見もある[寺前 2011]。

一方、高地性集落の石器組成からは、軍事的な性格が想定される集落以外にも平地の集落と性格の差異を見いだせない集落も存在することが指摘されている[禰宜田 2002]。また、漁撈活動の増大なども認められ、生業の多様化に伴う交易活動の活発化が指摘されている[乗松 2006]。さらに、高所立地する集落でも通常の機能を持つ集落を「山住みの集落」とし、その中で監視や軍事的機能をもつものを「高地性集落」として再定義する動きもある[柴田 2006]。このように、高地性集落のそれぞれの生業や機能から性格を把握し、個別の要因で説明しようとする立場も存在する。

さらに、上記のような見解に対して、弥生時代中期から後期への変化をさほど急激なものとして捉えずに、親族集団間の利害調整機能の拡大による解消とみる意見も一部で認められる[若林 1999b・2006]。

また、近年では、農業生産から集団関係を把握する立場に立ち、農業生産の変化に重きを置いて社会の変化を説明しようという立場もある。「農耕技術進展の帰結による大形集落の解体」[秋山 2007]や「灌漑システムに必要な労働編成の形態が集落形態や墓制の変化をうながした」[大庭 2016a]など弥生社会を支える基本的な生業である水田経営の変化が重要視されている。しかしながら、本研究における河内地域での検討からは、池島・福万寺遺跡における重層的な灌漑システムへと変化するのは弥生時代後期中葉となり、後期前葉の集落及び土器の変化を強調する立場からは、農業生産の変化よりも社会の変化が先行する。そのため、順調な農業生産の発展だけでは、社会変化の要因として理解できないことになる。

環境変化との関わり そこで、弥生時代中期から後期の社会変化の要因として、寒冷化/温暖化、湿潤化/乾燥化といった、環境の変化が当時の食糧生産である農業生産へ及ぼした影響について着目されている。

特に近年では、「環境の不安定化による食糧生産の危機に対して、金属器による生産技術の革新、大規模な協業やそれを進めるための意図的な集住、階層化をはらむ集団関係の再構成などの環境変化への対応」[松木 2014]、「集落形態の変化が農業生産や土地利用と密接に関係し、その要因として河内湖の水位上昇に伴う河川氾濫による環境の悪化」[大庭 2014・2016b]といった、要因としての自然環境の変化とその影響について考察が試みられている。

また、古墳時代後期においても「A.D. 536 イベント」の影響に関する問題提起がなされており[新納 2014]、古気候復元研究の進展とともにこれまで以上に社会変化の要因としての環境変化が重要視されている。

一方で、本研究でも確認できたように個別の地域や集落での社会変化の内容については、一律なものではなく、地域や時期によっても細かな差異が存在し、その変化に連鎖的な影響が読み取れる。また、自然環境の変化により新たに地域内での人口や必要物資の確保などの変化が生じたとみられ、環境の変化に対する対応こそが社会変化の要因と考えている[森岡ほか 2016]。

b. 弥生時代中期から後期の環境変化

「環境決定論」と既往の気候変動研究 しかしながら、環境変化に原因を求めるかつての説については、環境変化が社会の変化に対して決定的な影響を与えたとされ、考古学や歴史学と十分な整合性が十分とは言い難いものもあり、「環境決定論」として反発的な意見も多い。

例えば、弥生時代中期から後期への社会変化については、主に河内平野を中心とした冷涼・湿潤化に伴う植生変化とともに、拠点集落の周辺で洪水堆積層が確認されることを根拠に当該期に気候変動により大きな水害が頻発し、多くの集落が廃絶したことを要因とする説がある[安田 1984, 中西 1992]。

近年では、その根拠となる洪水堆積層の解釈や、洪水の発生による直接的な集落の廃絶に否定的な意見が多く[井上 2011]、社会変化の要因に単純な環境悪化を認めることは困難である[那須 1989]。さらに、地形・堆積環境の変化は居住域及び水田からなる生産域の移動の原因となったが、決して廃絶することなく、隣接地に形を変えて再び形成されることから、環境の変化に柔軟に対応したという意見もある[井上 2011・若林 2016]。

一方、古地形復元により河内平野の集落景観を復元した大庭重信は、後期前半には北部域で耕地環境の悪化が認められ居住域の集落規模が減少することを示している[大庭 2014]。

本研究においてもこうした視点に目を配りつつ、洪水痕跡や洪水堆積物の有無について各地域で検討を行ったが、面的な洪水や旱魃などの痕跡を考古学的に認められる事例は少なく、自然環境の変化に伴う直接的な影響による集落の廃絶・移動の可能性については低いものと考えられる。しかし、河内地域では水位上昇や環境悪化を受けたのちに一定期間を経て居住域や生産域が形成される場合もあり、環境の変化には必ずしも柔軟に対応できたということではないようである。

弥生時代中期から後期にかけての環境変化 一方、これまでに提示された尾瀬ヶ原のハイマツ花粉の

分析による本州中部の気温変動を復元した研究〔阪口 1989〕及び遺跡ごとにサンプリングされた花粉から見る植生変化などの気候変動にかかわるデータ〔安田 1984, 金原 2011〕などからは、弥生時代中期の温暖期から古墳時代への寒冷期へと向かう大きな流れがあり、弥生時代中期後半から後期前葉はこの時期に相当することが判明している。さらに近年では、太陽活動の変化を記録する樹木年輪のC14生成率の変化からみた気候変動〔今村・設楽 2011〕、響灘沿岸や芸予諸島において確認されている弥生時代中期後半の寒冷化に伴う風性砂丘の形成〔甲元編 2007, 村上 2016〕、さらに鳥取県東郷池固定堆積物の年縞の調査による2000年前の寒冷化など〔加藤ほか 1998〕、当該期の寒冷化を裏付ける多くの分析結果があり、共通の理解として捉えられつつある。

しかしながら、その分析結果をもとに、社会変化に関わる因果関係について考古学事象との関係を示しつつ明かに説明できていない現状もある。この点については、既往の気候変動に関する分析結果の時間軸の曖昧性も指摘されており、考古学サイドの暦年代の不正確さと相まって確定的な議論を展開することが難しいという意見もある〔中塚 2012, 田村 2015, 本研究中塚氏論考〕。そこで、暦年代を明確にしつつ、環境変化に対する人間活動の応答、すなわち環境変化によって何が変化し人間活動へどのような影響を与えたのかという観点から考古学事象との比較を行う必要がある。

木材年輪セルロースの酸素同位体比による環境変化との関わり こうした中、本共同研究において進められた中塚武による木材年輪セルロース酸素同位体比は中・低緯度地域では夏季の降水量と高い相関を持つことから降水量の純粋な指標を表すことができ、1年単位の高時空間分解能での古気候復元が可能であり本州中部では統計的な精度が十分に保証された精度の高いデータであるといえる〔中塚 2012, 中塚 2016a・b〕。

中塚の研究によってこれまでの温暖化／寒冷化といった温度による環境変化の指標ではなく、湿潤化／乾燥化という指標が明らかになったことで、夏季の降水量が水田稲作の収穫量へ明確な影響を表すことが示された。これにより洪水や大雨といった局地的な災害イベントによる集落への影響ではなく、環境の変化が当時の食糧生産へ影響を及ぼしうることが示された点は重要である。長雨と食糧生産については、中世の飢饉・疫病・旱魃・長雨の記録の分析によっても相関があることが指摘されている〔藤木 2001〕。

また、ヒノキ材を含めた資料数の増加を受けて新たに提示された木材年輪セルロース酸素同位体比によれば、紀元前1世紀のうち弥生時代中期後半中葉と推測されるB.C. 60年付近において大規模な湿潤化が認められたのち、紀元前後までに急激に降下する偏差をみせる。前段階の乾燥化傾向から大きく湿潤化へと変化し、それ以後も一定期間の湿潤化傾向を示す。これは、100～200年周期の中・長期的な環境変化といえ、農業生産量＝食糧生産への影響も大きく、人口の変動に影響を与えたことは想像に難くないだろう。本共同研究においても中塚により、こうした環境変化に起因する農業生産量の変化が人口動態に与えた影響についてのシミュレーションがなされており、両者に強い関係があることが示されている。

環境変化による考古学事象との関係性 次に、弥生時代中期後半における環境変化に起因する農業生産量と人口変動という中塚の研究成果に依拠した場合、それにより生じた社会集団への影響が考古学事象としていかなる形により把握できるか、予察的に検討したい(図27)。

まず環境変化の痕跡については、各地域において洪水による居住域の面的な廃絶は明確に認めら

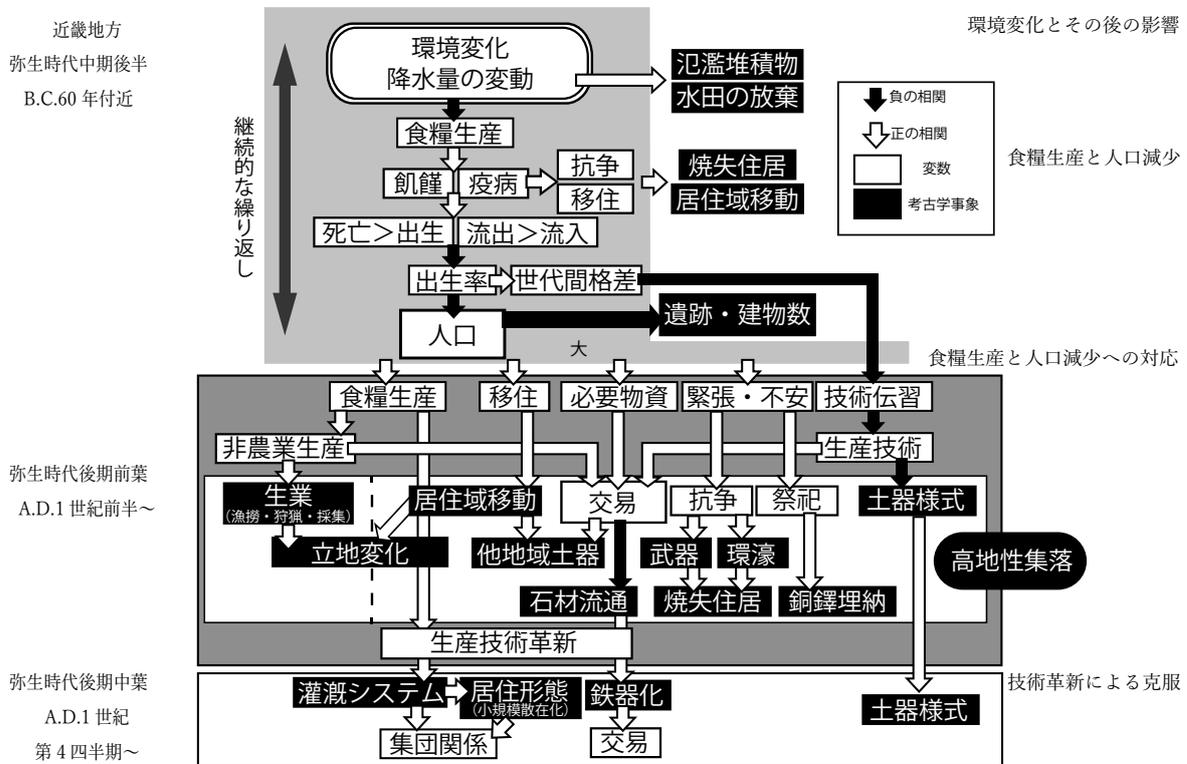


図 27 環境変化とその社会的な影響に対する考古学事象の発生モデル

れないものの、中河内地域の平野部では1) 河川水位の上昇ないし低地の環境悪化、2) 河川氾濫に伴う微高地と湿地の関係性の変化という2種類の動向が確認されており、大庭重信の分析にもあるように[大庭 2016b]、一部のエリアでは耕地環境の悪化と氾濫堆積物による流路埋没が認められる。

また、農業生産量の減少に伴う食糧不足は、飢饉と疫病の増加をもたらし、それに伴う死亡 > 出生による自然人口減、流出 > 流入による社会人口減による人口減少をもたらしたと考えられる。人口減は、集落様相の検討からみたとおり、弥生時代中期末から後期前葉までの遺跡数及び竪穴建物数の減少という形で考古学事象として表れている。

さらに、集落の変化には地域差や時間差が顕著であることから、環境変化による人口減少という共通の現象への対処という社会的な影響についても考慮すべきである。具体的には、食糧生産の確保、新たな耕作地や居住地を求めての移住、非自給物資の確保、社会的混乱に伴う不安・緊張などを引き起こされた可能性がある。これに伴い、中期末から後期前葉においては、飢饉時の山野河海の解放のように、漁撈・狩猟・採集などの非農業生産の活発化と、それに伴う集落立地の変化や居住地移動に伴う居住エリアの拡大による「山住みの集落」の出現がもたらされた。また、非農業生産の増加や必要物資確保は、交易の活発化を促し、交易の活発化は他地域土器の出土量、石材産地の変更、さらには石材流通の変質という形で考古学事象に表れている。また、緊張関係は抗争の拡大を引き起こしたと考えられ、事例は少ないながらも焼失住居の増加、環濠の掘削や投弾、石鏃の

保有などの遺構・遺物によって裏付けられる。また不安は、集団のアイデンティティを示すアイテムである銅鐸の埋納などの祭祀的行為に反映しされている可能性がある。そしてこれらの要素を様々な組み合わせにより包含する高地性集落は、人口減少による社会変化の顕著な表れとして捉えられるであろう。

また、食糧減少に伴い出生数もかなり抑えられたと考えられ、中・長期的な人口減少を引き起こしたとみるのが自然である。中長期的な人口減少は栄養環境の悪化に伴う乳幼児の死亡率上昇と相まってさらに特定世代の減少を引き起こし、特定世代の減少はさらには生産技術にかかわる技術伝習にも影響を及ぼし、製作技法などの伝習減退に伴う中期土器様式の崩壊をもたらしたと考えられる。

さらに、食糧生産の増加や社会危機を克服するための技術革新として、後期中葉以降にも変化が認められる。重層的な灌漑システムの確立に向けた耕地の再編成やその背後にある集団編成も変化したとみられ、小規模散在化などの居住域の変化が認められる。そして石材流通の変質に伴う物流の変化は、石器とは異なる素材へと利器材料の変換をさらに促し、製作技術を伴わない形での鉄器化が進められた。また土器様式においては本研究で明らかにしたように、分割成形技法による作り分けによる土器生産の効率向上を果たしたといえる。

以上、中塚の研究成果に依拠して、環境変化が食糧生産量＝人口減少という「弥生時代のクライシス」ともいうべき危機を招いたと仮定し、考古学事象との因果関係について素描を試みた。この思考実験の成果として環境変化によって生じる社会的な影響とその克服という構図に当てはめるならば、これまで社会変化の要因として提示された「社会的緊張関係」、「必要物資の流通・交易」、「集団の移動」、「集団間関係」、「集落立地」、「生業」、「農業生産」といった諸要因については、必ずしもいずれかが正しいというものではなく、相互に連動したものとして存在した可能性が考えられるのではないだろうか。

c. 今後の課題

環境変化と考古学事象の比較に関する課題 これまで弥生時代中期から後期への社会変化の背景について様々な既往の説を検討した。そのうえで、木材年輪セルロース酸素同位体比による古気候復元による成果に依拠した形で、弥生時代中期後半であるB.C. 60年付近で大きく湿潤化する環境変化に起因した食糧生産量の変化と人口変動という観点による考古学事象の整理を試みた。しかしながら、考古学事象に表れる変化については、主に弥生時代中期末から後期前葉のことであり、大規模な湿潤化が発生する時期と比較して50～80年以上のタイムラグが生じることになる（第4章第2・3節参照）。しかしこうしたタイムラグについては、環境変化が社会変化を直接規定しているのではなく、人口減少という共通現象への対処として表われたと考えられる。

こうした点から、環境の変化の後に、継起的な社会変化が生じさせた要因の具体相については、さらなる検討が必要である。大規模な湿潤化の中で次第に発生した食糧生産量の変化を契機として、さらなる長期的、継続的な社会変化が引き起こされたと考えることも可能である。

また、日本列島内部でも北部九州、中国・四国地方においては、人口増減の時期や集落の高所立地化といった時期が異なるという地域差が存在することも、環境変化と考古学事象の比較の上で課

題となる。集落の高所立地化に関しては北部九州では中期前葉、中国・四国では中期後半、近畿地方は後期前葉となり、段階的に東方へ変化が生じる点や、本研究で明らかにしたように同じ近畿地方でも地域間で変化の時期が異なることから、環境変化と関連付けた解釈を行うにあたっては、地域における社会変化の「差違」についても改めて検討が必要となる。

環境変化という共通の要因を契機としながらも、地域や社会構造、集団関係などの違いにより異なる社会変化が引き起こされていた可能性を踏まえ、「環境」、「人口」及び「社会」という3つの次元における変化のメカニズムについて、考古学事象をさらに検討する必要がある。(田中)

(5) 弥生時代後期への移行過程の理解に関する予察

最後に本章で提示してきた成果の要点を振り返るとともに、今後の課題について考えることにより、本研究の総括を行っておきたい。

土器様相 後期前葉の土器様式は、器種、文様、製作技術という3つのレベルにおいて、それぞれ広がりや異にする地域色が重層したものであり、器種および文様のレベルにみるシステムとしての開放性の背景には、河内地域と讃岐地域の直接交流をはじめとする遠隔地間交流の活発化と地域間関係の再編があったものと考えられる。また、広く伝播した生駒西麓系の土器については、それらが中期以来、効率的な土器製作に適した技術体系として発展を遂げてきたという技術論的要因も大きく作用したことが考えられた(第4章第1節土器の様相)。

これらの土器の特徴は、前後の時期との対比によってより明瞭に理解できる。すなわち、中期後葉の土器においては、装飾を伴い、多くの製作コストをかけた大型品が目立つのに対し、後期中葉の土器は、システムティックな分割成形技法による相対的に小型で無文の土器が主体を占めている。後期前葉の土器は、これらの間に位置し、中期的な土器製作技術体系の崩壊を受け、その代替となる技術の模索による地域色の発現を本質とするものといえよう。この間の変化は、一見断絶を伴うようにも見えつつも、個々の土器は、中期以来の系譜を引くものが大半であって、手の込んだ大型品の消長と他系統の土器によるその機能の代替を巡る混沌とした状況の中から、新たな技術体系としての分割成形技法が台頭する過程を示している。

そして、この現象が、西から東へ伝播した凹線文のように一方向的な流れではなく、広域的な連動性を有し、かつ明瞭な中心—周辺関係を伴う庄内式や布留式の広がりとも異なる、多元的、多核的なものであったと評価できる点に注目しておきたい。

集落様相 一方、集落様相を見た場合、中期後葉から後期前葉にかけて、集落数および人口の顕著な減少が想定されることが重要である。そして、これと同時に多くの集落の断絶および集落分布密度の低下といった広域的共通性をもつ現象が生じているほか、後期前葉をピークとする集落の高所立地化傾向が広く認められる一方で、その具体的なあり方には地域差が目立ち、高地性集落と低地の集落の関係性についてもこれと同様の顕著な地域性が生じている(第4章第2節集落動態の画期)。

つまり、中期後葉から後期前葉への集落の変化には、広域的な連動性とともな地域的な差異が認められるのであり、社会変化を引き起こした要因に対して、地域や集団の地理的・歴史的個性に応じた、ある種の柔軟な適応行動がなされた可能性が示唆される。このことは、前述した当該期の土器様相の理解とも親和的なものといえよう。

以上のような状況を踏まえれば、当該期の社会変化を考察するにあたっては、個別の事象に基づいた場当たり的な解釈ではなく、幅広い観点の総合により、広域に生じた複雑な事象の背後に通底する要因を見極めることが、当たり前のことながら何より肝心である。

本研究の集落分析の柱の一つである遺跡の堆積環境の検討は、そのための基礎作業となるものであるが、その成果によれば、後期前葉においても低地が面的に居住不適地化したような状況は考えられず、また、低地における生業も引き続き継続した可能性が高いものと考えられた。このことと高所立地化の地域差および時間差の存在をあわせて考えれば、当該期の集落様相の変化については、やはり社会的緊張の高まりによって説明される部分が多いものと考えられる。ただし、ここで問題となるのは、そのような社会的緊張の高まりが何によって引き起こされたのか、という問いへの答えであり、その意味で当該期に顕著な人口減少との因果関係を探ることが重要な課題となる。今回の対象地域の中でもとりわけ検討材料に恵まれた中河内地域においては、粗い予察の段階ではあるが、血縁原理の卓越する中期から地縁原理の強化された後期へと集団組織原理が変質し、それによって居住・生業形態に大きな変化が生じた可能性が指摘されており（第3章第2節河内地域）、このような観点のさらなる発展が、課題解決にむかうための一つの突破口となりうるのではないかと考える。

環境変化との関わり 本研究独自の分析によって明らかにできたことは基本的に上記のとおりであり、これ以上の具体的な社会変化の追求は、今後の課題ということになるが、近年、中期後葉の列島規模の寒冷化が様々な事象から指摘され、社会変化の要因として再評価されるなど、新たな環境変化要因論ともいべき研究が活況を呈し始めていることに注意を払うべきと考えた〔甲元編 2007、愛媛大学考古学研究室 2016 など〕。このため、本稿の末尾において、当該期における理化学年代分析の成果と舶載文物の精査により、改めて実年代の検討を行った上で（第4章第3節弥生時代後期の実年代に関する現状認識）、今回の検討成果と自然科学的手法に基づく環境変化に関する

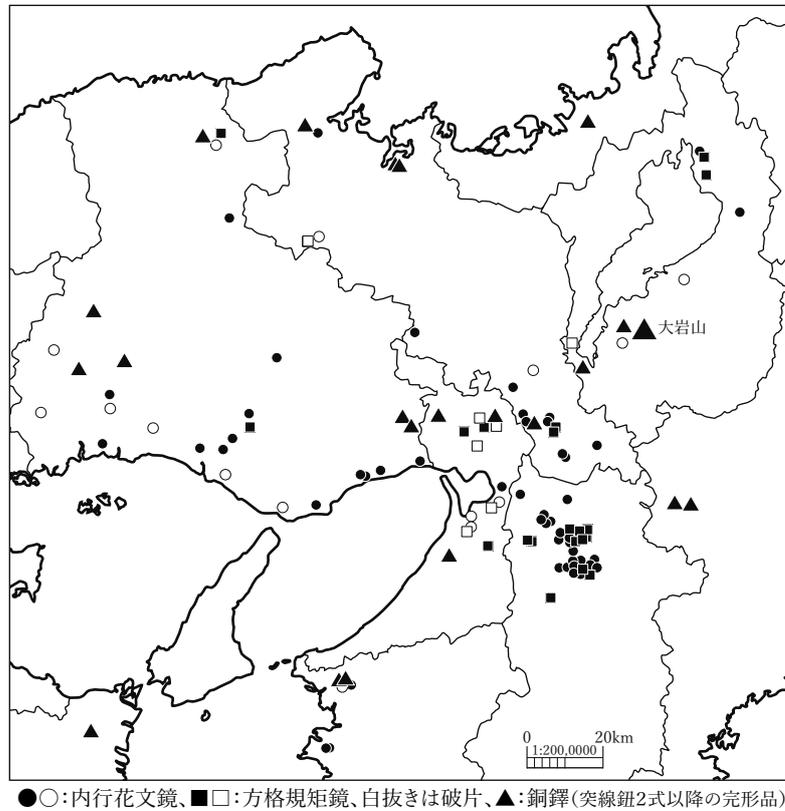


図28 近畿の漢代内行花文鏡・方格規矩鏡および突線鈕2式以降の銅鐸の出土分布

る研究との接点を模索した（第4章第4節環境変化との関わり）。とりわけ注目したのが、本歴博共同研究で進められた中塚武氏による木材年輪セルロース酸素同位体比分析に基づく考察である。中塚氏の研究においては、B.C. 60年頃の大きな気候変動の後、長期間の湿潤化によって農業生産量＝食糧生産量の低下を生じた可能性が指摘されるとともに、それらの事象が人口変動に与えた影響についてのシミュレーションがなされている。今回試作したモデル図（図27）からは、その成果の摂取・連携により、当該期の社会変化とその因果関係に関する、より包括的な説明の可能性を窺うことができるだろう。しかしながら、中塚氏の指摘する現象と、考古資料に基づいて本稿で指摘した人口減少とは、大枠での一致をみながらも、数十年程度のタイムラグを残すものとなっており、社会変化のプロセスに関するもう一步踏み込んだ考察が必要な状況にある。

今後の課題 具体的には、中期後葉以来の長期的な寒冷化に起因する人口減少がさまざまな考古資料の変化に帰結するメカニズムの解明に向けた理論および方法論の洗練とその実践が急務である。たとえば、人口減少は、集団内／間のコミュニケーション様式にいかなる変化を生ぜしめたのか、また近年研究の進展が著しい水田耕作システム〔大庭 2016a・b〕の変化との関連性はあるのか、あるいは当該期において想定すべき親族構造モデルはいかなるもので〔太田 2018〕、それを考古資料によっていかに検証すべきかなど、さまざまな論点が思い浮かぶ。

また、後期前葉には、中国大陸の政治的な不安定を背景として青銅製品や鉄製品、あるいは水銀朱などの舶載品が、九州地方北部から瀬戸内海沿岸地域を通じて近畿地方まで流通する動きが増大する。こうした動きを加味した経済的視点からの検討や、交易を経て入手、生産が可能となった集団のシンボルとしての銅鐸や青銅鏡の保有形態⁽⁵²⁾についての再検討など、新たに取組むべき多くのテーマがある。

このような課題を認識できたこと自体もまた、多数のメンバーが長期間にわたり議論を重ねてきた本研究の大きな成果であることを確認して、研究成果報告の結びとしたい。（深澤・三好）

謝辞 本稿作成にあたって、次の諸氏・諸機関に資料実見等のご高配ならびにご教示等を賜りました。末筆ながらご芳名を記し、謝意を表したい。秋山浩三、市村慎太郎、上田裕人、浦 蓉子、梶原慎司、川上洋一、川崎雅史、桐井理揮、坂本 稔、笹栗 拓、高橋公一、塚本浩司、土井孝之、中尾智行、中塚 武、濱田延充、濱野俊一、広瀬時習、藤田三郎、星野安治、前田敬彦、宮崎康雄、三好孝一、三好裕太郎、森井貞雄、森岡秀人、若林邦彦、和泉市教育委員会、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、公益財団法人大阪府文化財センター、高槻市教育委員会、田原本町教育委員会、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、明和町斎宮跡・文化観光課

註

(1)——本共同研究は、深澤芳樹を統括責任者として、浅井猛宏、荒木幸治、石井智大、岡田賢、杉山真由美、田中元浩、中居和志、三好玄、山本亮、渡邊誠が各地域における検討などを担当し、本稿の執筆も行った。なお、本稿における総括及び全体の調整・編集は、深澤及び、石井・三好・田中・山本が行った。各節の執筆者については、節末に示している。

(2)——ただし、その後も一部でこれに基づく研究がなされている〔鍋島 2000〕。

(3)——高槻市古曾部・芝谷遺跡、豊中市新免遺跡、和泉市観音寺山遺跡、神戸市表山遺跡など。

(4)——ただし、そもそも寺沢および藤田の河内第V様式、大和VI様式は、それぞれ前後に分けうることが示されており、両者の画期認識が三段階区分にもきわめて近

い事を指摘しておきたい。

(5)——ただし、森岡秀人は1世紀前半までさかのぼる可能性を指摘している〔森岡 1985〕。

(6)——その他の装飾的要素として、高坏の口縁部外面に波状のミガキを施すものが一定量認められる。

(7)——ただし、甕および高坏には、口縁部を拡張しない形態のものが一定量存在する。

(8)——図8・9における長頸壺、短頸壺および水差の体部調整の表記は、広口壺の分類による。

(9)——森田編年に対しては、中期後葉末が摂津IV-4、後期前葉1古相および新相が摂津V-0、前葉2が摂津V-1、中葉1がV-2、中葉2がV-3におおむね対応するものと考えている。

(10)——兵庫県域でいえば、三田市奈カリ与遺跡山頂地区1号住居跡などが該当する。

(11)——工程ごとに乾燥期間をおくことで器壁を薄くする分割成形技法と、全体を成形し終えた後にケズリによってこれを達成する内面ケズリ調整は相容れないものである。

(12)——ただし、ここでみられる様相が摂津全体に敷衍できるものであるか否かということについては、改めて検討が必要である。

(13)——高野陽子は、北近畿地域における後期前葉の土器に中部瀬戸内地域に由来する甕が多く含まれることを指摘し、これらを“中部瀬戸内系土器”〔高野 2002〕あるいは“凹線文系土器様式”〔高野 2009〕と呼んでいる。ここでは、四国を含まない形での播磨～吉備との関係性を強調すること、および中期の凹線文との峻別の必要性から、“山陽系土器群”と呼称することとした。

(14)——本稿第2章第5節河内地域参照。

(15)——寺沢・森井編年に対しては、中期後葉末が河内IV-4、後期前葉1が河内V-0、後期前葉2が河内V-1、後期中葉1がV-2、後期中葉2がV-3におおむね対応するものと考えている。

(16)——このようなタタキについては、中期以来の伝統を引くもの(すなわちIV様式系)として、VI様式系のものとは区別して考えておくべきであろう。

(17)——この資料の年代的な位置づけが、後に暦年代について考察する際に重要な論点となるため、やや長くなるが、以下でわれわれの理解についてやや詳しく説明しておきたい。

この土器群は、福万寺93-1調査区第11b面において検出された溝30から検出された土器100個体以上からなるものである。溝30は、幅約5m、深さ約0.5mを測り、池島・福万寺遺跡のFJ第11-3a層(=IK第11-2a層)上面の水田の相対年代を定めるための主な手掛かりとなる遺構とされる〔井上 2017:pp.3-6〕。近年、この水田面の杭列に対する酸素同位体比年輪年代法分析により、AD80年代半ばから後半という測定結果が得ら

れており、暦年代の定点となる資料として重要視されている〔井上・中塚ほか 2018〕。

土器の編年の位置づけに関して、調査概要報告では、総体として「第V様式初頭～前葉に属するものと考えたい」とされたが〔井上・森本編 1997〕、本報告(以下「報告書」という)の掲載遺物一覧表においては、帰属時期が寺沢・森井編年に即した形で個別の土器ごとに示されており、その時間幅は、V-0～V-3様式すなわち本稿という後期前葉1～後期中葉2へと広げられている〔井上編 2002〕。その後、このうちの甕3点が国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループによる外面付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)の分析対象となり、その際にも「報告書」における時期比定が踏襲された。

しかしながら、そこで主張された甕44・45にかかるV-3様式という位置づけは、本稿の理解とは異なっている。44・45は、いずれも受口状の口縁部をもつ本稿分類における甕Bdであり、体部外面にタタキ目が認められながら内面をケズリ調整で仕上げている点が特徴的で、分割成形の痕跡は認められない。そもそも分割成形技法は、粘土を薄く成形しながら作業工程に小休止をおいて乾燥を促すことにより、器壁に強靱さを与えることを主な目的としたものと考えられる〔三好 2019〕。一方、ケズリ調整は、成形後の粘土に改めて力を加えて器壁を薄くする効果を有したものと考えられ、基本的に両者は相互になじみにくい技法である。実際、分割成形技法が体系化する後期中葉2においては、タタキとケズリ調整が併用される例はきわめて稀であるのに対し、これに先立つ中期後葉1には、これに該当する良好な事例(弓削遺跡平成9年度調査溝〔八尾市教委 2000〕)が認められる。さらにいえば、同一遺構出土土器の帰属様式を既往の編年を参照しつつ個体ごとに比定していくという「報告書」のアプローチ自体がかなり強引なものとして評価せざるをえない。変異の幅をもつ型式の組み合わせの推移をとらえる形で発展してきた弥生土器編年研究の成果を念頭におきつつ、時期ごとの変化を把握しやすい高坏をはじめとする各器種の型式学的特徴を精査すれば、溝30は、一定数の後期前葉の土器を含みつつも、後期中葉1を主体とする土器群であるとの位置づけが可能と考えられる。これらのことから、われわれは、甕44・45を後期中葉1(=寺沢・森井編年V-2様式)に属するものとして理解する。

なお井上 2017では、FJ第11-3a層(=IK第11-2a層)上面の水田の出現時期にかかるもう一つの根拠として、大畦畔に埋納された土器が挙げられているが、例示された小山田 1989を見る限りでは、この資料で細別様式まで踏み込むような年代の特定は難しいものと思われる。

上記してきたことを是とすれば、井上・中塚ら 2018によって示された当該期の暦年代観についても部分的な修正を加えることが必要となるが、この点については、

改めて第4章において論じることとする。

(18)——内面ケズリの甕については、摂津地域からの影響および河内地域のIV様式系の残存など、多元的な系譜を考慮しておく必要がある。

(19)——桑原久男は櫛描文器種・非櫛描文器種に分けて考察している[桑原 1989]。

(20)——IV様式系の成立に影響を与えた凹線文に伴う土器製作技術の東方への波及は、深澤芳樹が詳しく検討を行っている[深澤 1994]。

(21)——円板充填法の痕跡が残らない脚部の土器は、中期の生駒西麓型土器に存在する。脚裾が広がる形状の台付鉢である。大和地域の後期前葉段階の台付無頸壺においても、円板充填法の痕跡が残らない。後期前葉段階での生駒西麓系の影響が強さを示す例といえる。

(22)——伊勢地域では、中期後葉の土器様式の構造や成立過程が畿内地域とは異なり、畿内地域におけるIV様式系、生駒西麓系、V様式系といった系統区分を同義で用いることは困難である。そのため、ここでは独自に系統区分を行い、畿内地域との対応関係については可能な範囲で随時示すものとする。

(23)——現状ではV群に属するものを明瞭には区別できていないが、後期前葉のくの字状口縁甕a1の器形にはかなりバリエーションがあり、今後さらに資料が増加すれば、器形・製作技法等の整理や中期後葉のものとの比較検討により、系統的な区分が可能と思われる。

(24)——金剛坂遺跡SX714は未報告であるが、図20には明和町の承認を得て報告書用に作成された図を転載した[味噌井 2018]。

(25)——諸般の事情により本稿には摂津地域の集落に関する個別の検討結果を掲載できなかったが、共同研究の過程では摂津地域についても具体的な検討を行い、近畿地方南部全体に関する議論の中に取り込んでいる。

(26)——惣ヶ池遺跡及び後述する池上曾根遺跡の様相については、和泉市教育委員会上田裕人氏の御教示を得た。なお脱稿後に行われた惣ヶ池遺跡の発掘調査により、集落形成時期が後期中葉以前に遡ることが明らかとなったが、本稿には反映できていない。

(27)——報告書掲載遺物から後期後葉に属する集落と見るべきものと考ええる。

(28)——池上曾根遺跡の居住域は、大規模かつ密度が極めて高いことが知られているが、遺構の切り合いが激しいこともあり、内部の分節の有無についての判断は難しい。ただし、方形周溝墓は、居住域を取り囲む4箇所以上に分かれて群をなすことが明らかにされている。

(29)——ただし、おしなべて資料が少ない中にも、その程度には地域差があり、後期前葉でも特に古相の資料については、中河内や大和地域で一定量が確認できる一方、山城や近江地域では極めて限定的である。後二者の検討の中では、後期様式への移行が若干遅れる可能性につい

ても言及がなされており(本稿第2章第8節山城地域・第2章第9節近江地域)、今後、積極的に理化学的年代測定を行い、精査を進める必要がある。

(30)——山城地域については、b)とc)が重複するような位置関係にあたると考えられる。

(31)——なお濱田延充は、佐原真の見解を受けつつ、凹線文について二次調整と文様の施文を兼ねた技法であり、櫛描き文よりも省力化進んだものという評価を行っている[濱田 2001:p.24]。いずれにしても、これらの製作に際して、強い横方向の回転運動が利用されたという点は共通する。

(32)——中期以来、壺・甕の下半部のケズリの方向が基本的に上から下へ向くものに対し、後期に加わる上半部のケズリは横方向を向いていることからすれば、中期の土器作りの大部分が製作台の上に正位に据えた状態で完結したのに対し、後期のそれは、製作中の土器自体を傾けて調整を加える工程があったことを示す可能性があると考えられる。

(33)——播磨・摂津地域では、壺や甕の底部付近のミガキが省略されるとともに、タタキをそのまま残したのも多くなるが、そのタタキは、中期以来の水平方向のものであり、後期中葉以降の分割成形に伴うものとは質的に異なったものであると考えられる。

(34)——他方、河内地域の生駒西麓系の壺には、分割成形技法が先駆的に採用された可能性がある。

(35)——山城では内外面ともにハケ・ナデ仕上げのものが目立ち、近江地域との技術的親縁性の高さを示すものと考えられる。

(36)——本稿第2章第4節摂津地域参照。

(37)——この範囲の中でも、広口壺以外の器種も搬入される畿内地域と、距離の遠近にかかわらず大型広口壺だけが出土する、その外側という違いが認められる。桐井理揮は、前者における土器の動きが日常交流に基づく土器流通であるのに対し、後者(特に播磨および淡路島)の広口壺の移動は、鉄製品の入手をめぐる広域ネットワーク形成に伴う遠隔地間の直接交流を示すものという解釈を提示している[桐井 2019]。また、桐井は、これらの広口壺の広域流通の背景に“何らかの観念的な付加価値が付与されていた”ことも想定している。中期の生駒西麓と中河内平野部の土器移動にかんする研究を踏まえれば[若林 1997]、生駒西麓系の広口壺が象徴的価値を有していた可能性は高いものと思われるが、本稿では技術論的視点による評価を加えることが必要と考えている。

(38)——讃岐地域では、内面朱付着土器が多数出土していることにも注意したい。内面朱付着土器の系譜とその広範な分布を取りあげ、瀬戸内海を通じた“鉄と水銀朱をめぐる首長間交易”と関連付けて論じた柴尾俊介による検討が参考になる[柴尾 2014]。

(39)——さらに、同じ讃岐地域でも、旧練兵場遺跡では、安芸や吉備地域からの外来系が多く出土していることから(第2章第2節讃岐地域)、集落によって異なる地域をカウンターパートとした交流の役割分担がなされていた可能性がある。

(40)——本稿では、詳しく検討できないが、近江地域についても、技術論および地政学的要因の両面から説明することが必要かつ可能であろうと思われる。一方、西の山陽東部系土器群については、現状では影響の発信源を特定しがたい状況であり、背景となる集団関係に質的な相違があったことを想定すべきかもしれない。

(41)——さらに、後期前葉における交易路は、瀬戸内ルートをはじめとする多面的なあり方が想定されるのに対し、後期中葉に至ってその多くが衰微し、北近畿ルートへとシフトした可能性が想定されており[福永 2000, 桐井 2016], このことが後期中葉の土器様相と関連する可能性を指摘できる。

(42)——この傾向は、和泉地域及び本稿では対象外であるものの、摂津地域においてとりわけ顕著に認められることを付記しておきたい。

(43)——ただし、唐古・鍵遺跡においても検出遺構の数は減少しており、居住人口は減少した可能性が高い。

(44)——中期後葉の時間幅は、その始期を遡らせた近年の放射性炭素年代測定に基づく研究を踏まえて長く見積もって100年ほど、一方、後期前葉の時間幅は短く見積もって50年前後と考える[森岡 2005, 若林 2018]。

(45)——瀬戸内地域の中期後葉の高地性集落においては、農具の出土や貝塚層の存在が下位に位置する集落との関係性において解釈されているが[柴田 2006:p.79], 両地域の集落構成(いわゆる山住みの集落の有無)の違いを考慮すべきであろう。

(46)——ただし、この際に扇状地等の緩斜面の水田化、あるいは畑作など、新たな生業の模索がなされた可能性は十分に考慮されるべきである。

(47)——註17参照。

(48)——寺沢薫はKIVb式と同c式が後期中頃以降に下

がるとするが[寺沢 2014ほか], 久住猛雄は誤解とする[久住 2015]。議論の成行きを注視したいが、本稿では後期前葉とする従前の理解に依った。

(49)——今回の共同研究では出土銭貨の集成を行い、以下の皆様からご協力をいただいた。成果については機会をあらためて公表する予定である。(五十音順、敬称略) 青山博樹, 赤澤徳明, 石井智大, 伊藤実, 河合忍, 君嶋俊行, 木村友則, 久家隆芳, 楳木敬太, 小玉秀成, 近藤玲, 佐藤祐輔, 佐藤由紀夫, 柴田昌児, 白石哲也, 鈴木信, 須藤英之, 高橋浩二, 田中元浩, 轟直行, 中山誠二, 仁木聡, 乗松真也, 樋上昇, 比佐陽一郎, 藤田典夫, 古澤義久, 増野晋次, 町田勝則, 森本幹彦, 渡辺朋和。

(50)——佐藤は五銖銭の復活によって不要とされたからこそ、貨泉がまとまって日本列島に流入したとする[佐藤 2015]。日本出土の銭種構成が窖藏銭の構成に似ておりこれが新の崩壊により放出されたとするが、実際に古墳時代前期までの遺構に限っても、沖ノ山埋納銭のような特殊な事例は除いて漢の半両銭・五珠銭より貨泉のほうが事例が多いこと[佐藤 2015]を追認できる。他の王莽銭も含めるとより差は顕著となり、時期幅も長い前・後漢王朝の貨幣より多い。貨泉流入の要因が青銅器原料の確保[近藤 1983]であったとする考えもなお根強い。

(51)——もちろんその他の王莽貨幣に比して貨泉が多いのはなぜか、日本列島で出土する事例は質が悪いものが多いのはなぜかということにもなるが、すでに多く私鑄銭が存在していることを考えれば、貨幣について十分理解していたか怪しい倭人社会へは少額の貨泉で質の悪いものを中心に流通していた可能性なども想定しうる。いずれにしても想定の域を出ず、今後の検討に俟ちたい。

(52)——たとえば、弥生後期並行期に製作されたであろう銅鏡と銅鐸の分布は、図28に示すように排他的とみることができる状況にあり、それぞれについていかなる入手・保有形態を想定するかによって、弥生時代から古墳時代への移行のシナリオは大きく変化しうるであろう。

参考文献

- 赤塚次郎 2001 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター, pp.25-48.
- 赤塚次郎 2002 「土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観』第2巻弥生古墳時代土器Ⅱ, 小学館, pp.33-39.
- 秋山浩三 1989 「『河内系』土器について」『京都府弥生土器集成』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp.59-83.
- 秋山浩三 1996 「B.C. 52年の弥生土器 —池上曾根遺跡の大型建物・井戸出土資料と年輪年代—」『大阪文化財研究』第11号, 大阪府文化財調査研究センター, pp.23-50.
- 秋山浩三 2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店
- 秋山浩三・大木 要 2010 「弥生拠点集落・西ノ辻遺跡の再検討」『研究調査報告』第7集, 財団法人大阪府文化財センター, pp.17-73.

- 秋山浩三・小林和美 1998 「弥生中期における池上曾根遺跡中核部の空間構造と地形環境」『大阪文化財研究』第14号, 大阪府文化財調査研究センター, pp.1-17.
- 安藤広道 2011 「集落構成と社会」『講座日本の考古学』6 弥生時代下, 青木書店, pp.347-384.
- 池田 研 1999 「高地性集落の機能と生業 —出土具を中心として—」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室, pp.149-166.
- 池田 毅 2013 「淡路型甕の種類 —調整手法の差異とその特異性—」『弥生研究の群像 —七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念—』みずほ別冊, 大和弥生文化の会, pp.329-338.
- 池峯龍彦 1993 「石津川流域の弥生時代集落の動向 —堺市四ツ池遺跡を中心として—」『考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室, pp.91-109.
- 池峯龍彦 2006 「和泉北部における弥生時代集落の動向」『みずほ』第40号, 大和弥生文化の会, pp.100-118.
- 石井智大 2010 「伊勢湾西岸地域における凹線紋系土器期集落の様相」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・中期篇 大規模集落と弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト, pp.107-114.
- 石井智大 2011 「伊勢湾西岸地域における弥生時代後期集落の様相」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・後期篇 伊勢湾岸地域の後期弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト, pp.89-98.
- 石井智大 2012 「土器の器種分類 (弥生時代中期)」『納所遺跡 I』三重県埋蔵文化財センター, pp.47-52.
- 石井智大 2015 「方形周溝墓の規模・平面形と埋葬施設配置の変化—伊勢湾沿岸地域における基礎的検討—」『弥生研究の交差点 —池田保信さん還暦記念—』みずほ別冊 2, 大和弥生文化の会, pp.11-24.
- 石井智大 2016 「集落動態からみた弥生時代から古墳時代へ —伊勢湾沿岸地域—」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.237-264.
- 石神 怡 1977 「池上弥生ムラの変遷」『考古学研究』第25巻第4号, 考古学研究会, pp.33-58.
- 石黒立人 1987 「高蔵式から山中式へ (予察)」『欠山式土器とその前後』研究・報告編, 愛知考古学談話会, pp.39-50.
- 石黒立人・宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会, pp.129-189.
- 石野博信 1973 「大和の弥生時代」『考古学論攷』第2冊, 奈良県立橿原考古学研究所, pp.1-17.
- 石部正志 1977 「原始古代集落の変遷 —泉北平野—」『地方史と考古学』地方史マニュアル 9, 柏書房, pp.84-96.
- 市村慎太郎・奈良拓弥 2009 「総括」『下池田遺跡 (財) 大阪府文化財センター』, pp.205-215.
- 井藤暁子 1982・1983 「入門講座・弥生土器・近畿 3・4・5」『考古学ジャーナル』No.205・207・219, ニューサイエンス社 (佐原真編『弥生土器』I に収録)
- 井藤暁子 1983 「近畿」『弥生土器』I, ニュー・サイエンス社, pp.201-274.
- 伊藤 武・笹栗 拓編 2014 『成合遺跡・金龍寺旧境内跡 2』公益財団法人大阪府文化財センター
- 乾 哲也 1995 「池上・曾根遺跡の変遷 —最近の調査結果に基づく集落変遷試論—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3, 財団法人大阪府埋蔵文化財協会, pp.25-52.
- 乾 哲也 1996 「弥生中期における池上曾根遺跡の集落構造」『ヒストリア』152号, 大阪歴史学会, pp.17-30.
- 井上智博 2011 「土地環境の変化」『多様化する弥生文化』弥生時代の考古学 3, 同成社, pp.25-47.
- 井上智博 2017 「池島・福万寺遺跡における弥生時代中期～後期水田の変遷過程」『大阪文化財研究』第50号, 公益財団法人大阪府文化財センター, pp.1-14.
- 井上智博 2020 「弥生時代の水田経営と降水量変動」『気候から読みなおす日本史』3, 臨川書店, pp.247-268.
- 井上智博編 2002 『池島・福万寺遺跡』2, 財団法人大阪府文化財センター
- 井上智博・中塚 武・李 貞・對馬あかね・佐野雅視・遠部 慎・中原 計 2018 「酸素同位体比年輪年代法による池島・福万寺遺跡の弥生時代水田に関する年代観の構築」『大阪文化財研究』第51号, 公益財団法人大阪府文化財センター, pp.1-27.
- 井上智博・森本 徹編 1997 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XV, 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 今村峯雄・辻誠一郎・春成秀爾 2004 「池上曾根遺跡の柱根の炭素 14 年代」『池上曾根遺跡 99』第一分冊, 和泉市教育委員会, pp.261-263.
- 今村峯雄・設楽博己 2011 「炭素 14 年の記録から見た自然環境 —弥生中期—」『多様化する弥生文化』弥生時代の考古学 3, 同成社, pp.48-70.
- 今村峯雄・松木武彦 2011 「炭素 14 年の記録から見た自然環境 —弥生後期から古墳時代—」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学 4, 同成社, pp.28-38.

-
- 愛媛大学考古学研究室 2016 『弥生時代凹線文期（第Ⅳ様式）の遺跡形成と環境変動』第15回愛媛大学考古学研究室シンポジウム
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号, 史学研究会, pp.1-42.
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集, 国立歴史民俗博物館, pp.39-83.
- 岡村秀典 2013 「漢王朝と倭」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣, pp.7-19.
- 大木 要 2013 「弥生時代における丘陵上の集落について—滝ヶ峯遺跡を中心に—」『和歌山市立博物館研究紀要』第28号, 和歌山市立博物館, pp.1-9.
- 大木 要 2015 「第1節 調査の成果」『橘谷遺跡発掘調査報告書～弥生時代高地性集落の発掘調査～』和歌山市教育委員会, pp.44-47.
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『下川津遺跡』香川県埋蔵文化財センター, pp.367-408.
- 大久保徹也 1995a 「上天神遺跡における弥生後期土器の構成」『上天神遺跡』第2分冊, 香川県教育委員会, pp.51-93.
- 大久保徹也 1995b 「上天神遺跡に先行する資料群」『上天神遺跡』第2分冊, 香川県教育委員会, pp.94-102.
- 大久保徹也 1995c 「後期前半段階の資料群」『上天神遺跡』第2分冊, 香川県教育委員会, pp.103-113.
- 大久保徹也 1995d 「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」『上天神遺跡』第2分冊, 香川県教育委員会, pp.114-135.
- 大久保徹也 1995e 「上天神遺跡の他系統「在地」土器」『上天神遺跡』第2分冊, 香川県教育委員会, pp.136-139.
- 大久保徹也 1995f 「近畿地方系統の在地土器」『上天神遺跡』第2分冊, 香川県教育委員会, pp.137-145.
- 大久保徹也 1996a 「煮沸形態からみた地域圏」『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部, pp.17-21.
- 大久保徹也 1996b 「讃岐」『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部, pp.67-70.
- 大久保徹也 2002 「中国・四国地方の土器」『考古資料大観』第2巻弥生古墳時代土器Ⅱ, 小学館, pp.159-168.
- 大久保徹也 2003 「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社, pp.189-198.
- 大嶋和則 1996 「大空遺跡出土弥生土器の概要」『高松市歴史資料館収蔵資料目録』考古資料, pp.29-48.
- 太田宏明 2018 「集団組織原理と地位継承原理の変遷から見た古墳時代の首長墓系譜について」『古代学研究』第216号, 古代学研究会, pp.13-24.
- 大庭重信 2009 「近畿地方の弥生時代後期墓制」『第58回埋蔵文化財研究集会 弥生時代後期の社会変化 発表要旨・資料集』第58回埋蔵文化財研究集会実行委員会, pp.49-62.
- 大庭重信 2013 「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」『待兼山論叢』第47号, 大阪大学文学部, pp.27-44.
- 大庭重信 2014 「河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用」『日本考古学』第38号, 一般社団法人日本考古学協会, pp.47-65.
- 大庭重信 2016a 「西日本の弥生時代水田の灌漑システムと社会」『水田から弥生社会を考える』近畿弥生の会第3回テーマ討論会, pp.29-40.
- 大庭重信 2016b 「地形発達と耕地利用からみた弥生・古墳時代の地域社会—河内平野南部を対象に—」『考古学研究』第63巻第2号, 考古学研究会, pp.51-65.
- 岡田 賢 2016 「摂津地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.189-220.
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号, 史学研究会, pp.1-42.
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集, 国立歴史民俗博物館, pp.39-83.
- 岡村秀典 2013 「漢王朝と倭」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣, pp.7-19.
- 岡山県古代吉備文化財センター 2001 『下庄遺跡 上東遺跡』
- 小倉徹也・趙 哲濟 2001 「大阪市加美遺跡の基本層序」『大阪市文化財協会研究紀要』第4集, 大阪市文化財協会, pp.17-26.
- 小沢佳憲 2000 「弥生集落の動態と画期」『古文化談叢』第44集, 九州古文化研究会, pp.1-37.
- 小野忠熙 1953 『烏田川』山口大学烏田川遺跡学術調査団
- 小野忠熙 1959 「瀬戸内地方における彌生式高地性村落とその機能」『考古学研究』第6巻第2号, 考古学研究会, pp.2-12.
- 柏田有香・古川 匠・浅井猛宏 2016 「山城地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.77-99.
-

- 片桐孝浩 2006 「弥生時代後期初頭～中葉の土器」『小山南谷遺跡』香川県教育委員会, pp.287-314.
- 加藤めぐみ・福澤仁之・安田喜憲・藤原 治 1998 「鳥取県東郷池固定堆積物の層序と年縞」『LEGUNA 汽水域研究』No.5, 鳥根大学汽水域研究センター, pp.27-37.
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『様式と編年』東海編, 木耳社
- 金原正明・金原正子 1997 「鬼虎川遺跡第35次調査における古植生および古環境の検討」『鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会, pp.104-119.
- 金原正明 1998 「鬼虎川遺跡第25次調査を主とする河内平野の環境と植生の変化」『鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告』東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会, pp.124-139.
- 金原正明 2011 「花粉分析からみた弥生時代後期の気候冷涼化の実態」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4, 同成社, pp.15-27.
- 兼康保明 1990 「近江地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ, 木耳社, pp.321-419.
- 河合 忍 2003 「弥生時代後期初頭における土器様式の変革と地域間関係 ―土器編年の併行関係の整理を基礎とした一考察―」『蜃気楼 ―秋山進午先生古稀記念―』秋山進午先生の古稀をお祝いする会, pp.85-122.
- 河合 忍 2015 「中四国」『弥生土器』ニューサイエンス社, pp.160-208.
- 川上洋一 2004 「大和地域」『第53回埋蔵文化財研究集会 弥生中期土器の併行関係』pp.357-377.
- 川上洋一 2011 「弥生後期土器の展開」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4, 同成社, pp.105-120.
- 川上洋一 2012 「大和地域における中期から後期への集落動態」『弥生時代集落の実像と動態を探る』近畿弥生の会, pp.137-149.
- 川崎雅史 2005 「日高川・南部川・田辺湾周辺」『弥生時代の和歌山 ―変化するムラと墓―』紀伊考古学研究会第8回大会, pp.1-14.
- 河田泰之 2000 「泉南地域の地域相理解への覚書」『向出遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター, pp.352-363.
- 川部浩司 2009 『大和弥生文化の特質』学生社
- 岸本道昭 1995 「断絶の中期と後期」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3, 財団法人大阪府埋蔵文化財協会, pp.53-72.
- 鬼頭 宏 2004 「人口と環境考古学」『環境考古学ハンドブック』朝倉書店, pp.455-463.
- 鬼頭 宏 2013 「災害シミュレーション ―文明成熟期における人口と環境―」『上智経済論集』第58巻第1・2号, 上智大学経済学会, pp.159-170.
- 木村泰彦 2006 「石京845次(7ANKTM-10)調査概要」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成16年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター, pp.149-159.
- 桐井理揮 2016 「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第7号, 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp.127-142.
- 桐井理揮 2019 「生駒山西麓産胎土をもつ広口壺について」『古墳出現期土器研究』第6号, 古墳出現期土器研究会, pp.51-64.
- 久住猛雄 2015 「『奴国の時代』暦年代論」『新・奴国 ―ふくおか創世記―』特別展「新・奴国展」実行委員会, pp.186-194.
- 久米雅雄 1988 「石才南遺跡の暦年代」『石才南遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会, pp.133-148.
- 蔵本晋司 2019 「第5章まとめ 第2節香東川下流域産土器群の基礎的研究」『上林遺跡』, 香川県教育委員会, pp.155-174.
- 桑原久男 1989 「畿内弥生土器の推移と画期」『史林』第72巻第1号, 史学研究会, pp.1-43.
- 小池香津江 1998 「芝遺跡第15・17次調査」『みずほ』第24号, 大和弥生文化の会, pp.30-33.
- 甲元真之編 2007 『砂丘形成と寒冷化現象』平成17年度～18年度科学研究費補助金研究成果報告書, 熊本大学文学部
- 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ 2007 「大阪府池島・福万寺遺跡出土試料の14C年代測定」『池島・福万寺遺跡』3, 財団法人大阪府文化財センター, pp.389-396.
- 古代学研究会編 2016 『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 小林行雄 1943 「弥生式土器細論」『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究室, pp.95-143.
- 小林行雄 1958 「大阪府枚岡市額田町西ノ辻I地点の土器」『弥生式土器集成』資料編1, 弥生式土器集成刊行会, p.11.
- 小山田宏一 1989 「87-2調査区の調査成果」『池島遺跡発掘調査概要』IV, 大阪府教育委員会, pp.47-50.

- 近藤喬一 1983 「亜鉛よりみた弥生時代の青銅器の原材料」『展望アジアの考古学』平凡社
- 近藤義郎 1966 「弥生文化の発達と社会関係の変化」『弥生時代』日本の考古学Ⅲ, 河出書房新社, pp.442-459.
- 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第3集, 奈良大学文学部文化財学科, pp.37-51.
- 佐々木宏治 2008 「第5章第3節 第1・2次調査出土の弥生時代後期土器について」『旧吉備中学校校庭遺跡 一有田川町公共下水処理施設建設に伴う発掘調査報告1一』有田川町遺跡調査会, pp.246-258.
- 阪口 豊 1989 『尾瀬ヶ原の自然史-景観の秘密を探る』中央公論社
- 佐藤大樹 2015 「東アジアの中の貨泉」『駒澤考古』第40号, 駒澤大学考古学研究室, pp.313-332.
- 佐原 眞 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2, 東京堂出版, pp.53-72.
- 佐原 眞 1970 「大和川と淀川」『古代の日本』5近畿, 角川書店, pp.24-43.
- 佐原 眞 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2, 東京堂出版, pp.53-72.
- 塩屋勝利 1989 「中国出土王莽銭に関する覚書」『福岡市立歴史資料館研究報告』第13集, 福岡市立歴史資料館, pp.31-70.
- 柴尾俊介 2014 「弥生時代中・後期における朱の利用をめぐる一内面朱付着土器を中心として」『古文化談叢』第72集, 九州古文化研究会, pp.21-61.
- 柴田昌晃 2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』第10巻 弥生・古墳時代遺跡・遺構, 小学館, pp.315-325.
- 柴田昌晃 2006 「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落」『古代文化』第58巻第Ⅱ号, 古代学協会, pp.69-81.
- 杉本厚典 1996 「東部瀬戸内海と北部九州の弥生時代後期初頭の土器編年の平行関係」『香川考古』第5号, 香川考古刊行会, pp.1-26.
- 鈴木香織 2002 「用途からみる弥生土器の変遷—河内第4～5様式を中心に」『史林』第85巻第2号, 史学研究会, pp.228-257.
- 第4回播磨考古学研究会実行委員会 2003 『播磨の弥生時代を探る—弥生時代中期から後期における集落動態—』
- 第45回埋蔵文化財研究会実行委員会 1999 『弥生時代の集落—中・後期を中心として—』第45回埋蔵文化財研究会
- 高倉洋彰 1989 「王莽銭の流入と流通」『九州歴史資料館研究論集』14, 九州歴史資料館, pp.1-49.
- 高野陽子 2002 「近畿地方北部の土器」『考古資料大観』第2巻弥生古墳時代土器Ⅱ, 小学館, pp.229-236.
- 高野陽子 2006 「丹後地域—擬凹線文系土器の様式と変遷—」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター, pp.225-242.
- 高野陽子 2009 「弥生後期土器の地域色とその系統—丹波にみる甕の分布—」『京都府埋蔵文化財情報』第108号, 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp.1-10.
- 武末純一 2009 「三韓と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集, 国立歴史民俗博物館, pp.285-306.
- 田崎博之 1998 「九州系土器からみた凹線文系土器の時間的位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』, pp.143-195.
- 田代克己・中西靖人 1973 『瓜生堂遺跡(Ⅱ)』瓜生堂遺跡調査会
- 田中元浩 2009a 「丁ノ町・妙寺遺跡の弥生土器—弥生時代中期最後の土器群—」『財団法人和歌山県文化財センター年報』財団法人和歌山県文化財センター, pp.40-43.
- 田中元浩 2009b 「総括 弥生時代の集落」『丁ノ町・妙寺遺跡, 西飯降Ⅱ遺跡—京奈和自動車道改築事業に伴う第1次・第2次発掘調査報告書—』公益財団法人和歌山県文化財センター, pp.251-259.
- 田中元浩 2013 「第Ⅴ様式土器の一地域性—紀淡海峡を挟んだ第Ⅴ様式土器の地域性と交流関係—」『紀伊考古学研究』第16号, 紀伊考古学研究会, pp.61-75.
- 田中元浩 2016 「紀伊地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, (2014『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化資料集』古代学研究会初出), pp.131-160.
- 田中良之 1998 「墓地からみた親族・家族」『考古学の論点2女と男, 家と村』小学館, pp.131-152.
- 田辺昭三・佐原 眞 1966 「弥生文化の発展と地域性 近畿」『日本の考古学』Ⅲ, 河出書房新社, pp.108-140.
- 田村憲美 2015 「自然環境と地域社会」『岩波講座 日本歴史』第9巻中世4, 岩波書店, pp.243-278.
- 趙 哲濟 2003 「大阪平野のおいたちと人類遺跡」『日本第四紀学会「大阪100万年の自然と人の暮らし」普及講演会資料集』, pp.1-16.

- 辻本宗久 1993 「長寺遺跡・東大寺山遺跡の検討」『みずほ』第10号, 大和弥生文化の会, pp.2-13.
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号, 考古学研究会, pp.20-47.
- 都出比呂志 1989 「弥生土器の地域色」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店, pp.298-320.
- 寺沢 薫 1974 「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会(上)・(下)」『古代学研究』第72・73号, 古代学研究会, pp.14-33・21-34.
- 寺沢 薫 1980 「大和におけるいわゆる第5様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所, pp.155-196.
- 寺沢 薫 1985 「弥生時代舶載製品の東方流入」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ, 同志社大学考古学シリーズ刊行会, pp.181-210.
- 寺沢 薫 1992 「銅鐸埋納論(上・下)」『古代文化』第44巻第5・6号, 古代学協会, pp.266-281・334-348.
- 寺沢 薫 2003a 「時は銭なり—弥生時代中国銭貨流入史の一駒—」『初期古墳と大和の考古学』学生社, pp.143-154.
- 寺沢 薫 2003b 「弥生後期低丘陵性集落の位置づけと高地性集落論」『三井岡原遺跡』奈良県文化財調査報告書第94集, 奈良県立橿原考古学研究所, pp.81-112.
- 寺沢 薫 2014 『弥生時代の年代と交流』吉川弘文館
- 寺沢 薫 2016 「大和弥生社会の展開とその特質(再論)」『纏向学研究』第4号, 桜井市纏向学研究センター, pp.1-47.
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ, 木耳社, pp.41-146.
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ, 木耳社
- 寺沢 薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ, 木耳社
- 寺前直人 2011 「倭国内の生産流通機構とその変化」『多様化する弥生文化』弥生時代の考古学3, 同成社, pp.129-146.
- 土井孝之 1986 「第Ⅵ章まとめ 第2節弥生時代の遺構・遺物」『船岡山遺跡—紀ノ川河川改修工事に伴う発掘調査—』和歌山県教育委員会, pp.143-163.
- 土井孝之 1989 「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ, 木耳社, pp.200-279.
- 土井孝之 1994 「紀伊の弥生時代集落の動向と高地性集落」『文化財学論集』文化財学論集刊行会, pp.242-252.
- 戸塚洋輔 2016 「近江地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.101-130.
- 豊岡卓之 1985 「『畿内』第Ⅴ様式暦年代の試み(上)」『古代学研究』第108号, 古代学研究会, pp.12-28.
- 豊岡卓之 1990 「時は大海を渡る—近畿暦年代論の現在」『考古学ジャーナル』No.325, ニューサイエンス社, pp.18-23.
- 中居和志 2010 「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心に—」『立命館大学考古学論集』Ⅴ, 立命館大学考古学論集刊行会, pp.125-148.
- 中居和志 2016 「近江系土器と受口状口縁土器」『古墳出現期土器研究』第4号, 古墳出現期土器研究会, pp.73-80.
- 中尾智行 2018 「弥生時代の計量技術—畿内の天秤権—」『考古学研究』第65巻第2号, 考古学研究会, pp.70-91.
- 中川二美・秋山浩三 2004 「近畿の下川津B類土器をめぐる」『瓜生堂遺跡』1, 財団法人大阪府文化財センター, pp.565-576.
- 中塚 武 2012 「1 気候変動と歴史学」『環境の日本史Ⅰ 日本史と環境—人と自然—』吉川弘文館, pp.38-70.
- 中塚 武 2016a 「高分解能古気候データを用いた新しい歴史学研究の可能性」『日本史研究』646号, 日本史研究会, pp.3-18.
- 中塚 武 2016b 「高分解能古気候データから始まる新しい災害史研究の方向性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第203集, 国立歴史民俗博物館, pp.9-25.
- 中塚 武・李 貞・對馬あかね・佐野雅規 2018 「酸素同位体比年輪年代測定」『京都府遺跡調査報告集』第173冊, 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター, pp.256-265.
- 中塚 良・國下多美樹・高野陽子 2018 「古墳出現期遺跡の文化財科学的研究」『日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨』日本文化財科学会
- 長友朋子編 2007 『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所
- 長友朋子・田中元浩 2007 「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年』六一書房, pp.469-526.
- 中西靖人 1992 「農耕文化の定着」『新版古代の日本 近畿Ⅰ』角川書店, pp.93-120.
- 中野 咲・福辻 淳・杉山拓己・青柳泰介 2016 「大和地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変

- 化』六一書房, pp.55-75.
- 那須孝梯 1989 「活動の舞台:概論」『弥生文化の研究』第1巻弥生人とその環境, 雄山閣, pp.119-130.
- 鍋島隆宏 2000 「南河内・石川流域における弥生集落の動向」『古代文化』第52巻第7号, 古代学協会, pp.1-16.
- 新納 泉 2014 「6世紀前半の環境変動を考える」『考古学研究』第60巻第4号, 考古学研究会, pp.73-84.
- 西谷 彰 1999 「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢』第33号, 大阪大学文学会, pp.1-23.
- 西谷 彰 2002 「弥生時代後半期における土器編年の併行関係 —西日本を中心に—」『古文化談叢』第48集, 九州古文化研究会, pp.85-107.
- 西村 歩 1996 「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター, pp.523-660.
- 禰宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店, pp.51-102.
- 禰宜田佳男 2002 「遺物組成からみた高地性集落の諸類型」『古代文化』第54巻第4号, 古代学協会, pp.32-42.
- 信里芳紀 2004 「讃岐地方における弥生中期の土器編年 —凹線文期を中心に—」『第53回埋蔵文化財研究集会 弥生中期土器の併行関係発表要旨集』, 埋蔵文化財研究会, pp.273-299.
- 信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年—凹線文期を中心に—」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』I, 香川県埋蔵文化財センター, pp.33-62.
- 信里芳紀 2011 「総括」『旧練兵場遺跡』II, 香川県教育委員会, pp.417-462.
- 信里芳紀 2013 「総括」『旧練兵場遺跡』III, 香川県教育委員会, pp.113-188.
- 信里芳紀 2019 「第6章特論 第1節紫雲山遺跡の土器・鉄器の特性」『紫雲山遺跡』三豊市教育委員会, pp.227-240.
- 乗松真也 2006 「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』第2号, 香川県歴史博物館, pp.31-44.
- 乗松真也 2007 「交易された土器」『徳島文理大学比較文化研究所年報』第23号, 徳島文理大学, pp.70-73.
- 橋口達也 1988 「半両銭・貨泉について」『新町遺跡II』志摩町教育委員会, pp.45-48.
- 橋口達也 2000 「弥生時代の年代論 —甕棺と副葬品—」『奴国王の出現と北部九州のクニグニ〜2000年の時を越えて〜』春日市奴国の丘歴史資料館
- 橋口達也 2005 「甕棺と弥生時代年代論」雄山閣
- 濱田延充 1993 「生駒西麓Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第2集, 大阪府立弥生文化博物館, pp.111-126.
- 濱田延充 2001 「畿内第Ⅳ様式の実像 —西ノ辻N地点出土土器の再検討—」『ヒストリア』第174号, 大阪歴史学会, pp.1-30.
- 濱田延充 2006 「弥生時代後期初頭の実年代に関する覚書」『喜谷美宣先生古稀記念論集』喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会, pp.39-50.
- 濱田延充 2009 「褐色の弥生土器をめぐる諸問題」『考古学ジャーナル』No.582, ニューサイエンス社, pp.18-22.
- 濱田延充 2014 「弥生土器様式の変化の持つ意味:畿内第五様式の成立をめぐる」『市大日本史』第17号, 大阪市立大学日本史学会, pp.1-13.
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾崎大真・藤尾慎一郎・西本豊弘 2011 「古墳出現期の炭素年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集, 国立歴史民俗博物館, pp.133-176.
- 伴野幸一 2006 「近江地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター, pp.49-66.
- 樋口吉文 1998 「四ツ池遺跡の弥生集落の変遷」『大阪の弥生遺跡II』大阪の弥生遺跡検討会, pp.26-31.
- 平井泰男 2002 「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」『環瀬戸内の考古学 —平井勝氏追悼論文集—』上巻, 古代吉備研究会, pp.389-410.
- 廣瀬時習編 2007 『池島・福万寺遺跡』3, 財団法人大阪府文化財センター
- 深澤芳樹 1986 「弥生時代の近畿」『岩波講座 日本考古学』岩波書店, pp.157-186.
- 深澤芳樹 1994 「尾張における凹線紋出現の経緯 —朝日遺跡出土土器の検討から—」『朝日遺跡V』財団法人愛知県埋蔵文化財センター, pp.273-288.
- 福家 恭 2012 「奈良県の高地性集落」『みずほ』第43号, 大和弥生文化の会, pp.2-16.
- 福永伸哉 2000 「弥生時代の転換期と七日市遺跡」『七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館, pp.51-62.
- 福永伸哉 2018 「古墳出土の内行花文鏡と方格規矩鏡」『待兼山考古学論叢Ⅲ』大阪大学考古学研究室, pp.199-212.

- 藤木久志 2001 『飢餓と戦争の戦国を行く』朝日選書 687, 朝日新聞社
- 藤田三郎 1989 「銅鐸鑄造年代とその祭祀」『三世紀の九州と近畿』河出書房新社, pp.281-296.
- 藤田三郎 2003 「大和第V様式」『奈良県の弥生土器集成』大和弥生文化の会, pp.98-103.
- 藤田三郎 2009 「唐古・鍵遺跡の集落構造と変遷」『唐古・鍵遺跡 I』田原本町教育委員会, pp.195-206.
- 藤田三郎・松本洋明 1989 「大和地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編 I, 木耳社, pp.147-199.
- 藤原 哲 2004 「弥生時代の戦闘技術」『日本考古学』第 18 号, 日本考古学協会, pp.37-52.
- 前田敬彦 1995 「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」『古代文化』第 47 卷第 10 号, 古代学協会, pp.20-41.
- 前田佳久 1988 「吉備系遺物の検討 ―弥生時代, 河内を中心にして―」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』網干善教先生華甲記念会, pp.153-163.
- 松木武彦 1996 「日本列島の国家形成」『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三一書房, pp.233-276.
- 松木武彦 2007 「第 2 章弥生時代の武力抗争と社会変化」『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会, pp.91-164.
- 松木武彦 2008 「弥生時代の集落と集団」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学 8, 同成社, pp.3-16.
- 松木武彦 2014 「人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化 ―吉備中南部地域を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集, 国立歴史民俗博物館, pp.139-154.
- 松田順一郎 2008 「発掘現場の地球科学 (4) 景観復原のために」『考古学研究』第 54 卷第 4 号, 考古学研究会, pp.108-111.
- 真鍋昌宏 2000 「讃岐」『弥生土器の様式と編年』四国編, 木耳社, pp.134-210.
- 丸山竜平 1976 「弥生式土器の終焉 ―稲初貯蔵用壺の消滅と古墳文化の成立基盤―」『古代研究』10, 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室, pp.1-22.
- 三重県埋蔵文化財センター 2006 「SK3」『一般国道 23 号中勢道路 (9 工区) 建設事業に伴う 六大 B 遺跡 (B ~ I 地区) 発掘調査報告』, pp.73-77.
- 味噌井拓志 2018 「明和町金剛坂遺跡第 7 次発掘調査について ~弥生時代後期の墓域の検討~」『第 4 回伊勢湾岸弥生時代研究会発表資料』
- 溝口孝司 2001 「弥生時代の社会」『村落と社会の考古学』同成社, pp.135-160.
- 溝口孝司 2006 「西からの視点」『考古学研究会例会シンポジウム記録 5 畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる諸問題』考古学研究会, pp.29-58.
- 宮崎康雄 2000 「淀川北岸の弥生集落 ―三島地域を中心に―」『みずほ』第 32 号, 大阪弥生文化の会, pp.26-39.
- 三好孝一 1993 「河内地方における弥生中期土器様相 ―亀井遺跡を中心にして―」『第 11 回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』(財)大阪府文化財調査研究センター, pp.31-44.
- 三好孝一 1999 「河内湖周辺部における弥生時代中・後期の集落」『弥生時代の集落 ―中・後期を中心として―』第 45 回埋蔵文化財研究会発表要旨集, pp.9-16.
- 三好 玄 2016 「趣旨説明」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.3-7.
- 三好 玄 2019 「畿内第 V 様式土器様式構造の再検討」『古墳と古代文化』白石太一郎先生傘寿記念論文集刊行会, pp.298-303.
- 村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村上恭通 2016 「凹線文期における臨海遺跡の形成と環境変動 ―芸予諸島を中心に―」『弥生時代凹線文期 (第 IV 様式) の遺跡形成と環境変動』第 15 回愛媛大学考古学研究室シンポジウム, 愛媛大学考古学研究室, pp.1-10.
- 森井貞雄 1982 「河内地方の畿内 III・IV 様式編年の一視点」『大阪文化誌』第 15 号, 財団法人大阪文化財センター, pp.16-25.
- 森井貞雄 2008 「大阪平野南西部における弥生時代の集落分布について」『大阪文化財研究』第 33 号, 財団法人大阪府文化財センター, pp.51-58.
- 森井貞雄 2014 「畿内地域における弥生時代の城塞集落」『弥生文化博物館研究報告』第 7 集, 大阪府立弥生文化博物館, pp.75-84.
- 森岡秀人 1976 「西摂地域における畿内第 V 様式編年試案」『新修芦屋市史』資料篇 1, 芦屋市役所, pp.314-320.
- 森岡秀人 1977 「畿内第 V 様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『河内長野市大師山』関西大学考古学研究室, pp.175-211.
- 森岡秀人 1982a 「西ノ辻 N 式併行土器群の動態」『古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会, pp.751-799.
- 森岡秀人 1982b 「表六甲の高地性集落 (中)」『古代学研究』第 97 号, 古代学研究会, pp.1-18.

- 森岡秀人 1984 「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣, pp.225-262.
- 森岡秀人 1985 「弥生時代暦年代論をめぐる近畿第V様式の時間幅」『信濃』第37巻第4号, 信濃史学会, pp.243-264.
- 森岡秀人 1990 「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ, 木耳社, pp.193-319.
- 森岡秀人 1993 「土器移動の諸類型とその意味」『転機』第4号, pp.29-45.
- 森岡秀人 1996 「弥生時代抗争の東方波及」『考古学研究』第43巻第3号, 考古学研究会, pp.38-53.
- 森岡秀人 2002 「近畿からみた併行関係と実年代資料」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』日本考古学協会2002年度橿原大会実行委員会, pp.133-142.
- 森岡秀人 2005 「新しい年代論と新たなパラダイム」『古墳のはじまりを考える』学生社, pp.113-173.
- 森岡秀人・三好 玄・田中元浩 2016 「総括」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会, pp.355-398.
- 森 浩一・辰巳和弘ほか編 1999 『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館
- 森田克行 1977 「遺物およびその考察 一第V様式土器の型式細分について一」『安満遺跡発掘調査報告書 一9 地区の調査』高槻市教育委員会, pp.50-54.
- 森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ, 木耳社, pp.77-191.
- 森本六爾 1943 『日本考古学研究』桑名文星堂
- 谷上真由美 2013 「弥生時代中期末から後期前葉の土器からみた地域性 一近畿地方を中心に一」『立命館大学考古学論集』VI, 立命館大学考古学論集刊行会, pp.131-140.
- 八尾市教育委員会文化財課 2000 『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10
- 安田喜憲 1977 「『倭国乱』期の自然環境」『考古学研究』第23巻第4号, 考古学研究会, pp.83-100.
- 安田喜憲 1984 「続・『倭国乱』期の自然環境 一大阪府河内平野の事例を中心として一」『高地性集落と倭国大乱』, 小野忠熙先生退官記念出版事業会, pp.282-325.
- 柳田康雄 2002 『九州弥生文化の研究』学生社
- 矢作健二・赤塚次郎 2003 「八王子古宮式と近江湖南型甕」『研究紀要』第4号, 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター, pp.34-44.
- 山崎敏昭 1997 「峠をこえて 一弥生時代中期畿内西周縁部の地域性一」『古文化論叢一伊達先生古稀記念論集一』伊達先生古稀記念論集刊行会, pp.94-104.
- 山崎敏昭 2013 「播磨周縁部摂津北部地域の1〇(いちまる)型中央土坑」『弥生研究の群像 一七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念一』みずほ別冊, 大和弥生文化の会, pp.319-328.
- 山崎頼人 2006 「和泉南部地域における弥生集落研究の現状と課題」『みずほ』第40号, 大阪弥生文化の会, pp.119-140.
- 山田勝芳 2000 『貨幣の中国古代史』朝日選書
- 大和弥生文化の会 1995 『大和の弥生遺跡基礎資料Ⅰ』
- 大和弥生文化の会編 2003 『大和の弥生土器集成』
- 与謝野町教育委員会 2005 『日吉ヶ丘遺跡』
- 若林邦彦 1997 「中河内弥生中期土器に見る諸相 一『生駒西麓型土器』のもつ意味一」『考古学研究』第43巻第4号, 考古学研究会, pp.58-76.
- 若林邦彦 1999a 「大阪平野における拠点集落の性格 一河内平野遺跡群を中心として一」『みずほ』第31号, 大和弥生文化の会, pp.80-94.
- 若林邦彦 1999b 「河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」『河内平野遺跡群の動態』Ⅶ, 大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター, pp.199-218.
- 若林邦彦 1999c 「第Ⅳ章 土器」『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館, pp.86-136.
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価 大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に」『日本考古学』第12号, 日本考古学協会, pp.35-54.
- 若林邦彦 2006 「丘陵上弥生集落と複合社会の拡大 一近畿地方の事例から一」『古代文化』第58巻第Ⅱ号, 古代学協会, pp.96-105.
- 若林邦彦 2008 「②集落と集団2 一近畿一」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学8, 同成社, pp.36-57.
- 若林邦彦 2009 「集落分布パターンからみた弥生社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集, 国立歴史民俗博

- 物館, pp.33-54.
- 若林邦彦 2013 『倭国乱』と高地性集落論・観音寺山遺跡』新泉社
- 若林邦彦 2016 「水害にかかわる環境と初期農耕社会集落動態」『国立歴史民俗博物館研究報告』第203集, 国立歴史民俗博物館, pp.27-46.
- 若林邦彦 2017 「集落と墳墓の立地からみた弥生～古墳時代の社会変化」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館, pp.137-162.
- 若林邦彦 2018 「近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代 —石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比—」『実証の考古学』同志社大学考古学シリーズXII, 同志社大学考古学研究室, pp.119-129.
- 渡邊 誠 2012 「第3節北山浦遺跡の生産部門 a土器製作 ～香東川下流域産土器成立の前夜～」『北山浦遺跡』高松市教育委員会, pp.194-195.
- 渡邊 誠 2013 「高松平野における弥生時代後期前半の土器相」『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念事業会, pp.167-186.
- 渡邊 誠 2014 「弥生時代中期から後期における高松平野の集落動態」『東アジア古文化論攷』2, 中国書店, pp.124-143.
- 渡邊 誠 2016 「讃岐地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房, pp.331-351.
- 参考文献〔海外〕**
- 高 英 1979 「古代青銅器的腐食性破壊」『中国歴史博物館館刊』第1期, 中国歴史博物館, pp.121-134.
- 蔣 若是 1997 『秦漢錢幣研究』中華書局
- 戴 志強・謝 世平 1984 「“貨泉”初探 —兼論葬錢製作特征的演变」『中国錢幣』1984年1期

図版出典

図25: 森井2014より転載。

図27: 漢鏡5・6期鏡の分布を示した福永2018の図1をもとに銅鐸の分布を加えて三好が作成。

※土器編年図に使用した土器の図については、報告書等から転載あるいは再トレースしている。本来なら出典を明示すべきであるが、紙幅の関係上省略した。ご容赦願いたい。

- 深澤芳樹 (天理大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)
- 浅井猛宏 (京都府城陽市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 荒木幸治 (兵庫県赤穂市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 石井智大 (三重県埋蔵文化財センター, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 杉山真由美 (奈良県橿原市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 田中元浩 (和歌山県立紀伊風土記の丘, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 中居和志 (京都府教育庁, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 三好 玄 (大阪府教育庁, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 山本 亮 (東京国立博物館, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)
- 渡邊 誠 (香川県教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

(2020年12月11日受付, 2021年9月24日審査終了)

Examination of the Transition Process from the Middle to Late Yayoi Period in the Southern Part of the Kinki Region

FUKASAWA Yoshiki, ASAI Takehiro, ARAKI Koji, ISHII Tomohiro,
SUGIYAMA Mayumi, TANAKA Motohiro, NAKAI Kazushi, MIYOSHI Gen,
YAMAMOTO Ryo and WATANABE Makoto

The social and cultural changes from the middle to the late Yayoi period are considered to be the most significant milestone in the Yayoi period. Hypotheses based on various perspectives such as politics, economy, and environment have been presented as to the cause of the change. However, a leading hypothesis has not yet been put forward. Therefore, we conducted a basic study with common standards in multiple regions in the southern part of the Kinki region and tried to clarify the social changes during the period. Then, the content and background of the change were comprehensively considered by elucidating interregional exchanges and environmental changes.

The main objects to be examined are pottery and villages. Regarding pottery, we examined the chronology and the parallel relationship and tried to systematically grasp the stylistic structure. In doing so, it was clarified that the exchange between remote areas became active, the relationship between regions changed, and the widespread transmission of pottery from the west foot area of Mt. Ikoma. From these facts, it was considered that the change of the pottery style in the initial phase of the late Yayoi period was linked to a wide area and had multiple centres. In the investigation of the settlements, it was confirmed in a wide area that the settlements were disrupted during the transition period from the middle to the late Yayoi period, the number and the distribution density of the settlements decreased in the latest phase of the late Yayoi period, and the settlements tended to be located in high places. On the other hand, there were differences in these trends between settlements. These points indicate that social changes during the transition period from the middle to the late Yayoi period were widely linked besides regional differences and that multiple factors which change society were flexibly adapted in each region.

Based on the above investigation results, we clarified that the changes in pottery and settlements during the transition period from the middle to the late Yayoi period reflect the activation of interregional exchanges and the reorganization of intergroup relations, and the rise of social tension. Also, we pointed out that the population decline during that period may be the cause. Then, based on the comparison with the research results on the chronology and paleoclimatic reconstruction using tree-ring oxygen isotopic ratios, we considered that long-term and continuous social transformation

was triggered by fluctuation in food production and population changes due to increasing rainfall in the latter half of the middle Yayoi period.

Key words: Middle Yayoi period, Late Yayoi period, Settlement, Pottery, Population decline